

仮面ライダー斬月・艦

はちコウP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

実の弟〈呉島光実〉との戦いに敗れ水底に沈んだ〈呉島貴虎〉

彼が目覚めた場所、そこは異形の存在〈深海棲艦〉と人類とが争いを繰り返る世界

人類を守護すべく大海を駆けて戦う戦士〈艦娘〉

戦士と戦士が邂逅し、真なる脅威が蔓延る時、新たな合戦の幕が上がる

※これは2014年9月よりpixiv <https://www.pixiv.net/novel/series/452817> に投稿している作品を加筆、訂正した作品です。

『艦隊これくしょん』と『仮面ライダー鎧武』を艦これ歴約一カ月(執筆開始当時)の新米提督がクロスさせてみた物です。

作品の時系列は仮面ライダー鎧武36話直後となります。

本作品で取り扱う設定は各媒体からの設定の寄せ集めに、オリジナルの要素を組み合わせております。

加筆、訂正が終了次第続きを投稿して参ります。

目次

【第十話】	part 3	313
【第十話】	part 2	297
【第十話】	part 1	283
【第九話】	part 3	270
【第九話】	part 2	261
【第九話】	part 1	251
【第八話】	part 3	231
【第八話】	part 2	220
【第八話】	part 1	208
【第七話】	part 2	186
【第七話】	part 1	167
【第六話】	part 2	153
【第六話】	part 1	141
【第五話】	part 3	126
【第五話】	part 2	112
【第五話】	part 1	98
【第四話】	part 2	87
【第四話】	part 1	73
【第三話】	part 3	56
【第三話】	part 2	45
【第三話】	part 1	32
【幕間 其の一】		27
【第二話】		14
【第一話】		1

【幕間 其の二】	—	339
【第十一話】	part 1	346
【第十一話】	part 2	365
【第十二話】	part 1	376
【第十二話】	part 2	389
仮面ライダー斬月・艦	【第十三話】	408
	part 1	
仮面ライダー斬月・艦	【第十三話】	424
	part 2	

## 【第一話】

梅雨の長雨が降る日も徐々に少なくなり季節は夏に差し掛かろうとしていた。

その日、空は雲一つない快晴で果てしなく広がる大海原も穏やかにゆらゆらと揺れ、照り付ける太陽をくつきりと水面に映し出していた。

もし船乗り達がこの光景を見れば、誰もが絶好の航海日和だと口を揃えて言うであろう。

だが、そんな穏やかな空気を引き裂くように、突如として辺りには爆音が響き渡った。

爆音のした方角では、数個の黒い影と数人の少女達が激しい水しぶきを立てながら水上を”駆けて”いた。

「どう!?この攻撃は!!」

セーラー服を身に纏い、淡く緑がかった銀髪をなびかせる少女が、海面を滑る黒い影に向け両手に構えた巨大な主砲を発射した。

少女の放った砲弾は眼前の黒い影「駆逐イ級」に全弾命中、黒煙と怨めし気な唸り声を上げながら敵駆逐艦は、海の底へと沈んでいく。

また、彼女のすぐ傍では……

「オラオラアー……いつを喰らいやがれ!」

片目を眼帯で覆い、何某かの動物の耳を模したようなアンテナを頭の脇に付けた少女が、背負った艦装から延びる単装砲の砲撃をもう一隻の駆逐イ級に浴びせていた。

敵は回避運動をとるも砲撃を避け切る事は出来ずに被弾。船体から炎を吹き上げる。

そして彼女らよりも若干の幼さを感じさせる容姿をした四人の少女が、連携を取りつつ別の敵艦を追い詰めていた。

「逃さへんでー!」

灰色の髪の子少女が手に持った連装砲を敵巡洋艦【軽巡ホ級】に向けて発射する。

「徹底的に追い詰めてやるわ」

落ち着きながらも闘志を秘めた言葉を発し、近くを滑る少女が続けて砲撃を敵艦に向け浴びせかけた。

二人の砲撃を受け軽巡水級は身に着けた砲の大半を破損。中破状態へと陥る。

「行くわよー！魚雷発射用意！」

二つの黄色のリボンで髪を結えた少女が間髪入れず仲間達に号令を出す。

合図を受けて四人の少女たちは魚雷を装填、発射の姿勢をとる。

だが軽巡水級もまた即座に回避運動を取りはじめた。少女たちの姿勢、立ち位置、目線を瞬時に見極め、最適であろうと推察される航路を割り出し速度を上げる。

「……撃」

じつくりとタイミングを図り、指揮を執る少女が発射の号令を発しようとした刹那

「四連装魚雷いっちゃってー！！」

両脇にマスコットキャラの様な砲を抱え、丈の短いセーラー服を着た少女が敵艦に向けて魚雷を発射した。

「てー……ってバカー！タイミングが早いわよー！」

ワンテンポ遅れて残りの三人の魚雷が一齐に発射される。

最適な発射タイミングを取れなければ魚雷の命中率は低下する。

一度チャンスを逃せば次発装填、発射の準備が整う前に敵艦との距離はますます離れ、撃沈する事は困難となってしまう。

号令を下した少女はそれを憂い、思わず頭を抱えた。

しかし……

突如として爆音が周囲にこだました。

頭を抱えていた少女は、音のした方向に目を向ける。

そこには燃え上がる軽巡水級の姿があった。

大きな口の様な形をした装甲からはみ出る両腕を振り回し、もがき苦しむ軽巡水級。

少女達の挙動を読み取った軽巡水級の回避運動は完璧なものだっ

た。四人の魚雷発射のタイミングが揃ってれば、ギリギリで全弾回避可能であったらう。

しかしながら、わずかに早く発射された魚雷が命中、軽巡ホ級は爆発炎上する。

遠くからはうかがい知る事は出来ないが、燃え盛る火炎と装甲の下で軽巡ホ級は驚愕の表情を浮かべていた。

そして遅れて発射された魚雷のうちの一発が直撃。それがトドメとなり軽巡ホ級は爆散。海の底へとその姿を消していった。

「や……やったあ！」

「これでウチらの勝ちや！」

「まあ、悪くない戦いだったわね」

「私から逃げられるわけないんだから！」

四人の少女たちはそれぞれの思いの丈を口にし、ある者は飛び跳ね、ある者は腕を高らかに掲げ勝利の味を噛みしめていた。

「……って！勝ったから良いものの島風！あんた私の号令をしっかりと聞きなさいよ！」

「だって陽炎の号令遅いんだもん！」

魚雷を早まって撃った少女、島風はふくれっ面を黄色のリボンをした少女、陽炎に向ける。

「それにちゃんと当てたんだから良いじゃん！」

「それとこれとは話が別よ！連携をしっかりとれないとこの編成をしている意味が無いでしょ！」

「まあ、まあ二人とも落ち着きいや」

灰色の髪の少女、黒潮がなだめに入る。

「確かに敵艦倒せたから結果オーライやけど、島風も反省はせなアカンよっ。」

「ぶうー！」

島風は不機嫌そうにふくれっ面から空気を吹き出しそっぽ向く。

「ちよつと！何なのよその態度は！」

陽炎が島風に向かって声を荒げる。

「でも陽炎の号令のタイミングが適切でなかった事も事実ね」

「不知火!？」

落ち着いた口調で薄紫色の髪の少女、不知火は言う。

「あの号令のタイミングだと全弾回避されていた可能性は高いわね。連携が取れなかった事は反省すべきだけど、島風の攻撃から学ぶべき所も十分にあると思うのだけれど?」

「むう……」

「それに真っ先に飛び上って喜んでいたのは誰?」

「うっ!それは……」

不知火の指摘を受けた陽炎は、耳まで顔を赤く染める。

「だ、だってこの四人で軽巡倒せたの初めてだし……」

陽炎は俯きながら恥ずかしそうに呟いた。

その様子を見て不知火は、口元に微笑を浮かべる。

「まあ、今までに比べて連携がうまなつとるのは確かやね。これからもみんなで頑張っていこうや。な、島風」

黒潮は島風の肩を軽く叩き言った。

「……うん、そうだね」

島風は俯きながら、少し照れくさそうに呟いた。

「戦いを通して芽生える美しき友情……眩しいわね」

遠巻きから四人のやり取りを眺めていた少女、夕張が呟いた。

「なくに気取った事言ってるんだよ」

隣に立った眼帯の少女、天龍が軽くツツコミを入れる。

「べ、別に気取ってなんかいないわよ。ただ、あの子たちも随分と馴染んできたなって思っただけよ」

「まあ、確かに。最初は微妙な雰囲気か漂っていたし、演習での陣形を組む事すら満足に出来てなかったもんな」

腕を組みつつ天龍は感慨深げに、うんうんといった具合で頭を上下させた。

「でもよ、考えてみるとおかしな編成だよな」

「え?」

「いや、島風以外は全員陽炎型の駆逐艦娘だろ。だったら同じ陽炎型で組んだ方が運用はしやすいはずじゃないか?そこに駆逐艦にし



ちやあ特徴的すぎる性能の島風を組みこむなんて、バランスが悪いだろ。提督は何考えてんだ？」

「そうねえ、セオリーと違った編成にして気分転換とか？」

「おいおい、これは遊びじゃねえんだぞ。そんな理由で編成されてたまるかつつーの」

天龍が半ば呆れた口調で言う。

「冗談よ冗談。でもその提督の采配のおかげで勝利し続ける事が出来るんだから良いじゃない」

「まあ……な。……うん！こんな事を気にするなんてちよつとらしくなかったな。考えるのは提督の仕事、体動かすのがオレ達の仕事だ！」

そう言いながら天龍は、握り拳を前方へ向け突き出した。

「そんじゃあそろそろ帰投するか。長居は無用だ」

「ええ、そうね」

「おーい、お前ら帰るぞー！とつと陣形を組め！」

天龍が叫びながら駆逐艦娘達のもとへ向かっていく。

提督の指示により夕張・天龍の軽巡洋艦娘二名は駆逐艦娘と共に編成を組み、基地近海での哨戒活動を行っていた。

哨戒活動と言ってもこの海域で敵【深海棲艦】の艦隊が出現する事は稀である。

今現在そこまで嚴重に警戒する必要は無かった。

目的としては練度不足の艦娘達に経験を積ませるため、迷い込んだ敵はぐれ艦の索敵、駆逐を行わせるのが主であった。

(でも以前はこの辺でも深海棲艦の動きは活発で、毎日のように艦隊戦が繰り広げられてたのよね。だから海底には深海棲艦の残骸がウジャウジャあるとか……)

夕張は、バラバラになった黒い残骸の山が海底を埋め尽くす光景を思わず想像してしまい身震いをする。

そしてそれを振り払うように、頭を素早く左右に振った。

(うう、変な事を考えるのはやめよう。みんなと合流してさっさと帰りましょう)

そう考え天龍達の元へ向かおうとした夕張は、何気なく後ろを振り返った。

眼前には穏やかに揺れる大海原が広がっている。一見何も異常は無いように思えたのだが……

その時、遠方の海面がほんの一瞬虹色に瞬いた様に見えた。

(あれは……もしかして……)

何か予感を感じ取った夕張は、天龍達の方へ向かって叫ぶ。

「みんな！向こうの方に何かあるみたい！私行ってくる！」

「お、おいちよつと待てよ！」

「大丈夫、敵艦の反応も無いみたいだし、すぐ戻るから！」

そう言うのと夕張は足に付けた主機の回転数を上げ、光の見えた方向へと進んで行った。

ごく稀に戦闘終了後の海域では、漂流している艦娘が発見されることがあると言われている。その時には救難信号の様に海面が光る事がある、という噂を夕張は耳にしていた。

(まさかとは思うけど、見過ごして行くわけにはいかないわよね)

噂については半信半疑であったが、本当に漂流している艦娘がいて、それを放置して帰ってしまったとあれば寝覚めが悪い。気のせいであればそれで良い。夕張はそう考え動いていた。

そして夕張は目的の場所にたどり着き、何かが漂っているのを目にした。

「え………？」

落ち着いた茶色の木目の内装が施された部屋の中で、白い軍服を身にまとった男が書斎机に向かい、レトロなタイプライターを打って書類を作成していた。

その目つき、引き締まった体躯は歴戦の強者を思わせる風貌をしている。

しかしながら彼が漂わせる雰囲気は、軍人のそれとは幾らか異なっているようにも思われた。

そして男の居る部屋の中にはその他に、数個の観葉植物の鉢と本棚、コーヒーを淹れるための道具が一式置かれており、隅々まで整理が行き届いていた。

静かな部屋には男の打つタイプライターの音だけが響き渡る。

するとその音の均衡を破る様に扉をノックする音が。そして少し遅れて人の声がした。

「提督、龍田です。報告にあがりましたあ」

「入れ」

「失礼いたしますう」

甘ったるい声と共に、一人の少女が部屋へ足を踏み入れる。

少女は黒みがかかった紫色のショートヘアをしており、その頭上にはまるで天使の輪を思わせる様な奇妙な機械が浮いていた。

「こちらが報告書になります」

そう言いながら龍田は机に向かう男、提督の前に書類を差し出した。

提督はそれを受け取り目を通し始める。

「それと天龍ちゃん達の部隊から連絡がありましたあ。作戦は無事終了。間もなく帰投するそうです」

「わかった」

書類に目を通したまま提督が応える。

「それと途中で民間人と思われる男性が漂流しているのを発見したらしいのですけど……」

すると提督は龍田の方へ視線を向ける。

「民間人の男？」

「はい、何でも酷い怪我をしているようで意識も不明みたいです」

「そうか……なら病室を一部屋確保しておけ。それと治療もだ」

「ええ、そうおっしゃると思つて既にお部屋は確保してありますう」

龍田はにっこりと微笑みながら言った。

「フツ、相変わらず用意が良い」

提督も口元に笑みを浮かべながらそれに応えた。

「恐れ入ります」

そして提督は壁に掛けられた時計を確認した。時刻は正午を少し過ぎた頃である。

「提督、お仕事は一旦やめてお昼にしませんか？お腹すいてきたんじゃないですか？」

「ああ。ならば今日は食堂に行くとするか」

「では、後ろ失礼致します」

龍田は提督の後ろへ回り込む。提督の座る車椅子のグリップを握り、手慣れた様子で方向を転換させる。

そして車椅子を押しながら部屋を後にしたのであった。

それから二週間程経過したある日。休暇中の夕張は長く続く廊下を歩いていった。

窓の外は雲一つなく晴れ渡り、鳥のさえずりと共に、訓練を行う艦娘達の声が響き渡っていた。

夕張の居る建物は戦闘にて負傷した入渠させる、もとい艦娘の治療・装備の修復を行う総合保養施設である。

その設備は多岐にわたる。規模の大きな鎮守府、基地ともなればまるでリゾート施設の様な豪華さを誇っている程であった。

しかしながらこの基地は、本土から離れた小島に設けられており、入渠施設も小規模なものであった。だが島には天然の温泉が沸いているため、入浴施設に関しては他の鎮守府に負けない位に充実していた。また温泉の効能面も優れており、艦娘の中にはわざわざ本土から治療・リフレッシュの為にやってくる者もいる程であった。

施設内を歩く夕張は、階段を昇り目的の階へたどり着いた。

すると病室から出てくる、眼鏡をかけ白衣を身に付けた小太りの男を目にした。

「先生！」

夕張はその男の元へ早足で近づいていく。

「やあ、こんにちは。もしかしてこの患者さんの事かな？」

「はい。やっぱり、まだ目を覚ます様子は無いんですか？」

「そうだね……怪我の方は命に関わる程じゃ無かったから心配はいらないんだけど」

そう言って医者は病室の扉の方へ視線を向けた。

「意識が戻らない原因はハッキリとわからないけど、精密検査でも脳には異常が見られなかったからね。時間が経てばいつか目を覚ますさ」

再び夕張の方へ向き直り医者は言った。

「先生がそう言うなら安心ですね」

「随分とあの人の事を気にかけているみたいですね」

「はい、偶然とはいえ私が救助した人ですから。どうしても気になってしまつて」

「そういえばそうでしたね。では中に入って様子を見て行かれますか？」

「え、大丈夫なんですか？」

「はい、それに誰かがそばに居てあげた方が患者さんにとって良い効果があるかもしれませんね。それでは、本土に帰る船の出る時間が迫ってますので私は失礼します」

「はい、お疲れさまでした」

「お疲れさま」

医者が階段を降りて行くのを見届けると夕張は、病室のドアノブに手をかけて扉を開いた。

夕張は部屋の中に入ると、窓際にあるベッドの傍へと向かった。

そして自らが救出した男の様子を観察する。海の上で見た時は、出血やこびり付いた汚れで気が付かなかったが、よく見ると男は端正な顔立ちをしていた。それでいてその体つきには鍛え抜かれた様が窺える。

(もしかして軍人さんなのかしら？……でもそうは見えないなあ。軍服も戦闘服も着てなかったし、助けた時はボロボロのスーツ姿だったし。一体何者なんだろうこの人？)

暫くの間ベッドに横たわる男を眺めると、夕張は窓辺に向かっている力を外すと窓を開け放った。外からそよ風が吹き込み、カーテン

を微かに揺らす。

「う〜ん、良い風ね」

緑色のリボンで縛ったポニーテールを風になびかせつつ、夕張は近くの棚に置いてあった雑誌を手に取り、ベッドの傍の椅子に腰かけた。

(今日は特に予定も無いし、ちよつとここでゆっくりしていこうかな。良い風も入るし、リラックスできそう)

部屋には雑誌のページをめくる音が響き始めた。

微かに開き始めた瞼の隙間から陽の光が入り込む。その眩しさゆえに瞳の周りの筋肉が一瞬ピクリと痙攣する。

それを何とか抑え込み、ゆっくりと目を開く。眼前に映ったのは真っ白な天井、そしてしっかりと固定された電灯。

体を起こそうとすると全身に激痛が走った。

その痛みに思わず顔をしかめる。体を起こすのをいったん断念し、そのままの状態で手足の指先から順に力を込めていく。それぞれの部位の感覚はしっかりと存在していて、ゆっくりとだが確かに動かすことが出来る。

手足が折れていたり、麻痺・欠損していたりする様子はみられなかった。

そして痛みを耐えながら、再びゆっくりと体を起こしていく。やつのことで上体を起こしきると、自分の体の様子を目で確認する。体の各所に包帯が巻かれている。何者かによつて治療された様子が窺えた。

頭の中で自分に何が起こったのかを整理しようとし始めたその時、すぐ隣から物音が聞こえた。

男は思わずその方向に目を向けた。

手に取った雑誌を半分ほど読み終えた所で、夕張は眠気に襲われた。

始めはそれを必死にこらえて雑誌を読み続けていたが、遂に耐え切

れなくなり椅子に座ったまま、うたた寝をしてしまっていた。

力の抜けた彼女の手から雑誌が零れ落ち、床に当たり音を立てる。その音に反応して体が一瞬ビクリと動く。そして夕張は目を覚ました。更に口の端から涎が垂れかかっていたのに気が付き、手の甲でそれを擦り取る。

（ううっ……いつの間にか寝ちゃってたんだ。風があんまりにも心地良くて）

夕張は椅子に座った状態のまま手を伸ばし、床に落ちた雑誌を拾い上げた。

「ふわああああ……」

そして立ち上がると両手を上に伸ばし、目を細め、口を大きく開けて欠伸をする。

「うくん、ちよつと夜更かしし過ぎたかな。見たいの溜まつちやつてたしなあ」

そして椅子に座りなおそうとした所で、ふとベッドの方を見やる。ベッドの上では眠っていたはずの男が包帯に包まれた上半身を起こし、彼女の方へと視線を向けていた。

「……あ」

再び手から零れ落ちた雑誌が音を立てて床の上に落ち、窓から吹き込んだ風がそのページをパラパラとめくっていった。

「……君は？」

ベッドの上の男が口開き、低い声で呟いた。

その途端に夕張は慌てて立ち上がり、顔を赤くしてまくし立てた。「わ、わわわ私は夕張！け軽巡洋艦で兵装実験が……ってそ、そうじゃなくて。あの、その……て、提督を、上司を呼んできますので待ってて下さい！」

慌てて駆けだそうとした夕張であったが……

「うわわあっ！」

床に落とした雑誌を踏んづけ、盛大に足を滑らせ転んでしまった。

「お、おい大丈夫か」

「痛たたたた……お、お構いなく！じゃあそのまま、そのまま待ってて

下さい！」

大急ぎで立ち上がり、服の裾をバツバツと払うと、夕張は凄まじい勢いで部屋を後にしていった。

部屋の扉が大きな音を立てて閉まる。

(うわー！…みつともない姿見られちゃった男の人に！涎垂らして、欠伸して、転んで…何なのよ！起きてるなら起きてるって言ってよ！ビックリした…っていか慌て過ぎよ私！)

突然の出来事に頭を混乱させたまま夕張は、廊下を駆けて行ったのであった。

その一方で一人部屋に残された男は、あつけにとられたまま扉の方に視線を向けて呟いた。

「夕張？…軽巡洋艦？ひよつとするとここは軍艦か何かの中なのか？」

そうして窓の外に目を向けた男であったが、そこには海ではなく、緑の木々が生い茂った林から鳥たちが飛び立つ光景が広がっていた。

それから数分後、病室の扉をノックする音が響いた。

「はい」

「失礼する」

扉が開き、先程の女性が車椅子を押しながら部屋に入ってきた。

その車椅子には白い軍服と軍帽を身に付けた、壮年の男性が座っていた。

女は若干気恥ずかしそうな雰囲気で俯いていたが、ベッドの上の男は一緒に入ってきた軍人風の男に気を取られ、女の仕草には気を留めていなかった。

「気分はどうだ？」

軍人風の男が口を開く。

「…体のあちこちが痛みますが、それ以外は特に変わった所はありません」

ベッドの上の男が答える。



「あなた方が手当てして下さいったのですか？」

「ああ、海を漂っていたお前さんをコイツが見つけてな。ここまで連れて来させた」

車椅子の男は、右手の親指を後ろの女に向けて言った。

合わせて女が会釈をする。その顔は少々紅潮していた。

「腹が減ってるんじゃないか？ずっと眠りっぱなしだったんだからな」

それを聞きベッドの上の男は自らの腹をさする。

言われてみると空腹感を体が訴えているような気がしてきた。

「食べれそうか？」

その問いに男は無言で頷く。

「夕張、鳳翔の所に行つて食事を作ってもらつて来い。なるべく消化に良い物をな」

「了解しました」

車椅子の男に命じられ、女が部屋を出て行く。

そして再びベッドの上の男に向かって話かける。

「さて、自己紹介がまだだったな。俺はこの基地を任されている者だ。

一応提督という役割を与えられている」

「提督、ですか？」

「ああ、そうだ。今は、夷（えびす）と名乗っている」

「今は……？それは一体どういう」

「さあ、俺は名乗ったぜ、次はお前さんが名乗る番だ」

疑問の声を遮る様に、目の前の夷と名乗った男は促した。

それを受けてベッドの上の男は、自らの名を名乗るのであった。

「呉島、貴虎」

窓から吹き込んだそよ風が、再びカーテンを静かにユラユラと揺らした。

## 【第二話】

母なる海。全ての生きとし生けるモノの源。そこでは数多の生命が生まれ出でては消えていく。この惑星が誕生してから絶えず繰り返されてきた自然の摂理。いかなる生物にも例外なく、等しく訪れる生と死のサイクル。

では、突如として世に現れた“怪異”それは果たしてどうなのであろうか……

陽の光も殆ど届かない海の底の暗闇の中。そこは闇に溶け込む程にどす黒い、朽ち果てた残骸で埋め尽くされていた。

古い残骸が完全に朽ち果てても、海流に乗って新たな残骸が運ばれてきては堆積する。

そして今、新たにボロボロのゴミクズの様になった黒い物体が海底に流れ着いた。

しかしその物体は、まだ微かに脈動していた。それは淡く光る緑の眼をもって、海面の方を見つめる。

だが、そこには何も見えない。一匹の小魚すらも、その視線の先には存在していなかった。

本能、憎しみ、破壊衝動に従ってひたすらに目の前の生命を喰らい尽くすだけだった黒いモノは、間もなくただの残骸と成り果てる。周囲に散らばる物体と同様に……

その眼が完全に光を失おうとしていた時。突如、海中に小さな紫色の光が瞬いた。

ゆっくりと、揺らめくように動くその光は、吸い込まれるように黒いモノの佇む所へと落ちていく。

そして、黒と紫、二つの色は静かに溶け合っていた……

呉島貴虎は目の前にいる、車椅子に座った軍人風の男、夷提督えびすに自らの名を告げた。

「タカトラか。勇ましそうな印象のする名前だ」

提督が頷いた。

「二週間も眠りっぱなしだったから何かしら異常が出てないかと思っただが、どうやら頭の方も問題は無いようだな」

「二週間……そんな長い間」

自分の想像以上に時間が経過していた事に驚く貴虎。

だが、その一方で更に気がかりな事が頭に浮かんできた。

「一つ聞いても宜しいでしょうか？」

「何だ？」

「世界の状況は、今どうなっているのでしょうか？」

貴虎は、夷<sup>えびす</sup>提督に質問をする。

実の弟、光実の暴走を止める事が出来ず、戦いに敗れ海に沈んだ貴虎。

その弟が手を組んでいた異形の存在、オーバーロード。一瞬にして世界中を混乱の渦に巻き込んだ彼らが行動を起こすには、二週間という時間は十分すぎる。それこそ、世界の殆どを破壊し尽くす事さえも可能な程に。かつてその力を目の当たりにした貴虎の心には、言い知れぬ不安が溢れ出していた。

「随分と漠然とした質問だな。だが大雑把に言うなら、今は大分俺達にとって有利になってきた所だ。この前の大規模作戦行動も成功して、ヤツらの動きも沈静化している」

「そうですね……それは良かった」

提督の答えに貴虎は安堵した。

正直な所、オーバーロード及び彼らの使役する怪物、インベスに対して人類が優位に立っているという事は貴虎にとって予想外の事であった。

仮に葛葉紘汰を始めとするアーマードライダー達が奮戦しても、世界規模の騒乱を収める事は不可能であろうと貴虎は思っていた。

「世界中の主要都市が壊滅的被害を受けたと聞いた時はどうなる事かと思ったが、まだ人類にもヤツらに反抗するだけの力は残っていたか」

貴虎がそう眩くと……

「世界中の主要都市が壊滅的被害？何を言っている、そんな知らせはどこからも入ってきて無いぞ」

提督が意外な一言を返してきた。

「何？」

「第一、ヤツらは主要都市周辺の制海権は取っていない。都市を直接攻撃する手段に乏しいヤツらが、都市部に壊滅的な被害を与える事なぞ出来るわけがない」

「いや、あなたこそ何を言っているのだ？沢芽市を始めとして、世界各国にはオーバードロードの呼び出したインベスの群れが進行しているのではないのか？」

「沢芽市？オーバードロード？インベス？一体何の話をしているんだ、お前さんは」

話が全く噛み合わない、目の前の男の言っている事に対し理解が及ばない。

一時期、オーバードロードの支配する世界、ヘルヘイムの森に半ば幽閉されていた貴虎ではあったが、沢芽市に帰還した際にかつての部下、湊耀子らより世界に起こった出来事は全て聞いていた。

その事実を知らない人間がいるなど信じられない。

ましてや目の前の男は見るからに軍人。そんな人間が世界規模の危機を知らないという事などあり得ない。

貴虎の頭の中は、混乱するばかりであった。

「……なるほどな」

だが、その一方で何かを理解したかのように夷<sup>えびす</sup>提督は眩いた。

「貴虎、今度は俺から質問させてもらう。お前は深海棲艦について何か知っているか？」

「シンカイ……セイカン？いや、初めて聞く言葉ですが」

「艦娘という言葉に聞き覚えは？」

「……ありません」

その後も提督は、貴虎に向けて質問を繰り返す。

そして、一通り質問をした後に

「最後に、ここに来る前にお前は何をしていたのか話してくれ。もし話にくい事があるのなら、無理して話さなくても構わん」

と、貴虎の目を見据えて言った。

見ず知らずの者に素性を話す事について、一瞬躊躇した貴虎ではあったが、今更隠し立てする事でもない。と思い直し、今までの自分の行いについて話し始めた。

ユグドラシルコーポレーションでの自分の役割、ヘルヘイムの森による世界の浸食、それに対抗する為の人類救済計画『プロジェクトアーク』、自らアーマードライダーとなり、インベスらと戦いを繰り広げた事を……

貴虎が話し終わると、それまで相槌すら打たずに黙って聞いていた提督は、暫くの間自らの顎に手を当て思考を巡らしていた。そして少々の沈黙の後、静かに口を開いた。

「単刀直入に言おう。ここはお前が元いた世界とは違う世界だ」

「……？」

予想だにしていなかった答えが帰ってきた。

貴虎が呆気にとられていると、提督は車椅子を近くの棚に横付けして、そこに置いてあった新聞をベッドの上の貴虎に投げ渡した。腿の辺りに軽い音を立てて新聞が落ちる。

「それを読め」

貴虎は新聞を手にとるとそれを広げ、まず日付を確認する。日付の欄に記されていたのは……

「……412年7月20日!?!」

見覚えのない年号を表す数字。更に記事の内容に目を通す。

オーバードの進攻について、何か書かれていないかと隅々まで目を通す。

しかし、そのような記述はどこにも見当たらない。それどころか

【ジャム島制海権奪取】

【敵深海棲艦戦艦部隊に壊滅的打撃】

【横須賀鎮守府所属艦娘奮戦】

自分にとって全く馴染みのない見出しや記事ばかりが目に入る。

そこには先程提督が自分に向けて質問をした時に出てきた言葉が、数多く記述されていた。

「そんな、馬鹿な話が……」

開いた新聞を持った手をゆっくりと降ろす。

「目を覚ましていきなりこんな話を聞かされて、頭の整理がつかない所だろうが、それが事実だ。気持ちが悪く落ち着くまではゆっくりしていけ。それと、この事はむやみに他言しない方がいいぞ。頭のおかしなヤツだと思われる」

提督は、こめかみの辺りを指で軽く叩く仕草をしながら言う。

「それは一体どういう意味で」

と、貴虎が質問しようとした時、病室の扉が開いた。

「すみません、待たせしました」

お盆を持った夕張が戻ってきた。その上には一人用の小さな土鍋とレンゲ、水さしとコップが乗っていた。

「失礼します」

そう言つて夕張はベッドに近づくと、棚上にお盆を置き、ベッド用のテーブルのセッティングを始めた。

「じゃあ俺は一足先に帰るとする。夕張、そいつの話相手をしててやれ」

すると提督は、車椅子の肘掛部分を手で掴み、それを支えにしてゆっくりと立ち上がる。

「提督！一人じゃ危ないですよ！今、龍田を呼びますから座つてて下さい！」

慌てた様子の夕張が、立ち上がろうとする提督を止めようとする。「その必要は無い。これぐらい一人でも平気だ。これは後で俺の部屋に戻しておいてくれ」

そう言つて車椅子を軽く指で弾いた後、ぎこちない足取りで二人に背を向け歩き出した。

「あと、どうやらソイツは事故のショックで記憶があやふやらしい、何か聞かれたら丁寧に教えてやれ」

夷提督は、最後に一言付け加え病室を出て行った。

そして病室の扉が静かに音を立てて閉まる。

病室に残された二人は、その様子を無言で見つめていたが、やがて「あの人は、歩けないわけではなかったのか」

貴虎が口を開いた。

「あ、はい。提督は今怪我の治療中で、時々リハビリのために歩行訓練をしてるんです。でもああやって、勝手に一人で行っちゃう事があって」

「人の手を煩わせるのが忍びない、とでも思っているのだろうか」

「仮にそうだとしても、何かあったら困ります。上官としてその所は、もう少し気を使って欲しいです」

夕張は、若干呆れた様子で頬に手を当て、溜息をついた。

「あ、すみません。お食事の準備が途中でしたね。すぐ終わらせませから」

そして夕張は、再びテーブルのセッティング作業に移る。

「ああ、すまない」

彼女が準備を進める間、貴虎は窓の方へ視線を向け、そして考えを巡らす。

弟との戦いに敗れて海に沈んだはずの自分が、目を覚ますと知らない世界にいた。

これは自分の見ている夢なのか。一瞬そのような考えがよぎったが、時折体に走る痛みは、どう考えても現実のそのものであった。

また、夢ではなかったとしてあの男、提督が嘘をついているようにも思えない。仮にそうだったとしても、偽の新聞まで用意して騙すなどといった手の込んだ事をするとは考えにくい。第一、貴虎を騙す理由がわからない。

提督の言った通り、ここが異世界であると結論づけるのが正しいと思えたが、貴虎にはそれを事実として素直に受け入れる事は難しかった。

「あのー、早く食べないと冷めちゃいますよ?」

その声に反応し、振り向く貴虎。すると、夕張が心配そうな面持ちでこちらを見つめていた。

「やっぱり、食欲湧きませんか？」

「いや、すまない。少し考え事をしていた」

「そうですか。何があったのか私にはわかりませんが、これを食べ  
て元気出して下さい。鳳翔さんのお粥とっても美味しいですから」

そう言いながら夕張は、土鍋の蓋を開ける。

すると、中から湯気と共に食欲をそそる様な香りが広がってくる。

土鍋の中には、トロトロになるまでじっくりと煮込まれた玉子粥が  
入っていた。

その上には若干のしらすと青菜が散らしてあり、彩りにも作った者  
の気遣いが感じられる。

夕張は小鉢にお粥を取り分けると、レンゲと一緒に貴虎へ手渡す。

「どうぞ、召し上がれ」

「ああ。……いただきます」

お粥をすくい、レンゲに息を軽く吹きかけ、適度に冷ましてから口  
へ運ぶ。

「……美味しい」

思わず感想が口からこぼれ落ちる。口の中でトロトロになった米  
と玉子が溶け合い、喉の奥へ流れ込んでいく。しらすのほのかな塩気  
も程よく、火が適度に通された青菜のシャキシャキとした食感が、小  
気味よい。一口、また一口とお粥を流し込む。そして小鉢が空になる  
と、貴虎は自らおかわりをよそい、再びレンゲを口元へ運んでいく。  
思っていた以上に空腹であったのか、気が付けばあつという間に貴  
虎はお粥を完食してしまっていた。

「はい、どうぞ」

傍に立っていた夕張が、水の入ったコップを差し出す。

「ああ、すまない」

そう言つてコップを受け取り、貴虎はゆっくりと水を飲みほした。  
「ふう」

空腹を満たして体が満足したのか、自然と口から溜息が漏れる。

「美味しかったですか？」

「ああ、こんなに美味しいものを食べたのは久しぶりだ」



ここ暫くの間は変身用ベルト【戦極ドライバー】と、それに装着する【ロックシード】の力で栄養を補給していたおかげで、貴虎は食物を長い事口にしていなかった。

そのため、食に対する感動もひとしおであった。

「そう言えば自己紹介がまだだったな。私の名は呉島貴虎。宜しく、夕張さん」

「あ、宜しくお願いします」

夕張は差し出された手を取り、貴虎と握手を交わす。

「じゃあ、私の方も改めて、さつきはバタバタしちゃってましたし。……夕張です。軽巡洋艦の艦娘としてこの基地に所属しています。宜しくお願いします。私の事は呼び捨てで呼んでもらって構いませんから」

そう言つて夕張は、軽く敬礼をしてみせた。

すると貴虎は怪訝な表情をしつつ、夕張に向けて尋ねた。

「ああ、わかった。それと一つ聞きたいのだが、艦娘とは何の事だ？」  
「……え？」

思わぬ突然の質問に、きよとんとする夕張。

「さつきの男性、夷提督の話や新聞の記事から察するに、軍艦の乗組員の事だと思うのだが……本当にそうなのか？君の様な子が軍人をやっているなどは少し想像しにくいのだが……」

（艦娘を知らない？嘘……よね、いくらなんでも）

「それと、深海棲艦というのは何なのだ？どうやら君らは、それと戦っているみたいだが」

（ええっ!?!）

この世界に生きる者にとって艦娘、そして深海棲艦という言葉は普通に生活していれば、嫌でも毎日耳にするぐらい馴染み深い物である。

それを知らない人間がいるなどという事は、夕張でなくとも信じがたい事であろう。

（艦娘も深海棲艦も知らないって、どういう事？提督がああ言ってたから記憶喪失なのかと思ってたけど、話してみると全然そんな感じは

しないし……)

そうして夕張は、改めて貴虎の様子を窺ってみるが……

(うくん、嘘や冗談を言っているようには見えないわね……)

「どうした？私の顔に何かついていないのか？」

「い、いえ何も付いてないですよ」

貴虎の反応に対し、若干狼狽してしまう夕張。

(とにかく話してみましよう。この状況じゃ説明しないわけにはいかなそうだし)

そうして意気揚々と夕張は、貴虎に艦娘・深海棲艦についての説明を始めたのだった。

人に何かを教えるためには、自分が理解するために必要な知識の三倍の量が必要などと、一般的には言われることがある。

艦娘である夕張は勿論その道のプロフェッショナルであり、艦娘・深海棲艦に関する知識量で言えば、一般人を遥かに超える物を持っている。

従って、それを人に教授することなど朝飯前である。

しかし、その知識が全くない、艦娘・深海棲艦など見たことも聞いたことも無い、という人間相手となればまた話は違ってくる。

お互いの常識、文化が異なる人間に教えるとなると、それは途方も無く困難となる。

この場にいる二人にとって、円滑な意思疎通を図るには、その隔たりはあまりに大きかった。

「艦娘は軍艦の乗組員というよりは、どちらかという運用の仕方としては、軍艦そのものに近いつて感じて……」

「……乗組員ではなく、軍艦？」

「……海の上を泳ぐんじゃないかって『駆ける』というか『滑る』って言った方が良いのかな？」

「……海を、滑る？」

「……あとは、それぞれ艦種ごとに特徴があつて……例えば空母の艦娘は、搭載した数種類の艦載機を飛ばして……」

「……艦載機？」

「……で、深海棲艦は一説によると、沈んだ軍艦の怨念の集合体、なんて言われていたり……」

「……怨念？」

そんな具合に十数分程にわたつて、夕張による艦娘・深海棲艦講義は行われ……

「と、まあ大体こんな感じなんですけど、わかりました？」

話を聞き終えて貴虎は、口元に手を当てる仕草をしつつ、夕張から教わつた事柄を頭の中で整理し始める。

そんな彼の脳内では、夕張程の年頃の少女が何人も並んで腹這いになり、その背に窮屈そうに立った水兵を乗せ、ペンギンが氷上を滑るがごとく海の上を滑り、更にその近くでは、巨大な戦闘機をいくつも背負つた少女たちが、海上をドタドタと走り回り、手に取つた戦闘機を遙か遠方に漂う、艦橋部分に白の三角頭巾を巻きつけた軍艦に向かつて力一杯に投げつける、というシュールな光景が広がっていた。「……………すまない、この話は私には難しすぎるようだ。全く理解し難い」

額の辺りを手で押さえながら、貴虎はそう応えた。

「そうですね……お役に立てなくてすみません。呉島さん」

「いや、君は一生懸命話してくれた。だから気に病む必要などない」

貴虎は、上手く説明できなかつた事を気にして落ち込む夕張を気遣う言葉をかける。

「それと、私の名前も呼び捨てにしてくれて構わない」

「えっ？」

「私の周りの人間は、私の事を名前か役職で呼ぶ事が多くてな。呉島さん、なんて呼ばれ方は慣れてないんだ。貴虎と呼んでもらつた方がしっくりくる」

「そう、わかつたわ……貴虎！」

そうして、少々気恥ずかしそうに夕張は貴虎の名前を呼び、照れ隠

しに軽く笑みを浮かべる。それに釣られてか、貴虎の口元にもわずかに笑みが浮かぶ。

「それじゃあ私は、食器と提督の車椅子を片づけて来るわね。何か持ってきて欲しい物とかがあれば持つて来るわよ？」

「いや、大丈夫だ」

「そう、じゃあ行つてくるわね」

そして夕張は、空になった食器を乗せたお盆を車椅子の上に置き、それを押し外へと向かう。貴虎は「そんな食器の運び方をして、大丈夫なのか？」と質問したが、夕張は笑いながら「いつもの事よ」と言い部屋を後にした。

一人になった貴虎は、窓の外に目を向けながら

「艦娘に深海棲艦……その様な奇妙なものが存在するとは。どうやら、ここが異世界であるというのは事実のようだな……」

と先程のイメージを思い起こしながら呟いた。

その後、貴虎は戻ってきた夕張に手伝ってもらいながら、歩行訓練を行った。

体調面への配慮や基地の機密に関わる事もあつてか、移動したのは病棟内に限られた。

医者の見立て通り、貴虎の体には目立った異常・後遺症は無く、長期間寝たきりだった事による若干の体力低下があつたものの、概ね健康である事がわかつた。

そして、病室で貴虎が夕食を取り終えた頃に、再び夷提督がやってきた。

彼の後ろには、車椅子を押してきた女性、艦娘と思わしき者が付き従っていた。

「体の方も大体は大丈夫なようだな。それと、後ろにいるのが龍田だ。俺の秘書をやらせている」

「龍田ですう。宜しくお願ひします、貴虎さん」

貴虎に向かって、龍田が軽くお辞儀をする。

「ああ、こちらこそ」

合わせて貴虎も頭を下げる。

「さて、突然だが貴虎。お前には明日、横須賀に行ってもらおう事になった」

「横須賀？」

「ああ、横須賀の鎮守府、事実上の総司令部からお呼び出しだ」

「貴虎さんの事は、横須賀の方に報告させて頂きました。そうしたら向こうの提督さんが、実際に会ってお話を聞きたいと言ってきてんですよお」

夷<sup>えびす</sup>提督の言葉を補足するように龍田が言う。

「病み上がりでキツいだろうがな。まあ、我慢してくれ」

「いえ、私なら大丈夫です。こちらからも聞きたい話が出来ましたので」

「そうか、わかった。それと明日は九時に船が出航予定だ。遅れるなよ」

貴虎に向けそう言うのと提督は、貴虎の傍に立っていた夕張に視線を向ける。

「横須賀行きの船の護衛艦隊旗艦は夕張、お前に任せる。随伴する駆逐艦の小娘達を会議室に集めてある。すぐにミーティングを始めろ」  
すると龍田が脇に抱えていた封筒を夕張に向かって手渡す。

「はい、頑張つてね夕張ちゃん」

「う、今からですか……わかりました！軽巡夕張、行ってまいります！」

最初の一瞬、顔を僅かに歪めたものの、すぐに気持ちを切り替えて夕張は、早足に病室を後にして会議室へと向かっていった。

そして、しばしの沈黙の後、提督が口を開いた。

「それと明日は俺も同行させてもらう。俺からも向こうに直接伝えなきゃならん事があるのでな」

夕張は会議室への道すがら、歩きながら渡された書類に目を通していた。

（私の他に駆逐艦の子が二人か。通常の護衛と比べると編成人数が少ない気もするけど、ここから横須賀に行くだけならそこまで時間はかからないし、まあ大丈夫かな？）

そうして建物を出た夕張は月明かりに照らされた道を、会議室のある施設の方へ向かって歩いて行った。

## 【幕間 其の一】

「畜生！船底に穴を空けられた！」

「とつとと穴を塞げ！モタモタしてるんじゃねえ！」

激しく揺れる船の中を、屈強な男達がせわしなく動き回っていた。「積み荷を投げ捨てる？バカヤロウ！んな事出来るか！余計な事考えてる暇があんなら必死こいて水を掻き出せ！」

船長と思わしき髭面の男が、意見した部下を怒鳴りつける。

「おい！甲板の野郎どもはどうなっている！」

髭面の男は、手に持った無線機に向けて声を張り上げた。

無線機からノイズ混じりに聞こえてくる声に、筋骨隆々の体軀をした中年の船員が舌打ちをした。耳に当てていた無線機を口元に当てて、脇のボタンを押して返答をする。

「こちら甲板！ヤツらがどんどん近づいてきてやがります！攻撃も激しくなってきたよ！このままじゃ追い付かれてボロボロにされちまいやすよ！」

《ウダウダ言っただけで何とかしろ！ありったけの弾を叩きこんでヤツらをぶつ殺せ！》

船長の罵声に対し、聞かれないように男は再度舌打ちをする。

(ぶつ殺せ！んなの無理ってわかるだろうが！)

男は懐に無線機をしまい込むと、甲板に備え付けられた機関銃に手をかける。

彼が狙う標的は船に近づいて来る、海上を蠢く多数の黒い影。深海棲艦。その群れの駆逐級の一体だ。

「喰らえっ！」

引き金を引かれた機関銃が激しい振動と共に、込められた弾丸をさまざまに速度で吐き出してゆく。弾丸は迫りくる深海棲艦の周囲に着弾。激しい水しぶきが発生する。

そして深海棲艦の身にも着弾。だが、金属製の板をも貫通する威力を誇る弾丸は、敵駆逐艦の装甲を傷つける事は無かった。

数百発の弾丸を正面から受けても深海棲艦は、怯む様子すら無く平然と船を追いかけて来る。

駆逐艦群の一体が、その口を大きく開いた。そこから伸び出る砲身より、砲弾が放たれる。

砲弾は男らの乗る船の十数メートル横へと着弾。立ち上がった水柱から飛び散る水しぶきが、甲板へと降り注いだ。

「俺に任せろー！」

と、全身ずぶ濡れになりながら別の男が躍り出る。

その肩には対戦車用のロケットランチャーが。

激しく揺れる甲板上で何とか狙いを定め、敵へ向けて発射する。

爆音と煙を放ち高速で飛んでゆくロケット弾。

これもまた、迫りくる駆逐艦の顔面へと着弾。巻き起こった爆風が、深海棲艦を大きく後方へと吹き飛ばした。

「っしやあ!!」

ロケット弾を撃った男は片手でガッツポーズをとるが、程なくしてその眼を驚愕と共に見開いた。

弾の直撃を受けた駆逐艦は水面を数度跳ねた後、水しぶきを高く噴き上げて着水。

だが、数秒の後に再び水面へと浮上し、航行を再開していた。

「くそつたれ！バケモノめ！」

機関砲を撃った男が地団太を踏み、怒りを露わにする。

「お、おいーアレを見るー！」

と、今度は傍で双眼鏡を覗きこんでいた見張りの男が海上を指差した。

機関砲を撃った男が双眼鏡をひったくるように奪って、見張りの男の示した方角に目を向けた。

編隊を組んで航行する駆逐艦の更に後方、そこには全身黒づくめの、青白い肌をした女の姿があった。

その女は腰の辺りまで長い黒髪を垂らし、両手には身の丈と同じ程の大きさの黒い盾を構えていた。盾には砲塔が生えており、ゆっくりと旋回、微動するそれは男達の乗る船に狙いを定めていた。



深海棲艦の戦艦。戦艦ル級であった。

「ヤベエ！あんなの喰らったらマジで沈むぞ！」

男は戦慄し、身を震わせる。

その脳裏には、これまでの人生の記憶が走馬灯のように駆け巡った。

男は思わず目を瞑り、頭を抱えるようにしてその場にうずくまった。

と、その時。

上空に響くエンジン音とプロペラ音。

高速で船の上空に飛来した、ラジコン程度の大きさの飛行機の編隊が、戦艦ル級へ向けて一直線に飛んでゆく。

やがて戦闘機は海面付近まで一気に降下、下部に搭載されていた魚雷をル級の進路へ向けて投擲したのであった。

「……艦攻隊、敵戦艦を撃沈。続けて索敵機より伝令。敵残存戦力は駆逐三、軽巡一、雷巡一」

青色と白色を基調とした弓道袴姿の女が、淡々と情報を告げる。

口調と同様にその顔も、落ち着いた、と言うよりもむしろ無表情、と表現するのが適していると思える様であった。

それを受けて傍らに立つ、黒髪長髪の女が苦笑気味に口角を吊り上げた。

その女は一見するとモデルが似合う程の長身と、引き締まった体軀をしていた。しかし、露出された肌の一部からは鍛えられた筋肉の様子が窺え、表情の凛々しさも相まって、アスリートと表現した方が些か適している様に思われる。

「大規模作戦の帰路でこのような事態に遭遇するとは。少々暴れ足りなかった所だが、あの程度の戦力では、満足のいく歯ごたえは期待できそうにないな」

呟いた女は、右手のひらを大きく開き、前方へ向けてグツと突き出した。

その動きに呼応するかのように、彼女が背負った巨大な鉄塊に取り付けられた砲塔が旋回、砲身が上方へと傾いてゆく。

そして彼女の背後を航行する女性達もまた、装備した武器を敵のいる方角へと向ける。

「だが、私は如何なる敵にも容赦はせん！全艦、全砲門一斉射！撃てーっ！」

号令と共に放たれた多数の砲弾が、深海棲艦群の頭上へと飛来する。

その戦闘が終了するまで、そう長い時間はかからなかった。

「た、助かったー」

見張り役をしていた男が安堵の声を漏らしつつ、その場にへたり込んだ。

「もうダメかと思ったけど、とんだラッキーだな俺達は。艦娘が偶然近くを通りかかるなんてよ」

「まったくだぜ。にしても、あんな玩具みてえな武器でヤツらをあっさり沈めちゃうなんてな。話には聞いてたが、この目で見るまで信じられなかったぜ」

ロケットランチャーを抱えた男が、甲板の手すりに寄りかかりながら言う。

「あれに比べたら、コレが豆鉄砲みたいに思えちまうぜ」

と、自らが撃っていた機関砲を手で軽く叩きつつ言った。

「違いねえ！ハハハハハハッ！」

男らは愉快そうに笑いあう。

すると、彼らが身に付けた無線機からノイズ混じりに声が聞こえてくる。

《こちら………所属………通………周波………合わせ………》

男らは即座に耳を傾ける。暫くして男らは、何とか聞き取れた指示に従い無線の周波数を調整する。やがて音声がハッキリと聞こえるようになった。

《こちら横須賀鎮守府所属航空母艦 “加賀” です。ご無事でしょうか？》

「おおっ！こっちは大丈夫だ！アンタらのおかげで助かったぜ、ありがとよ！」

やや興奮気味に男が言う。

だが対する加賀は、相変わらずの淡々とした口調で言葉を続けた。

《ところで一つ聞きたい事があります》

「おう、何でも答えてやるぜ！」

《つい先刻、付近を航行していた輸送船が何者かの襲撃を受け、積み荷の大部分を強奪されたとの連絡が入っています。それについて事情をお聞かせ願えますでしょうか？》

同時に周囲に響き出すエンジン音。

それは船を取り囲むように上空に展開した、小型戦闘機群から発せられていた。

茫然とした様子でその光景を見上げていた男らは、武器を甲板に置いて、ゆつくりと両手を上げたのであった。

【第三話】 part 1

晴天の空の下、白い軍服を着こなした男が港に立ち、水平線の彼方を見据えている。

周囲にはコンクリートに打ち付ける波の音、吹き荒ぶ海風が港に掲げられた旗をはためかせる音が響いていた。

そんな海辺の音に耳を傾けていると、背後から人の近づいてくる気配が感じられた。港に立つ男は後ろを振り向く。

「よう、中々似合ってるじゃないか貴虎」

「本当くサイズもピッタリ！カッコいいですよ」

秘書艦の龍田を伴って、車椅子に乗った夷<sup>えびす</sup>提督がやってきた。

「私としては違和感がまだ拭いきれないのですが。こういった服を着た経験は無いもので……」

貴虎は窮屈そうに軍服の詰襟部分に指を入れ、隙間を広げるように左右に動かした。

海で救出された際、貴虎が着ていた背広は戦いの衝撃と漂流を経て傷みが激しくなっており、処分せざるを得なくなっていた。その為、新たな服を用意するまでの間、提督の軍服の予備を貸し与えられたのである。

「そのうち慣れるさ。俺もそうだった」

「そういうものですか……とところで、横須賀へはこの船で？」

貴虎は、少し先の方に見える船着き場に停泊している大型輸送船を指差す。その周りでは船員たちが重機を使いながら荷物の積み下ろしを行っていた。

「ああ、横須賀への荷物を運ぶ船だな。丁度ここに寄港する予定だったんで、ついでに乗せて行ってもらおうのさ」

「そういえば聞きそびれてしまっていたのですが、この基地は地理的にどの辺りにあるのでしょうか？」

「大雑把に言うと、伊豆諸島辺りってとこだな」

「伊豆諸島ですか……だとすると半日も時間はかからないでしょう」

ね。それと、運ばれている荷物は何なのでしょうか？」

貴虎の疑問に対し、今度は龍田が答える。

「あれは、燃料や鋼材といった資材関係なんですよ。横須賀に行く前に、この基地にも補給していくんです。その中には他の基地のみならず、頑張って集めてくれた物もあるんですよ」

「みんな……というのは艦娘の事か？」

「はい。私たち艦娘のお仕事は戦闘する事だけじゃありません。資材を運ぶ輸送船を護衛したり、時には自分たちで運んだり、色んなことをやってるんですよ」

貴虎達が今いる基地は、深海棲艦の進攻が始まった初期の頃に、本土の最終防衛ラインとして作られたものであった。その時は、まだ近隣の島々にも複数の基地が存在していた。だが制海権を取り戻し戦線が拡大した今、他の基地は解体、あるいは放棄され、機能しているのはここ一箇所のみであった。

「規模的には、泊地と言っていい位に縮小しちゃったんですけど、昔の名残で未だに基地と呼ばれてるんです」

そうして龍田や提督から基地の成り立ちを聞いていると、宿舎などの施設のある方から港へ近づいてくる人影が見えた。薄紅色の和服に紺の袴を穿いたその人物は、両手で風呂敷包みを抱える様になっていた。

「提督、こちらをお持ちになって下さい。お昼ご飯を用意しておきました」

「すまんな鳳翔」

鳳翔と呼ばれた女性から包みを受け取ると、提督は貴虎の方へ視線を向け

「会うのは初めてだな鳳翔？その男が例の呉島貴虎だ」

と、和服の女性へ向け貴虎の紹介をした。

「初めまして貴虎さん。私、鳳翔と申します」

そう言っ、鳳翔と名乗る和服の女性は深々とお辞儀をする。

「いえ、こちらこそ初めまして」

貴虎も、合わせて鳳翔へ向けお辞儀をした。

「鳳翔さん、と言いますと食事の用意をして下さった？」

「ええ、お口に合いましたでしょうか？」

「はい、美味しく頂かせてもらいました。あれほど美味な食事を取ったのは久しぶりでした」

「あら、お世辞なんて良いんですよ」

鳳翔は柔らかな笑みを浮かべ、若干気恥ずかしそうに謙遜の言葉を述べる。

「そんな、お世辞だなどと……」

「そうですね、鳳翔さんの料理は、とくくつても美味しいんですから、あんまり謙遜しちゃだめですよ。この基地で一番の料理上手の艦娘に、そんな事言われちゃったら他の艦娘の立場がありませんよお」

「うふふ、ありがとう龍田さん。じゃあ、素直にお褒めの言葉として受け取っておきます」

「艦娘、ということとはあなたも？」

「はい、軽空母の艦娘を務めさせていただいております。でも、ここ暫くは前線には出ていないんですけどね」

「ちなみに、私の前任の秘書艦でもあるんですよ」

龍田が鳳翔の言葉を補足する。

とその時、遠くから小刻みな足音と共に、何やら金属の様な物が打ち合っているような音が聞こえてきた。

一同がその音のする方向へ目をやると、二人の少女が駆け足で近づいて来ていた。

二人ともセーラー服と思わしき服装をしているが、一方は上着とスカートで構成された標準的な意匠のセーラー服を着ているのに対し、もう片方の少女はセーラー服を模したようなワンピースを身に付けており、脚には黒のタイツを穿いていた。そして二人とも背中に船のパーツの様な、奇妙な機械を背負っている。

駆け足をする少女達は、提督の前で停止し敬礼のポーズをとる。結構な距離を走ってきたにもかかわらず、二人の呼吸は全く乱れていなかった。

「おはようございます司令官ー」

「おはよう、司令官」

標準的なセーラー服を着た、後ろ髪を僅かに結えた黒髪の、素朴な外見をした少女が快活に。ワンピースタイプのセーラー服を身に着けた、淡い水色の長髪の少女が若干冷ややかな口調で挨拶をした。

「ああ、おはよう」

提督も二人に挨拶を返す。だが暫くして怪訝な表情をする。

「夕張はどうした」

「それが……」

顔に苦笑いを浮かべ、黒髪の少女が答えようとした、その時

「待って〜置いてかないで〜!」

夕張が金属音をガシヤガシヤと、けたたましく鳴り響かせながら駆け込んで来た。全力疾走をしていたせいも、一同の前で一瞬つんのめりそうになりながら停止する。

「嚮導艦が一番最後にお出ましとはな」

「す、すみません。そ、装備に、手間取り、まして……」

ぜえぜえと息を整えながら、申し訳なさそうに夕張は答える。

「だが、集合時間には間に合っているな。まあ良しとしよう」

すると提督は視線を貴虎の方に向け、簡単に二人の少女の紹介をする。

「貴虎、こいつらが輸送船を夕張と一緒に護衛する、駆逐艦娘の吹雪と叢雲だ」

「初めまして貴虎さん。特型駆逐艦の吹雪です。宜しくお願ひします

!」

黒髪の少女が貴虎へ向け敬礼をする。

「同じく叢雲よ。覚えておきなさい」

ふてぶてしい態度で長髪の少女が言う。

「呉島貴虎だ、宜しく頼む」

そう言うとき貴虎は吹雪と叢雲、二人の駆逐艦娘を暫しの間見据えていた。

「どうかしましたか?」

と吹雪が尋ねる。

「いや、この様な子供が戦いに出るのか、と思ってな」

貴虎がこれまでに目にした艦娘、夕張・龍田・鳳翔の三人は、二十歳前後。若しくはそれより若干上の年齢に思えるような容姿で、軍人として戦場に出てもそうおかしくは無い印象であった。戦争とは勝手が違うが、沢芽市でアーモードライダーとして戦っていた者達も、彼女らとそれほど変らない年齢であったと思える。だが、吹雪・叢雲の両名は、中学生程度の年頃であるように見える。流石にそれ程の若い少女が戦場に赴くとは貴虎も想像はしておらず、少々の驚きをもつて呟いたのである。

「何よ、馬鹿にしてるわけ?」

だが叢雲には、それが自分たちへ向けられた侮蔑の言葉の様に感じられた。貴虎の前へ踏み出し、睨みつける様に顔を見上げて食って掛かる。

「そういうつもりで言ったわけではないのだが……」

「そうだよ叢雲、いきなりそんな事言つて。貴虎さんに失礼だよ」

吹雪が叢雲の肩を押さえる様にして、なだめようとする。

「フツ、俺も初めはこんな小娘共が戦っていると知った時、少々驚いたもんだ」

「司令官!?!」

そう口を挟まれ叢雲は提督の方へ目を向ける。

「だがな、この小娘共は『覚悟』を決めて戦場に出てる。気概は並みの軍人なぞ及ばない位に一人前だ」

「そう思つて貰えてるのなら、小娘呼ばわりもいい加減やめて欲しいのだけれど」

「断る。それが嫌ならもつと『大人』になる事だ」

「余計なお世話よ」

そう言う叢雲は、不機嫌そうにそっぽを向く。そんな彼女に向け貴虎が声をかける。

「機嫌を損ねたというのなら謝ろう。何分、君らの様な少女が戦場へ出るとは想像してなかったものでな。許して欲しい」

「……別に、もういいわよ。気にしてないから」



「そうか。なら今日はよろしく頼む」

叢雲に向かつて手を差し出す貴虎。叢雲は、不承不承ながらその手を取り、軽い握手を交わす。

「君もよろしく頼む」

「はい！任せてくださいー！」

吹雪は、差し出された貴虎の手を両手で掴み、がっちり固く握り返した。

「これぞ大人の対応ってやつですよ」

夕張が鳳翔の耳元で囁く。

「ふふふっ」

それを聞き、小声で笑う鳳翔。一瞬、叢雲に睨まれた様な気がしたが、二人は敢えて気にしない事にした。

「さて、全員揃った所で任務の概要を確認する」

提督がそう言うとき夕張・吹雪・叢雲の三人は、たちまち真剣な顔つきとなり一斉に横一列に整列する。

「と、その前に貴虎これを持ってくれ。抱えたままだと締まりがないからな」

「わかりました」

そうして貴虎へと鳳翔から受け取った包みを渡すと提督は、軽く咳払いをして話し始めた。

「今回の任務は大型輸送船の護衛、目的地は横須賀鎮守府。夕張が先頭、右舷に吹雪、左舷に叢雲が付く。航行予定海域の制海権はこちらの物だが、時折敵の出現も報告されている。警戒は怠るな。万が一敵と遭遇した場合、戦闘時の細かな判断はお前たちに任せるが、交戦するか否かは俺が決定する。言うまでもない事だろうが、命令は必ず守れ。そして深追いはするな。以上だ」

「了解!!」

護衛の三人が敬礼する。

「鳳翔、留守は任せたぞ」

「はい、行ってらっしゃいませ提督」

鳳翔が深々とお辞儀をする。その姿は見る物によっては、女中が主

人を、または妻が夫を見送る光景にも見えたかもしれない。それ程に彼女の姿は様になっていた。

「では俺たちは、船に乗りこむとしよう。行くぞ龍田、貴虎」

そうして車椅子を押す龍田と共に、提督は輸送船の搭乗口へ向かっていった。

貴虎も、受け取った鳳翔の弁当入りの包みを抱え、その後をついて行くのだった。

貴虎達が輸送船へ向かう一方で夕張らは踵を返し、艦娘出撃用の棧橋へ向かい始めた。

「皆さんも、お気をつけて行ってらっしゃい」

見送る鳳翔へ手を振りながら、三人は歩いて行く。するとその途中で吹雪が口を開いた。

「貴虎さん、本当に艦娘の事知らないみたいですね。私達と同じ年頃の艦娘なんて、世の中にはいっぱいいるのに」

「ええ、私も驚いたけど漂流……多分、海難事故か何かだと思うんだけど、そのショックで記憶があやふやなんじゃないかって提督が言っていたから、きつとそのせいでしょうね」

「だとしても、今どき艦娘も深海棲艦も知らないなんて、流石にどうかと思うわ」

「そうですねえ」

「でも、私達が今そんな事を考えてもしようがないわよ。任務に集中しましょう」

そう言いながら夕張は、武装を身に付けた左腕でガッツポーズをとる。

すると叢雲が、その左腕を訝しげに見つめながら言った。

「わざわざ時間をかけて “それ” 持つてくる必要あったの？」

「これ？確かに今回の任務では使わないかもしれないけど、付け心地とか、航行に与える影響のデータを取れたかったから付けてきたのよ。実戦で不具合があったら困るしね」

「それって新開発の装備ですよ？」

「ええ、そうよ。あなた達もいつか使うことがあるかもしれないから、楽しみにしててね」

「はいー」

「まったく……そんな風に無駄に装備を持つてくるから、いつも遅くなるのよ。出撃も航行も」

「うぐ……」

痛い所を突かれて、夕張は口ごもる。夕張は通常の仕事以外に、兵装の実験を受け持っているため、常に他の巡洋艦娘以上に重装備をして出撃する事が多い。本人にそれを可能とするだけの能力があり、自ら進んでやっている事なのだが、装備に時間をかけすぎたり、武装の重さのせいで航行速度が落ちるため、時折仲間に置いて行かれそうになるのである。

「ま、まあでも夕張さんが、こうやってデータを取ってくれてるおかげで、私達も安心して武装を使うことが出来るんですから。大丈夫ですよ！みんな夕張さんに感謝してますよ」

夕張に対し吹雪がフォローの言葉を口にする。

「あ、はははは。ありがとう吹雪」

そうこうしているうちに三人は、艦娘出撃用の栈橋へとたどり着く。それと同時に、背負った艀装に括り付けられた主機を手に取り、足へと装着する。背負った艀装と、これとを身に着ける事によって、艦娘は海上を「駆ける」事が出来るようになる。主機の形状は艦娘によって大きく異なり、船の形を模した物から、普通の靴と変わらないう見た目の物まで様々な物が存在していた。

夕張達は主機を装着すると、海へと足を踏み出す。その体は水中に沈むことなく、ゆっくりと滑る様に前へと進んで行った。そして全員が海上に降り立ち、進行方向に向け縦一列に並んだ陣形「単縦陣」を組んだのを確認すると、旗艦である夕張が高らかに号令をかけた。

「護衛艦隊出撃よ!!」

輸送船が出港して数時間後

「レーダー依然として異常反応無し！」

「ソナー同じく！」

「各方向とも目視観測異常なし！」

輸送船の艦橋内では、船員達の報告をする声飛び交っていた。観測に臨む船員たちの表情は真剣そのもので、出港して以来殆ど持ち場を移動するも無く、一心不乱に目を凝らして洋上を見つめ続けている。

貴虎・夷提督<sup>えびす</sup>・龍田の三人は、艦橋入口の扉付近からその様子を眺めていた。

「随分と緊張感が漂っていますね。双眼鏡を構えている方々からは特に」

「そうだな」

「一般船舶での深海棲艦に対する索敵は、目視が中心になってますからね」

「レーダーもソナーもあるのにか？」

「そんなのは気休めだ。やつらに対してはな」

この輸送船に搭載されているレーダーやソナーは、あくまで通常の船舶等を発見する事を念頭に置いたもので、それらに比べ遥かに小型な深海棲艦を探すのには適していなかった。深海棲艦の反応は大型の海洋生物や魚類などと似通っている部分があるため、確実な索敵を行うのは困難を極めた。もちろん対深海棲艦に特化した物も存在はするのだが、量産の体制は整っていない。現在その生産設備では、艦娘達に搭載するための電探・ソナー系統の装備開発・生産が優先的に行われており、通常の船舶用の物は生産が後回しにされているのが現状だった。

だが僅かな異常や観測者の感じた違和感が、深海棲艦の発見に繋がるといふケースも存在するため、通常のレーダーやソナーでの観測は未だに行われているのである。

「なるほど、道理で」

一通り説明を聞き終えた貴虎が呟く。すると提督が

「いい機会だ、お前もやってみろ」

と言い、近くにあつた予備の双眼鏡を貴虎に手渡した。それを受け取った貴虎は、艦橋内をぐるりと見回す。

しかしながら艦橋内の窓際には双眼鏡を構えた船員達が立っており、貴虎が入れそうな場所は無い。

「ですが、もう場所が無いようですが」

「あそこだ」

と、提督は船の進行方向へ向け指をさした。

三人は艦橋を出て、輸送船の艦首付近へとやってきていた。提督が指し示した場所は、そこであった。

洋上の天候は夏らしい晴天で、遠くの空には巨大な入道雲が広がっていた。甲板が眩いばかりの太陽の光に照らされ、反射光を辺りに散らばせている。気温もそれなりに高くはあるのであるが、海風のおかげであまり不快な暑さは感じられなかった。

「う〜くん！風が気持ちいいですね〜」

髪をなびかせながら龍田が、両手を前に突き出し大きく伸びをする。

「ああ、良い風だ」

かぶった帽子を右手で手直ししながら、提督もそれに同調した。

一方で貴虎は、艦橋を出る際に船員から貸してもらった無線機を取り出し電源を入れる。そして無線の周波数をセッティングする。暫しの後、無線機から夕張の声が響いてきた。

《やつほ〜調子はどう貴虎？》

艦娘の艤装には無線機能が搭載されている。それは戦闘に支障の無いよう、イヤホンやマイクを介さずとも、やり取りが可能となっている高性能な物であった。

「夕張か。こっちは問題ない。至って快適だ」

言いながら貴虎が双眼鏡を覗きこむと、輸送船を先導して海を進む夕張が首だけを少し振り返らせ、貴虎達に向かって手を振っていた。《そう、それは良かったわ。……あ、そういえば私達が航行する姿を見るのは初めてだったわね。どうかな、初めて見た感想は？》

「そうだな……想像していたよりも、随分と優雅だな」

《あら、意外とお世辞が上手いのね》

横から叢雲が口を挟む。

「別に世辞ではない。本当に心からそう思っている」

《ふふふつ、ありがとうございます。艦娘が航行するのは、もう当たり前前の事になってて私たちの事そんな風に言ってくれる人って今はあんまりいないから、何だか新鮮でちよっぴり照れちゃいます》

と吹雪も話に加わってくる。

「しかし、観測と言っても何を目印にすればいいのだろうか？」

《そうね例えるなら……ホエルウオツチングって感じかしら？深海棲艦は基本的に黒い色してるし、鯨とかシヤチを探すつもりでやってみるのが良いかも》

という夕張のアドバイスを受け、貴虎は双眼鏡の倍率を調整し、周囲を見渡し始めた。

《私達よりも高い所にいる人の方が、遠くまで見渡せますからね。頑張ってください！》

吹雪の応援も受けて貴虎は、暫くの間索敵行動を続けた。

「目視による索敵というものは、思った以上に疲れるものなのだな」  
「そうでしょく、体は立ってるだけでも、真剣に警戒してる時はすっごく頭を使うから、本当に大変なのよお」

甲板での索敵体験を終えた貴虎は、提督・龍田と共に、昼食を取るため輸送船内の食堂へやって来ていた。

空いている席に腰を掛けると、龍田が鳳翔から渡された風呂敷を広げ、包まれていた重箱の蓋を開ける。

中には一つ一つ丁寧に包装されたおにぎりと、付け合わせのだし巻き玉子が入っていた。

「これは美味そうだな」

そう言いつつ貴虎がおにぎりを一つ手に取る。

「そうですね」

「すまんが俺は船長と今後の打ち合わせがあるのでな。別の所で食わせてもらう」

すると提督は、おにぎりを二個風呂敷に包んで、車椅子に括り付けてあった荷物入れへと放り込む。そして車椅子から立ち上がり荷物を取ると、左足を引き摺る様にゆっくりと歩き出し、食堂を後にしたのだった。

席には貴虎と龍田だけが残される。

「このような揺れる船の中で、一人になって大丈夫なのだろうか？」

貴虎が心配そうに呟く。

「大丈夫ですよお。今日はいつもより調子が良さそうですから」

「そうなのか？」

「ええ。提督のお傍にずっといるんですもの、私には分かるんですよ」

龍田は人差し指を頬に当てながら、得意げにしている。

「それに、バランス感覚を取り戻す訓練にもなりますから」

「なるほどな」

「それじゃあ、そろそろ食べましょ。いただきます」

両手を合わせてゆっくりと食事前の挨拶をすると、龍田は重箱の中のおにぎりを手に取った。

「いただきます」

龍田に倣って貴虎も手を合わせ、おにぎりを掴む包装を外し一口食べる。

口の中に海苔の風味と共に塩の味広がる。更にもう一口食べると酸味が舌を刺激した。

「どうやら具は梅干しのようである。」

「う〜ん〜たまりませんねえ、この酸っぱさ」

口をすぼめ目をギュツと閉じ、龍田が顔全体で味を表現する。

「そういうえば護衛の者達の食事はいいの？」

重箱の中身は、どう見積もっても六人が食べるには量が少ない様に思われた。

「護衛の娘達は横須賀に着くまでご飯は食べませんよ。短時間の任

務だと休憩を取らない事はよくあるんです。だからこれは全部私達の分ですよ」

付け合わせの玉子を手に取りつつ龍田が言う。

「でも心配しなくても大丈夫よお。みんなお腹を空かせて、横須賀の間宮さんの所でご飯を食べるのをすつごく楽しみにしてるんですからあ」

「間宮さん?」

「間宮さんは給糧艦の艦娘なんですよお。戦闘に出る事は無いんですけどとっても料理上手で、横須賀に行く時はみんな間宮さんの所で食事をするのを楽しみにしてるんです」

「そうか、艦娘にも色々いるのだな。思えば君たちについては知らない事だらけだ」

「じゃあ私が艦娘の事教えてあげちゃいます。横須賀に着くまで時間もたつぷりありますから」

「ああ。ではまず一つ質問させてくれ。君達の名前、龍田とか夕張とこのは本名なのか?だとすると随分と変わった名前のように感じるのだが」

「そうですねえ……どちらかというコードネーム、みたいなものかしら?」

そうして貴虎は昼食を取りながら、艦娘についての知識を得るために龍田へと質問をしていたのだが、いつしか話題は龍田と同じ基地に所属する艦娘達の話へと移り変わり、彼女達の人となりについてが話題のメインとなっていた。

そんな時、突如として船内に警報が鳴り響く。同時に無線へと連絡が入ってきた。

「龍田、貴虎、至急艦橋まで来い。深海棲艦を発見した」

「了解しましたあ、すぐに行きます」

そう告げると龍田は素早く駆け出し食堂を後にする。貴虎も即座にその後を追った。



【第三話】 part 2

貴虎達は艦橋へ向かう際に何人かの船員とすれ違った。全員が首から双眼鏡をかけており、鬼気迫る様子で走っている。その中には、先程まで艦橋内で観測を行っていたと思われる者達もいた。

(ただならぬ緊迫感が漂っている。やはり、深海棲艦とはそれ程に驚異的な存在なのか……)

深海棲艦についての知識が、夕張らより聞きかじった程度にしか無い貴虎にも伝わるほどに、船内の空気は緊迫していたのだった。

貴虎と龍田が艦橋内にたどり着くと、そこでは輸送船の船長や船員達が慌ただしく各所への指示を飛ばしていた。

「来たか」

「敵さんの襲撃ですかあ？」

「いや、どうやら敵はまだこちらには気づいて無いようだ。だが進路上でぶつかる可能性が極めて高い。それに可能性としては低いだろうが、向こうが囷の陽動部隊という事もありうる。船長には念のため甲板にも、観測の船員を増やしておくように指示させたが……」

そう言うと提督は口を噤み、考えを巡らしだす。同時に貴虎へ双眼鏡を手渡し、船の進路上のとある地点を見る様に促した。

貴虎が倍率を調整しながら双眼鏡を覗きこむ。すると、遙か遠方で黒い点の様な物が、船の進路と垂直に交わる様な進路をとって移動しているのが見えた。

「多分駆逐艦ねえ。この進路だとT字戦の形になるわねえ」

龍田も双眼鏡を覗きこみ呟く。

「……よし」

考え始めて一分と経たないうちに提督は決断を下し、無線を手に取ると護衛艦娘達に向け指示を飛ばす。

「交戦を許可する。直ちに進路上の敵艦へ向け先制攻撃を仕掛けろ」

《了解！》

《了解です！》

《了解よ!》

無線からは、護衛艦娘達の勢いの良い返事が響いてきた。

「龍田、お前はそのまま索敵を続ける。貴虎は念のため安全な部屋へ行っている」

「了解しました〜。」

そうして龍田は窓際に近づき双眼鏡を構え、索敵を開始する。と、その隣へ双眼鏡を手に持った貴虎が近づいてきた。

「何をしている」

「私にもお手伝いさせて下さい。こんな状況で一人じつとしているのは、性に合わないもので。それに、観測の目は一つでも多い方が良いでしょう」

貴虎は振り返り、真剣な眼差しを以て提督に告げた。

「好きにしろ」

「はい」

ぶつきらぼうに提督が返答する。それを聞くと貴虎は窓の方へ向き直り、双眼鏡を覗きこむ。

暫く視線を彷徨わせると、前方二時の方角に小さな黒い点が二つ見えた。それは時間と共に少しずつ大きくなっていき、その輪郭を露わにさせていく。その姿は艦というよりも何かの生物、いや怪物じみていた。

「あれが、深海棲艦……この世界の脅威……」

「了解!」

《了解です!》

《了解よ》

夕張の声に続くように吹雪、叢雲の返事が無線に入ってくる。

提督から交戦許可が下されれば、次は夕張の番である。旗艦である彼女が、戦場においては指揮官となるのだ。

伝えられた情報を頭の中で素早く整理し、指揮下の艦娘に命令を下さねばならない。夕張は無線を通して二人の駆逐艦娘に言い放つ。

「敵は恐らく駆逐艦二隻。でも他に敵が出現する可能性も考えて、二手に分かれるわよ。私が輸送船の護衛と周囲の警戒を引き続き行わ。吹雪と叢雲は前方二時方向の敵を迎撃して」

「はいー」

「わかったわ」

二人の駆逐艦娘は返答と同時に主機の出力を上げ、遙か前方の敵の方へと向かっていく。

輸送船の右側から直進していく吹雪の後ろに、左舷の警戒をしていた叢雲が大きく回り込むようにして付いて行く。そして、十分な距離をとって“単縦陣”の陣形を組み、最大船速で激しい水しぶきを立てながら進む。

暫くの間を経て彼女達の視線の先では、二隻の深海棲艦“駆逐イ級”が、その目を青く輝かせる。それは、深海棲艦たちが獲物を発見し、攻撃態勢へと移る合図であった。しかしながら、既に攻撃準備の整っていた二人の駆逐艦娘を相手にするには、その反応はあまりに遅い。

「砲雷撃戦開始します！」

その声と共に、吹雪が手に構えた12.7cm連装砲を、後ろに着く叢雲も艤装から伸びるアームの先に取り付けられた12.7cm連装砲を一斉に発射した。

狙いすまして発射された砲弾が駆逐イ級の傍に着弾し、水柱を吹き上げた。直撃はしなかったものの、衝撃によって駆逐イ級は二隻とも損傷を負う。すると二隻の敵艦は、陣形を崩し大きく進路を変更し始めた。一方は面舵をとり輸送船から見て十二時の方向へ、もう一方は取舵でUターンし、元来た航路を引き返そうとしているようだった。

「逃げるつもりなのよね」

「私が前に逃げる敵を追いかけるから、叢雲は引き返そうとしてる敵をお願い！」

「了解！」

吹雪と叢雲も二手に分かれ敵艦を追い始めた。

吹雪は速度を維持し、駆逐イ級へ向け連続で砲撃を浴びせかけた。

だが、ジグザグに動き攻撃を回避する“之字運動”を繰り返す敵に対し決定打を与える事は出来ない。吹雪の狙いは悉く外れ、先程の様に至近距離での爆発による衝撃でダメージを与える事も敵わなくなっていた。

「意外と素早いな……」

吹雪は若干の焦りを抱き始めていた。そこで一瞬後ろを振り返る。輸送船が大分小さくなっていった。どうやら思っていた以上に深追いをしてしまっていたらしい。

「これ以上追うと船と距離が離れ過ぎちゃう。……だったらコレに賭ける！」

吹雪は連装砲での攻撃を諦め腕を降ろすと、腰を落として魚雷の発射体勢をとる。両脚に取り付けられた61cm三連装魚雷が九十度回転し、敵駆逐艦に向けて発射された。

「当たってえ!!」

扇状の軌道を描き計六本の魚雷が海中を進んでいく。之字運動を繰り返す駆逐イ級へ向けて。

一本……二本と発射された魚雷は、駆逐イ級の傍を素通りしていく。しかしそのうちの一本が、駆逐イ級の軌道とピッタリ重なり直撃した。敵艦は大爆発を起こし、黒煙を吹き上げながら海中へとその姿を消していった。

「やったあー！」

吹雪は両手の拳をギュツと握りしめ、喜びの感情を露わにする。それと同時に減速をする為に主機の出力を落とし、輸送船の元へと戻る為の体勢を整え始めた。

叢雲は、別方向へ逃亡を図る駆逐イ級が方向転換しきる前に撃破しようとして、速力を保ったまま攻撃体勢を整えた。すれ違いざまに砲撃を浴びせて、一気に決着をつけてしまおうと考えていた。その狙いを察したのか、駆逐イ級が一足早く叢雲に対し砲撃を開始した。むき出しにされた歯の生えた口を大きく開かれる。すると不気味な咆哮と共に、砲弾が放たれた。

叢雲は敵の狙いを見極め、左へと進路をとる。彼女の横、少し離れ

た場所に敵弾が着弾し、海上に水柱が出現する。

その後も飛来する砲弾を巧みにかわし続けた叢雲は、敵艦とすれ違  
う直前に一斉砲撃を浴びせかけた。

「沈みなさい!!」

大音量を発しながら、両脇の連装砲から砲弾が発射される。駆逐イ  
級の周りに一瞬にして多数の水柱が立ち上がった。

「よしー!」

その水柱の脇を抜けた叢雲は、後ろを振り返り着弾点を確認する。  
手ごたえは十分であった。勿論敵は仕留められたものと思われた  
……が

「ちっー……生意気ね」

敵駆逐イ級は水柱を飛び出し、後方へと抜け去っていた。様子を見  
る限りダメージはあったものの、中破クラスに収まっていたようであ  
る。叢雲の攻撃は直撃には至っていなかったのだ。

「逃がさないわよ……」

戦い慣れていた駆逐イ級を、至近距離での砲撃で撃沈する事が出来  
なかつた事に、プライドの高い叢雲は我慢ならなかつた。経験を積み  
練度の上がつた自分が、たかが駆逐艦の一隻を沈め損ねるなどありえ  
ない。そう思った叢雲は直ちに進路を変え、中破状態の駆逐イ級を追  
撃し始めたのであった。

《叢雲！何してるの!? 深追いは厳禁よ！戻りなさい!》

無線に乗って夕張の声が響いてくる。

「大丈夫よ！あの程度すぐに沈めて戻るわ!」

叢雲はその呼びかけを無視し、速力を上げ敵艦への砲撃を開始し  
た。

「もうっ！何やってるのよ、あの娘は!」

《夕張さん！私が叢雲を連れ戻します!》

「吹雪！あなたはすぐに輸送船の護衛に戻って！私の方が距離が近  
い、だから私が連れ戻すわ!」

吹雪に指示を下すと夕張は面舵をとり、敵艦を追う叢雲の方へ全速  
力で向かっていった。

「困ったものね叢雲ちゃんにも……」

双眼鏡を覗きこむ龍田は、無線の内容を聞いて溜息混じりに呟いた。

「龍田、貴虎」

不意に後ろの席に座る提督が、索敵を行う二人に声をかける。その声を受け二人は後ろを振り返った。

「何か嫌な予感がする。今まで以上に警戒を強めろ」

二人に向かって言うと、提督自身も気を引き締める様に軍帽をかぶり直し、まっすぐに前方を見据えた。

「了解です」

相変わらずのゆったりとした声で返答する龍田。しかしながら、外の光景を見つめるその表情は真剣そのものであった。

貴虎も同様に、真剣な面持ちで双眼鏡を覗きこんだ。

「何か根拠がおりなのですか？」

貴虎がそのままの状態で見守る。提督に話しかける。

「勘……だな」

提督は静かに、だが確信めいた口調で返答した。

一発、また一発と叢雲は狙いすまして連装砲から砲弾を発射していく。依然として之字運動を繰り返す駆逐イ級に対し、未だに直撃弾は無かったものの、至近弾の衝撃でその装甲は確実に削られていた。

黒煙を吹き出しながら逃げ続ける駆逐イ級が沈むのは、最早時間の問題であった。イ級の之字運動も動きの幅が小さくなっていき、遂にはただ一直線に進むだけとなってしまった。

「ふふん、もう回避運動する元気も無いみたいね。じゃあ楽にしてあげるわ!!」

叢雲は左腕に装着した魚雷発射装置を構え、狙いを定めて発射した。勢いよく発射された三本の魚雷が着水し、白い軌跡を描きながら

速度を上げ一直線に敵艦へと向かっていった。

大破状態で速力も落ち切っていた駆逐イ級に、これを避ける術は無い。しかして魚雷の直撃を受け駆逐イ級は爆散する。

「まあ、こんなもんね」

敵の撃沈を確認すると叢雲は、服に着いた煤を手で軽く払いながら速度を落とし始めた。

しかし、叢雲は気付いていなかった。魚雷が当たる直前、その一瞬。駆逐イ級が僅かに叢雲の方を振り向き、彼女を嘲笑うかのようにその眼を細めた事を……

---

(これがこの世界の、彼女達の戦いか……)

貴虎の視線の先では駆逐イ級が、叢雲の放った魚雷により爆散する光景が見えていた。

艦娘の戦いに目を奪われていた貴虎だが、同時に深海棲艦のおぞましさも、彼を驚愕させるものであった。

海上を跋扈する異形の怪物。

今までに貴虎はインベス、オーバロードといった怪物らとの戦いを経験しており、常人よりもそういった存在については馴染みがあった。

しかし深海棲艦はそれらとは似て非なるものである。それが漂わせる何処か異質な雰囲気、貴虎の本能は感じ取っていた。

夕張が言っていた“沈んだ船の怨念”が関わっているという話も、まんざらただの噂話では無い様にと思われる。

そんな事を考えながら、ふと貴虎は叢雲の後方を見やる。すると、海中に黒い影の様な物が揺らめいているのが見られた。影は徐々にその大きさを増していく。

「龍田、あれは何だ？」

貴虎がそう言って指し示した所へ、龍田が目を向ける。

瞬間、龍田の顔が青ざめる。そして無線に向かって咄嗟に叫んだ。

「叢雲ちゃん後ろ!!」

《叢雲ちゃん後ろ!!》

無線から龍田の声がこまりました。

その声を受け、叢雲が後ろを振り返る。するとその先には、叢雲へ向け伸びてくる三本の白い筋。魚雷が迫ってきていた。

(魚雷攻撃!?! 一体何処から!?!)

心の中で声を上げると同時に叢雲は、停止しかかった主機の出力を再び最大まで上げ始めた。

そして魚雷の描いた軌跡の先へと、更に視線を伸ばす。そこには、黒い長髪を不気味に水面に漂わせた、女性の水死体の様な物体が浮かんでいた。その眼は青い光を鈍く輝かせながら、叢雲の方をじっと、恨みがましく見据えていた。

(潜水艦!?! 待ち伏せされていた!?!)

潜水艦型の深海棲艦 “潜水力級” から発射された魚雷は、確実に叢雲の位置を捉えていた。このまま今の場所に留まれば、被弾は避けられない。たかだか小型の船の攻撃といえども、魚雷攻撃は戦艦クラスの装甲をも壊す程の威力を持っているのだ。それを駆逐艦娘である叢雲がまともに喰らえば、大破は免れない。場合によっては轟沈、すなわち死に至る可能性すらあった。

「早く動きなさいよ!!」

焦りのあまり思わず声を荒げる叢雲。一度停止しかかった上で速度を上げるのは、少々時間を要する。その僅かな時間に魚雷との距離は確実に縮まっていく。

魚雷をぶつけ相殺する事も考えたが、再装填は間に合いそうになり。叢雲は連装砲の装着されたアームを後方へ向け、魚雷を破壊しようとして一斉砲撃を始めた。だが身体を前に向けながら首をひねり、後方を見ている状態では狙いが上手く定まらない。おまけに焦りのせいもあってか、砲撃は魚雷をかすめる事すら無かった。弾も尽きた所で砲撃を諦め叢雲は、回避のための姿勢制御に意識を集中する。

「あああああーっ!!」



自らを奮い立たせるように雄叫びをあげ、姿勢を制御し叢雲は面舵をとる。その叫びに呼応するかのように主機が大きく唸りをあげ、足元に激しく水しぶきをまき散らす。身体が大きく横滑りしながら右方向へ旋回する。

完全に方向を転換したその瞬間、彼女の真後ろを数本の魚雷が通り抜けて行く。魚雷は近接信管が作動しなかったのか、そもそも搭載されていなかったのか定かではないが、爆発する事は無かったのだ。

後ろを振り返り魚雷が通り過ぎて行くのを確認し、叢雲は安堵する。が、その刹那

《叢雲！前だ！！》

無線から貴虎の声が響き渡る。それに反応し前方に向き直ると、叢雲の進路上に黒い影、別の潜水力級が海上に出現した。その周囲には、魚雷発射管への注水完了を意味する水泡が点々と浮かび上がっていた。

二隻の潜水力級と駆逐イ級が、この海域に同じタイミングで出現したのは、完全なる偶然であった。

付近の海域において他の艦娘達と交戦し、大きく損傷していた二隻の潜水力級。かろうじて逃げ延びたものの、航行能力も失われ、もはや海中を漂うばかりの状態であった。

だが、二隻のはぐれ駆逐艦が艦娘達と交戦をし、そのうちの一隻が偶然にも二隻の潜水艦のもとへやってきた。潜水力級の存在を感じ取った駆逐イ級は、敢えて討たれる事で叢雲に隙を作らせた。自分を痛めつけた艦娘へ一矢報いてやろう、という憎悪のこもった最後の抵抗であった。

潜水力級らもまた、艦娘への憎悪を抱いていた。そして、自分をこんな姿にした艦娘どもの同胞を葬り去る事が出来る、その喜びに打ち震えていた。運悪く自分の真正面へと躍り出た、哀れな艦娘を沈められる喜びに。

今のこの距離、全速力で進路変更をした直後の叢雲へと、魚雷を命中させるのは容易い事であった。それが唯一残された、一発の魚雷で

あつてもだ。魚雷発射管へ注水を開始すると同時に、かろうじて生きていた浮上機能を使つて、海面へゆつくりと姿を表す。注水が完了し、その眼に捉えた艦娘へ向け魚雷を発射する刹那、潜水力級の意識はプツリと途絶えていた。

叢雲の前方で爆音と共に、巨大な水柱が立ち上がる。その位置にいた潜水力級は、爆発に巻き込まれ消滅していた。

打ち上げられた海水が頭から降り注ぎ、叢雲の身体を濡らす。

「叢雲、大丈夫!？」

叢雲が声のした方へ振り向くと、そこには夕張の姿があつた。その左腕に装着された武装からは、噴射煙が立ち上つている。その武装こそが、夕張が出港前に装備していた対潜武装『三式爆雷投射機』であつた。

「もう一発!!」

夕張は左腕に装着した三式爆雷投射機に再装填すると、もう一隻の潜水力級へ向けて爆雷を投射する。

大きく放物線を描いて飛び、着水した爆雷の爆発を受けて、潜航しようとしていた潜水力級もまた、海の藻屑となつたのであつた。

「どう? 他に敵艦はいそう?」

《大丈夫そうよくそれらしいものは、もう見えないわ》

龍田が無線で応答する。少し間を空けて

《……他の船員達の報告でも敵艦の姿は、もう見られないとの事だ》  
輸送船内からの情報を集めた提督からの返答があつた。

「それにしても、貴虎お手柄ね」

《いや、敵を撃破したのは夕張だ。私は大したことはしていない》  
「そんな事無いわよ。あなたのおかげで二隻目の潜水艦を見つけられたんだから」

《そうですよ! 貴虎さんのおかげです、叢雲が助かったのは!》

吹雪も、無線の向こう側で歓喜している様子であつた。

叢雲の後を追いかけていた夕張は龍田の声を聞き、爆雷投射機の照準を一隻目の潜水艦に合わせ発射しようとしていた。そんな時、貴虎から二隻目の潜水艦発見の報が入つた。それを聞いた夕張は即座に

狙いを変更し、叢雲の正面の潜水力級に向けて爆雷を投射したのであった。

そして間一髪、敵が魚雷を発射する直前に仕留める事が出来た。結果として損害を出す事無く、戦闘を終わらせる事となったのである。その事実には艦娘一同、輸送船の乗組員の誰もが喜びの声を上げていた。

しかし……

「……………っ!!」

叢雲だけは、悔しさを顔に滲ませながら海上に立ち尽くしていた。

【第三話】 part 3

水平線が橙色に染まる刻。横須賀の港もまた、夕日に照らされ色付いていた。

港に備え付けられたクレーンがせわしなく動き、輸送船に積まれたコンテナを次々と降ろしていく。無事に航海を終えた輸送船の船員達は、船と貨物を港の職員達へと委ね、久々の丘で過ごす夜を堪能する為、嬉々として港を後にする。

だが、貴虎、艦娘達、夷<sup>えびす</sup>提督らは未だに港に残っていた。提督の横には龍田と貴虎が控え、正面には輸送船護衛を担当した艦娘達が横一列に整列していた。

そして貨物を移動させる音が響く中……

「馬鹿者！何故、俺や夕張の命令に従わなかった」

提督の、静かだが威圧感と凄みを感じさせる叱責の声が、叢雲へ浴びせられた。

「……………」

叢雲は俯いたまま沈黙する。

「お前の役目は何だ」

「……………輸送船の護衛」

「それが分かっているながら、何故勝手な真似をした。輸送船だけでなく、場合によっては夕張や吹雪が危険にさらされた可能性もあったんだぞ」

「……………」

再び叢雲は口を噤んでしまう。

「…………自分がやるべき事、守るべき者を見失うヤツに戦う資格は無い」  
そう言い放つと提督は、龍田の方へ顔を向ける。

「叢雲は帰りの護衛任務から外す。代わりにお前が入れ」

「了解しましたあ」

それを聞いた叢雲は、俯いたまま肩を静かに、一瞬震わせた。

提督は再び正面に向き直り、全員へ簡潔に告げる。

「ご苦労だった。明日の出航時刻まで各員自由に過ごせ。以上、解散」  
提督の解散号令が下されると同時に、叢雲が踵を返して走り出した。

「あつ、待って叢雲！」

夕張が即座に叢雲の後を追い、引き留める。

「何？」

「あのさ、せっかく任務も終わったんだからさ、みんなでご飯に行きましよう？」

「……結構よ」

「そんな事言わないでさ」

夕張が叢雲の肩に手をかける。

「やめて」

その手を払うように叢雲は肩を揺らし、冷たく言い放つ。それに対し夕張は一瞬たじろいだ。

「さつきは……悪かったわ……でも、今は余計なお節介は、やめて」

そう言い残すと叢雲は、再び駆け出して行った。

「あつ……」

「仕方ないわ。今は一人にしてあげましょ」

夕張の元へ龍田が近づいてくる。

「……そうね」

「さあ、それじゃあ、そろそろ行きましようか。提督、後ろ失礼します」

そうして龍田が、提督の車椅子の背後へ回り込もうとする。

「いや、その必要は無い」

そう言い提督は、視線を港の入口の方へ向ける。一同がその方向へ目をやると、一つの人影がこちら側へ向かってくるのが見えた。

夕日に照らされ、海風に長い黒髪をなびかせながら歩いてくる女性。白の胴着に赤い弓道袴を身に着けたその姿は、何処か凜とした空気を漂わせている。

そうして、提督の前までやってきた女性は、柔らかな笑みを浮かべ一礼をした。

「お久しぶりです、夷<sup>えびす</sup>提督。本日は急な呼び出しにも拘らず、ようこそおいで下さいました」

「堅苦しい挨拶は抜きだ赤城。背中が痒くなってくる」

「ふふっ、それは失礼しました」

そう言つて口元に手を当てて、赤城と呼ばれた女性は微笑む。更に貴虎の方へ視線を向け一礼をする。

「あなたが呉島貴虎さんですね？初めまして。私は今現在、この横須賀鎮守府の提督の秘書艦を担当している、正規空母の赤城と申します」

「呉島貴虎です。こちらこそ初めまして」

「早速で申し訳ありませんが、当鎮守府の提督が待つておりますので、御一方は執務室までお越し下さい」

「ああ、行くぞ貴虎」

「はい」

「では参りましょう。失礼いたします」

そうして赤城は提督の車椅子の後ろに回り込み、グリップを手に取り押し始める。

提督、貴虎、赤城が港を後にする。

「次にみんなが集合するのは、明日の朝ね」

「そうね、貴虎さん以外はねえ」

「え？どういう意味？」

思いもしない龍田の発言に、疑問を投げかける夕張。

「だって〜貴虎さんは民間人よお。ウチの基地で一時的にお世話していただいで、あの人にはあの人<sup>の</sup>生活があるはず。ここで事情聴取を受けて、機密を口外しない様に誓約書を書いて、お家へさようなら〜って事になるんじゃないかしらあ？」

「あ……そっか、そうだよね。……これでお別れかあ」

「どくしたの夕張ちゃん？……あつ、もしかして貴虎さんのこと〜？」

龍田は口元に手を当て、ニヤニヤとしながら夕張の顔を眺める。そんな龍田の言葉の意味する所を理解したのか、夕張は顔をほんのり赤

面させて、目の前に伸ばした手のひらをブンブンと振る。

「ち、違うってば！そんなんじゃないって！ただ折角、少しでも仲良くなれたのに、すぐお別れなんてちよつと寂しいなって思っただけよ！」

「あらあら、じゃあそういう事にしておくわね」

「もう！龍田の意地悪！」

ニヤニヤとしながら回れ右をした、すまし顔の龍田の背中をポカポカと夕張が叩く。一方の龍田は、歩く貴虎達の背中へ視線を向ける。(……でも、提督の様子を見てみると、普通にお別れって感じにはならないような気もするけどお。どうなるにしても明日が楽しみね)

「もうこの話は終わりー」ごはん食べに行きましょう！お腹ペコペコよ」  
照れ隠しの様に声を上げた夕張が、手でお腹をさすりながら話題を切り替える。

「そうね、間宮さんの料理をいただきに行きましょうか」

「ええ！それじゃあ、しゅっぱーっ！」

夕張の言葉に龍田が同調し、二人は食堂へ向け歩き出した。すると「す、すみません！」

今までずっと黙っていた吹雪が突然声を上げた。それに対し夕張と龍田は後ろを振り返る。

「どうかしたの？」

「私、行く所があるので晩御飯と一緒に出来ません。お二人だけで行ってきて下さい」

「あつ！」  
「そう言い夕張と龍田に向け頭を下げた吹雪は、一人で駆け出した。」

夕張が言葉をかける間もなく、走り出した吹雪の姿は、みるみる小さくなっていった。

「ふふふ、やっぱり駆逐艦の事なら駆逐艦同士よねえ」

龍田が目を細め微笑する。

「え？……ああ、そういう事か」

龍田の言葉の意味する所を理解した夕張も、にこやかな表情になり吹雪の去って行った方向を見つめる。

「それじゃあ、いい加減私達も行きましようかね」

「そうね、そうしましょ」

「何食べよつかないかな？やっぱり天ぷらそば……いや、丼ぶりモノも捨てがたいなあ」

「私は、天龍ちゃんが食べたがっていた新作ケーキを食べようかしらあ。いくつぱい食べて、天龍ちゃんにじっくりと感想を聞かせてあげなきゃ」

「いや、そこは持って帰ってあげようよ」

貴虎達が歩いていると、後ろから走る足音が響いてくる。

三人が後ろを振り返ると、全力で走る吹雪が近づいてくる。そして「失礼しますー！」

と、一言告げて貴虎達の脇を通り過ぎていく。

「待て吹雪！」

だが、駆け抜けて行こうとする吹雪を提督が呼び止めた。その声を受けて吹雪は急停止する。

そして提督の方を振り返る。上官の傍を無作法に駆け抜けるという行為に対し、まずい事をしたと思っっているのか、彼女の表情は提督の叱責を恐れて強張っているように見えた。

「も、申し訳ありませんー！」

頭を深々と下げて謝る吹雪。だが、そんな彼女を提督が咎める事は無かった。

提督は、車椅子に取り付けられた荷物入れの中から何かを取り出す。

「吹雪」

その声に顔を上げて反応する吹雪。

「これを持って行け」

提督はそう言い、吹雪に向けて取り出した物を放り投げる。それを吹雪は両手でキャッチする。吹雪の手の中に収まった物、それは提督が食堂を出る時に仕舞い込んだ包みだった。

「余り物だ、お前にやる。早く行け」

提督は軍帽を目深にかぶり直す。



吹雪は暫くの間、包みと提督を交互に見やると

「ありがとうございますごいます司令官!」

と、敬礼をして再び走り出したのであった。

「……あれはお昼の?」

「打合わせや戦闘の事後処理が忙しくてな、食べそびれた」

「ふふっ、ここに来るまでに何やら色々であったようですね」

「お前さんの上官に会ったら、まとめて話すさ」

提督はそう言いつつ、貴虎と赤城に先に進むよう促す仕草をする。再び三人は執務室に向かって歩き出した。

コンコンと扉をノックする音が響く。

「赤城です。例のお二人をお連れしました」

だが、執務室の中から返答は無かった。

「急用でも入ってどこかに行ってしまったのか?」

貴虎が言う。

「いえ、恐らくそれは無いかと……もしかして……」

すると赤城は、無言のままドアノブに手をかけ扉を開ける。鍵はかかっていなかった。

中の様子を覗いた赤城は大きく溜息をつくと、早足で室内に足を踏み入れる。夷提督と貴虎もその後が続いていく。

部屋の中は、所狭しと本棚が並んでおり、そのどれにも本がぎっしりと詰め込まれていた。更には入りきらないのだろうか、周囲には床に平積みされた本が点々と置いてあった。

窓際に置いてある机の上には、書類と本が乱雑に山積みされており、今にも崩れ落ちそうな状態だった。そしてその向こうに側には、入口に背を向けた状態で椅子に座った人物が一人。

赤城は足元の本を踏まない様に避けて歩きながら、その人物に近づき声をかける。

「提督!」

かなりの大声で呼びかけたものの、椅子に座る人物は何の反応も示さない。

その様子に業を煮やした赤城は、何かをその人物から取り上げる。高々と上げられたその手には、牛乳瓶の底の様な厚みのレンズがついた眼鏡と、文庫サイズの本が握られていた。

「あ、あれ？何も見えない。眼鏡は？どこ、どこに行っちゃったんだ？」

座っていた男は立ち上がりながら、まるで暗がりを手探りで進むように手を揺り動かす。と、振り返った拍子に手が机の上の本や書類にぶつかってしまう。バランスを崩した本や書類が雪崩を起こし、ドサドサと大きな音を立てて床に落ちる。

「うわわわー！」

慌てた男は腹部を机の縁に打ち付け、そのまま机の上に上半身を投げ出すように倒れ込んでしまった。机に残っていた書類の束が宙を舞う。その惨状を目の当たりにした貴虎は、男を助け起こそうと一歩踏み出した。しかし

「やめておけ」

「ですが……」

「心配無い、いつもの事だ」

と夷提督に止められてしまう。

「いたたた……」

机に突っ伏している男が、頭を上げて起き上がろうとする。そこへ赤城が取り上げた眼鏡をかけさせた。

男はしばし瞬きをした後、横でふくれっ面をしている赤城に声をかけた。

「やあ赤城さん、どうしたんだい？」

「どうしたんだい？じゃありません！また執務中に関係のない本なんか読んで！」

「いや、それは大事な参考資料で……」

「これの！どこが！！参考資料ですか！！」

赤城が手に持った文庫本を叩きつけるように机に置く。その表紙

にはアニメに出てくるような愛くるしい少女が、ウインクしながらポーズをとっているイラストが描かれていた。

「ほら、こういうのを見て萌え……もとい燃える事によって、キラキラするようにやる気を高揚させてだね……」

「それにー」

男の言う事を遮って赤城が捲し立てる。

「身だしなみにも気を使って下さいー！来客があるっていうのに……その髪もいい加減切って下さい」

男の髪は襟足が肩口まであり、前髪も目に覆いかぶさる程で、ボサボサの伸び放題であった。

「いや、忙しくてそんな暇はなかなか……」

「……また、加賀さんに丸刈りにされても良いんですね？」

そう言って赤城はニツコリと微笑む。しかしその眼は笑っているとは言い難い程に、何やら恐ろしげな雰囲気醸し出している。

目の前の男は身震いをする、かろうじて机の上に乗っていた軍帽を手に取る。大慌てで髪の毛を軍帽の中に押し込み、姿勢を正したが、あまりの毛の量の多さに軍帽はモコモコと膨れ上がっており、収まりきらなかった前髪がピョンとはみ出し、再び目を覆い隠してしまふ。

だが男は意に介さない様子で歩き出し、ひよいひよいと足元の本や書類を避けながら貴虎達の所へ近づいてきた。

「いやあ、お久しぶりです。お元気そうで何より何より」

そう言って車椅子に座る夷提督の手を取り、握手を交わす。

「相変わらずだな、ヨコ」

ヨコ、と呼ばれた男は、次に貴虎の方へ歩み寄り手を差し出した。

「あなたが貴虎さんですね？僕がこの横須賀鎮守府の指揮を任せられている者です。横須賀とか横ちゃんとかヨコっちとかヨッコとか、好きに呼んで下さい」

その飄々とした様子に、一瞬怪訝な表情を浮かべた貴虎であったが、握手を交わし自己紹介をする。

「呉島貴虎です。では横須賀さんと呼ばさせていただきます」

「いえいえ、敬語は結構ですよ。僕の方が年下だと思うので。もつとフランクに話して下さい」

「あ、ああ。……了解した」

男の言う事に応えると、貴虎は改めてその容貌を見直してみる。遠目では分かりにくかったが、近くで見ると男は確かに若く見える。年頃は二十歳に届くか届かないか、といった所であろうか。

「……なるほど、やはり妖精さんのお導きを感じます」

握手した後の自分の手をまじまじと見つめながら、不意に横須賀提督が呟いた。

「妖精？」

と、貴虎が聞き返す。が、それに答える事無く横須賀提督は、目を細める様に笑みを浮かべる。とは言っても前髪と厚みのある眼鏡に阻まれて、ハッキリとは見えなかったのだが。

そして男は、再び足元の障害物を跳ぶように避けながら机へ向かい、ふわりと椅子に腰かけた。

「さてと、お話ししたい事、お聞きしたい事は山ほどありますが……まずは今日の出来事についてお話しただけですでしょうか？」

「ああ」

そうして提督は、基地を出港してから横須賀鎮守府に到着するまでの出来事を事細かに話し始めた。

「なるほど……そんな事が」

顎に手を当て考え込むような仕草をしながら、横須賀提督が言った。

「鎮守府近海に潜水艦部隊ですか。それも駆逐艦と連携を図る様な……。となると、対潜用の哨戒駆逐隊を再編成する必要があるそうですね」

横に控えていた赤城が意見を述べる。しかし

「いや、そこまでする必要はないだろう」

「えっ？」

「そうですね、その通りだと思います」

両提督の言い分に困惑の表情を浮かべる赤城。

「お二人とも、それは流石に危機感が無すぎでは？」

「あの潜水艦は大破、ないし中破した状態で出現した。既にどこかで戦闘をして逃げる途中、それか漂流してたつて所だろう」

「そうですね、でなきや大型輸送船なんて極上の獲物を前に遠巻きに見てるだけ、なんて事をしませんよ。ヤツらはね」

「叢雲に攻撃したのは、ほんの偶然だろう。たまたま、アイツらの所へ不運にも飛び込んで行っちゃったんだよ、あの小娘はな」

「ですが、駆逐艦と潜水艦が綿密に連携をとっていたという可能性は……」

「それも無いでしょう。最初からそのつもりなら、吹雪ちゃんだって潜水艦の前に誘い込まれてるはずですよ」

「そうだな」

「……なるほど。少々考えが浅かったです。私の分析力もまだまだです。精進しなくては」

「とは言え、何も対策をしないのはアレですから、哨戒部隊へのソナー配備数増を検討しておきましょう。今回の様に万が一、という事もありますから」

三人が話すのを、貴虎は黙って聞いていた。そして若干の驚きの気持ちを抱いていた。

先程のドタバタの様子を見ていた貴虎は、正直言って横須賀提督の力量を侮っていた。部下である赤城に怒鳴られる様は、どう見てもだらしない子供が母親、または姉などに怒られる様な姿にしか見えなかった。

だが、戦況分析的確に行い、赤城を納得させる様は、この世界の軍事について素人の貴虎でさえも感心してしまった。

また、自分の隣に座る夷提督の冷静な分析・判断も、横須賀に引けを取らない位に優れていると強く感じたのであった。

「それでは赤城さんは、ソナー配備計画の見直しと増産体制強化の旨を担当部署へ伝達お願いします。それで今日のお仕事は終わりになるのでゆつくり休んで下さい。僕はこの方達と、まだお話しする事が

あるので」

「了解しました。では失礼します」

そうして赤城は、慎重な足取りで扉の前まで歩いていき、振り向いてから一礼をする。

「それでは御二方、ごゆっくり。……それと提督、ちゃんと部屋の中を片づけておいてくださいね」

まいったなという具合に頭をかく横須賀提督を尻目に、赤城は部屋を後にした。

開かれた扉がゆつくりと閉まり、パタンと軽い音をたてる。

「さてと……」

その音を合図としたかののように、横須賀提督は喋りだした。

「本題に入りましょうか。貴虎さん」

「ええ」

「あなたの事については、既に報告を聞いています。異世界から来た人間であるらしい……と」

「自分でも信じ難い事だがな。ここが自分にとっての異世界だという事は。しかし、艦娘の戦い、深海棲艦、実際に見た今となっては否定するの方が難しい」

「ははは、みんな同じ事を言いますよ。あなたの様な境遇の人はね」

「あなたの様な……?という事は、私の様に別の世界からやってきたという人間が他にもいるのか!」

「ええ、この世界においては、そう珍しい事ではありません」

「一体どういう事だ?詳しく説明してくれないか?」

「元よりそのつもりですよ。ですが、その前に艦娘とは何か……その事からお話しなくてはなりません」

「艦娘?それが私と何か関係があるとでも言うのか?」

「ええ、大ありです」

横須賀提督は、スツと立ち上がると、後ろ手を組んだ状態で窓の外へ体を向ける。

「あの広大な海を駆け巡る艦娘。彼女達は如何にして艦娘たりえるか。あなたはご存知ですか?」

「いや、分からない。そこまで踏み込んだ話は、まだ聞いていない」  
「なるほど、では基本的な所から言いましょう。艦娘というのは艦装を身に着け、海を駆け、深海棲艦と戦う軍人の一般的な総称です。一部例外もいますがね。基本的に彼女らは志願兵です。ごく普通の、一般に生活する女性達が、数々の厳しい適性試験を受けた末に、艦娘としての名前と力を与えられます」

「志願兵……幼い少女すらもか……」

「……少なくとも彼女達は、自らの意志で戦う道を選んだものばかりです。その理由や事情は人それぞれですが」

「すまない、君らを批判するつもりで言ったわけでは無いのだ。ただ少しばかり、思う所があっただけだ」

「そうですか。では続けさせて頂きます」

横須賀提督は、仕切り直しの合図の様に咳払いをして話を続けた。  
「今述べた通り志願兵で構成されている艦娘達ですが、極稀にそれには当てはまらない、説明のつかない者が我々の前に出現する事があります。そんな普通ではない、もう一つの艦娘が存在するのです」

「もう一つの艦娘……？それは一体？」

窓の外へ目を向けていた横須賀提督は、貴虎の方へ体を向け直し、  
「今まででない程の真剣な表情で告げた。」

「かつて“とある戦争”で沈んだ軍艦が転生し、人として生まれ変わったモノ……それがもう一つの艦娘です」

執務室の置かれた建物を出た赤城は、兵装の開発などを行う施設“工廠”へ向け歩を進めていた。

横須賀鎮守府は、この国の最大規模の軍事施設であり、その敷地面積は、とてつもなく広大である。従って、施設間の移動といえどもかなりの時間を要してしまう。もちろん電話等の連絡手段はあるのだが、開発の申請は様々な書類手続きを要する為、電話一本で解決する

ような事は、おいそれと出来ないのである。その為提督の代理として、秘書艦である彼女が工廠へと向かう必要があるのだ。

赤城は海に面した通路を早歩き気味に歩く。時刻は夕食を取り始める時間帯、早く工廠へ行つて仕事を終わらせねば、彼女と同じ正規空母にて親友の加賀を待たせる事になってしまう。

特に約束をしているわけでも無いのだが、鎮守府にお互いが居る時、加賀は可能な限り赤城と食事を共にしようとする。先に食べても構わない、と赤城はよく言っているのだが、彼女はいつも澄ました顔で、赤城が来るのを待っていた。逆に赤城も、加賀が遅くなる時はいつも待たせている分、自らも待とうと努めるのだが、空腹に耐えかねて先に食べてしまっている事がしばしば。

だがそんな赤城に対し、加賀は文句の一言も口にする事は一度たりとて無かつたのだった。

歩きながらそんな事を思い出し、考えていると、まるで何かの歌に出てくる夫婦みたいだな、と思いきや笑しくなってしまう。自然と出てくる笑いを堪える為に赤城は、かぶりを振る。

すると視界の端に何かが映る。

その方向に視線を向けると、棧橋に座り込む人影が見えた。その人物は、体育座りの姿勢で膝の間に顔を埋めている。

「……あの娘は」

目を瞑って頭の中を空っぽにしようと試みる。

……だめだ。

大分前からずっとこうしているが、一向に頭の中がスッキリしない。嫌な出来事、思い出、言葉、そんなのばかりが頭の中をグルグルと駆け巡る。どうしてこうなってしまったのだろう。あんな事をしたのだろうか。どうして自分がこんな事に……胸がモヤモヤする。

こんな気分になるのはイヤだ。頭の中を空っぽにしななければ……同じ事を何度考えたのだろうか、いつまで自分はこうしてるのだろうか

……

そんな事を考えていると、頭の上から声がした。

「隣、いいかしらっ」



頭を上げ、頭上を見上げた叢雲の目の前には、黒髪の女性の顔が逆さに映っていた。

叢雲の返答も聞かずに女は、その右隣に移動し棧橋に腰かける。

「あなたが叢雲ね。私は……」

「赤城……さん、でしょ。知ってるわ。ていうかモグリでも知らないヤツはいないでしょ」

「あら、そう?」

「艦娘として着任以来、勝利に貢献した海戦は数知れず。攻め時、引き際の見極めにも長けていて、損害が出たとしても最小限に抑え、それで命を救われた艦娘も数知れず。艦娘とは斯くあるべき。って言われる程のエース中のエースにして模範的艦娘さまが、下っ端駆逐艦の私めに一体何の用で御座いましょうか?」

これでもかという位に慇懃無礼な態度で叢雲は、赤城に言葉を返す。

だが赤城は全く意に介さない様子で言う。

「聞いたわ、今日あった出来事」

それを聞いた瞬間、叢雲は顔に嫌悪感を露骨に滲ませる。

「それでね、気になったの。何で命令違反してまで敵を追い詰めたのかって」

「……………話す気は無いわ」

「そう、ならあなたが話すまでずっと隣に居るわね」

「ハア!」

思わず叢雲は声をあげる。

「何バカな事言ってるのよ!?!第一、何でアンタに話をしなきゃならないのよ!?!」

「そうね……気になって気になって、ご飯が美味しく食べられなくなるから。かしら?」

「バツカじゃないの!?!意味わかんない。……絶対話さないから」

そう言って正面へと向き直る叢雲。対して赤城は彼女に対して何も言う事無く、黙って水平線の彼方を見つめていた。沈黙する二人。打ち寄せる波の音だけが周囲に響いていた。

それから五分程度の時間が過ぎた。

相変わらず叢雲、赤城の周りは沈黙に包まれている。

叢雲は思った。わけの分からない事を言ったこの女は、どうやら本気らしい。たとえ自分が立ち上がってどこかへ行こうとしても、絶対に付いてくる。寝床に向かおうとも、枕元に立ってじつと待ち続ける、下手をすれば布団にまで潜り込んで来るのではないか？そんな馬鹿げた考えまでもが浮かんでくる。

「あーもう！分かったわよ、言えば良いんでしょ言えば!!」

結局叢雲が折れる事となった。そして彼女は語りだす。

「悔しかったのよ、あんなチンケな駆逐艦を仕留めきれずに逃がすのが」

叢雲はチラリと隣を見る。赤城は何も言わずに、海を見つめ続けている。どうやら、今言った事だけでは納得がいかない様子である。それを見て叢雲は半ばヤケになり、洗いざらい話してしまう事を決めた。

「私が作戦によく参加出来るようになったのは、ここ一年から半年位の事よ。それまでは訓練、演習も満足にやらせてもらえなかった。空母のアンタみたいに派手な活躍が出来ない駆逐艦娘は、地道にコツコツ戦って、地道にコツコツ戦果を稼ぐしかないのよ。そうしないと誰からも認められない……。戦いにも慣れてきた、撃沈数も増えてきた。駆逐イ級なんて、赤ん坊の手を捻る位に簡単に倒せるようになってきた。だから、今日のヤツを一気に沈められなかったのが悔しかった。逃がすのが許せなかったのよ」

赤城は何も言わない。黙って視線を真っ直ぐに保ったままだった。

「はい！これで言う事は全部言ったわよ！これ以上話す事なんて、ホントにもう無いんだからね！」

そう言い放ち叢雲が立ち上がりかけた時、赤城が口を開いた。

「慢心は、良くないわね」

赤城は叢雲の方へ顔を向けると更に一言、口にする。

「でも、あなたは運が良かった」

「は？何それイヤミ？」

ゆつくりと首を振り否定する赤城。

「あなたはそんな身勝手な理由で独断行動をしてもなお、大切な仲間を失う事も、傷つける事も無く、自分も無傷でいられた。そして犯した過ちを振り返る事が出来る。それは、とっても幸運な事なのよ」

そう言う赤城は、再び水平線の彼方へ視線を向け、ポツリと呟いた。

「私も、戦場で全てを失う前に気づければ、気づいてもらえていたら、違ったかもしれない」

と、その言葉に叢雲は違和感を覚える。戦場で全てを失う……彼女  
の経歴を考えるに、そんな出来事と彼女とは関係が無いはずである。  
一体何を言っているのだろうか？そう思い、疑問を口にしようとした時  
「それにね、無事に帰って来て美味しいご飯を食べられるのが、何より  
も幸運な事よね。生きてるって実感が湧いてきて堪らないのよ！」

両頬に手を当て、満面の笑みを浮かべながら赤城が言う。口の端から涎が垂れている様に見えたが、叢雲は見なかった事にした。

「さくて、じゃあ私は行くわね。お互いに、お友達を待たせちゃってる  
みたいだし」

と、言う赤城は後方へ目を向ける。叢雲も、その視線の先を追う。  
すると近くにある建物の影に少女が一人。その少女は二人の視線に  
気づくと、慌てて建物の影に隠れようとする。

「吹雪？」

「迎えに来てくれるなんて良いお友達ね。それじゃあ、さよなら」

赤城は立ち上がって踵を返すと、軽やかな足取りで歩き出した。

自分の近くへ歩いてくる赤城に対して吹雪は、あたふたとしながら  
敬礼をする。赤城は歩きながらにこやかに敬礼をすると、そのまま  
去って行った。それを見送ると吹雪は叢雲の方へ、小走りに近づいて  
行く。

「今の人って赤城さんだよ、何を話してたの？」

「さあ？私にもよくわからないわ。で、アンタは何しに来たの？」

座ったままの姿勢で後ろを振り返りながら、叢雲が吹雪に尋ねる。

「これ、提督に貰ったから一緒に食べようと思って」

そう言うのと吹雪は、小さな風呂敷包みを広げる。その中には二個のおにぎりが包まれていた。

「これを夕食の前に食べる気なの？」

「え〜と、そう！前菜ってやつだよ」

「前菜ってアンタねえ……」

「いいからいいから」

そうして叢雲へ強引におにぎりを渡すと、先程まで赤城が座っていた位置に吹雪は腰かける。

「いただきます！」

元気に声をあげると吹雪は、手に持ったおにぎりに噛り付く。

叢雲も仕方なしにそれに続き、おにぎりを口にした。塩のきいた米の味、湿り気を帯びた海苔から口の中に磯の香りが広がってくる。

叢雲の頭の中には、再び今日の出来事が思い返される。苛立ち、恐怖、後悔、生きている事への喜び、様々な感情が心の中に溢れ出してきた。

俯きながらおにぎりを食べる叢雲の腿に、ポロポロと雫が落ちてくる。そしてそれは、彼女の穿いている黒タイツに点々と染みを作っていた。

「叢雲？」

美味しそうにおにぎりを頬張る吹雪が、嗚咽を漏らす叢雲の方へ目を向ける。

「ち、違うわよ！具の梅干しが酸っぱかっただけよ！あーもう！最悪だわ！」

そんな叢雲を見た吹雪は口元に微笑を浮かべると、日が落ちて暗さを増した空を見上げる。

「うん……でも凄く美味しいね」

空には星々がキラキラと瞬き始めていた。

【第四話】 part 1

真夜中の夜空に浮かぶ月を、厚い雲が覆い隠す。静寂なる海上は、たちまち闇に包まれる。

その闇間に紛れるように佇む複数の黒い影。影からは、幾つかの淡い緑色の光が揺らめいていた。

それは深海棲艦の哨戒部隊であった。深海棲艦が人の様に眠るのかは定かではないが、まるで眠っているかのように、その影は目を細めて動かない。

ここは深海棲艦の制海権内、未だに人間達、艦娘達が足を踏み入れた事のない黒い艦の楽園、聖地と言えるような場所。深海棲艦の戦力の充実したこの海域は、よほどの大部隊を率いて攻めなければ、人類は返り討ちに合うと推測されるほどに守りが固かった。

だが、そんな所へと無謀にも近づいてくる異様な気配を、哨戒部隊の旗艦「重巡り級」は感じ取った。

その気配は、真っ直ぐに自分たちの方へ近づいてくる。海洋生物とは明らかに異なる気配。自分達に近いと思われるそれからは、味方の識別信号は送られて来ない。

重巡り級は、即座に周囲の随伴艦へ通信を送る。それを受け、艦隊は直ちに陣形を整え迎撃態勢をとった。

深海棲艦達の瞳が、青く淡く輝きだし、その闘志を溢れさせる。

艦隊が整えた陣形は複縦陣。隊を縦二列に分けた防御寄りの陣形である。それぞれの列は、片方が軽巡へ級を先頭とし雷巡千級二隻が後ろに並ぶ。もう片方は重巡り級を先頭とし、残りの軽巡へ級、雷巡千級がそれに続くという形をとっていた。

日中と違い見通しのきかない夜間戦闘、夜戦時においては砲撃の命中率が著しく低下するため、必然的に接近戦が多くなる。敵を照らし出す照明弾や探照灯があれば別であるが、この哨戒部隊は、そういった類の装備は持ち合わせていなかった。

そのため、視覚と聴覚を研ぎ澄ませ、近づいてくる敵の気配を探る

事に集中する。夜戦においては、多くの攻撃が一撃必殺になる。

一瞬の間違いが生死を分かつのだ。

前方へ意識を集中していた重巡り級が、ふと風切音を耳にした瞬間、隣の列の先頭に位置していた軽巡へ級が、突如として炎に包まれ爆散した。

それに気づくと同時に重巡り級は周囲の随伴艦に対し、専用の通信信号で散開の指示を飛ばす。

信号を受け、素早く散開する指揮下の艦。次の瞬間、砲弾の飛来する音が、艦隊のいた位置を突き抜けていった。

謎の敵からの攻撃は、異様なものであった。通常であれば、砲弾という物は放物線を描いて撃ちだされるものだ。遠方の敵に対し砲撃する場合、おおよその位置を予想し砲弾を発射した後に、着弾した位置から敵との距離を割り出し、角度を調整して命中率を高めていくのがセオリーである。だが今の攻撃は、そうやって角度を付けられて発射された様子は見られなかった。外れた二発目の攻撃が着水した音が聞こえなかった事を考慮すると、砲撃は水平発射されたとは思えなかった。

しかも敵の姿はおろか、砲撃の噴射炎すら確認できていない。明らかに通常の夜戦時の射程を逸脱した距離から、敵の攻撃は行われている。夜間偵察機が飛んでいる気配も感じられない。偶然当たっただけ、という可能性もあったが……

散開し、独自の判断で動き出した一隻の雷巡り級が、敵弾の直撃を受け炎に包まれる。深海棲艦達は周囲を見渡すが、敵の姿は見受けられない。こうも連続して被弾が続けば、偶然の一言では片づけられない。敵は暗闇の中、遠距離からの攻撃を当てる何らかの術を持っているのは確実であると思われた。深海棲艦達は、警戒心を一層高める。

そんな中、このままでは埒があかないと判断したのか、二隻の雷巡り級が突撃を開始する。事態を打開するために、こちらから打って出ようという腹積もりだ。

二隻の雷巡り級は、砲弾の飛んできたと思われる方向へ全速で進む。ジグザグの軌道を描きつつ、敵の狙いを外しながら。

雷巡千級の脇を、風切り音が幾つも掠めていく。数発の攻撃を避けた所で、前方の闇の中に緋色の光が二つ浮かび上がっているのが見えた。その光めがけて二隻の雷巡千級は、左手の砲を掃射する。だがその瞬間、緋色の光が素早く揺れ動く。残像を幾つも描きながら高速移動する敵に対し、雷巡千級の攻撃は掠める事すらかなわなかった。

敵の動きに翻弄されているうちに、一隻の雷巡千級が直撃弾を受けて炎上する。だが敵の痕跡を捉えてもなお、攻撃の正体は掴めない。威力はどう見ても砲撃のそれだが、砲撃の音も噴射炎も確認できない。

沈んでゆく同胞の身体を燃やす炎が、周囲を照らし出す。その明かりを頼りに、残された雷巡千級が周囲を見回そうとしたその時、側面から黒い影が躍り出て、雷巡千級の顔面を鷲掴みにした。千級は反撃を試みようとして腕に装着された主砲に力を込める。ヒュツと下から吹いた風切音が首筋を撫でる。その瞬間、雷巡千級の腕から力が失われ、だらりと垂れ下がった。体が水面に音を立てて没するより早く、雷巡千級の意識は深淵に飲み込まれていった。

黒い謎の影に向かって全速力で近づくと、雷巡千級が砲撃を放つ。謎の敵の周囲に水柱が数本立ち上がる。炎に照らされているおかげで、砲撃の狙いは定まりやすくなっていった。攻撃を受けた黒い影は素早く前進を開始、左手で掴んでいた物、雷巡千級の頭部を軽巡へ級に向かって投げつけた。自分の顔面へ向け、一直線に飛んでくるそれを手で払いのけると、へ級は主砲を前方へ向ける。しかし、そこに敵の姿は無い。戸惑うへ級は突如、上方から強い衝撃を受けた。頭頂をそのまま強い力で押し込められ、全身を海の中へと沈められる。何とかその手から逃れようと必死にもがく軽巡へ級の全身を、複数の弾が突き貫く。その体に無数の穴を空けられた軽巡へ級は、爆発する事も無く海の底へと、その身を沈めていったのであった。

わずかな時間の中に五隻もの深海棲艦を沈めた黒い影は、ゆっくりと立ち上がり、炎上する雷巡千級の方へ目を向ける。

やがて炎上する雷巡千級の身体は、完全に水面下へと沈む。程なくして周囲は再び暗闇に包まれた。

その瞬間、謎の影の後頭部めがけて高速で近づく物が。それは巨大な黒鋼の手甲。

旗艦である重巡り級は、随伴艦が倒される光景を見て思った。

この敵と正面からやりあっても倒す事は不可能だ。全滅は免れない。と……

そう判断すると瞬時に重り級は、敵の動きを観察、常に相手の死角を維持するように動き回り、チャンスを待った。

この重巡り級は人類側からはフラッグシップ級とカテゴライズされる、強い力を持った精鋭であった。戦闘力、判断力にも優れ、並みの艦では足元にも及ばない。これしきの動きをするのは容易い事であった。

そして機が訪れる。目の前の障害を全て蹴散らし、油断しているであろう謎の敵へ、渾身の打撃を叩きこんだ。

り級の手甲が黒い影の頭部に一撃を加える直前、り級の視界の端で淡緑色の小さな光が煌めいた。

手甲は後頭部の手前、数センチの所で停止した。決して重巡り級が意図して止めたわけでは無い。止められたのだ。

右腕には強い力で縛られた様な感覚が。すると奇妙な風切音が聞こえる。自分の周囲を小さな物体が複数飛び回っているのを感じる。再び淡緑色の光が煌めいた、それも複数。そこから放たれた何かによって重巡り級は、残る左腕・両足をも拘束され、完全に身動きを取ることが出来なくなってしまった。

重巡り級は表情を変化させる事無く、目の前の敵の後頭部を見据える。

月を覆っていた雲が晴れ、月光が海上を淡く照らし出した。目の前の黒い影はゆっくりと振り返り、その相貌をもつて重巡り級の顔をじつと見つめた。その瞳は血走ったように緋く、そして見る者が見れば吸い込まれるように美しかった。

そして、その顔を触れ合う寸前まで接近させた謎のヒトガタは、静かに囁いた。

り級には眩いた言葉の意味は理解できなかった。否、他の誰である



うと理解は出来なかつただろう。

この世界の誰もが聞きなれない様な音を口から発し、ニヤリと笑みを浮かべる。

刹那、重巡り級の体に衝撃が走った。謎のヒトガタの右腕が、リ級の腹部を貫いていた。

右手の先には禍々しく伸びた鋭い爪。その先からリ級の体液がしったり落ち、水面に波紋を広げる。

重巡り級の青く光る相貌が黒く染まり、その全ての肉体活動は停止した。

腹部から右腕を引き抜くと、ヒトガタは爪の先に付いた重巡り級の体液を舌でスツと舐めとった。リ級を拘束する縄のような何か光を発しだす。すると重巡り級の身体がその光に包まれる。リ級の全身を包んだ緑色の光は、やがて収縮、結晶化し謎のヒトガタの左手に収まった。その結晶は、さながら何かの果実の様にも見えた。

バシヤリと音を立てて、拘束を解かれた重巡り級の体が水面へ落ちる。まるでミイラのように干からびたその体は、瞬く間に海底へと沈んで行った。

謎のヒトガタは、左手にもった結晶を口へと運び込む。不気味な咀嚼音が周囲に響き渡る。喉を鳴らし、咀嚼したそれを体内へ流し込むと、ポツリと呟くように口から、謎の声を発したのだった。

再び、流れる雲が月を覆い隠した。その身体を闇に溶け込ませ、謎のヒトガタは音も無くその場を立ち去って行った。

「軍艦が人として生まれ変わった姿!」

横須賀提督の口から発せられた思いもしない言葉に、貴虎は驚愕した。

彼の言う“もう一つの艦娘”それが異世界から迷い込んだ人間という事ならば、今の貴虎にはすんなりと受け入れられたかもしれない。しかしそれが“軍艦が人として転生した者”などというオカルトじみた話をされては、流石に「はいそうですか」と受け入れる事な

ど出来るわけがなかった。

やはりこの男は、ふざけた男なのだろうか？と疑いの目を向けていた貴虎に対して、隣から声がかけられる。

「この程度でいちいち疑っていたらキリがない。馬鹿馬鹿しいと思っても最後まで聞いておけ」

声の主の方へ目を向ける貴虎。彼もまた、真剣な面持ちで貴虎の目を見据えていた。貴虎の心の内は、この壮年の提督にはすっかり見透かされている様であった。無言で微かに頷くと貴虎は、再び前方に向き直る。

「フオローありがとうございます。……とその前に失礼、頭が重いので」

すると横須賀提督は、パンパンに張っていた軍帽を脱ぎ机の上に置く。そして、軽く会釈してから再び話を始めた。

「私の秘書艦の赤城と同じ正規空母の艦娘に、加賀という者がいます」

加賀……そういえば先程の会話に、そのような名前が出てきたな。と貴虎は思い返す。

「そして同じく飛龍、蒼龍と言う名の正規空母の艦娘が存在します。

赤城、加賀、飛龍、蒼龍……あなたは、この名前に聞き覚えはありませんか？」

「……ミッドウエー海戦、かつての太平洋戦争で沈んだ軍艦か？」

「はい、ちなみに戦艦としては非常に有名らしい“大和”“長門”などの名を冠した艦娘も、当鎮守府に所属しています」

「だが、それが何だと言うのだ。ただ当時の軍艦になぞらえて、彼女らが名づけられたというだけの話ではないのか？」

「確かに彼女達は、太平洋戦争時に存在していた軍艦にちなんだ名が与えられています。ですが、この世界においてあなたの言う、太平洋戦争という名の戦争は起こっていないのですよ」

「何だと？」

「いや、今まさに我々が行っている戦争こそが、それなのかもしれません」

そうして横須賀提督は、静かにこの世界の近代史、主に戦争の歴史

について語り始めた。

この世界においても、二度の世界大戦は存在していた。

戦争における国家間の対立の様相は、貴虎の知るそれとほぼ似通っていたが、それ以外においては、異なる点がいくつも見受けられた。とりわけ目立ったのが文明レベルの違いだ。この世界の大戦は、貴虎の知識にある大戦の時よりも高い技術水準、文明を人類が有する状態で勃発していた。軍事の専門家ではない貴虎が聞いても、その差は数十年単位の隔たりがあるように思われた。

そして、この世界における第二次大戦の序盤に異変は訪れたのである。

突如として出現した謎の艦隊が世界中の海を跋扈し、ありとあらゆる国の船舶、港湾都市等に対して攻撃を開始した。

後に深海棲艦と名付けられる、艦とも生物とも知れない異形の存在への対応に、人類は追われる事になった。

拡大する戦火、被害に対して大国は、こぞって最新鋭兵器を投入し深海棲艦の撃滅を試みた。しかしながら、いかなる強力な兵器を用いても深海棲艦に対して決定的な損害を与える事は敵わず、増え続ける敵艦隊に海上輸送の拠点、航路を制圧された国々は、次第に疲弊していった。

強大な軍事力を有する国ほど、その度合いは高く、度重なる戦闘による燃料や資源の消費、敗北により被った損害のおかげで、瞬く間に国力は低下していった。そして慢性的な資源の不足により、運用コストの高い最新鋭の戦闘機、戦艦などの兵器は無用の長物と成り下がってしまった。

この世界における日本は、大戦に本格的に参戦する直前の状態であり、最新鋭の兵器の配備数も少なかったため、資源の消費及び損害は最小限に抑える事が出来た。

しかしながら資源の備蓄にも限りがある。他国からの輸入に資源を頼っている日本にとっては、それが絶える事は滅亡を意味するにも等しかった。

「だがそんな時、不可解な事が起こり始めました」

「不可解な事？」

「ええ、深海棲艦の出現とほぼ時を同じくして、素性の知れない人間達が次々とこの世界へと現れはじめたのです。貴虎さん、あなたのようにね」

その人間達を保護した政府関係者は驚愕した。皆、誰一人として戸籍が登録されておらず、この世界に存在していた形跡も見受けられなかったのである。そこでその人間達に対して数々の質問を投げかけ、情報を集める事を試みた。何処から、何の目的で、どうやって来たのか。これまでの経歴、居住地など、ありとあらゆる事について聞き取り調査を行った。

その結果、幾つかの事実が判明した。それは大まかに分けて三つ。まず年齢・性別等はまちまちで、その共通点・法則性は、何一つなさそうであるという事。

次に、それぞれが暮らしていた環境、境遇などもバラバラであるという事。

そして調査対象の人間全員が、望んでこの世界を訪れたわけでは無く「気が付いたらこの世界にいた」と証言しているという事であった。未確認・不確定要素は多いものの、様々な情報を総合した結果、その人々は「バラバラに異なる世界から迷い込んできた」という結論に至ったのである。中には、ほぼ同じ世界から来たと思われる共通点を持つ者達もいたが、お互いに面識を持っていたという人間は殆どいなかった。

「ですが、そんな彼らを更に調べて行くうちに、ある共通点が判明したのです。それは彼らが皆、第二次大戦及び太平洋戦争に関する知識を持っている事。そして、軍事に関する何かしらの才覚に優れていたという事でした」

迷い込んできた人間の中には兵器開発、戦略指揮、戦史研究などの分野に秀でた人間が多数存在していた。その人物達に可能性を見出した軍は彼らを徴用し、対深海棲艦の研究を進めていった。その研究の過程で、低コストで運用可能な小型の新兵器が開発された。そしてそれは、深海棲艦相手に絶大な効果をもたらしたのであった。その際

に兵器を運用したのが素性の知れない女性達、艦の生まれ変わった人間「艦娘」と後に呼ばれる事となる者達であったのだ。

「もちろん軍艦が生まれ変わった、などというオカルトじみた話は人々に受け入れられませんでした。最初はね。ですが彼女たちの記憶や証言内容、戦史研究家達のもたらす情報を整理していくと、どうしてもそう判断せざるを得なかったのです。数々の異世界の方々のケースと同様に」

横須賀提督はそう言いながら、広げた右の手のひらをゆっくりと前に突き出した。

「ですがもう一つ、決定的な判断材料として僕が、僕のような人間が「妖精さん」を感じ取ったというのがあります」

「妖精さん？……そういえば、先程もそんな事を言っていたようだが」「はい、妖精さんです。この世界においては、人知を超えた不可思議な現象を「妖精さんの仕業」とする風習、妖精信仰ともいうべきものが存在するのです。もともと宗教の様な大仰なモノではなく、民間伝承、迷信に近いモノであるのですがね」

横須賀提督は突き出した手を下げ、後ろ手に組む姿勢をとり話を続ける。

「僕は物や人に触れる事によって、それが妖精さんの加護を受けているかどうか、大まかにですがその力の強弱をも感じ取る事が出来るのです。あ、理解できなくても結構です。そういうものがあるらしい、程度に捉えて下されば良いですよ。そして、艦娘や異世界から来た人々、深海棲艦に有効な兵器からは妖精さんの力が強く感じられる、という傾向があります。あと余談ですが、人によっては小人のような姿をした、妖精さんの姿を見る事が出来るらしいですよ」

「だから私も異世界の人間である、と判断したのか？」

「ええ……実はあなたの事に関して報告を受けた時点で、既に戸籍や存在の形跡は調べさせて頂いたのです。その時点で呉島貴虎及び沢芽市という都市は存在しないという事は分かり、十中八九あなたが異世界人であるだろうと結論付けました。そして先程の握手を通じて、それは確信に変わったのです」

「なるほどな。先程の言動はそういう意味を持っていたのか」

「はい。と、大まかな説明はここまでとなりますが、ご理解いただけましたか？」

「正直な所、余計に頭が混乱している。この世界の成り立ち、異世界の人間や艦娘の存在、あなたの様な特異な性質を持った人間、わけのわからない事ばかりだ。だが、事実として受け入れなければならないのだろうか……」

苦笑混じりに貴虎が嘆息する。

「今は分からなくとも、体験を通してじきに理解できるようになりますよ。……ところで、これから貴虎さんはどうされるおつもりで？」

「……これから、どうする……か」

そう言われてみて初めて貴虎は、これから自分がどうするか、何をしたいのかを全く考えていなかった事に気が付いた。

もともと、目を覚ましてから流されるがままに横須賀まで連れて来られ、その間は未体験の出来事に驚くばかりで先の事を考える余裕など、一時もなかったのではあるが。

そして貴虎は、暫く思考を巡らした後にポツリと呟いた。

「……元の世界に戻る方法を探したい……と思う」

真つ先に思い付いたのが、それだった。

「そうですね、元の世界にね。何か当てはあるのですか？」

「いや、残念だが何も無い。地道に情報を集めていって、手がかりを探すしかないさそうだ」

と言ってみたものの、右も左も分からない、何のツテも無い未知の世界でどうしたら良いのか。具体的な方針は全く思いついていない。それ以前にどうやって生活するかという問題が立ちはだかる。正に前途多難であった。

そんな事を考え沈黙する貴虎に、横須賀提督から声がかけられる。  
「貴虎さん。もし宜しければ我々に協力しては頂けないでしょうか？」

「協力？私が一体何を？」

「あなたさえ宜しければの話ですが……提督になってみる気はありま

せんか？」

「私が提督に？」

「ええ、先程言った通り異世界から迷い込んできた人々には、何かしらの才覚を持つ者が多いのです。昼間の遭遇戦での出来事、私があなたから感じた強い妖精さんの力、それを考えるにあなたには、軍事に關する才覚がおりだと私は考えます。優秀な戦力は多いに越したことは無い。事実、提督の中には、あなたと同じような境遇に置かれていた人々も登用されていますし。それに軍では異世界の人々によって、様々な研究が進められています。その中には、あなたにとって有益となりうるモノもあることでしょう。あなたは我々の勝利に貢献し、我々はあなたに情報や研究の成果を提供する。ギブアンドテイクです」

その提案に貴虎は、しばし考え込む。確かに彼の言う通り、元の世界に戻る手がかりを得るためには情報が必要だ。何の当てもない貴虎が一人で動くよりは、彼の提案を受けた方がよっぽど良い。

だが、艦隊指揮の経験も知識もない自分が提督になる、などと言われても今一つピンとこない。それに似たような事として、貴虎にはユグドラシルコーポレーションにて戦闘部隊の指揮を取った経験ならばある。だが、それが提督業においても通用するかどうかは、わからない。

「もしそれがお気に召さないのであれば、鎮守府の事務職や輸送船の船員などの仕事を斡旋する事も可能です。また、軍に携わる事を望まない人も時々いらつしやいます。そういった方々には、一般社会での生活を送ってもらっています。まあ、機密保持の為に自由は大分制限され、監視も付く事になりますがね。どの選択肢を選ぶにしても我々は強制しませんが……」

考え込む貴虎に、横須賀提督は更なる提案を持ちかける。が……  
「いや、その必要は無い。最初の、提督になるという提案を受けさせて貰いたい。軍事について素人の自分に、どこまで出来るのかは全くもって分からないが」

長考の末出した結論がこれだった。確かに畑違いの仕事かもしれ

ない。だが、自分の今までに培ってきた経験が生かせる可能性があるのならば賭けてみたい、そう思ったのが理由だった。

そしてそれ以外にもう一つ、僅か間ながら世話になった艦娘達、夷提督への恩返しに何か手助けが出来るかもしれない、と考えたのもその理由の一つであった。

「いやあ、お引き受けいただきありがとうございます！」

そう言うのと横須賀提督は、再び足元の書類や書籍を器用に避けながら近づいて来て、両手で貴虎の手を固く握りしめた。

「だが私は軍事に関しては素人だ。それでも大丈夫なのか？」

「心配いりません。研修期間は、たっぷりと設けさせてもらいますから」

横須賀提督はチラリと横に視線を向ける。

「分かってる、ウチで面倒を見れば良いんだな」

車椅子に座った提督が、やれやれといった仕草で軽く首と手を動かす。

「いやはや理解が早くて助かります」

「と、いうわけだ」

「よろしくお願ひします」

そう言つて夷提督に頭を下げる貴虎。そのやり取りが終わるのを見計らつて、横須賀が口を開く。

「いくつか注意事項を言っておきます。異世界の事や、そこから来た人々についての情報は、軍の最高機密となっています。それは一部の人間しか知らない事です。くれぐれも他言無用でお願いします。たとえ艦娘にであつてもね」

「艦娘にも……？それは何故なんだ？」

「完全に解明されていない不確定な情報というものは、時として人々に混乱をもたらします。それは艦娘とて例外とは言えないでしょう。憶測、それに基づいた偏見による差別的行動、その他諸々の事態が起るのを危惧しての事です。故にこのような秘密を知る人間は少ない方が良いでしょう。上層部の判断によるものです」

横須賀提督の言う事を聞いて貴虎は、自分にも覚えがあつた事を思



い出す。

彼の所属していたユグドラシルコーポレーションは、秘密裏にヘルヘイムやインベス等への対策活動を行っていた。それが万が一露見した場合、機密保持のために、街一つを焼き払う事というプランまで用意して……

貴虎の胸中に、不快な思いが広がってきた。だが即座にその思いを封じ込め、目の前の男の話に集中する。

「それと、転生した艦娘の中には、自らの出自にコンプレックスを持つ者が僅かながらいます。そんな娘達は、周りの人間達との違いに苦悩しながらも、どうにか折り合いをつけて日々を送っています。彼女達の心の平穩の為に、どうか宜しくお願いします」

「分かった。決して他言しないと誓おう」

「ありがとうございます。ところで、話は変わりますが貴虎さん。僕はある話に大変興味があります。特に謎の森、植物の進攻と怪物についてね」

「ヘルヘイムの事か？」

「ええ、凄まじい繁殖力を持つ未知の植物、口にした生物を異形の怪物に変えてしまう果実、それにより生まれた怪物インベスや謎の知的生物オーバーロード、どれも非常に興味深い。そして、そんな脅威と戦ってきたあなたの経験にも。それらには、僕らの現状を打破するヒントがあるかもしれませんね」

「聞きたいというのであれば、話しても構わないが、私の話が役に立つかどうかは保障できないな」

「そうでしょうか？あなたの世界での出来事には、何処となく今の我々の状況と酷似する点を、感じざるを得ないのですがね。さて、本当はここでじっくりお話を伺いたい所ですが、そろそろ夕飯時だ。折角ですが、それは次の機会に致しましょう」

「ああ」

「それではお二人は、お食事に行ってください。ご一緒したいのですが、僕は部屋の片づけをしなければなりません。でないと、また赤城さんに怒られてしまいますから」

横須賀提督は苦笑をしつつ頭をかいた。

「では行くとするか」

そうして車椅子の車輪を器用に転がして方向転換する夷提督。

貴虎は彼の先に立ちドアを開ける。夷提督が部屋を出た後に「失礼する」と一礼をし、続く貴虎もまた同様にして執務室を後にした。

そうして、夷提督と共に夕食を取るために食堂へと向かっていく。

その道中、貴虎の胸中にはある思いが渦巻いていた。

自分はふと思いついた事から元の世界に戻りたいと言った。しかし、自分は一体元の世界に戻って何をしようというのか。弟の暴走を止める事が出来なかった。戦う力も失った。説得でもするつもりか？ いや、出来るとは思えない。その術も自身も無い。

他に何か、自分がやるべき事があるのか、全く分からない。そんな自分が、元の世界に戻って一体何をしようというのだろうか……と。

## 【第四話】 part 2

翌朝、昨日と同様に晴れ渡った空の下。港に整列する一団がいた。それは、横須賀鎮守府より出港する、新たな任務に就く輸送船を護衛する為の艦隊のメンバー夕張、龍田、吹雪。

彼女達の正面には貴虎、夷提督<sup>えびす</sup>。その後ろに叢雲、そして横須賀鎮守府の秘書艦赤城が控えていた。

出撃の前に話す事がある、と前置きをして提督が告げる。

「貴虎が提督見習いとして、ウチの基地に着任する事となった」

その発言に、事情を既に聞いていた赤城以外の艦娘達が、驚きの表情を浮かべる。

そして提督に促され前に出た貴虎が、自分の素性と着任に至った経緯を話し始めた。

自分がかつて一般企業に勤めるサラリーマンであった。しかし、幼少期より世界中を旅する冒険家となる事を夢見ており、それを叶えるため数か月前に、一念発起して会社を退職した。

そして入念な準備をし、貯金をはたき購入した自家用クルーザーに乗り込み出港。制海権のとれた比較的安全な航路を選び航海を始めたものの、運悪く深海棲艦と遭遇。

命からがらなんとか逃げ切ったが、船は沈没。そして漂流していた所を夕張達に救出されたのである。

そして深海棲艦の襲撃により受けた精神的ショックによる記憶混濁も、鎮守府にてカウンセリングを治療を施してもらった事により緩和された。

この話は勿論真つ赤なウソである。

数時間前に横須賀提督に呼び出された貴虎は、急遽作成された偽の経歴書と仮の身分証を渡された。この世界で活動する際に不都合の無いように、との配慮であった。更に戸籍情報も既に登録されているという用意の良さだった。

とはいえ、作られた経歴は若干無理のあるモノのように貴虎には思われた。しかしながら提督や赤城のそれとないフォローもあり、艦娘

達から疑いの目を向けられるような事は無かった。

「……そして昨日の輸送船上での出来事が目にとまり、提督業をやるように勧められたのだ」

「横須賀鎮守府の提督が、いきなり未経験の人材をスカウトする事があるって噂で聞いた事がありますけど、本当だったんですね」

吹雪が言う。

「ウチの提督は変わり者ですから……でも貴虎さんなら安心じゃないかと私も思います」

「そうねえ、赤城さんまで太鼓判を押してくれるのなら大丈夫よねえ」  
そうして龍田は、にこやかな表情を浮かべる。

「でも意外ね。貴虎ってそんな無茶な事をするような人には見えなかったわ」

夕張のその言葉を、苦笑を浮かべつつ軽く流すと、貴虎は口を開く。

「私の力がどれ程役立つかは分からないが、皆の期待に恥じぬよう精進したいと思う。今後ともよろしくお願いする」

そうして貴虎は若干不慣れな動きで、習ったばかりの敬礼のポーズをとった。周りの者達も同様に海軍式の敬礼をする。

「ふふっ、それじゃあ私達は、護衛を普段以上に気合を入れて臨まないとね！新しい仲間が良いとこ見せなくっちゃ！」

と夕張が力強く拳を握りしめて、ガッツポーズをしてみせた。

「それと、もう一つ知らせておく事がある」

提督のその発言に、全員が耳を傾ける。

「新たに三人の艦娘がウチの艦隊に加わる事となった。一時的な赴任ではあるがな」

「一時的ってどういう事ですか？」

吹雪が疑問を口にする。

「今回赴任するのは、先日の大規模作戦時に活躍した娘達なの。体調面が万全とは言い難いから、そちらの基地に一旦預けさせてもらうのよ。あなた達の基地にある温泉は効果抜群だから、リフレッシュに最適と思つてのウチの提督の判断ね」

「私達の基地って、保養施設みたいな扱いを受ける事が多いわよね」

夕張が複雑な表情を浮かべて言う。

「ですが休暇扱いというわけでもありません。言うなればリハビリの様なモノですから。任務もバッチリこなしてもらっているのでご心配なく」  
「それで、誰が来るのかしら〜」

「川内さん、神通さん、那珂さんの三人になります」

「うげっ！川内が来るの!?!?!:あぁ、ちよつと眩暈がしてきた」  
額に手を当て、夕張がげんなりした表情を浮かべる。

「どうした、何か問題でもあるのか?」

貴虎が夕張に尋ねた。

「……静かな夜が恋しくなるわね」

夕張が遠くを見ながら静かに呟いた。その様子に貴虎は首をかしげる。

そんな二人をよそに赤城は話を続ける。

「え〜御三方には、訳あって一足先に船に乗り込んでもらっていますので。申し訳ありませんが着任の挨拶等は、そちらの方でお願いします」

「ああ、わかった」

と、夷提督は赤城に応えると正面に向き直り、昨日と同様に護衛作戦の概要を皆に向かって話し始めた。

輸送船が警笛を轟かせながら、港を遠ざかっていく。その音は港への別れを惜しみつつも、無事に航海を終えて再び戻ってくるという強い決意を示す叫びの様だ、と赤城は感じていた。

瞳を閉じ、胸に手を当て、その航海の無事を赤城は一人祈った。すると……

「赤城さん!」

遠くから彼女を呼ぶ声が聞こえてきた。目を開け声のした方向へ視線を移すと、赤城とよく似た出で立ちの、青い弓道袴を身に着けた女性が早足で近づいてくる。

「加賀さん?」

その女性、加賀は赤城の傍まで来ると

「提督がどこに行つたか知りませんか？」

と尋ねてきた。

「提督でしたら執務室にて書類業務を行つているはずですが」

「いないのよ執務室に」

「えっ?」

「だから赤城さんと一緒に、例の方達のお見送りに来ているのではないかと思つただけど……違ふの?」

「提督は書類業務で手が離せないので、代わりに私を見送りによこしたんです。それが何故……」

「何か心当たりは無い?」

その加賀の質問に対し暫し考え込む赤城。

「……………あつ! そういえば、近頃疲れているので温泉でリフレッシュしたいと、よく呟いていたような」

「温泉……………まさか」

そうして二人は揃つて海の方を見る。その視線の先には、先程よりも幾分か小さく見えるようになった輸送船の姿があつた。

輸送船内の仮眠室に貴虎、提督、叢雲の三人は居た。室内には簡素なベッドが数台置いてあるのみの、殺風景な光景が広がっていた。提督は車椅子に座つたまま本を読んでいる。それはどうやら何かの小説のようだった。

叢雲は特に何をするというわけでもなく、ベッドの縁に腰を掛けたまま窓の外をぼんやりと眺めている。

貴虎も特別やるような事も無いので、ベッドの一つに腰を掛けたまま、枕元に置いてあつた新聞を手にとって眺め始めた。

室内には、本のページをめくる紙の擦れる音が時折響くのみで、誰一人口を開く事はない。昨日の一件のせいだろうか、叢雲は集合の際に、号令に対し声を出す程度で、他には一言も言葉を発する事はな

かった。

どことなく室内の空気は重い。

貴虎は新聞に目を通しつつ、チラリと提督と叢雲の様子を見る。二人とも何も変わらない様子である。

何か話すべきだろうか、と貴虎は一瞬考える。だが元より口数が多いわけでもなく、世間話の類も殆どする事なかった貴虎には、どうすればいいのかわからなかった。仕方がないので再び新聞に目を通し始めると、部屋のドアがノックされた。

「何だ？」

夷提督が顔を上げてドアの方へ向けて言う。

「あの……遅くなり申し訳ありません。着任の挨拶に参りました」

と細々とした女性の声が、扉の向こうから聞こえてきた。

「入れ」

と提督が促すと、三人の少女が部屋へと足を踏み入れた。

少女達は三人とも橙色を基調とした、お揃いの制服を身に付けていた。

最初に入ってきた少女は、特徴的な前髪と長髪が印象的であり、どこか儂げな雰囲気醸し出していた。

その後が続いてきた少女は、お団子状にまとめた髪の毛が特徴的で、その顔には満面の笑みを浮かべていた。

最後の少女は、先の少女とは対照的に虚ろな目、気だるげな表情を浮かべており、その顔色はお世辞にも良いとは言えなかった。明らかに体調が思わしくなさそうである。

「本日付けで横須賀鎮守府より着任致します、軽巡洋艦神通です。宜しくお願い致します」

と先頭に立っていた少女が自己紹介をし、敬礼をした。

「ああ、久しぶりだな神通」

「はい。夷提督こそ御変わりが無いようで」

「面識があるのですか？」

貴虎が尋ねる。

「私は以前、こちらの夷提督の元で任務に就いていた事があるのです」

と言うと神通は、ハツとしたような顔になる。

「申し訳ありません、初対面の方に。お初にお目にかかります、神通です。宜しくお願い致します」

神通は貴虎に向かつて、慌てた様子で深々と頭を下げる。どうやらこの艦娘は、いたく腰が低いようだ。

「呉島貴虎だ。こちらこそ宜しく頼む」

と貴虎も自己紹介をし頭を下げる。

すると最後に入室した少女が、フラフラとした足取りで前にやってきた。そして

「……同じく川内……着任。……よろしく」

か細い声で自己紹介をすると、再び後ろへ下がっていった。

「君は大丈夫なのか？体調が優れないようだが」

「ああ……うん、お構いなく……」

「もう、姉さんったら。しっかりしてください」

神通が注意するが、川内は生返事を返すのみで、ふらつきながらようやく立っているという状態だった。

「すみません！何だかこの所ずつとこの調子で……」

「だいぶ重症のようだな。十分にウチの基地なりの治療を施してやろう」

「はい。宜しく願います」

再び神通は深々と頭を下げた。

「じゃあ最後は那珂ちゃんの番ー！」

と、残る少女が勢いよく声をあげ前に躍り出る。いつの間にかその右手はマイクが握られていた。彼女は勢いよくその場でターンをしてポーズを決める。

「艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよー。よつろしくうー！」

「そして僕が鎮守府のアイドル、横ちゃんだよっ！ヨロシクツ!!」

那珂の後ろから青年が勢いよく飛び出してきて、同じくポーズをビシッと決めた。

室内が一瞬のうちに静寂に包まれた。誰もが突然の出来事に面食らい、しばらくの間黙ったままだった。



「え〜どうしたのみんな〜ノリが悪いなあ」

「……ヨコ、お前こんな所で何をしているんだ」

夷提督が半ば呆れた様子で、突然の来訪者に声をかけた。

「いやあ、僕も先日の作戦の指揮で大分疲労が溜まっています。こちらの基地の温泉でリフレッシュしようかな、と」

いつの間にか船に乗り込んでいた横須賀提督は「ハハハハ！」と満面の笑みを浮かべつつ、屈託なく言い放つ。

「構いませんよね?」

「……許可なら後ろの奴に取るんだな。俺は知らん」

「後ろ?」

そう言われ横須賀提督は後ろを、部屋の入り口の方へと振り返る。するとそこには、一人の女性が立っていた。

和装の身なりで青い弓道袴が特徴的なその女性は、冷やかな目で、ただじつと横須賀提督を見つめている。

「ウエ!?か、加賀さん!?!」

横須賀提督は驚きのあまり、飛び上る様な勢いで体を震わせた。

「……こんな所で何をしているのですか?」

「い、いやあ僕も今回の作戦で疲れたから、温泉でゆっくり休養を取ろうかな〜って……加賀さんもどう?」

声を震わせながら青年は言う。

「それは非常に魅力的な提案ですね」

それに対し加賀は目をつむり、思案するような素振りを見せる。

「でしょ?…だったらさ……」

「ですが、これ以上赤城さんの負担を増やさせるわけにはいきません。却下します」

横須賀の言葉を遮り冷徹にそう言い放ち、近づいてきた加賀は、何処からか取り出した縄で彼を素早く縛りあげる。

そして室内を見渡すと

「皆さま、大変お騒がせいたしました。良い航海を」

加賀は一言を告げると共に一礼し、力一杯に縄を引っ張り、そのまま歩き出した。

「ちよ、そんな乱暴に！」

縛られた青年は、引つ張られた勢いで盛大にすつ転び、倒れた姿勢のままズルズルと引きずられていく。

それと共に、ガンツ！ゴンツ！と鈍い音が辺りに響く。

「痛ッ！後頭部打った！か、肩が！やめて、熱い！手が、顔が擦れる！」  
悲鳴に近い声が遠くなつていく。その様子を一同は無言で見つめていた。すると

「あー！ゴメン、もう限界……」

と、力無く言うのとフラフラとした足取りで川内がベッドに近づき、そのまま倒れ込んだ。

更に那珂が頬を膨らして、プンプン！といった擬音が似合うような仕草で怒り出す。

「もう！アイドルは掴みが大切なのに、横ちゃんばかり美味しい所を持って行ってズルい！」

「それはアイドルと言うより、芸人の言い草に近い気がするがな」

夷提督がポツリと呟く。その一言に那珂は、しまった！というような表情をし

「いつけなくい、那珂ちゃん言い方間違えちゃった。キャハ！」

と舌をペロリと出して自分の頭を小突いた。

その隣では神通が申し訳なきように、何度も何度もしきりに頭を下げていた。

ズルズルと音を立てながら、船内の廊下を加賀が早足で歩き続ける。

「ちよ、ちよつと待って加賀さん！お願いします！自分の足で歩かせて下さい！止まって下さい！」

引き摺られる男の懇願の声に対し、物言わず加賀は立ち止まる。

横須賀提督は、体をもそもそと動かしながら、縛られたままの状態で器用に立ち上がった。

その様子を一瞥すると加賀は、ゆつくりと歩を進め始めた。

青年は再び転ばされない様に、加賀の隣について歩いて行く。

暫くの間、二人は口を紡いだまま歩き続けた。だが程無くして加賀が口を開く。

「どうやら、随分とあの方を気になされているようですね」

「あはは、お見通しつてわけか」

「一応、付き合いは長いですから」

「流石は加賀さん。御美しいだけじゃなく洞察力も抜群だ！」

「それで、何故そこまで気にしてるのですか？」

自分を煽てる言葉に対し、加賀は眉ひとつ動かす事無く質問を続ける。

「釣れないなあ。……まあ、なんて言うか……彼からは特別強い妖精さんの力を感じたんだよね。彼は素晴らしい加護を受けているみたいだ。いや、加護と言うよりはむしろ……」

「むしろ……？」

「いや、何でもない。だからこそ、もう暫く一緒に話したりしたかったんだけど……」

「だからといって、勝手な行動を取るのには感心しませんね」

「ごめんごめん。これからは置き手紙くらい残しておくよ」

その一言に対し、加賀は無言で横須賀提督を睨みつける。

「……ちゃんと許可を貰ってから外出します……ハイ」

そうこうしているうちに二人は、船の後部甲板にたどり着いた。

「そういうえば加賀さん、どうやって帰るの？小舟か何かを呼んであるの？」

「水上を滑って帰ります」

「……ハイ？」

加賀の言葉に対し呆気にとられる横須賀提督。

それを全く意に介さず、加賀は落下防止用の柵に近づくと一言

「海水の飲み過ぎに注意して下さい」

と告げ、勢いよくジャンプしてそれを乗り越えた。ロープを握りしめたまま。

「うわあああああ!!」

悲鳴を上げ海面へと落下する青年。大きな音を立てて海に落ちた

彼の方を一瞥すらせずに、加賀は鎮守府へと向かって舵を取った。

海面をトビウオの様に跳ねまわる横須賀提督を引つ張りながら

……

仮眠室に居た貴虎達は、ベッドに倒れ込んだまま眠りについた川内を氣遣つて外へ出た。

神通と那珂は部屋に残った。結果的に皆を部屋から追い出す形になつてしまつた事に対して神通は、しきりに頭を下げて謝り続けた。その様は、逆に貴虎達が申し訳なくなる程だった。

そして今、貴虎達三人は甲板に出てきていた。

艦首部分に立つた貴虎は、双眼鏡で周囲を見渡していた。一通り辺りを見回した後に、ふと後方へと目を向ける。

その視線の先には夷提督と、傍らに立つ叢雲の姿があつた。どうやら何か話をしている様子であるが、この位置からはその内容までは聞こえなかつた。

そんな時、片手に握りしめられた無線機から声が聞こえてきた。

《中に入つてなくて良いの？外は暑いでしょ？》

夕張の声である。確かに彼女の言う通り、夏の日差しがギラギラと照りつける甲板の気温は真夏のそれであるのだが、貴虎は首を軽く振りつつ応える。

「大丈夫だ。潮風が心地良いから暑さは殆ど感じない。それに君たちの働く姿を間近で見たい。後学の為にな」

《そんな事言つて、私たちのお尻に見とれてるんじゃないんですか？》

冷かし気味な龍田の声が聞こえてくる。

《おしつ!?!》

その言葉を聞いた吹雪が、慌ててスカートを後ろ手に押さえた。

《そんな事したら主砲が火を吹いちゃいますから、氣をつけてくださいね》

「ははは、それは恐ろしいな。そうならない様に、視線の配り方には氣

をつけなければな」

《貴虎ってそういう冗談に付き合えるのね。あんまりそういうイメージが無かったから意外だわ》

「そうか？……いや、その通りだな」

夕張の一言を受け、貴虎は小さく呟く。

《え、何？よく聞こえなかったんだけど》

「何でもない。気にするな」

龍田の言ったような軽口に付き合うなど、以前の自分からは想像もつかない事だ、と貴虎は思った。

仕事、使命に突き動かされるように日々を過ごしていた貴虎には、気の休まる時など無かった。

だが、今ここで彼女達と話していると気が紛れ、落ち着いた気分にも包まれる。艦娘達の明るさ、雰囲気当てられて肩の力が抜けたのかもしれない。命を救ってくれただけでなく、心に僅かでも安らぎを与えてくれた彼女達に対し、貴虎は感謝の気持ちで一杯であった。

そして、成り行きはどうあれ、そんな恩人達のサポートをする事になったのだ。彼女達の為に自分に出来る事を最大限にやろう。元の世界にどうやって戻るか、戻って何をするか、何をしたいのか、それを考えるのは、それをしてからでも良いだろう。と貴虎は密かに決意したのであった。

【第五話】 part 1

水平線の彼方に沈む夕日が、辺りの景色を鮮やかなオレンジ色に染める頃。横須賀鎮守府を出港した輸送船は、伊豆諸島のとある島に存在する基地へ到着した。

船のタラップを車椅子に座った夷提督えびすが下っていく。その後ろでは叢雲がグリップを握り、慎重に車椅子を操作していた。龍田ほどではないが、その手つきは手慣れている様に見える。

二人に続いて貴虎もタラップを下り、港の棧橋の上に降り立った。するとそこには、柔和な笑みを浮かべた鳳翔が佇んでいた。

「お帰りなさいませ。任務お疲れ様でした」

鳳翔は深々とお辞儀をして、一同を出迎えた。

「ああ。留守中は、何も問題は無かったようだな」

「はい、こちらの海は、至って穏やかでした」

鳳翔が提督の問いに、にこやかに微笑んで答える。

「あ〜〜っ！鳳翔さんだ！お〜〜い！」

輸送船の方から元気の良い声が聞こえてきた。

一同がそちらの方を見ると、タラップの上から川内が手を振っている。そして駆け足で皆の元へ近づいてきた。

「鳳翔さん久しぶり。元気してた？」

「ええ。川内ちゃんは、先日の作戦で大活躍だったみたいね」

「うん！」

輸送船内では顔色が悪く、目も虚ろであった川内だが、今はそんな様子を微塵も感じさせない程に澆刺せうしとしていた。

鳳翔と川内が会話に花を咲かせていると、続いて神通と那珂も船を降りてこちらへやってきた。

彼女達も鳳翔に挨拶すると共に、軽く言葉を交わす。

「ふふっ、これで本日の主役が全員揃ったわね」

「それでは、行くとするか」

「はい。主役の到着を、みんな待ち焦がれていますから」

提督と鳳翔に促されるようにして、一行は歩き出した。

鳳翔と川内達は、楽しそうに会話しながら歩いている。その後を貴虎達三人が続いていく。

「あの川内という少女、先程は大分具合が悪そうでしたが、持ち直したようですね」

「そうだな」

「彼女がどのような状態にあるのか私にはわかりませんが、あのよう  
に体調を崩してしまう程に、激しい戦いを繰り返してきたのでし  
ょう」

提督業がどのようなものなのか、貴虎は未だその全容を知らない。

だが、部下となる艦娘達のケアを行うのも、大切な役目の一つであ  
ろうことは想像に難くない。

そういつた事についても学んでいかねば、と貴虎は考えていた。

「フツ、どうやらお前は思い違いをしているようだな」

「思い違い？…どういう事でしょうか？」

提督のその一言に、貴虎は小首を傾げる。

すると傍の叢雲が、ポツリと呟いた。

「そのうち嫌でもわかるわよ」

一行は、とある建物の廊下を歩いていった。

和風の内装が施された様子は、ちよつとした料亭や旅館のような雰  
囲気を感じさせる。

暫く歩いていると、廊下の先から賑やかな話声が微かに聞こえてく  
る。

すると、先にある曲がり角から、様子を窺うように一人の少女が顔  
を出した。

そして近づいてくる一行に気が付くと、パツと顔を明るくし、後ろ  
を振り返り声を上げた。

「みんな来たでー！」

そう言った少女がサツと引つ込むと共に、バタバタと何やら慌ただ  
しく動き回る様な音が響いてきた。

何事かと貴虎が訝しんでいると、襖の前に立った鳳翔が、後に続く者達を手で制する。

「鳳翔さん大丈夫？」

襖の向こう側から声がする。

「ええ、もう良いわよ」

その言葉を合図に、襖がバツと左右に開かれた。

「着任おめでとうございます!!」

威勢のいい明るい声と共に、大勢の少女達が貴虎達を迎え入れた。その中には、一足先に戻ってきていた夕張達の姿もあった。

部屋の中は、手作りと思わしき装飾が、至る所に取り付けられており、吊り下げられた垂幕には貴虎、川内、神通、那珂の名前と共に「祝！着任」の文字が書かれていた。

どうやらこの部屋は宴会場のようで、広々とした部屋の中は一面畳張り、端の方には小さな舞台までもが設置されていた。

「これはもしや……」

「はい、皆さんの歓迎会です」

鳳翔がにつこりと微笑んだ。

宴会場の畳の上には、人数分のお膳と座布団が並べられており、長方形を描くような形で配置されていた。

部屋の広さに比べ、参加者の人数は少ないようで、一人一人の席の間隔は、広めにとられている。

貴虎は提督と共に、上座に当たる席に座る事となった。他の者も皆、それぞれ席に着いて歓迎会の開始を待っていた。

「は〜い、皆さん、本日もお仕事お疲れさまでしたあ」

マイクを手にした龍田の声が、舞台上に設置されたスピーカーを通して部屋全体に響き渡る。どうやらこの歓迎会の司会は、秘書艦である彼女が務めるらしい。

「では、これから新規着任者の歓迎会を始めたいと思います。それじゃあ最初は着任の挨拶から。トップバッターは、川内ちゃんよ。よろしくお願ひします」

龍田は川内の元へ近づいていき、マイクを手渡した。



「川内型軽巡一番艦、川内よ。この基地には療養も兼ねて赴任したんだけど、夜戦訓練は今まで通りバリバリやるつもりだからヨロシク！付き合ってくれる子がいたら大歓迎だから、いつでも声かけてね！」と、一番手の川内が、やる気に満ち溢れた挨拶をした。

貴虎は、その意気込みの良さに感心していた。が、周りの者を見てみると、苦々しい表情を浮かべている艦娘が相当数いるのが見受けられる。特に夕張は、一段とゲンナリした表情をしている様に見える。「は〜い、ありがとうございます。流石は川内ちゃんって感じの挨拶だったわねえ。じゃあ、次は神通ちゃんよ。よろしくね〜」  
「はい」

と、次の挨拶が始まったので、辺りを見回していた貴虎は、そちらの方へ視線を移す。

「軽巡洋艦、神通です。この基地に着任するのは二回目になります。短い間になると思いますが、以前ご一緒した方々も、初めてご一緒させて頂く方々も、皆様どうぞ宜しくお願い致します」

そう言う神通は、周りに向かってお辞儀をする。

「私は前に一緒にお仕事していた事があるんだけど、神通ちゃんは気が配りが出来て、頼りがいのあるとっても良い子よ。仲良くしてあげてね〜」

その龍田の言葉に神通は、顔をほのかに赤く染めて俯いていた。

「それじゃあ三人目、那珂ちゃんの番よ〜」

龍田からマイクを渡されると、那珂は輸送船内でやったのと同様に、その場でターンをしてポーズを決める。

どうやらこれが、彼女の決めポーズのようである。

「みんなお待ちせつ！艦隊のアイドル那珂ちゃん着任しました！今日は那珂ちゃんの為に歓迎会を開いてくれて、どうもありがとうー！那珂ちゃん、みんなの期待に応えられるように頑張るから応援ヨロシクー！」

那珂は、両手で宴会場内の参加者に向かって手を振る。

「それじゃあ、那珂ちゃんからお礼の歌のプレゼントだよ！聴いて下さいー！那珂ちゃんのデビュー曲、恋の2ー4ー」

「はい、那珂ちゃんありがとうございますあ」

曲のタイトルを言い切らないうちに、那珂の手から素早くマイクを取り返し、龍田は挨拶を打ち切った。

「あ〜ん！これからが本番なのに！」

「それでは続きまして……」

那珂の抗議を完全にスルーして、龍田は司会を続けていく。

「う〜……でも、那珂ちゃんは負けないんだから。アイドルは理不尽な扱いを受けても、絶対にめげないのだ」

ブツブツとそう呟きながら那珂は、自分の席に戻り、ゆっくりと腰を降ろしていった。

「提督候補生として着任する事になった、貴虎さんの挨拶よお」

龍田の紹介を受け、貴虎は静かに立ち上がった。そして、その手にマイクが手渡される。

顔を上げ周囲を見回す。宴会場に居る全員の視線が、貴虎に集まっていた。

貴虎は咳払いをして、喉の調子と気持ちを整え、口を開き始める。

「改めて自己紹介をさせていただきます。呉島貴虎だ。まずは礼を言わせてもらいたい。海を漂流していた私を救助し、治療まで施してくれた事、大変感謝している。あなた方は命の恩人だ」

その言葉に、若干照れくさそうにしている者が数名、口元に微笑を浮かべていた。

「そして、故あって横須賀の提督に認められ、提督候補生として着任する事となった次第だ。私は軍事的な事柄については素人だが、精進して一日も早く、恩人である君達の役に立てるようになりたいと思っている。どうか今後とも宜しく願います」

挨拶と感謝の言葉を言い終えると、貴虎は一礼をする。

そんな彼に向け、夷提督が静かに、称えるように拍手をし始めた。艦娘達も一人また一人と拍手をしだし、宴会場には拍手の大合奏が響き渡った。

「は〜い、貴虎さんありがとうございますあ。貴虎さんは、とても素質のある人だと私は思うわあ。これからの活躍が楽しみね。では最

後に提督から、ご挨拶をしてもらいたいと思いまゝす」

その声を受けて提督は、やれやれといった様子でゆつくりと立ち上がり、マイクを手取る。

「こういった事は柄じゃないんだが、手短にいこう。新たな面子も加わって、この基地も一層賑やかになるだろう。だが、誰が加わろうとも、俺がお前達に望む事は変わらない。命を無駄にするな。自分が守るべきものは守り通せ。それだけだ」

言い終えると提督は、ゆつくりと腰を降ろした。

「提督、ありがとうございます。それじゃあ、みんなお待ちかねの乾杯のお時間よ。準備してね」

それを合図に、艦娘達はグラスに飲み物を注ぎ始めた。貴虎と提督の前には鳳翔がやってきて、慣れた手つきで二人のグラスにビールを注いでいく。

そして全員が飲み物を手にしたのを確認すると、龍田が声を上げた。

「かんぱ〜い!」

「乾杯!!」

宴会場内には皆の明るい声と、グラスを打ち付けあう音が響き渡った。

貴虎の目の前のお膳の上には、色とりどりの料理が、所狭しと並んでいた。

山菜と茸の炊き込み御飯、同じく山菜のお浸し、緑黄色野菜のサラダに金目鯛の煮付け。

汁物のお椀を開けると、出汁の効いた味噌汁の香りが鼻腔をくすぐる。具材はわかめに豆腐と、シンプルながらも王道の組み合わせである。

一口すすると胃の中に暖かさが染み渡り、何とも言えないホツとし

た気分にも包まれる。

次々に料理を口にしていく。比較的舌の肥えている貴虎も思わず唸ってしまう程に、そのどれもが絶品であった。

周囲の面々も楽し気に談笑しつつ、料理に舌鼓を打っていた。

「お口に合いますでしょうか？」

貴虎の傍に鳳翔が近づいてきて尋ねる。

「素晴らしい料理です。先日頂いたお粥もそうですが、どれも非常に美味です」

「ふふつ、それは良かったです。お茶、置いておきますね。お酒だけじゃ、ご飯は食べにくいでしょうから」

「お気遣いありがとうございます」

鳳翔は湯呑みを貴虎のお膳の上に置くと、他の者達の席へと向かっていった。

「よく出来た娘だろう」

隣に座る夷えびす提督が言う。

「ええ、あのような様子を見ると、彼女が艦娘だというのが信じられなくなります」

「そうだな。とはいえ、アイツはアレでいてかなりの強さを誇る。戦闘技術において言えば、勝る者は数えるほどしかいないだろうな」

「是非とも拝見してみたいですね。彼女の戦いを」

そして二人は、再び箸を進め出した。

時折提督と軽い会話を交えつつ食事をしていると、龍田がやってきた。

「お疲れ様です」

龍田は運んできたお盆の上に乗っていたお猪口を提督に手渡し、冷酒専用の徳利から、よく冷えた日本酒を注ぎ込む。

「貴虎さんもおどろぞ」

「ああ、すまない」

注がれた冷酒を一気に口にする。体内に程良い冷たさと、アルコール独特の何とも言えない熱さが広がっていくのを感じた。酒自体の口当たりも、まろやかで心地が良い。

「あはっ、良い飲みっぷり！もう一杯どうぞ」

龍田は空になったお猪口に、再び酒を注ぎ入れる。

「貴虎さん、分からない事があつたら何でも聞いて下さいね。新人教育も秘書艦としての務めですから」

「ああ。よろしく頼む」

「でも手とり足とりつてわけにはいきませんから。お触りは禁止されてますからね」

彼女の一言に苦笑する貴虎。こういった冗談に対し、常に気の利いた返答が出来るほどに貴虎は、話術に秀でてはいなかった。そのため、彼は龍田の軽口に対し返答する代わりに、愛想笑いを浮かべつつ酒を一息にあおったのだった。

龍田を交え、貴虎と提督は暫く会話を続けていたが

「少し席を外させてもらいます。他の艦娘達と話しておきたいので」

と言い、貴虎は立ち上がった。

「わかった」

「いつてらっしゃい」

二人に見送られ貴虎は、ゆっくりと、談笑する艦娘らの元へと向かっていった。

まず初めに彼が向かった場所では、吹雪と叢雲が会話をしつつ食事をしていた。

とは言つても、会話は殆ど吹雪が主導しており、叢雲はそれに応える、といった形のものであったが。

「隣、座つても大丈夫か？」

「あ、貴虎さん！お疲れ様です。どうぞー！」

明るく答える吹雪に促され、貴虎は腰を掛けた。

「……いらつしやい」

叢雲は貴虎を一瞥すると、そのまま食事を続けた。

「もう叢雲つてば、せっかく貴虎さんが来てくれたのに」

「いや、気を使わないでくれ。自然体でいてくれた方がこっちも楽だ。

二人とも体は大丈夫か？」

「はい！大丈夫です」

「見ての通りよ」

「そうか。なら良かった」

「あっ！私、貴虎さんが今までどんなお仕事をやっていたのか、知りた  
いです。良かったら教えてもらえませんか？」

「ん？……そうか、そうだな……」

貴虎は躊躇した。簡単な経歴は横須賀鎮守府で用意されていたも  
のがあるが、仕事について詳しく話すとなると厄介である。そこまで  
は完全にフォローされていなかったのだ。

「……ダメ、でしょうか？」

かと言つて、何も話さないのは問題があると思い、貴虎は当たり障  
りのない範囲で話を合わせる事に決めた。

「いや、そんな事は無い。何から話せば良いか迷っただけだ。……私  
は医薬品のメーカーに勤めていて……」

かつて、ユグドラシルコーポレーションに勤めていた際に、世間の  
目を欺く為に使っていた「表」の情報を所々ぼかしながら、当たり障  
りのない様に話していった。食い入るように聞く吹雪。どうやら、怪  
しまれる心配は無さそうだった。

「と、こんな所だな」

「色々と話して下さいって、ありがとうございます」

「私こそ、じっくり話が出来て良かったと思う。では、そろそろ他の娘  
達の所へも行かせてもらおうとしよう」

「はい、行つてらっしゃい」

そうして貴虎が立ちあがろうとすると

「待ちなさい」

叢雲が声をかけてきた。

「……どうした叢雲？」

今まで話に参加する事も無く黙っていた叢雲が、突然声をかけてき  
た。

何か怪しまれるような事を言ってしまったかと思い、貴虎の背筋に

一瞬の緊張が走る。

「……き、昨日は……悪かったわね。」

「昨日?」

「……潜水艦の。……手間かけさせて悪かったわね」

「ああ、その事か」

「どうやら昨日の護衛任務中に、貴虎に助けられた時のお礼を言いたかったようである。」

「私は、ただ艦橋から見ていただけだ。礼なら敵を倒した夕張に言つてやれ」

「……わかったわ」

「そつけない物言いだが、彼女の性格を察するに、これでも精一杯の感謝を表しているつもりなのだろう。」

「そんな彼女を見て、貴虎は微笑を浮かべた。」

「すると叢雲は、顔を真っ赤にして俯き」

「も、もういいでしょーさっさと他の娘の所に行きなさい!」

「と貴虎を怒鳴りつけた。」

「ああ、失礼する」

「そうして貴虎は、吹雪と叢雲の元を離れていった。」

「叢雲の様子を見て吹雪も、その顔に笑みを浮かべていた。」

「そんな彼女を睨みつけると叢雲は、目の前にあつたグラスを手に取り、火照つた体を冷やそうと、一気に中身のジュースを飲みほしたのだった。」

「失礼する」

「次に貴虎が向かったのは、四人の駆逐艦娘が集まっている所だった。」

「あ、いらつしやい」

「黄色いリボンを髪の内側に付けた少女、陽炎が貴虎を迎え入れる。」

「どうぞ、こちらにお座り下さい」

「傍らにあつた予備の座布団を手早く、ピンク色の髪の少女、不知火が敷いた。」

「すまない」

貴虎は、その座布団の上に腰を降ろした。

「君らと会うのは初めてだったな。呉島貴虎だ。宜しく頼む」

「こちらこそ初めまして、陽炎よ。……とは言っても、私達は一度貴虎さんに会ってるんですけどね」

「どういう事だ？」

「夕張はんが貴虎はんを見つけた時、ウチら一緒にあったんよ。あ、ウチは黒潮や。よろしゅうな」

陽炎の隣に居た黒髪の少女が言った。

「そうだったのか」

「ええ。あと、その不知火と島風も一緒だったわ」

陽炎が指し示した方へ、貴虎が目を向ける。

「不知火です。宜しくお願いします」

「島風だよ。ヨロシクね」

島風の挨拶に合わせて、顔の描かれた砲塔に、体のついた彼女の武装「連装砲ちゃん」が三機、手をパタパタと動かしながら、挨拶するような仕草を試みせた。

その妙な機械人形に、一瞬戸惑いの表情を浮かべた貴虎であったが「ああ、こちらこそ。よろしく」

と、皆に向け会釈をした。

「それにしても運が良かったわ。私達が近くにいなかったら、今頃は深海棲艦のエサになってた所ですよ」

「深海棲艦は、人を食べる事もあるの……だったな」

「ええ、そうよ」

「小舟が丸々、ガブガブツと噛み砕かれたつちゆう話もある位やしな」  
黒潮が両腕を大きな口に見立てて、上下に動かすジェスチャーをした。

「それは、恐ろしい話だな」

「ですがそのような被害を、犠牲者を増やさない為に私達がいるのです」

「うん！ そうだよ！」



「そういえば、君達は駆逐艦娘、らしいな」

横須賀鎮守府に行く途中の龍田との会話の中に、彼女らの話が出てきた事を思い出す。

「せやで」

「駆逐艦娘というものが、どのような役割を担っているのか、私に教えてくれないだろうか？様々な艦娘がいるのは知っているのだが、その違いについてまでは把握していないものでな」

「もちろん！」

「駆逐艦娘とは、火力自体は他の艦種に大きく劣りますが、その分燃費は良いのです」

「せやから、護衛や遠征の任務に重宝されとるんや」

「でねでね、すつごうく早いんだよ！」

陽炎、不知火、黒潮、島風は口々に駆逐艦娘の特徴と役割を、貴虎に教授していった。

一般的な駆逐艦娘の特徴や性能の話から、彼女らの武勇伝まで、話のタネは尽きる事が無いようだった。

駆逐艦娘らの元を去った貴虎は、見知った艦娘の元へ足を運んだ。

「隣、座っても構わないか？」

「あ、貴虎いらっしやい。どうぞ座って」

夕張の隣へと貴虎は、ゆっくり腰を降ろした。

酒が入っているせいか、夕張の顔は仄かに赤い。

「随分とお話が白熱していたみたいじゃない？」

「私は殆んど聞いていただけだったかな。彼女らの勇ましきには、感服させられる」

「そうね、私も気を抜くと、あの娘らには気圧されそうになる時があるわ」

夕張は苦笑する。

「おいおい、何を情けない事言ってるんだよ。気合が足りてねえんじゃないか、夕張？」

貴虎と夕張が声のした方を見やる。そこには両手に飲み物をもつ

た、片目を眼帯で覆い隠している少女が立っていた。

少女は荷物を床に置くと、自らもドカッと腰を降ろした。

「君は？」

その貴虎の質問に対して、少女は前髪を軽くかき上げ、鋭い眼光でキツ！と貴虎を睨みつけ、声に凄みを込めて言い放った。

「オレの名は天龍。天龍型一番艦の天龍サマだ。フフツ……怖いかな？」

渾身の名乗りが決まった、とばかりに天龍は得意気だった。

彼女の様子に貴虎は、言葉一つ発する事無く、ただじっとしていた。ただ、隣の夕張は苦笑とも呆れともつかない、複雑な表情を浮かべていた。

「このオレのオーラにビビっちゃまって、声も出ねえか？」

「……いや、すまなかった。あまりにも龍田の言った通りだったものでな」

「龍田が？一体何の事だよ」

「君が不治の病だと聞いていたのだが」

「ハア？何言ってるんだよ。オレは見ての通りピンピンしてるぜ？」

天龍は拳を握りしめ、右肩をグルグルと回し、健康さ、元気さを現すかの様な仕草をする。

「いや、体では無く精神的な病だと……」

横須賀へ向かう途中の輸送船内で貴虎は、龍田から天龍の事も聞かされていた。

その内容は龍田曰く……

「……天龍ちゃんは病気なのよ。誰の前でもカッコつけないと気が済まない、心の病にかかっているのよお」

「出会ったらすぐに、怖いか？なんて言ってくるかもしれないけど、許してあげてねえ」

「……でも、そんな所も天龍ちゃんの魅力だと思うの。だから怒らないでほしいのよ」

「私も何とかしてあげたいと思ってるんだけど、どんなお医者さんに

も直せない病気みたいで……」

次々と龍田より聞いた天龍の事を、掻い摘んで伝えていく貴虎。その話を聞いているうちに、天龍は徐々に俯いていき、肩をふるふると震わせ始めた。

「何でも『チュウニ病』?という病気らしいな。そんな病があるなどとは、その時初めて知って驚いた。私も及ばずながら力になれば良いと思っっている。だから……」

更に話を続けようとしていると、不意に肩を叩かれる。すると夕張が慌てた様子で、自らの口元に人差し指を突き立てていた。

「それ以上はダメ、もうやめてあげて」

囁く夕張の様子に、貴虎が首を傾げた瞬間……

「龍田ああああーっ!!!」

天龍が大声で叫びながら立ち上がった。

そのまま勢いに任せて走り出し、龍田のいる提督の席に向け、一目散に走り出した。

が、そこには龍田の姿は無く、提督が一人でお猪口を傾けていた。

「龍田は!? 龍田は何処に行きやがった!?!」

提督は視線も動かさず、無言で入り口の方を指さした。

その先では龍田が襖から、ちょこんと顔を覗かせており

「天龍ちゃん、怒っちゃい〜やくよっ!」

とウインクをすると、回れ右をして駆け出して行った。

「コラア!! 待ちやがれ!!」

天龍は凄まじい勢いで龍田の後を追いかけて、宴会場から出ていってしまった。

「私は何か不味い事でも言ったのだろうか?」

「うん……後でちゃんと謝っておきなさいね」

【第五話】 part 2

夏の暑さとアルコールで火照った手が、蛇口から流れ出る水により冷やされていく。

トイレの洗面台で手を洗っていた貴虎は、ふと目の前の鏡を見る。そこに映った自分の顔は、心なしか穏やかな表情をしているように思えた。

思い返してみれば、今までの自分は働き詰めで、今日のような宴に出たような記憶は無かった。

かつて無い位に気分が何処か晴れやかなのは、宴会のおかげなのかもしれない。

「あながち、こういう事もバカにはできないのかもな」

ポツリと独り言を漏らすと、貴虎は手洗い場を後にした。

そして、宴会場へ戻ろうと廊下を歩いていると、両手に空の器が満載されたお盆を持った、鳳翔の姿が目にとまった。

「鳳翔さん？」

「あら、貴虎さん。お手洗いですか？」

「ええ。それよりも、一人でそれを運ぶのは大変でしょう。手伝います」

「そんな、今日の主役にそんな事をさせるわけには……」

「遠慮しないでください。二人で手分けした方が、安全に早く運べるでしょう」

「すみません。では、お言葉に甘えて」

鳳翔から差し出された片方のお盆を受け取り、貴虎は彼女の横に並び歩き始めた。

「どうですか、楽しんでいただけますか？」

「はい、これ程までに心豊かな時間を過ごしたのは、久しぶりです」

「ふふっ、そう言っていたら、頑張った甲斐があります。貴虎さん達の赴任の知らせを聞いて、今朝から艦娘のみんなで準備を進めたんですよ」

「という事は、半日ほどであれだけの準備を？」

「はい。天龍さんと島風ちゃんが、お魚を捕りに行ってくれたり、陽炎ちゃん達が、裏山に山菜や野草を採りに行ってくれたり。それから帰ってきたら、みんなで飾り付けをして……」

聞けば艦娘の歓迎会は、艦娘達で取り仕切るのが慣わしとなっているらしい。

他の鎮守府などでもそれは同様で、皆準備をしたりするのは慣れておおり、時にはその速さ、出来栄えを誇らしく語り、自らの所属する部隊の、結束の指針とする艦娘もいる程だという。

「ところで、この基地に所属している艦娘は、今日のメンバーで全員なのでしょうか？」

「いえ、他にも何人かいますけど、今は他の鎮守府との合同作戦に参加するために、出張しているんです」

などと更に話していくうちに、二人は厨房までたどり着く。

そして運んできた食器類を、まとめて流しの傍に置いた。

「新しい飲み物も、持っていないといけないじゃありませんね」

鳳翔は冷蔵庫や戸棚を開け、ジュースやお茶などのドリンクに、酒類を次々に揃えていった。

「あら。お酒これじゃあ足りなそう。倉庫に取りに行って補充しておかないと……」

「でしたら手伝いましょう。倉庫の場所も頭に入れておきたいので丁度いい」

「わかりました。では、一緒に行きましょうか」

厨房の勝手口を出た二人は、少し離れた場所にある倉庫へ行き、目当ての酒類を運び出す。

ついでに不足していた食材なども補充する事となり、二人は厨房と倉庫を数往復したのだった。

暫くの後、一仕事終えた貴虎と鳳翔の額には、薄っすらと汗が浮かんでいた。

「すみません。長々と手伝わせてしまって」

「いえ、いい腹ごなしになりました」

そして二人は、新たに補充した飲み物や、つまみを持って再び宴会

場へ向かっていった。

宴会場へと続く長い廊下を、二人は会話を交わしつつ歩く。すると鳳翔が、何やら訝しむ表情を浮かべた。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ何でもありません」

と、その場は軽く流した鳳翔であったが、宴会場の襖の前で小首を傾げる。

「何か静か過ぎませんか？」

「言われてみれば確かに……」

宴会場から何の音も聞こえてこない。廊下もシンと静まり返っている。

鳳翔は、そつと手をかけ襖を開き、中へと足を踏み入れた。

貴虎も、その後が続いていく。すると部屋の中には誰一人として居なかった。

ただ食べかけの料理、飲みかけの飲料、空の器が所々にあるのみであった。

その奇妙な様子に、二人は思わず顔を見合わせた。

話は数十分前に遡る。

貴虎が部屋を出て以降もなお、叢雲は、ふてくされたままであった。吹雪もなだめるのを諦めかけようとしていた時、叢雲に提督からの呼び出しがかかった。

そして叢雲は、若干緊張した面持ちで、提督の席へと向かっていった。

一人残された吹雪の元に、不知火と黒潮が近づいてきた。

「昨日は大変だったようですね」

「叢雲が、危うくやられてまう所やったんやて？」

「うん。でも叢雲も皆も何ともなかったよ。貴虎さんや夕張さんのおかげ」

「先程詳細を伺いましたが、軍事に疎いと言っていたにも関わらず、異

変を察知し深海棲艦を発見する観察眼に直感力、貴虎さんは、只者では無いように感じます」

「せやな。それはそうと、叢雲は大丈夫なんか？落ち込んだるんちゃうか？」

「やつぱり、昨日の事を引き摺ってるみたい。でも今朝までに比べると、今は少し良くなってきているのかな？」

「さよか。ほな時間が経てばどうにかなるか」

「果たしてそうでしょうか？」

「どういう事や不知火？」

「いささか冷静さを欠いていたとはいえ、戦闘中に命令違反をしたのです。何らかの処分があるのは確実でしょう。あの時のような……」

と、不知火は提督の正面に座る叢雲の後姿へ、チラリと目を向ける。

「それを分からない叢雲ではないでしょう。ある種の達観、開き直りの気持ち彼女に芽生えただけなのでは？」

「そうなんでしょうか……」

不知火の言葉に、吹雪は表情を曇らせる。

「だとしても司令はんは、そない厳しい事はせんと思うで。叢雲をこれ以上落ち込ませるような事は、せえへんよ。きつと」

「その可能性もあり得ますが……どちらにせよ、叢雲の様子には気を配らないといけません」

「なんや、随分と優しい事言うんやな不知火も」

にやけた表情を浮かべながら、黒潮が肘で不知火を小突く。

「駆逐隊の士気にも影響が及ぶのを、危惧しているだけです」

「まくたそないな風に言うて、素直に言うたらええのに」

「素直に自分の考えを言っているつもりですが？」

すまし顔の不知火は、ふと後方へ視線を向けた。そして何某かを見やると、そのままスツと立ち上がる。

「どうしたんですか、不知火さん？」

「少しお花を摘みに行ってます」

不知火はスタスタと歩いて、部屋を出ていってしまった。

残された吹雪と黒潮は、怪訝な表情で彼女の出た方を見てい

だが、突然背後からポンと肩を叩かれる。

何事かと振り返ると、そこには満面の笑みを浮かべた那珂の姿があった。

「ねえ二人とも、那珂ちゃんのお願ひ、聞いてくれるかな？」

その様子から彼女が何をしようとしているのかを察した二人は、同時に不知火の出でいった方を見やり、思った。

アイツ一人で逃げたな、と。

不知火と黒潮が吹雪と話していた頃、陽炎の元には川内がやってきていた。

ちなみに島風は、連装砲ちゃんが一人いなくなったと言って、少し前にどこかへと行ってしまっていた。

「やつ！お疲れ様」

「川内さん、お疲れ様です」

「ここ、良いかな？」

「はい、どうぞ」

陽炎は腰を降ろした川内に空のグラスを渡し、飲み物を注ぐ。

そして自分もグラスを手に取り、二人で乾杯をした。

「聞いたよ、陽炎って今この駆逐艦娘達のまとめ役なんだって？すごいじゃん！」

「いいえ、そんなに立派なものじゃないです。いつも苦労してばかりですよ。不知火と黒潮にフォローしてもらいながら、何とかやっけるって感じですよ」

照れくさそうに頬を人差し指で、ポリポリとかく。

「ところで、川内さんは先日の大規模攻勢作戦に参加したんですよね？どうだったんですか？」

「私は神通、那珂と一緒にずっと夜戦任務やってきて、凄く疲れた。けどやり甲斐あったなく。こんな事言うのも何だけど、とても楽しかったです！」

「あはは、お疲れ様でした。それで川内さんは、どの位仕留めたんですか？」

「うーん、確か重巡二隻、軽巡五隻、駆逐は……十から先は忘れたか



なつて位？あと戦艦、手負いのやつにも遭遇したけど仕留め損なつちやつた。それは残念だったかな」

「十分な戦果じゃないですか！」

陽炎が目を丸くして、驚きの言葉を口にする。

「でもさ、やっぱり力不足を感じたよ。実力は随分とつけてきたつもりだったけど、自分はまだまだだなつて」

若干の憂いを帯びた表情を浮かべ、俯き加減に川内は言った。

現状に満足せず、向上心を見せる先輩艦娘の様子に、陽炎は尊敬の眼差しを向ける。

(川内さん程の強さを持つ人でも、そう感じるんだ……)

と思っていると

「だからさ、お願いがあるんだけど……」

そう言つて顔を上げた川内が陽炎の方へ、ズズツと近づいてきた。キラキラとした目で彼女を見つめながら。

陽炎は、その様子に何か嫌な予感を感じた。それと同時に

(あ、私逃げられないかも……)

と、冷や汗を浮かべつつ悟つたのであつた。

いなくなつた連装砲ちゃんを探して、あちこち歩き回っていた島風は、再び宴会場へとやつてきていた。

すると、夕張の傍にちよこんと座り、彼女に頭を撫でられている連装砲ちゃんを発見した。

島風はそこへ駆け寄る。

「こんな所にいたの？探したんだよ！」

島風に怒られた連装砲ちゃんは、ギョツと目を細め、両手をバタバタと動かしていた。

正直、周りの人間にはこれが何を訴えている動きなのか、全く理解できないと思われる。が、島風には伝わったようである。

「もう勝手にいなくならないでね」

といい、島風は連装砲ちゃんを抱きかかえた。

「やっぱあなたにはわかるもんなのね。私にはサッパリだわ」

夕張は手に持つていたグラスの中身を飲みほす。

「へへん、だって島風と連装砲ちゃん達は、とくつても仲良しだもんね」

得意気に島風が言うと、傍らの連装砲ちゃん達も、得意気な表情を浮かべる。

「じゃあ、私も仲良くなれば連装砲ちゃん達の事、わかるようになるかしら？」

「うんーきつとそうだよ」

と言った島風だったが、何やら夕張から不穏な気配を感じた。

夕張は俯いたまま静かに、ブツブツと何かを呟いている。そして彼女の傍には、空のビール瓶とチューハイの空き缶が、幾つも転がっていた。

「よーしーこれから連装砲ちゃんとの親睦を、思う存分深めるわよ!!」  
と叫ぶや否や夕張は、連装砲ちゃんの一体を素早く小脇に抱える  
と、まるでアメフトの選手の如き猛ダッシュで、その場を走り去っていく。

「まずは分解して、隅から隅までその構造を徹底的に調べ上げちゃうんだからー!!」

突然の夕張の奇行に、流石の島風も不意を突かれ、反応が遅れてしまった。

そして、我に返った島風は

「待てー!!連装砲ちゃん返せー!!」

と、叫びながら夕張を追いかけ宴会場を後にするのであった。

夷<sup>えびす</sup>提督に呼び出された叢雲が彼の席に向かうと、その傍に一人の女性が座っていた。

橙色の服を身につけた長い髪の女性、川内型軽巡洋艦の二番艦、神通である。

神通は叢雲と目が合うと、軽く頭を下げる。叢雲もそれに合わせ会釈をした。

提督が目で座るように促したので、叢雲は神通の隣に腰を下ろす。

そして、正面に座る提督が話を始めた。

「単刀直入に言おう。叢雲、お前への処分を下す」

提督のその言葉に、思わず表情に緊張を滲ませる叢雲。

昨日の出来事があったから叢雲は、自分がどんな処分を下されるのか、ずっと考えていた。

自分への処分は良くて謹慎、最悪の場合除籍。考え始めた時は心の中は不安だらけだった。

しかし、やがて開き直りの気持ちが芽生え、ウジウジと考えるのも馬鹿らしくなっていった。

そして、どんな処分が下されようと構わない、何でも受け入れてやる。と思い、考えるのをやめていた。

そうして既に覚悟は決めていたはずなのだが、思わず手に、肩に震えが走る感覚に襲われる。

自分の心はこんなにも弱いのか、と叢雲は自己嫌悪に陥る。

そんな彼女へ向け、提督は告げた。

「神通達の哨戒部隊に加わり明朝からの任務に着け、その後暫く演習も同隊で行う。以上だ」

「……え？」

拍子抜けした様子で瞬きをする叢雲。

「それ……だけ？」

「なんだ、不満なのか？なら別の処分を考えるが？」

「そ、そんな事言っていないでしょ！随分と甘い考えの司令官にちよつと呆れただけよ」

つい、いつもの調子で憎まれ口を叩いた叢雲は「しまった」というような表情を浮かべる。

「生意気な口の利き方だな相変わらず。だが、それでいい。お前らしい」

「ふ、ふん！悪かったわね」

「さて、部隊の嚮導艦は神通、お前に任せる。頼んだぞ」

「はい、了解しました」

提督の命に対し、静かに神通が答える。

「叢雲さん、よろしくお願いします。頼りにしていますね」

「随分と腰の低い嚮導艦ね。まあいいわ、頼られてあげるわ」

と、二人が握手を交わそうとしたその時、宴会場内部に大音響で音楽が流れだした。

一同が視線を向けると、そこでは舞台上に立った那珂が、上機嫌で歌を唄い始めていた。

リズムに合わせて、ノリノリで歌とダンスを披露する那珂。

その後ろでは吹雪と黒潮が、バツクダンサーとしてステージに参加させられていた。

二人とも引きつり気味の笑顔を浮かべ、ぎこちない動きで踊っている。

那珂の背中を見て必死に合わせようとしているのが見て取れたが、リズムもテンポもてんでバラバラで、見るに堪えないダンスとなっていた。

「ダメです！ダメですつてば！」

と、悲痛な叫びが別の所から聞こえてくる。

するとそこでは、陽炎が川内に引っ張られ、何処かへと連れて行かれようとしていた。

「いーじゃん！夜戦しよ、夜戦の訓練！駆逐艦をまとめるなら、夜戦を極めなきゃダメだよ！だから夜戦！」

「何ですかその理屈は!?!それに川内さんお酒入ってるじゃないですか！そんな状態じゃ事故になりますよ！やめましょう！」

自分を引っ張っていかうとする川内に必死で抗う陽炎。しかし軽巡の艦娘である川内に、駆逐艦娘である陽炎は完全に力負けしており、ズルズルと少しずつ引きずられていってしまっていた。

「川内姉さん！那珂ちゃん！や、やめてください！」

二人のはしやぎっぷりに、神通は顔を青くしていた。必死に何度もやめさせようと呼びかけるも、二人の耳には全く届いていない。もつとも、ただでさえ小さい神通の音が、那珂の歌や川内、陽炎の叫び声にかき消されてしまっているせいでもあるのだが。

「神通」

と提督の声がかかる。

「提督、申し訳ありません！」

提督の前に正座した神通は、何度も頭を下げて必死に謝る。すると提督はそれを手で制し、懐から封筒を取り出し神通に手渡した。

「明朝の哨戒任務に備えて準備を始めろ。全員の体調を万全に整えさせてな。場合によっては封筒の中身を使っても構わん」

神通は手渡された封筒を開ける。その中には二枚の紙きれが入っており、なにやら文章が書かれていた。

手早くそれを読み終えると神通は、そのうちの一枚を叢雲に手渡した。

「叢雲さんは那珂ちゃんをお願いします。私は姉さんを」

と言い、神通は川内の元へ向かっていった。

叢雲は渡された紙切れに目を通す。

その内容を読んだ叢雲は思わず、フツツと声を小さく出して笑ってしまった。

「いやー！引っ張らないで下さい！」

「ほらほら！早くしないと朝になつちやうよ！夜戦だよ！夜戦！」

いつの間にやら、うつ伏せに倒れこんだ陽炎の足を引っ張り、川内は宴会場の入口付近まで来ていた。

陽炎は連れて行かれまいと、襖の縁を掴んで必死の抵抗をしている。陽炎の必死の抵抗で、畳の一部がささくれ立っていた。

と、そこへ神通が近づいてきた。

「あ、神通も夜戦しよ夜戦！みんなで訓練すれば捗るし、練度もバリバリ上がるよ！」

その誘いに対し、首を横に振る神通。

「姉さんは、私、那珂ちゃん、叢雲さんと共に明朝の哨戒任務に就く事になりました。なので明日に備えて今日はもう休みましょう」

その通達に川内は不満の声をあげる。

「えー、何で!?夜はこれからだよ！それに今日は私たちの歓迎会でしよ、なのはどうして!?!」

そこへ提督がゆつくりと、足を若干引きずるようにして歩きながら近づいてきた。

「てーいーとくーいーどういふ事なのさ!？」

「生憎うちの艦娘どもは、今日の準備で疲労してるからな。疲労の溜まっていない者が出撃するのが、艦隊運用のセオリーだ。だから明日はお前たちが出る」

「そんなー! あんまりだよ!」

川内の抗議の声に一切答える事無く、提督は「用を足してくる」と告げてその場を後にした。

だが川内は、なおも神通に対し食い下がった。

「じゃあさ、少しだけ夜戦させてよ。ちよつとやったらすぐ寝るからさく」

「わがままを言わないで下さい。姉さんの為なんですから。すぐ休みましょう」

その後もしばらく川内の懇願と、それを却下する神通とのやり取りが繰り返される。

このままでは埒が明かれないと思った神通は、先程提督から受け取った紙を取り出すと、駄々をこねる川内の目の前に、それを突きつけた。

「これを読んで下さい」

「え、何これ?」

姿勢もそのままに、顔だけを紙に近づけ目を凝らす川内。

その紙には、こう書かれていた。

川内ちゃんへ

赴任先での所属部隊の嚮導艦の命令には、絶対に従って下さい。

もしこれが守れなかった場合は、二度と夜戦任務に就かせることはしないのでヨ・ロ・シ・ク!

それと、バツチリ時差ボケ治してね。

横ちゃんよ

り

それは、横須賀鎮守府の提督からの命令書であった。書類は正規のものが使用され、判子もしっかりと押されている。

そして川内がここへ来た理由、それは書かれている通り「時差ボケ治療」の為であった。

先の攻勢作戦において連日連夜、夜戦任務に就いていた川内型の三人は、生活リズムが完全に昼夜逆転となっており、作戦が終了し鎮守府に帰還した際には、時差ボケの症状に襲われていた。

神通、那珂は早い段階でそれを治す事が出来た。しかし常日頃、周囲から苦情が来るほどに夜更かしし、夜戦訓練に明け暮れる川内は、完全に昼夜逆転の生活リズムが身についてしまったのである。

そのため日常生活、任務にも差支えが出る始末。周囲の者も本格的な治療を試みたが、大規模な軍事施設である横須賀鎮守府は、夜間でも人の動きが活発であり、川内にとって治療を行うには刺激的すぎた。

そこで治療の場として、規模も小さく、夜間も静か、横須賀にほど近いこの基地に白羽の矢が立ったのである。

「そ、そんな……」

書類の内容に目を通した川内はガツクリとうな垂れ、その場にへたり込んでしまった。

「そんな~~~~」

那珂の落胆の声が響き渡る。

那珂に対しては、叢雲が命令書を読み上げていた。

その内容は、命令に従わない場合はアイドル活動の援助を打ち切る、といったものだった。

ちなみにその援助は、横須賀提督のポケットマネーからなされている。

正式な予算申請をしようとした事もあったが、それは加賀と赤城に捻り潰された。という経緯もそこにあつたりする。

「それでも、まだ歌いたいのならどうぞ御自由に」

叢雲のトドメの一言を受けた那珂は、ステージ上にそつとマイクを置いて、ゆつくりと舞台を降りていった。

トボトボと歩く那珂の後ろに、叢雲がついていく。

すると、入口の所でへたり込んだまま動かない川内を連れて行こう

と、神通が悪戦苦闘する姿が見えた。

「どうしたのよ」

「姉さんが放心状態になってて、立ってくれなくて。陽炎さんの足も握ったままで手が離れないんです」

「何で手の力だけ入ったままなのよー！死後硬直じやあるまいし！全然剥がせないんだけどー！」

足を掴まれた陽炎が、必死に川内の指を開こうとしているが、状況は一向に改善しなさそうであった。

「仕方ないわね。そのまま陽炎ごと引っ張っていきましょう。もしかしたら途中で離れるかもしれないし」

「え、でも……」

叢雲の提案に戸惑いの表情を浮かべる神通、しかし叢雲に促され、そのまま川内の腕を掴まされる。

「ちよ、ちよっと冗談でしょ!?!」

「行くわよ。せーのっ!」

狼狽する陽炎の意見は無視し、叢雲は陽炎ごと川内を引っ張り始めた。

「すみません、ちよっと我慢してくださいね」

申し訳なさそうに言いつつ神通もまた、力を込めて二人を引っ張り出す。

「いーやーやー!離してー!熱っ!あっつ!擦れてるっ!やめてええー!」

廊下に陽炎の叫びがこだました。

ステージ上に残された吹雪と黒潮は、その状況をポカンとした表情で見つめていた。

「と、とりあえず解放されましたね」

黒潮の左に立つ吹雪が言う。

「でも、陽炎が連れてかれてももうたで」

「仕方ありません、助けに行きましょう」

黒潮の右隣から声がした。

「ん?……うわっ!不知火!?!」



そこには、いつの間にか戻ってきていた不知火が立っていた。

先程の事について抗議しようと思潮が口を開きかけた瞬間、既に不知火は陽炎の後を追って駆け出していた。

「あっ！」

瞬く間に遠ざかってゆく不知火の姿。

「わ、私達も追いかけてみましょう！」

「せ、せやな！」

思潮と吹雪も、駆け足で不知火の後を追いかけていった。

そうして、宴会場からは誰もいなくなつた……

【第五話】 part 3

そんな出来事があったとは露知らず、部屋の入口に立ち尽くす貴虎と鳳翔。

しかし「そのうち戻ってくるでしょう」という鳳翔の声を受け、貴虎は共に部屋へ足を踏み入れる。

二人は新たに持ってきた飲み物や、つまみを配膳すると共に、空いた皿などを片づけ始めた。

「随分と派手に騒いでいたようだな」

部屋の散らかりように、貴虎が思わず呟く。

「そうですね。でも賑やかなのは良い事です。あの人が来る前は、この基地はこんな賑やかさとは無縁でしたから」

「あの人？」

「今の提督の事です。前任の方は、こんな事を許してはくれませんでしたから」

「そんなに違ったのですか？」

「ええ、前任の提督は生粋の軍人といった人で、軍としての規律を重んじていましたから。対して今の提督は、元々軍人ではありませんが、厳しくも優しくみんなを気遣ってくれて、何だかみんなのお父さんみたいな感じで……」

「あの提督が軍人では無かった？」

「そうですよ、って何も聞いてらっしゃらないのですか？」

「ええ」

「そうですか。あの人は、自分の事を進んで語ろうとしないんですね本当に……」

と、二人が会話をしていると、ガヤガヤとした声と足音が聞こえてきた。

「あ、皆さん戻ってきたみたいですよ」

鳳翔がそう言うとはぼ同時に襖が開かれ、艦娘達が部屋へ入ってきた。

「ホントひどい目にあつたわ……叢雲だけじゃなく神通さんまで、人を何だと思つてるのよ」

不機嫌そうにブツブツ言っているのは陽炎。その服は所々ヨレヨレになっており、全体的に黒ずみが目立つようになってしまつていた。

「おかげで床掃除の手間が省けましたね」

不知火の一言に、続く黒潮、吹雪が笑い出す。陽炎は更に不機嫌な表情になり、そっぽを向いたのだった。

四人の駆逐艦娘の後から続けて入ってきたのは、天龍と龍田であつた。

「もう、天龍ちゃんってば、機嫌直して、ねっ」

天龍の腕に、自分の腕を絡みつかせながら歩く龍田。それに対し、ふくれっ面の天龍。

だが、何故かチラチラと龍田の方を、横目で何度も見ている。

その視線の先には、龍田のぶら下げる小さな箱、その表面には大きく【甘味処間宮】の文字が印刷されていた。

自らの席に腰をかけた天龍の目の前で、龍田は持ってきた箱を開き、その中身を手に取る。

「じゃ〜ん！間宮さんのお店の新作スイーツ、ミックスベリーのパイよ〜。美味しそうでしょ〜」

「ぐっ……」

「天龍ちゃん、さっきの事を許してくれたら、このお菓子あげてもいいわよお」

そう言いつつ龍田は、天龍の目の前でベリーパイをゆらゆらと揺り動かす。

出来上がりからかなりの時間が経っているにも関わらず、ソレからは芳醇な果実の香りが漂い、天龍の鼻腔を刺激する。

「ダメえ〜？」

龍田が上目使いで天龍を見つめる。会話の主導権は完全に龍田のモノとなつていた。

天龍は暫く何やら葛藤している様子であつたが、龍田の眼差しと、

お菓子の香りに根負けし

「わかったよ！もう気にしねえよ！」

と声をあげた。

「ありがと〜天龍ちゃん！じゃあ仲直りの印に……はい、あくん」

龍田はパイの一片を手にとると、それを天龍の口元へ運んでいった。

「馬鹿やめろー！ガキじゃあるまいし！」

だがニコニコしたままの龍田は、一向に天龍の口元から菓子を動かそうとしない。

フルフルと肩を震わせた天龍は、仕方なく目の前のパイを一口齧った。

程良い酸味と甘み、生地は時間が経ってサクサク感が失われているものの、ソースと馴染んでしっとりとした生地の食感が合わさり、新たな味わいを醸し出している。口の中に何とも言えない魅惑的な感覚が広がり、天龍は思わず口元を緩める。

「あはっ！とつても美味しいですよ。はい天龍ちゃん、もう一口あくん」

その声につられて、再びパイを口にしようとした天龍だったが、ふと我に返り顔を真っ赤にする。

そして龍田の手からパイをひったくると、そのままの勢いで口に放り込んだ。

「あくん、天龍ちゃんってば、はしたないんだからあ」

それに対し天龍は、口をもごもごさせながら何やら抗議しているようだった。

そうしてあつという間に、再び宴会場は賑やかな空気に包まれていった。

貴虎の隣で鳳翔は、にこやかに微笑んでいる。その様子と艦娘達の楽しげな姿を見て、貴虎の心も自然と穏やかな気持ちに包まれていった。

「鳳翔さん！」

陽炎がこちらへ近づいてきた。

「あれ持ってきてくれた？」

「あ！ごめんなさい、私ったらうつかり……」

「あはは、良いですよ。自分で取ってきます」

「本当にごめんなさい。ところで、他の人達は何処にいったのかしら？」

「提督はお手洗いに、夕張さんと島風は分かりません。」

「川内ちゃん達はどうしたの？」

その名前が出た一瞬、陽炎の顔が強張った。

「……川内型の人達と叢雲は寝ました」

慥然とした口調で陽炎は言う。「失礼します」とその場を去っていった。

「何かあったのでしょうか？」

「どうなんでしょう。それにしても、夕張ちゃんと島風ちゃんは何処に行ったのかしら？そろそろデザートを配る時間なのに」

「私が探してきましたよう。鳳翔さんは準備がおりでしょうし」

「そうですね。ありがとうございます」

貴虎は宴会場を出ようと歩を進める。

すると入口で、宴会場へ戻ってきた夷提督とすれ違った。

「何処に行くんだ？」

「夕張と島風を探しに行つてきます」

提督は「そうか」と一言だけ告げると、そのまま自分の席へと戻つていった。

貴虎が廊下を歩き始めて間もなく。突然、何かがぶつかる様な大きな音と「うぎゃー！」という叫び声が耳に飛び込んできた。何事かと思ひ貴虎は、音のした方へ駆け出した。

すると前方から駆けてくる人影が目に映った。

「私から逃げようなんて、夕張には無理だよー！」

連装砲ちゃんを抱いた島風が、猛スピードで貴虎の横をすれ違った。

思わず立ち止まり、彼女の走り去った方を見やる。

「何なんだ一体？」

貴虎は再び足を動かし、音のした方へ向かう。するとそこには、目を回して仰向けに倒れ込んでいる夕張の姿があった。

状況を見るに、ものすごい勢いで壁に激突したようである。

「おい、大丈夫か！夕張！」

倒れた彼女を抱き起しながら、貴虎は呼びかけた。

「うくん……あれ、貴虎？」

「大丈夫か？」

その問いかけに頷くと、夕張は貴虎の手を離れ、自分でその場に座り込んだ。

「何があつたんだ？すごい音が響いていたが」

「あ、あははは……ちよつとね」

夕張は島風の連装砲ちゃんを奪って、自室に向け一目散に走っていった。

しかし自他ともに認める快足を誇る島風に、行く先々で先回りされてしまっていた。

島風の良いように走らされ続けた夕張は、ヘトヘトになった所へと背中から跳び蹴りを打ち込まれる。そして、蹴られた勢いそのままに壁へと激突してしまった。との事である。

「完全に遊ばれてた感じね。まいったわ」

そうしておどけて見せる夕張。

「そんな事をして、酒の飲み過ぎではないのか？もう休んだ方が良いのではないか？」

「大丈夫大丈夫。今ので頭が冴えたからさ。……よつと！」

夕張は勢いよく飛び上るように、立ち上がってみせた。

「とつと、うわっ！」

「危ない！」

しかし、バランスを崩してひっくり返りそうになってしまい、貴虎に腕を掴まれて何とか踏みとどまる。

「本当に大丈夫なのか？」

「ごめんごめん。今のは流石に調子に乗り過ぎたわ」

てへへ、と笑いながら夕張は指で頬をかいた。

それから二人は宴会場へと向かい歩き出す。

「そういえばさ、貴虎って家族の人に連絡とかしたの？」

「……連絡？」

「そう。無事を知らせたりとか、提督になるとか、色々と言っておかないと不味いでしょ？」

「あ、ああ、そうだな。すっかり忘れていた」

「ダメよ、そういう事はしっかりしないと」

「明日にでも済ませておこう」

夕張との何気ない会話に、思わず表情を曇らせる貴虎。

「もしかして、余計なお世話だったかな？」

その表情に何かを感じ取った夕張は、どこか申し訳なさそうにしていた。

「いや、そんな事は無い。ただ、すぐに連絡が取れない所に家族がいるものでな」

「そうなんだ。奥さんとかかしら？」

「いや、私は未婚だ。親と……弟、だな」

「そっか、貴虎には兄弟がいるんだ。どんな弟さん？」

「弟は……」

夕張の質問に対し口ごもる貴虎、脳裏に弟、光実の顔がよぎった。

自らが親代わりとなり、面倒を見ていた実の弟。

道を誤った彼を正す為に、貴虎は戦いに赴いた。自らの過ちを清算する為に、戦いに赴いた。

本気で戦いを繰り広げた、本音をぶつけ合った、その末に迷いを捨て去れなかった自分は……敗北した。

その時の光景が、次々と頭に浮かんで消えていく……

「……ら……た……とら、貴虎ってばー！」

傍らで呼びかける夕張の声で、貴虎は我に返った。

「どうしたの、急に黙り込んだんじゃって？」

「あ、ああ、すまない。私にも酔いが回っていたようだ」

「もう、貴虎も人の事は言えないわね」

「……全くだ」

「みんなくデザートの時間だよ〜！」

宴会場へと戻ってきた陽炎の手には、果物カゴがぶら下げられていた。

「おっ！待ってましたー！」

「配るのを手伝いしましょう」

黒潮と不知火が駆け寄り、中に入っていた果実を手にとると、部屋の中の者達に配って回る。

「はい、司令もどうぞ」

「ほう、これはイチジクか」

「ええ、夕食用の山菜を取りに行った時に見つけたの。味は保障するわ」

夷<sup>えびす</sup>提督の前で、陽炎が得意気な表情を浮かべる。

「陽炎、配り終わったで！ウチらの分も早う分けよ」

「今行く！あ、果物ナイフもあるけど使う？」

それに対し、軽く首を横に振る提督。

「そう、じゃあ私は行くから」

提督へ手を振りながら駆逐艦娘達の集う席へと、陽炎は向かっていった。

提督は手でイチジクの実を二つに割り皮を？き、一息にかじりついた。

「ふむ……なかなかの甘さだな」

「美味し〜い！」

島風が幸せそうな笑みを浮かべる。

「ホンマやなあ」

「取ってきた甲斐がありますね」

駆逐艦娘達が、カゴから次々とイチジクを取り出しては食べていく。皆完全にその味の虜となっていた。

「おい、ちよっとお前ら食いすぎなんじゃねえのか？オレにも、もう少し



し分けてくれよ」

そこへ、自分に配られた果実を食べ終えた天龍がやってきた。

そしてカゴの中から実を一つ、ヒョイツと掴み取った。

「ん？何だこりゃ？」

「えっ？……こんなの取ってきた覚え無いよ？」

天龍と陽炎が怪訝な表情で、天龍の手に握られた果物を見つめていた。

その果物は、鮮やかな赤紫色の彩りをもち、チューリップを逆さにしたような形をしていた。

それ以上に特徴的なのは、ヘタの部分の形状で、絡み合った繊維が、まるで南京錠のような輪っかを形成していた。

世にも奇妙な見た目の果実であったが、それを見つめる天龍は、何ら怪しく感じる事は無かった。

むしろその香り、見目麗しさが食欲をそそる。

喉をゴクリと鳴らし天龍は、果実の皮を剥きはじめた。

皮は難なく、スルリと剥くことができた。その表皮の下に包まれていた果実の中身は、若干ピンクがかかった半透明で、寒天や杏仁豆腐を思わせるようにプルプルで柔らかか、見た目にもハッキリ分かる程に潤っていた。

「何だかライチに似てますね」

座った状態の陽炎が、天龍の手元を見上げている。

「すっげえ美味そう……」

うつとりとした眼差しで手の中の果実を見つめる天龍。そして再び喉を鳴らし唾を飲み込み、ゆつくりと、その果実を口元へ運んでいった。

廊下を歩く貴虎と夕張は、宴会場の方から賑やかな声が聞こえてくるのを耳にした。

「何か、やけに賑やかなね。どうかしたのかしら？」

「そういえば、先程デザートを配ると言っていたな」

「本当？じゃあ早く行かないと！みんなに食べられちゃうかも！」

夕張が緩やかに駆け出した。貴虎もそれを追うように、歩く速度を

速めていった。

二人が部屋に入ると、皆が果物らしきものを頬張っている様子が目に入った。

するとこちらに気づいたのか、龍田が手招きをする。どうやら貴虎と夕張の分は、彼女が確保してくれていたようである。夕張はその方へ向け、軽やかな足取りで歩いていく。

何気なく貴虎は周囲を見渡した。

すると、虚ろな表情をしている天龍の姿が目映る。その手には特徴的な形をした赤紫色の果実が握られていた。

彼女はその皮を？き、ゆっくりと口元へと運び始めた。

「やめろ!!」

貴虎の叫びが室内に響き渡った。

頭に靄がかかった様にボーツとする。

目の前の果実から目を離す事ができない。何故こんなにも惹きつけられるのだろうか？

これは絶対に美味いに違いない。こんなにもいい香りと鮮やかさをした果物が不味いはずがない。

さつき食べたベリーパイもイチジクの実も、これには敵わないはずだ、きつと。

頭の中で渦巻く思考と本能に突き動かされ、夢見心地の天龍は、その手に握りしめた果実にかじりつく。

刹那

パァン！と乾いた音が響き渡った。

天龍の手から果実がこぼれ落ち、ベシヤリと音を立てて畳の上に落下する。

突如として叩かれた手がヒリヒリと痛む。その手を押さえながら視線を正面へと向けると、そこには息を切らせた貴虎が立ちはだかつていた。

「……っ！痛ってえな！いきなり何しやがる！」

吠える天龍の両肩が強く握られた。

「何処でこの果実を見つけた！」

「あ、ああ!？」

「言え!早く言うんだ!!」

凄まじい剣幕で天龍を怒鳴りつける貴虎。その手には過剰なまでの力が入り、肩はギリギリと音をたて、指が肉に食い込まんばかりに締め付けられる。天龍は思わず痛みで顔をしかめる。

更に貴虎が天龍を追求しようと、口を開きかけたその時、彼の首筋にヒヤリとした感覚が走った。

「貴虎さあん、天龍ちゃんに手を出すなんて、どういふつもりかしらあ?」

二人の間に割って入るように、横から龍田の顔が覗きこんだ。彼女の手には果物ナイフが握られており、その刃は貴虎の首に突きつけられていた。貴虎の手が緩み、拘束を逃れた天龍が後ずさりをする。

「貴虎!」

遠くから夕張の悲鳴にも似た声が響いた。

「た、龍田、何のマネだ?」

「質問しているのはこっちよお。返答次第では、制服が真っ赤に染まる事になるわよ」

龍田の口元は微笑を浮かべているが、細められた目の奥からは鋭い殺気が放たれている。とても冗談でやっているようには思えなかった。明確な敵意が貴虎に向けられている。貴虎の背から冷や汗が滑り落ちる。

突然の出来事に直面した他の艦娘達は、張りつめた空気の前に悲鳴を上げる事すらかなわず、固唾をのんでその状況を見つめる事しか出来なかった。天龍が何か言いたげに近寄ろうとするが、龍田に目で制され、たじろいでしまう。

そうして水を打ったように静まり返る室内。その静寂を破ったのは一人の男だった。

「龍田、その辺にしておけ」

夷提督がゆっくりと貴虎達の元へ近づいてきた。

「ダメですよお、提督のご命令でもこればかりは」

「ナイフをそんな風に当てがわれちゃあ声なんて出せるか。それに、

貴虎が着ているのは俺が貸した制服だ。俺には血塗れになった服を着る趣味は無いんでな。血生臭い事は勘弁してもらいたい」

提督の説得を受け、不承不承といった具合に龍田が貴虎から離れる。

ナイフの当てられていた首筋には、薄っすらと赤い線が浮かんでいた。

提督が、畳の上に落ちていた潰れかけの果実を手に取り、貴虎の前に差し出す。

「貴虎、もしやお前が言っていた果実というのは……」

「……ええ、恐らく間違いないでしょう」

ヘルヘイムの果実。

貴虎の居た世界において、浸食を続けていた植物に生る禁断の実。

それを食した生物は、一瞬のうちに異形の怪物“インベス”に変化してしまう。

一度変化してしまったが最後、人としての理性は失われ、本能の赴くままに行動する怪物に成り果ててしまった者は、二度と元の姿に戻る事は無い……

それが今、ここには存在するはずの無い物が今、貴虎の目の前にあった。

「一体どういう事か説明してくれよ」

天龍が、貴虎に掴まれた肩をさすりながら近づいてきた。

隣には龍田が控え、ニコニコとした笑みを浮かべているが、その佇まいに隙は無く、絶えず警戒をしているような様子であった。

「この果実は……猛毒を持っている」

一瞬の躊躇で言葉を詰まらせつつ貴虎は言う。

「うげっ、マジかよ!？」

天龍が目丸くして驚きの表情を示す。

「こんなに綺麗で美味そうなのにか?」

「鮮やかな見た目や魅惑的な香りで誘惑し、他の生物に実を捕食させる。そんな植物は自然界にはありふれている」

提督が言った。

「それにしても、尋常じゃない慌てぶりだったんじゃない、貴虎さん？」

「その果実を食べ、そして変わ……死に至った者を知っている。……そのため我を忘れてしまった。天龍、すまなかった」

貴虎は天龍の正面に向き直ると、深く頭を下げ謝罪する。

「いや、頭を上げてくれよ。逆に礼を言わなきゃなんねえのはオレだしよ。おかげで助かった」

そして天龍は「ほら、お前も」と龍田を小突く。

「貴虎さん、ごめんなさい。ついカツとなっちゃったの。悪かったと思ってるわ。でも天龍ちゃんの肩に痣とか残ったら困るから気をつけてねえ。これでも女の子なんだからあ」

龍田の脇で天龍が「これでもとは何だよ！」と抗議の声を上げている。

「ああ、以後気を付ける」

「それはそうと、イチジクを採ってきたのは陽炎達だったな。本当に心当たりが無いのか？」

提督のその問いに、陽炎と不知火は首を振り否定する。

と、近くにいた黒潮が、おずおずと手を挙げた。

「もしかしたら、それ持ってきたのウチかもしれへん……」

そうして口を開いた黒潮の話によると

山菜採りに行った際に、イチジクも手に入れた陽炎達。その後で黒潮は、海で魚を捕っている天龍らの様子を見に行った。だが彼女らの元へ向かう途中、浜辺を歩いていたら黒潮はうっかり転んでしまい、浜に打ち上げられていた流木や蔦の傍に、イチジクの入ったカゴをぶちまけてしまったのである。

そうして散らばったイチジクを回収している時に、紛れ込んでしまったのでは、という事らしい。

「ウチが慌てんと中身確認しとったら、こないな事には……貴虎はん、天龍はん、ホンマすんません」

「良いよ気にすんな。もう済んだことだしよ」

「それにしても、残ったコレはどうしましょう」

不知火が、カゴに入った二個の赤紫色の果実を見やる。

「ゴミ捨て場に投げちやえはいんじやない？」

陽炎が言うが

「それはダメだ」

貴虎が否定する。

ヘルヘイムの果実は、食した生物をインベスへと変化させる。それは人間に限った事ではない。

ゴミ捨て場に近寄った鳥やネズミが果実を食べ、インベス化するのを貴虎は危惧していた。

「焼却処分する」

そう言って貴虎は果物カゴを手を取った。

「いや待て。処分はするな」

提督が貴虎を制した。

「それを持って俺の部屋まで来い」

と言うと提督は、部屋の外に置いてあった車椅子に座り、自分で車輪を回して進んでいった。

貴虎もその後を追い、部屋を後にしようとした。

「待って貴虎」

夕張が声をかけてきた。貴虎が振り返ると、彼女は手に持ったおしぼりを貴虎の首筋に当てる。

少ししてそれを離すと、おしぼりには薄っすらと赤い線が染みついていった。

貴虎はそこで初めて、自分が出血していた事に気付いた。

「もう血は止まってるみたいね」

「すまないな夕張」

そう言い残して今度こそ貴虎は部屋を後にする。夕張はその背中を心配そうに見つめていた。

部屋には艦娘達だけが残された。

流星にあの騒ぎの後では誰も宴会を続ける気にはなれず、会はそのままお開きとなったのだった。

「確かにコレが例の実なんだな」

「はい、嫌と言う程見てきた果実です。間違いありません」

夷提督の執務室で貴虎は、回収した果実をくまなく調べていた。

その末に出た結論に、貴虎は眩暈を覚えた。

「何故……ここにこんな物が」

果実を睨みつけるように見ながら、憎々しげに貴虎は呟く。

「それを言っても何も始まらない。今出来る事を考えるのが先決だ」

「具体的にはどうするのですか？」

「これを横須賀鎮守府に送って分析をさせる。あそこの研究施設なら更に詳しい事がわかるだろう。そして本当にこれが危ない物なら、ヨコを通して各所に注意を促してもらおう。万が一があつたら事だからな」

「ですが既に、この近辺で繁殖を始めている可能性もあります。この植物は周囲の生態系などお構いなしで増え続けますので」

「そうだな、明日皆に島内を調査させよう。それと果実の輸送はアイツに任せるとしよう」

貴虎と提督はその後も暫くの間、ヘルヘイムの植物に対する対策を話し合った。

そして案が出尽くすと貴虎は、今日はもう休むようにと提督に促される。そこで話合いは終了となった。

時計が刻をきざむ音が、静寂な部屋に響き渡る。時刻は深夜を回った所だが、貴虎は未だに寝付けずにいた。

貴虎は執務室のある建物にあってがわれた寝室にいた。部屋の中は綺麗に掃除されており、ベッドメイクも丁寧に行われていた。恐らく鳳翔が整えてくれたものと考えられる。

貴虎は窓際に立つと、外の様子を見つめた。しかし目の前は闇に包まれており、目に入るのは窓に映った自らの姿のみであった。

「我ながら酷い顔をしている……」

思わず独りごちる。

数時間前に洗面台の鏡に映っていた姿とはうって変わって、貴虎の

顔には疲労の色が滲み出ていた。

自分の置かれた状況に折り合いをつけ、新たな決意を以って頑張ろうとしていた矢先、貴虎の目の前に現れた悪夢。

彼自身が「理由の無い悪意」と称したその現象に、この世界が今まさに飲み込まれようとしている。

その事實は、貴虎の心を疲弊させるに十分過ぎた。

貴虎は俯いて目を閉じると、大きく溜息を吐いた。

「ほう、果実の気配を辿って来てみたら意外なヤツの姿が……こいつあ驚いたな」

突如、貴虎の背後から声が出た。

ハツとして視線を上げる。しかし窓には貴虎以外に誰の姿も映っていない。

だが、その声は確かに貴虎の背後から聞こえてきた。ゆっくりと貴虎は背後を、声の主の方向を振り返る。

するとそこには、サイクルウェアを身に纏い、額にバンダナを巻きつけ、不敵な笑みを浮かべ貴虎を見据える一人の男が立っていた。その男は貴虎の良く知る人物であった。

「貴様は……DJサガラ!？」



## 【第六話】 part 1

貴虎の目の前に突如として現れた男、DJサガラ。

沢芽市にて、カリスマネットラジオDJとして名を馳せていた彼は、ダンスを愛好する街の若者達の間で“インベスゲーム”という名の、怪物同士を戦わせるゲームを流行らせた。

が、そんな彼の裏の顔は、貴虎の所属していたユグドラシルコーポレーションの協力者。

インベスゲームは、ユグドラシルの実験の一環に過ぎなかった。

ゲームの道具である、果実を模した錠前“ロックシード”更にその力を最大限に引き出すベルト“戦極ドライバー”の。

そんな謎の人物が今、貴虎の目の前に姿を表していた。

だが、その容姿は通常の人間のそれとは異なっていた。色は白黒のモノトーン。そして時折、モザイクがかかった様にその体が歪む。

まるで壊れたテレビに映る画像の様に。

「通信用の立体映像？ 貴様が姿を見せたという事は、この世界は異世界などではないのか？」

彼は元々、神出鬼没と言っていていい程に、突然貴虎達の前へ姿を現す事があった。

だが、異世界であるはずのこの場所へ姿を見せた事に、貴虎は困惑する。

「いや、この世界は、お前が元いた世界とは違う世界さ」

相変わらずの飄々とした口調で、サガラは告げる。

「だとしたら、何故お前は俺の前に姿を表す事が出来るんだ、説明してくれ。……お前は一体何者なんだ」

サガラは素性の知れない謎の人物。異形の存在オーバーロードとも面識がある様子だった彼は、何らかの事情を知っているはず。そして、普通の人間には無い力を持っているであろう、という事も窺い知れる。

そして、貴虎が元の世界に戻る手掛かりも……

「やれやれ、俺としては、何故お前さんがこんな所に居るかの方が、は

るかに謎なんだがね」

とオーバーなりアクションを交え言った後、彼は自らの素性・正体を語り始めた。

彼自身がヘルヘイムの森そのもの、言わばその化身であると……様々な宇宙を、世界を渡り歩き、そこに存在する生命体に破滅と進化を促す存在であると……

生存競争の末、黄金の果実を手にした勝者に、世界の行く末を決めるといふ運命を託し、見届ける使命を帯びた者であると……

目の前で淡々と喋るサガラの話を、貴虎は黙して聞いていた。が、その拳は血が滲まんばかりにグツと握り締められ、徐々に震え出していく。

「……貴様が……貴様が、全ての元凶だと言うのか……」

今にも溢れ出しそうな感情を必死に抑え込みながら、貴虎は声を絞り出す。

「有り体に言えばそうなるかもしれないな。だが生物の進化とそれに伴う淘汰、それは仕方の無い事だ」

「仕方ない、だと……!」

貴虎は握り拳を思い切り机の上に叩きつけた。

「ふざけるな!どれだけの人間がその犠牲になったと思っている!」

悪びれた様子もなく、あつさりと言い放たれたサガラの一言。それに対し押さえつけていた感情が遂に爆発する。

叫びと共に打ちつけられた拳は衝撃で擦り切れ、血がジワリと滲み出す。

「おいおい、別に俺は直接人に対して手を下した事なんて無いぜ。そりゃあヘルヘイムの浸食によって、ちよつとは被害を被った奴はいるだろうがな。そんなの人類が常日頃、世界中で出している被害に比べたら些細なものだ」

「何だと……」

「それにお前達、ユグドラシルの人間は“人類を救う”と称して十億人を選定し残り数十億人を見捨てる計画を立てていた。同族を見捨てる選択を出来るようなお前達の方が、俺には十分に残酷に思えるが

ね」

「……………」

「植物が繁殖する、微生物が、虫が魚が、様々な生き物が、己が生存をかけて競い合う。これは自然の摂理だ。そして俺は、その担い手に過ぎない。それ導く事こそが俺の使命、存在理由」

まるで大衆の前で演説する政治家の如く、大手を振るいながらサガラは己が主張を悠然と語り続けていった。

「……それで我々の世界の次に、この世界が貴様の言う『自然の摂理』とやらの犠牲になるというのか」

そんな彼の話を聞いていた貴虎は、俯きながら怒気を滲ませた声で呟いた。

深海棲艦という脅威に晒されながらも、それに屈することなく逞しく生きる人々。そして艦娘達。

貴虎に暖かく接してくれた者達、皆がヘルヘイムの森の浸食に蝕まれる。

そんなことは許しがたい、自然の摂理と言われた所で納得できるはずもない。

だが貴虎の呟きに対し、サガラから返ってきたのは意外な答えだった。

「いや、それは無い。お前のいた世界での黄金の果实争奪戦は、まだ終結していないんだからな」

貴虎は目を大きく見開き顔を上げる。

「何だ?!」

「俺の使命は黄金の果实を手にした勝者の決断を見届ける事。それを終える事無く他の世界へ試練を与えに行くなんて、あり得ない話だ」  
「では、お前は一体何の為にこの世界へやってきたのだ!」

「ちと話は長くなるが……」

そう前置きをすると、サガラは静かに語り始めた。

ヘルヘイムの森そのもの、その意志が形を成したものであるサガラは、ヘルヘイムの植物のある所であれば自由に姿を表す事ができた。そして、植物の存在を探る事も可能なのである。何せ己が体の一部な

のだから。

ある時、沢芽市及び世界中に浸食を続けていたヘルヘイムの植物、その一部に異変が見られた。

とある場所に蔓延っていた植物が、ほんの僅か一メートル四方にも満たないような範囲でスツパリと消失していたのである。

仮に何者かが切り取り、持ち去ったのであったとしても、切り取られた部分の気配もまた感じ取れるはず。だがその気配は全く感じられなかった。異変を察知したサガラは、その原因を探り始めた。

すると、消失の起こった箇所から、僅かながら時空の歪みのような現象が感じ取られた。

彼はその歪み、その先にある世界へと接触を試みる。それは非常に困難を極めるものであった。

だが、遂には試みが成功し、この基地に存在する果実を介する事で、僅かながらに意識を送り込むのに成功したのである。

「全く、ここままで苦勞させられるとは思わなかったぜ」

片手で額を押さえ、やれやれといった具合のジェスチャーをしてみせるサガラ。

「今の俺は、この近くにある果実を介してどうにか意識を飛ばしている。だが、それも長くは続かないだろう」

「何故だ？」

「うくん、何ていうかね、人間に分かるように例えると……まるで激流に逆らって泳いでいるような感覚、とでも言えば良いのか？その位に負担がかかっているんだよ。こうしてお前と会話しているだけでな。それと、どういう理由か分からないんだが、この辺にある果実以外のヘルヘイムの気配を感じ取る事が出来ない」

「ここ以外にはヘルヘイムの果実、植物は存在していないという事なのか？」

貴虎の問いかけに対し、サガラは首を横に振る。

「言い方が悪かったな。気配をハッキリと感じ取る事ができ、俺が干渉できるのは、この近くにある果実だけという事だ。この世界の他の場所に、ヘルヘイムの植物が存在するのは確実だ。だが存在するとい

う事だけは分かるんだが、どこにどの程度存在しているのかまでは分からない。そして何故か干渉もできない。まるで……そう、ボワくつと霧に包まれたような感じでな。様々な世界を渡り歩いてきた俺だが、こんな不可解な事に出会うのは初めてだ。……と、そこでだ」

サガラは片手の人差指を立て、貴虎の目を見据え言った。

「貴虎、俺に協力しちやあくれないか？」

「協力、だと？ 一体何のために」

「勿論、この世界のヘルヘイムを消滅させるためさ」

思いもよらないサガラの言葉に、貴虎は啞然とした。

「ヘルヘイムを消滅させるだ?!」

「ああ、そうだ」

キツパリと言い放つサガラの表情は真剣そのもの。いつも見せるような、おどけた雰囲気は全く見られない。

その意図が読めず困惑する貴虎に向け、彼は更に話をする。

「既に言ったように、俺の存在意義・目的は黄金の果実を手にした者の決断を見届ける事。ヘルヘイムを浸食させるのは、あくまで手段であり目的ではない。だからこの世界におけるヘルヘイムの浸食は、本来ならあり得ない事だ。そして、俺自身の意図を超えた範囲で蔓延る、言うなれば『暴走』したようなものを放っておくのは、望ましくない事なのさ」

真剣に話す彼の声色、表情は相も変わらず淀みなく見える。言っている事も、一見筋が通っているように思えた。

だが……

「……お前の言う事が本当だという根拠は、何処にある」

貴虎には、サガラのいう事を素直に信じられなかった。いくら自然の摂理、存在意義などといった言葉を並べられても、ヘルヘイムによって、彼の住む世界が脅威に晒されたのには変わりない。貴虎は、未だサガラに対する不信感を拭いてはいない。本当の所は、自分を利用してこの世界への進行を手助けさせるつもりなのではないか。そんな考えすら浮かび出す。

「残念だが、今の俺にそれを証明する手立ては無い。ただ……信じて

くれ。とでも言う他にないな」

懇願するように出される言葉を聞いてもなお、貴虎は睨むような視線でサガラを射抜き続ける。

「ただこう言うだけじゃ不満なら、いつそ土下座でもしてみせるか？」

「そんなポーズに何の意味がある」

ぴしやりと言い切る貴虎。サガラは「まいったねえ」と呟き後頭部をかくような仕草をする。

貴虎は暫しの間、瞳を閉じ沈黙をする。部屋の中には時計の秒針が時を刻む音だけがこだましていた。そして

「……わかった。協力しよう」

サガラの申し出を了承することを決めた。

「よっしゃ！流石は主任サマ、話が分かる！」

満面の笑みを浮かべ、指をパチンと鳴らすサガラ。

「私はもう主任ではない。それと、お前を心から信じ許したわけではない、という事は肝に銘じておけ。この世界の人々には恩がある。そして私は、その人達を助けたいからこそ貴様に協力するのだとな」

「フツ、アンタらしいな。では早速だが時間が無い。お前の知るこの世界の情報を教えてくれないか？何か手がかりが得られるかもしれない」

貴虎はサガラに対し、今この世界で起こっている事、彼が体験した出来事を話していく。

どうして貴虎がここにいるのか、艦娘について、深海棲艦について、それにまつわる彼が知りうる全ての事を、包み隠さず伝えていった。「ふむ、なるほどねえ」

一通り聞き終えたサガラは、腕を組み思索するような仕草をする。

「俺も色んな世界を渡り歩いてきたが、こんなユニークな世界は、滅多にお目にかかれるもんじゃないな」

「それで、お前にとって手掛かりになりそうな情報はあったか？」

「どうだろうねえ。深海棲艦、妖精さんに艦娘、どれもこれも不可思議でいて怪しいところだが、決定打に欠けるな」

その時、サガラの姿が一層大きく歪みだした。まるで映像にノイズ

が入った様に激しく揺れ動き、暫くしてまた元に戻る。

「つと、そろそろ限界が迫っているみたいだ。あと少しで俺の意識は、この世界から完全に切り離される」

「何だど？それで、私はこの世界で何をすればいいのだ？」

若干の焦りを滲ませた口調で貴虎が言う。

「今はとにかく出来るだけ沢山の情報を集めていってくれ。俺も可能な限り早くこの世界との再接触を図ってみる。どれだけかかるかは分からないけどな」

「ああ、了解した」

「……と、そうだ。お前に渡しておきたい物がある。あれを持ってきてくれないか？見ての通り、今のこの体は虚像なもんでな。自分で取りたくても取れないんだ」

そう言つてサガラは、窓際に置いてある花の植えられた植木鉢を指差した。

貴虎はそれを手に取り、サガラの目の前に差し出す。

「その花を抜いて、鉢植えだけを机の上に置いてくれ」

意図がわからず一瞬首を傾げた貴虎だったが、彼の言う通りにして鉢を机に置いた。

そして机の前に立ったサガラは、鉢植えに向け両手をかざすと、瞳を閉じ、何やら念じ始めた。

暫くすると白黒のモノトーンだったはずのサガラの手が、黄金色の輝きを発しだす。

淡い光が鉢植えを、そして部屋全体を仄かに照らし出していった。サガラの手から溢れ出る光はやがて収束していき、小さな黄金色の光の粒となる。しかしてそれは、鉢植えの土の中へゆっくりと吸い込まれていった。その光の粒が完全に鉢の中心へと消え去ると同時に、黄金色の輝きは弾けるように霧散した。

「ふう、出来るかどうか分からなかったが、どうにか成功したようだな」

「一体何をしたのだ？」

黙つてサガラの様子を見ていた貴虎が口を開く。

「黄金の果实の力、それをこの鉢植えに埋め込んだ」

「黄金の果实だ?!」

「正確に言うとは果实そのものでは無いがな。俺がオーバーロードの王、ロシユオから受け取り葛葉紘汰に託した黄金の果实の欠片。それの残りカス……いや、種みたいなものかな?」

「……種」

「とは言っても、これが何かの役に立つかどうかは俺にも分からない。もしやと思ってやってみたものの、今この鉢植えからは全く何の力も感じられないんだ。まあ、気休めのお守り程度にはなるかもしれんがな。それ以上の事は期待しない方がいいかもな」

と、再びサガラの姿が乱れだす。その乱れの間隔は先程に比べ、徐々に短くなっているようだった。

「最後に何か聞いておきたい事はあるか?」

「聞いておきたい事……」

それを聞いた貴虎の脳裏に、ある人物の顔が思い浮かぶ。その人物の事を、彼がどうなっているのか知りたい……

と、貴虎は一瞬口を開きかける……が、寸前で思い止まり口を閉じる。その後、再び口を開くと

「お前の力で私を元の世界に戻す事は可能か?」

と質問をぶつけた。

「残念だが、そいつは無理だ。俺に普通の人間を次元移動させるような力は無い」

「そうか」

「すまないが、それは自分で方法を……いや、異世界を渡り歩く戦士の力を借りれば、あるいは……」

「何か知っているのか?」

「以前……の世界……よく……。パラ……」

その瞬間、目の前のサガラの姿が判別が困難な程に歪み出した。同時に、発せられる言葉も途切れ途切れになっていく。

「……元を……たる……つ者……さ……れば……」

サガラはそんな状態になってもなお、言葉を発している様であった



が、その全てを伝えきる前にプツリと、彼の姿は貴虎の前から消え去ってしまった。

サガラ姿が消え、その声も途絶えると室内は完全に静まり返った。

視線を落とし、貴虎は机の上に置かれた鉢植えを見やる。それは先程、奇跡的な輝きに包まれていたのが嘘のように、土気色の薄汚れた姿を晒している。

その前で黙して佇む貴虎の心は、何故か不思議なほど落ち着いており、何かに安堵したかのようでもあった。

貴虎はそんな自分の心情に、ふと違和感を覚えたのだった。

ひび割れたコンクリート造りのビルが轟音と共に崩れ落ち、その破片が炎上する車を押し潰した。

廃墟と化した街の各所から煙があがっている。そして道路、建物、街の繁栄を象徴するオブジェ、至る所に都市には不釣り合いな植物が生い茂っており、そこには紫の果実が数多く実っていた。

辺りを見渡す。怪我をしたのか、それとも動く気力を失ったのか、茫然とした様子の人々が多数うずくまっている。

そんな中、泣きじやくる一人の子供が目に入った。その周りには誰もおらず、親兄弟とはぐれてしまった様に見える。

その子供が気になり近づこうとした時、母親らしき人物が駆け寄ってくるのが見えた。

「お母さん！お腹すいた！」

涙を流しながら、クシヤクシヤになった顔を押し付けるようにして、母に抱き付く子供。

「もう大丈夫よ、これを食べて元気を出して、ね」

我が子を励ましながら母親は、手に持った果実の皮を剥き始める。

そして、瑞々しく潤った果肉を差し出した。

「やめろ！」

その様子を目にした男は、子供が果実を頬張るのを止めようと必死

になり駆け出す。

だがそれは適わず。子供は美味しそうに果実を咀嚼し、飲み込んだ。

次の瞬間、子供が苦しそうに胸を押さえ、悶え始めた。

突然の出来事を前にし、パニックになる母親。その眼前で緑の植物に子供の体は覆われていく。

瞬時に生い茂った植物が消え去ると、そこには上半身が不気味に膨れ上がった灰色の人型の怪物が現れた。

悲鳴を上げる母親の腹部を、怪物の鋭い爪が貫く。そしてその身体はドシヤリと音をたて、力なく地面に倒れ込んだ。

その光景を目にした人々は、恐怖の叫びを口にしながら、我先にと逃げ出していく。が……

人の群れ目がけて、燃え盛る火球が飛来した。その爆発に巻き込まれ、人々は一瞬にして吹き飛ばされる。

ある者は爆散し、ある者は壁に激しく叩きつけられ、ある者は火炎に包まれ悶え狂い、絶命する。

男は見た。地平線を埋め尽くすほどの、人型の怪物の群れが近づいてくるのを。

そしてそれを先導するように歩く人物の姿を。

黒のスーツを身にまとったその人物は、男を一瞥しニタリと笑みを浮かべると、瞬時にその姿を変化させた。

一瞬にして、緑と白の軽装鎧のような装甲を身に纏ったその人物は、手にした弓を引き絞り、天へ向け光の矢を放つ。

放たれた光の矢は上空にて弾けると、逃げ惑う人々に向け容赦なく降り注いでいった。

思わず目を覆いたくなる、地獄のような光景。そんな中に佇む男、貴虎の頭上にも光の矢が降りてくる。

貴虎は矢を放った男を見据えながら絶叫した。

「光実!!」

目覚めた貴虎の瞳には、真っ白な天井と固定された電灯が映る。

「夢か……」

ベッドの上で体を起こして周囲を見渡す。部屋の中は必要最低限の家具が並んでおり、昨夜と全く変わらない様相であった。机の上にポツンと置かれた鉢植えも……

コンコンとドアをノックする音がした。

「貴虎？私だけど、開けてもらえらう？」

ドアの向こうから聞こえてきたのは、夕張の声だった。

貴虎はベッドから降りてドアを開く。

「おはよう、つてすごい汗じゃない。大丈夫？」

夕張に言われて自分の体に目を落とす。確かに彼女の言う通り、着ている寝間着には、汗が大きな染みを作っていた。

「大丈夫だ。それより何か用か？」

「あ、提督に言われて様子を見に来たの。なかなか起きてこないみたいだからって」

貴虎は部屋の中を振り返り時間を確認した。時刻は十一時になるうといった頃合いであった。

「出来れば連れて来るように、つて言われてたんだけど、体調が悪いなら無理しないで休んでて良いわよ」

「いや、問題ない。すぐに着替える。待つてくれ」

貴虎はドアを閉めると、壁際に掛けてあった軍服を手にとった。

貴虎の部屋は通称「別棟」と呼ばれる建物の中にあつた。

ここは当初、艦娘達の宿舎の一つとして割り当てられていた建物であつたが、基地の規模の縮小共に使用されなくなつていった。そしていつしか、歴代提督専用の建物として使われるようになり、今に至つている。もちろん提督の執務室兼私室は別棟の中に存在するが、提督は現在様々な設備が整えられている「本館」の作戦司令室に在るとの事だった。

貴虎と夕張は今、その本館の廊下を歩いていた。

「そういうえば、さつき私が部屋の前に着く直前に何か言つてなかつた？」

「私が？」

「ええ確か……ミツ、ザネ？そんな風に聞こえたんだけど。誰かの名

「前かしら？」

「……私の弟だ」

「ああ、なるほど。昨日話してた」

「合点がいったように夕張は、ポンと手を打ち合わせる。」

「ふふっ、そうやって口に出してしまっなんて、やっぱり家族が恋しいんじゃないの？」

「悪戯っぽい笑みを浮かべながら夕張は言う。」

「どうだろうな」

「え？」

「ここに来る前……最後に会った時に、派手に喧嘩をしてみましたな。弟とはそれつきりだ」

「あつ……ごめんなさい無神経な事言っちゃって」

「夕張は申し訳なさそうに顔を少し俯かせた。」

「気にするな。もう過ぎた話だしな」

「そう……仲直り、出来ると良いわね」

「……ああ」

二人は司令室のある上階へ続く階段を昇りはじめた。

## 【第六話】 part 2

「随分遅い目覚めだな」

司令室に入った貴虎に夷<sup>えびす</sup>提督は言う。

「申し訳ありません」

「いや、別に責めてるわけではない、気に病むな。それと夕張、ご苦労だった。下がっていいぞ」

「はい。失礼します」

夕張はサツと敬礼をし「それじゃあまたね」と貴虎に囁き、部屋を後にした。

そして提督は、軽く咳払いをすると話を始める。

「まず結果から言おう。例の果実、植物の痕跡は発見できていない」

提督の命令により早朝から、任務の無い艦娘及び一部基地職員による、島中の搜索が行われたのだった。

黒潮が実を拾ったと思われる浜辺を中心として、森林、施設周辺をはじめ様々な場所が徹底的に調べられた。

何処からか流されてきたという可能性も考慮し、海上まで搜索の手は伸びたが、それらしい物は発見出来なかった。

「無論、数時間程度の搜索で終わらせるつもりは無い。暫くの間は続けさせるつもりだ。それと昨日の果実だがな、横須賀鎮守府に送らせてもらった」

「横須賀にですか？」

「あそこの鎮守府には、様々な研究施設があるからな。分析してもらえば何か手掛かりが掴めるかもしれない」

「だとすると明日には分析が始められる、という事でしようか」

「いや、もっと早いさ。最速の特急便に届けさせたからな」

「特急便……？」

貴虎が怪訝そうな表情をした時、室内に備え付けられた電話が鳴りだした。

「俺だ……いや、予想通りだ。何せ島風に任せただけだからな。……ああ……何だと？」

電話を取った夷提督は、暫く話をした後、眉をひそめる。そして貴虎へ向け受話器を差し出した。

「ヨコの奴からだ。お前と直接話がしたいそうだ」

そう言われ貴虎は、受話器を手に取り耳に当てがう。

「もしもし」

《貴虎さんですか？僕です、横須賀です》

「何かあったのか？」

《それがですねえ……残念な話なんです、枯れていたんですよ》

「枯れていた？それは、もしか……」

《はい、送っていたいただいた例の果実、梱包されていた箱を開けてみたら、すっかり萎れちゃってまして。部位によっては、まるでドライフラワーかミイラか、って位にパリパリに干からびちゃってたんですよ》  
「そんな馬鹿な」

《お聞きしておきたいのですが、例の……ヘル、ヘイム？の果実ですか、一晩で萎れてしまう程にデリケートな物なんでしょうか？》

「いや、そんな事例は聞いたことが無い。植物自体も周囲の環境をものもしない程に繁殖力が強い。果実もそうだ。それが昨夜の状態から一日と経たずに枯れるなど……」

横須賀提督から聞かされた事実、貴虎は困惑していた。

一瞬、よく似た別の果実だったのでは？との考えが浮かんだが、軽くかぶりを振り自ら否定する。

確かにあの果実はヘルヘイムの果実だった。嫌になる程に見飽きた忌々しい果実。見間違えたなどという事はある得ない。触った感触、それを食そうとした天龍の魅了されたような表情、あらゆる要素がそう思わせる。

《そうですね。何故そうなったかわかりませんが、その原因も含めて調査は進めさせて頂きます。まあ、あんな状態でどこまで正確な調査ができるかはわかりませんが……っ痛たた》

「ん？どうかしたか？」

《あ、いえね。受け取った果実が枯れてたもんだから運んできた島風ちゃんに「寄り道でもしてきた？」なんて冗談めかして言ったら、思

いつきり脛を蹴られちやいまして……彼女は自分の速さに強い。プライドを持つてますからね。それを茶化すのはよくなかった。女性はうんと褒めないでダメですよねえ。貴虎さんも気を付けて下さい」  
ハハハと笑いながら、横須賀提督は軽い様子で言う。電話口の後ろから呆れた様子の子の女性の溜息が聞こえた。おそらく秘書艦の赤城のものだろう。

「そうか……まあ、覚えておこう」

「あ、すみませんが、夷提督が変わってもらえますか？少しお話しておきたい事がありますので」

「ああ」

そうして目の前の提督へ向け受話器を返す。

夷提督が電話をしている間、貴虎は昨晩から今朝に至るまでの不可解な出来事について、考えを巡らせていた。

浜辺にて見つかったと思われるヘルヘイムの果実。突如として現れたDJサガラとその証言。横須賀へと送られるまでに枯れてしまったいた果実の謎。全ては何らかの形で繋がっているように思われる。だが、その因果をハッキリとさせるための情報は限りなく少ない。

「貴虎」

と、通話を終えた提督が声を掛けてきた。我に返った貴虎は彼の方を見やる。

「果実の分析については、お前が聞いた通りだ。それと対策についてだが、万一に備え同封しておいた写真がある。ヨコを通して全司令部にそのデータのコピーを送るそうだ。それを見つけ次第報告するようにと命令を加えてな」

「そうですか」

「余計な混乱を避けるため果実本来の性質については、一部の者以外には秘匿するらしい。俺らにも無暗に他言するなどの通達があった」  
「確かにその方が良くありません」

「それと貴虎、何かあったらしいな」

「……え？」

提督の一言に貴虎は一瞬、戸惑いの表情を浮かべる。

「話したくないなら無理して話さなくても良いがな」

全てを見透かすかのような提督の洞察力に、若干たじろいだ貴虎であったが、少し迷った後に、昨夜のDJサガラとの出来事について話を始めた。信じがたい話ではあるうという思いもあったのだが、そのような危惧など今更だろうと判断して。

「……なるほどな」

黙して貴虎の話を聞いていた夷<sup>えびす</sup>提督は、一通り話が終わると腕組みをして軽く目を閉じた。

「そのサガラとかいう男の話、どこまで信用して良いかは分からないが、一考の価値はありそうだ」

「……疑わないのですか？私のお話を」

拍子抜けする程あっさりと言った貴虎の話を受け入れた提督に、貴虎は思わずそう口にしていた。

「普通なら信じがたい話かもしれんが……決め手はお前の目だ」

「目、ですか？」

「その目は嘘を言っている目じゃない。それに、冗談でそんな事を言う性格でも無いだろうしなお前は。加えて、妙な出来事には昔から慣れているんだ俺は」

「それならば」と貴虎が今後の対策について話し合おうとした時、提督は少量の書類の束を彼に差し出した。

「……と、以上がこの施設の設備の全てです。何かご質問は？」

「いや、大丈夫だ」

「そうですか。では私はこれで」

そう告げると作業着姿の職員は、その場を立ち去った。貴虎は一人、施設内を歩き出す。

「……旅行？」

「基地の施設を見て回る事の通称だ。本来なら艦娘の一人でも案内に



付けるんだが、生憎、今の時間は皆用事があつてな。まあ、気ままに一人旅というのも悪くないだろう」

「ですが我々の方でも、何かしらヘルヘイムについての対策を立てるべきでは？」

「今の状況で出来ることなんざ、たかが知れてる。焦る気持ちは分かんなくてもないが、気分の切り替えも必要だ」

と、半ば流されるように貴虎は、提督から書類を受け取った。そこには基地内の施設についての簡単な概要と、全体の見取図が記されていた。

そんなやり取りを経て、貴虎は一人で基地内の施設を見て回っていた。

既に訪れていた入渠施設の他、様々な装備等を開発する工廠、弾薬・燃料などの補給施設、武装や資材を集めた倉庫と改装施設、その他、日常生活に利用される施設など、それぞれ規模は小さいながらも、多様な物が揃っていた。

そして基地内には、艦娘以外の職員も相当数働いているのがわかった。

貴虎の事情については、多少なりとも知らされていたらしく、皆、快く案内や説明に応じてくれていた。

横須賀提督が言っていたように、彼らの中にも異世界から迷い込んだ人間がいるのかもしれない。

とは言え、それをこちらから尋ねるのも無粋だと思われたので、貴虎は敢えてそれを口にする事は無かった。

(ここが最後になるな)

貴虎がたどり着いた施設、そこは巨大な体育館のような様相をしている。

案内図によると、この施設は演習場らしい。作戦司令室のある本館や、宿舎等の施設からは大分離れた場所にあり、その周囲は、木々が鬱蒼と生い茂る森に囲まれていた。

演習場の中からは時折、砲撃音や訓練に励む艦娘の声がかんかに聞こえてくる。

「皆、頑張っているのだな」

そう呟きつつ、貴虎は演習場へと足を踏み入れた。

演習場内は砲撃訓練、航行訓練など、多岐に渡った訓練が行える設備が整えられており、それぞれの施設で艦娘達は、思い思いに訓練をこなしていた。先ほど司令室を後にした夕張の姿も、そこに見られた。

彼女は真剣な表情で砲撃訓練を行っており、後ろから様子を見ていた貴虎に気づく事もない程に集中していた。

そんな彼女を尻目に貴虎は、その場を後にし、更に施設内を巡っていった。

「ここは、弓道場か？」

その後、貴虎がやってきた施設は弓道場のようであった。

しかし、そこは通常の弓道場とは異なった構造になっていた。

その最大の違いは、射場からのまでの異様な距離、そして本来なら、砂などが敷き詰められているはずの的場に満たされた大量の水である。恐らくこれも深海棲艦との戦いに関係のあるものだと推察できたが、知識の乏しい貴虎には、その構造の理由が分からなかった。

と、足元へ目を向けると、何やら紙切れが落ちているのが目に入る。

貴虎は、かがんでそれを摘まみ上げ観察する。

「この形は、飛行機か？随分と簡略化されてはいるが」

周囲を見渡すと、用具置きと思われる棚が目に入る。どうやら飛行機を模したような紙切れは、そこから飛んできたらしい。貴虎は手にとった紙切れを、その棚へと置く。そこには多様な形の飛行機型の紙と一緒に、巻物のようなものが置かれていた。弓道場には似つかわしくないその物体に首を傾げつつ、貴虎はその場を後にした。

弓道場を出て歩いていると、廊下の向こうから一人の女性がやってくるのが見えた。

「あら、貴虎さん。おはようございます」

「おはようございます、鳳翔さん」

二人は頭を下げ挨拶を交わす。

「もしかして『旅行』ですか？」

「はい、提督にそうするよう命じられてまして。鳳翔さんは何を？」

「私は訓練です。この先の弓道場に」

「弓道場にですか。艦娘と弓道とは関わりの深いものなのですか？」

「そうですね、私みたいなタイプの空母の艦娘とは、切っても切れない関係です」

空母の艦娘と聞いて、貴虎の脳裏に横須賀で出会った赤城の姿が浮かぶ。彼女は正規空母の艦娘との事だった。

彼女の装いは思い返してみると、確かに弓道を嗜む者のそれであった。

「もし興味がおありでしたら、見ていけますか？」

と鳳翔が提案をしてきた。確かに空母の艦娘の訓練、弓道との関わりに気になる所はあったが……

「いえ、早いうちに施設を全て見て周りたいため、今日は遠慮させていただきます」

「そうですか」

「次の機会があれば是非。提督も鳳翔さんの技術を大変褒めてらしたので、実際に見られる時が来るのが楽しみです」

「提督が、ですか」

その言葉を聞いた時、鳳翔の顔が少々赤みを帯びたようにも見えた。が、彼女はすぐにかぶりを振り「では失礼します」と頭を下げる。そして、いそいそと弓道場へと向かっていった。

鳳翔の背を暫し見送った貴虎は、踵を返すと次の目的地へ向けて歩みだした。

「ここが最後の部屋か」

貴虎の目の前には、大きな金属製の扉があった。その傍には「武道場」と書かれた札が貼られている。

金属音を、ギギギと響かせながら開く扉を潜り抜け、足を踏み入れると、そこには広大な空間が広がっていた。

世界大会などを行うレベルの競技場と見まごうほどの部屋では

「オラオラー・ビビってんじゃねえぞ！もつと腰を入れて振れ！」

「は、はいっ！」

と、声を上げながら、木刀を構えた天龍が、吹雪に対し剣術の稽古らしきものを行っていた。

壁際には、同じく木刀を片手に持った陽炎と不知火が立っており、天龍と吹雪の様子を見ながら時折言葉を交わしているようであった。武道場の中央で吹雪は、おぼつかない手つきで以って木刀を打ち付ける。対して天龍は、それを容易くいなししていく。

「たああああ!!」

暫しの打ち合いの後、吹雪が雄叫びを上げ、大きく木刀を振り上げ、天龍へ向け突撃する。

力一杯に振り下ろされた木刀を天龍は、スツと横に半歩ずれて難なくかわす。

渾身の一撃を空ぶった吹雪は、大きくバランスを崩し、そのまま前方へとつんのめり、盛大な音と共に床へと倒れ込んでしまった。彼女の手から離れた木刀が、カラカラと音を立てて転がる。

「おいおい、そんなバレバレの動き、ガキンちよでも簡単に見切っちゃうぞ」

半ば呆れ気味に天龍が言う。

「す、すみません」

息を切らせながら吹雪は、フラフラと立ち上がる。

「夜戦じゃあ、敵と鼻っ面突き合わせて戦うことだってあるんだからな。気合い入れてけ！」

「は、はいー」

木刀を拾い上げると吹雪は、再度天龍に対し挑みかかっていた。その様子を見ていた陽炎が、不知火に話しかける。

「いくら夜戦は接近戦が多いって言っても、毎度毎度剣術の稽古ってのもねえ」

「剣術は相手の動きを読み、回避・攻撃に転じる適切なタイミングを図る良い訓練だと思えます。真面目に取り組んで損は無いかと」

目線を正面に向けたまま、小声で不知火は陽炎に応じる。

「確かにそうかもしれないけど、刀を持って出撃するの天龍さんぐらいじゃない。私たち駆逐艦は、そんなの持つてく余裕なんて無いわ

よ」

「砲が壊れた時に、それを使って殴りつけるのに役立ちます」

表情を変えずに不知火は、さらりと言う。その様子は冗談を言っているようには見えない。

「不知火って、大体は物静かで理性的な感じなのに、妙な所で何というか、バイオレンスよね」

短く溜息を吐きつつ陽炎が言った。と、その時、木刀が床を転がる音が再び響く。

その方へ目を向けると、吹雪が先程よりも盛大に、すっ転んでいる様子が見えた。

「うう……」

「まあ、こんなもんか。さつきよりはマシになったけど、まだまだだな」

天龍は担ぐように肩に木刀を乗せ、トントンと上下させる。そして、クルリと回れ右をすると、木刀の切っ先を陽炎たちの方へ向けた。「次はお前らの番だ。チマチマ一人ずつ相手するのは面倒だ、二人一緒に相手してやる。かかってきな!」

天龍の言葉を受けて、陽炎と不知火は顔を見合わせる。

「ああ言ってるけど、どうする?」

「お言葉に甘えさせていただきますましょう」

「フツツ、そうね。遠慮せず、キツイの一発打ち込んでやるわ」

「陽炎も、あまり人の事は言えませんか」

「知らなかった? 私、やるときは思いつきりやる女なのよ」

「よく存じてます」

言いながら木刀を構えると二人は、余裕の笑みを浮かべている天龍へ向け飛びかかっていった。

「痛たたた……」

おぼつかない足取りで歩いてくる吹雪に対し、貴虎は声をかける。

「精が出るな」

「た、貴虎さん!?!」

目の前にいた貴虎の存在に初めて気づいた吹雪は、狼狽した様子で

あった。

「も、もしかして見てたんですか？」

「ああ」

「そ、そうですか。恥ずかしい所を見られちゃいましたね」

顔を赤くしながら、照れ隠しするかのように笑う吹雪。

「恥じる必要はない。懸命に訓練するのは良いことだ。それと、艦娘も武芸に勤しむのだな、勉強になった」

「アハハ、これは、ちよつと変わった訓練なんですけどね。普段はもつと実戦的な、砲撃とか航行の訓練をしています」

「そうか。だが、これなら私にも出来そうだ。すまないが、それを貸してもらえるか？」

貴虎は、吹雪の手にした木刀を指差す。

「これですか？良いですけど」

吹雪から差し出された木刀を貴虎は受け取り

(少し体を動かしてみるのも悪くない)

貴虎は、両手で木刀を構えると、手慣れた動きで素振りを開始した。

「はあああつー！」

陽炎が、袈裟斬りに木刀を振り下ろす。天龍は木刀でそれを軽く受け止めつつ、滑らすように横へと陽炎の太刀筋を受け流す。

それによりよろめいた陽炎に対し、天龍が軽く足払いをかける。足を引つ掛けられる寸前に、陽炎は小さく跳ね、何とかそれをかわすが、着地の瞬間に、ドンと背中を押されてしまう。バランスを崩した陽炎は、そのまま倒れこみ、床をゴロゴロと転がっていった。

「はっー！」

天龍が陽炎を倒した瞬間を見計らい、不知火は天龍の背中めがけて、木刀を思いつき叩き付けようとした。

「来ると思つたぜ」

ニヤリと笑みを浮かべ、ボソリと呟いた天龍は、陽炎の背中を押し、勢いそのままに、自らの体を床に投げ出す。

陽炎の後に続くように、天龍の体が床を転がる。天龍に向け放たれた不知火の一撃は、空を切り、力一杯に振られた木刀が床を激しく打

ち付ける。その衝撃に手が痺れた不知火は、思わず木刀を取り落としそうになる。しかし、どうにかそれに耐え、不知火は反撃の体制を整えようとした。次の瞬間、不知火の眼前に木刀の切っ先が突きつけられた。視線を上げるとそこには、したり顔の天龍が立ちはだかっていた。

「参りました」

不知火は木刀を床に置き、両手を挙げ降参の意思を示す。

「へっ、なかなかやるな。陽炎を囷にして突っ込ませて、不知火が俺の隙を付く。良いコンビネーションだ」

「お見通しでしたか」

「まあな、俺がお前らと同じ立場ならそうするかもしれないしな」

「あく痛っ。ちよつとは手加減してくれても良いんじゃないですか？

天龍さんの方が、剣の実力は上なんですから」

後ろ手に背中をさすりながら、陽炎が近づいてくる。

「何言ってるんだよ。強い奴に全力で向かって倒すのが、戦いの醍醐味じゃねえか。そんな考え甘い甘い」

そう言って得意気に笑う天龍。対して陽炎と不知火は、軽く肩をすくめていた。

と、天龍の耳元に微かな風切り音と「わあゝ」という吹雪の感嘆が聞こえてきた。

「……………ん？」

天龍は、その方へ視線を向けた。

腰を落とした姿勢から、両手で構えた木刀を逆袈裟に切り上げる。そして勢いを殺す事なく、即座に刀を返し横一線になぎ払いをかける。振り抜かれた刀はピタリと止まり、静止画のごとく微動だにしない。

刀を正面に構えなおす。目にも止まらぬ速さで、前方に鋭い突きが繰り出される。そして、獲物に突き刺さった刀を引き抜くような動作を以て体をひねらせ、後方へ向け回転切りを放つ。正面へ向き直って更に切り下ろし、真横への切り払い、右下から左上へ突き上げるような、斬撃のコンビネーションが流れるように決まる。

貴虎は振り上げた木刀を下ろし、軽く息を吐き出す。

久々に剣を手にしたにも関わらず、以前と全く変わりなく体が動く事に、貴虎は軽く安堵した。

「ありがとう、良い運動になった」

借り受けた木刀を、吹雪の前に差し出す。

「……凄い、凄いです貴虎さん！私、すっかり見とれちゃいました！あんなカッコイイ剣術見たの初めてです！」

両手をギョツと握り締めた吹雪は、大変興奮した様子であった。

「いや、あの程度、大した事では無い」

「そんだけ良い太刀筋を見せつけといて、謙遜してんじゃねえよ。逆にイヤミに聞こえるぜ」

そう言いつつ天龍が近づいてきた。続いてくる陽炎と不知火は、どこか驚いた表情を浮かべている。

「貴虎、お前剣術やってたのか？並の腕前でできる動きじゃねえぞあれは」

天龍が訝しむように尋ねてくる。

「……ただの護身術の類だ」

「護身術ねえ、それにしちや、随分と戦い馴れた感じに見えたけどよ……」

顎に手を当てて天龍は、貴虎の体を品定めをするかの様に、首を下に動かしてジロジロと見やる。

「ま、いいか。それよりも……」

と、言うとき天龍は、目を輝かせながら木刀を貴虎の前に突き出した。「オレと手合わせしようぜ！あんな剣舞見せられちゃあ、体が疼いたまんねえー！」

「……いや、それは」

「なんだよ、オレじゃ相手にならないってか？」

「そういうわけでは無いのだが……」

貴虎が木刀を振ったのは、あくまで軽い運動と、体の調子を確認するためのものだった。

そして、異常は全く無いことがわかったので、手合わせを断る道理



はなかったのだが

「……」

貴虎は天龍の問いかけに対し答える事も無く、ただ黙してしまっていた。

「天龍さん、貴虎さんは病み上がりです。無理を強いるのは良くないかと」

天龍の申し出を洩り沈黙する貴虎の様子を見て、そういう理由だと察したのか不知火が声をかけた。

「え〜大丈夫だろ、あんなだけの動きが出来てたんだから。ちよつとだけでいいから付き合ってくれよ〜、な？」

なおも食い下がり懇願する天龍。それに対し、貴虎が口を開きかけた瞬間

「なくに天龍ちゃん、随分と楽しそうねえ」

後ろの方から声が聞こえてきた。貴虎が振り返ると、入口付近に龍田の姿があった。

龍田はゆつくりと、天龍の元へ近づいて来る。その顔には、にこやかな笑みが浮かんでいたが、彼女の纏っている雰囲気は、穏やかとは言い難いものであった。その異様さを感じ取った吹雪と陽炎は、思わず身震いをした。

傍目には、冷静な表情でそれを見つめている様子の不知火、彼女の頬に一筋の汗が流れ落ちる。

貴虎と天龍は、龍田の様子に特に感じる事も無いのか、平然としていた。

「龍田からも言ってくれよ、貴虎にさ。オレに付き合ってくれって」  
その言葉を聞いた龍田の眉が、ピクツと揺れた。

「ダメよお、そろそろお昼の時間なんだから」  
龍田は笑顔でそう言うのと、自らの腕を天龍の腕に絡ませる。

「さあ食堂に行きましょうね〜」

そのまま天龍を引きずるようにして、早足で歩きだした。

「ちよ、ちよつと待てよ。そんなに引つ張るな！あ、貴虎！今度はちやんと付き合えよ！絶対だからな！って痛ツ！そんなに強く絞めるな

！」

と、言い残しながら天龍は、龍田に連れられて行ってしまった。そして、入れ替わるように、訓練を終えた夕張が武道場へと入ってくる。

「なんか、龍田から異様な空気が漂っていたように見えただけど、何かあった？」

夕張の問いに、吹雪と陽炎は身震いをし、不知火は無言で目を伏せ、貴虎は

「さあ、何だったのだろうか」

と不思議そうな表情をしていたのだった。

【第七話】 part 1

目の前のお盆の上に置かれた、陶器を手取る。その器の中には鰹と昆布の出汁香るつゆが、程よく満たされていた。

せいろの上にとっぷりと盛られた蕎麦を箸でつかみ、半分程度つゆに浸すと一息にそれを啜る。

そして隣の皿に盛られた、ほのかに湯気を立てている揚げたての海老天を、軽くつゆに浸し口へと運ぶ。

衣がサクツと小気味よい音を奏で、出汁と海老の香りが、口いっぱいに広がった。

「——っ！美味しいッ！」

感嘆のあまり、ギョツと閉じていた目を見開き、幸せいっぱいといった表情を浮かべ、夕張は声をあげた。

訓練を終えた一同は、昼食のために食堂へとやってきていた。

「夕張さんって本当に蕎麦が好きですね。週に何度も食べてるみたいですけど、飽きないんですか？」

夕張の隣に座る陽炎が尋ねる。そんな彼女の昼食は、シーフードカレーであった。

「ええ全然！食べ方のバリエーションが豊富で良いのよ、蕎麦って。夏はこうしてキュツと水で締めたコシのある麺が堪らなく美味しく、冬は熱々のつゆに揚げたてのかき揚げを浸したりとか、海老天をのせて食べるのが最高だわ！お肉や卵、山菜、とろろ、何にでも合って組み合わせは無限大！色々試して楽しめる！ホント素晴らしいわ！」

蕎麦の魅力を熱く語る夕張。対して、話しかけた陽炎は「アハハ……」と引き気味に乾いた笑い声を出していた。

夕張の向かいに座る貴虎も、彼女の勧めで昼食は蕎麦を注文していた。

特に蕎麦好きというわけではない貴虎ではあったが、その味は大変美味に感じられた。さすがに毎日とまではいかないが、いくらでも食べられそうな気がした。夕張が熱心に語るだけのことはあると思わ

れた。

「はい、天龍ちゃん、あ〜ん」

貴虎達のいる所から、少し離れた席より声がする。

そちらへ視線を向けると、一足先に食堂へ来ていた天龍と龍田が食事をしていた。

龍田は箸で掴んだ鶏の竜田揚げを、向かいの天龍へ差し出している。

「やめろって、ガキじゃないんだから！自分で取るよ！」

天龍は龍田の目の前の皿から、サツと竜田揚げを掴み取ると、自らの口へ放り込んだ。

「もう天龍ちゃんったら、恥ずかしがっちゃって、カワイイ〜！」

「うるへえ〜！」

竜田揚げを頬張ったまま言うと、茶碗に盛られた白飯をガツガツとかつこんだ。

そんな天龍の様子を見つめる龍田は、ご満悦といった表情を浮かべていた。

二人の席からは、他者が近寄りがたい雰囲気醸し出されており、実際その周囲には空席が目立っていた。

「あの二人は、随分と仲が良いのだな」

「いや、あれは仲が良いという次元を超えているような……」

「龍田さんは、天龍さんの事となると何をするかわかりませんし……」

その光景を何の気なしに見る貴虎とは対照に、夕張や陽炎を始めとした艦娘達は、複雑そうな表情をしていた。

「見せつけてくれちゃってるね〜、あのお二人さんは」

と、言いつつ近づいてくる艦娘がいた。川内である。その少し後ろから、神通と那珂も付いてきていた。

「……、空いてるっ！」

貴虎達が領いたのを確認すると三人は席に着き、昼食の乗せられたお盆を置くと

「も〜那珂ちゃんおなかペコペコ。いっただつきま〜す！」  
「いただきます」

「いただきまーす！」

三者三様に言葉を発し、食事を取りはじめた。

そんな三人の様子を見ていた吹雪が、辺りをキョロキョロと見渡し、首を傾げた。

「皆さんは、四人で哨戒任務に行かれてたんですよね？ 叢雲はどうしたんですか？」

確かに、一緒に出撃したはずの叢雲の姿は、食堂内のどこにも見当たらなかった。

「ん？ ああ、あの子だったら、自主トレをしてから来るってさ。熱心だよねホント」

「自主トレですか？ 皆さんと一緒に帰投したばかりですよ？ どうして……」

「まあそれは、神通のせいだよね」

「私ですか？」

神通は箸を止めて、川内の方を見やる。

「だってさ、旗艦のあんたが激しい航行するからさ」

「どういう事？」

一通り食事を終えた夕張が会話に加わる。

「いや、駆逐艦の娘が編成に加わるからさ、いつもの私達の航行よりも、ペース落として行くこうとしたんだよ。私達の動きに慣れてない娘には、負担が大きいつて思ってた。そしたら叢雲が「遠慮はいらないわ！」なんて言うもんだから、神通が本気出しちゃってね。案の定、叢雲は何度も置いてかれそうになったり、水面を転げまわったり、なんて有様で大変な目にあってたんだよ」

「あくそれは……いくら叢雲がそう言っても、真に受けちゃだめよ神通」

「そうそう、神通は変な所でバカ正直だから」

苦笑交じりに言う夕張と川内。それに対し神通は、若干の弱々しきを感じさせる声色で抗議の声をあげる。

「そ、そんな、真に受けてなんかいませんよ。ちゃんと加減はさせてもらいました」

「あれで？」

「はい。ちゃんと普段の九割五分に加減しておきました」

「きゅ、九割五分って……それ加減って言うの？」

と若干引き気味の夕張。

「叢雲さんの要望も、最大限考慮してそうしたのですが、何か間違っていたでしょうか？」

きよとんとした表情で言う神通。それを見た川内は、やれやれと  
いった具合で肩をすくめた。

「ふふふ、今朝の哨戒任務は、上手くいったみたいですね」

微笑混じりの穏やかな声が聞こえてくる。

一同がその声の方へ目を向けると、そこには鳳翔の姿があった。

彼女は大きめのお盆を両手で持っている。「失礼しますね」と前置  
きをして彼女は、テーブルの上にお盆を乗せた。

そこには、人数分の冷茶と饅頭が並べられている。

冷茶は透明な茶器に注がれており、見ているだけで涼しげな気分  
なってくるような風情があった。

「よろしければ、皆さん召し上がって下さい」

「わあ、ありがとうございます！」

「いただきます」

「ありがと、鳳翔さん！」

その場にいた駆逐艦娘達、吹雪、不知火、陽炎が真っ先に菓子へと  
手を伸ばした。年頃の少女だけあってか、甘いものには目がない様子  
であった。

「鳳翔さんは、お昼ごはん食べないんですか？」

「私は訓練の前に軽く済ませましたので」

夕張の問いに答え「あのお二人には後で渡しておきましょう」と天  
龍、龍田の方へ視線を向けた後で、鳳翔もまた饅頭とお茶へ手を伸ば  
した。

昼食を終えた者達は談笑をしつつ、ティータイムを満喫している。

その雰囲気は貴虎も、穏やかな気持ちで浸っていた。

午前中に様々な施設を周っていた時にもそうであったが、不思議と

この基地には、よそ者である彼に疎外感を感じさせるような空気というものが、無いように思われた。

お茶を啜りつつ鳳翔は、皆が談笑する光景を愛おしむように見ている。すると

「この基地も随分と様変わりしましたね」

と、神通が言葉を漏らした。

「ええ、本当に。神通さんが前に所属していた時には、想像もつかなかったでしょう?」

「はい。以前は何処にいても、緊張した空気に包まれていましたので」「以前は?」

二人の会話を耳にした貴虎が思わず口にした。

「あ、はい。前任の提督は、風紀に厳しい方でしたので……」

貴虎の呟きに対し、神通が律儀に答える。

それを聞いた貴虎は、鳳翔が今の提督は着任して一年程だと言っていたのを思い出す。

思案顔の貴虎を見た鳳翔は、軽く微笑むと

「興味がおありなら、お話致しましょうか?」

と声をかけてきた。

「ええ、お願いします」

頷く貴虎。

「あつ、それ私も聞きたい!」

と、夕張が興味津々といった様子で話に加わってきた。

「何故だ、夕張はこの基地の者だろう?」

貴虎が怪訝な表情で夕張に問う。

「あ、そういえば貴虎は知らないのか。私がこの基地に配属になったのはね、今の提督が着任した後だったの。だからその前の基地の様子ってよく分からないのよ。みんなから話を聞いた事もないし」

「なるほどな」

「あの、私も聞かせてほしいです」

吹雪がおずおずと手を上げる。

「私も夕張さんと着任時期は、ほぼ同じでしたので」

「わかりました。では少し長くなりますが……」

と前置きをして鳳翔は語り出した。

「約一年と数カ月前、この基地にいた前任の提督は、先程も言いましたが非常に厳しい方でした」

激しく駆動する足元の主機が海水をかき分け、水しぶきを巻き上げる。

最大船速で洋上を駆ける叢雲は、遠方に浮かぶ的へと狙いを定め、背負った艦装から伸びるアームの先に装着されている連装砲を撃つ。放たれた砲弾は、初弾が的を飛び越え着水、次弾が的の手前に落ち、水柱を作りだす。

夾叉きょうさ——撃った砲弾が目標を挟み込む——に成功した。

その結果を元に狙いを微調整、精度を上げた一撃を撃ち込む。同時に叢雲は、急速に方向転換を開始する。

速度は維持したままで。

横目での的への着弾を確認しつつ、次の目標へ意識を向けようとした瞬間、強烈な遠心力が叢雲の身体に働き、そのバランスを大きく崩した。必死で体勢を立て直そうと試みるも、抗うことは敵わず、彼女の身体は転倒し、着水。

猛スピードを保ったまま水面に叩きつけられた叢雲は、水切りの石のように何度も何度も跳ねた後に停止した。

水上に仰向けに倒れ込んだ叢雲の頬を、小さな波がパシヤリと打ちつける。艦装により働く浮力のおかげで、そんな姿勢であつても艦娘の身体は沈むことは無い。そのまま休むことも可能であったが、叢雲は疲れた身体に鞭打って、ゆっくりと立ち上がった。

口の中に入った海水をペツと吐き出す。塩辛さが口の中に溢れかえっていたが、不快ではなかった。むしろ、どこか心地よさを感じさせる程だった。

こんなにも一心不乱に訓練に励んだのはいつ以来だろう、と叢雲は考え記憶を辿る。そして……



「最悪……」と呟いた。

とにかく気に食わない男だった。

「何処が？」と言われると困る。あまりに多すぎて。

少なくとも自分の、仲間の命を預けるに足る人物だとは思えなかった。

第一印象から上官として敬える人物と感じられなかった。

「貴様、態度がなつとらんな」

そして、それがその男が自分に放った第一声だった。

「アンタこそ艦隊司令官としてなつてないわね。それでアタシらを指揮していけると思ってるの？」

叢雲は間髪入れずに、男に対し言葉を返した。

艦娘は通常の軍隊とは異なつた設備、指揮系統にて運用される。それは深海棲艦と戦うために生まれた艦娘の持つ特性ゆえであり、風紀や規則などの面でも、違っている点が多岐に渡った。

その一例として、言葉遣いや生活態度が挙げられる。これらは通常の軍であれば、定められた規範のもと、厳しく指導されるものである。うが、艦娘達に対しては、任務に差し支えの無い範囲であれば、特に咎められることはなかった。事実、艦娘には常に酒をあおっているような者や、どんな時もネットスラングなどを、恒常的に口にする者などがいたりする。

そもそも艦娘とは、誰にでもなれるものではない。艦娘になるために必要な資質や、適性が無ければならないのである。そして、それを持つ者は非常に少ない。

適性が無ければ、艦装を身に付けようとも、まともに動かすことは出来ず、攻撃を放つたとしても、深海棲艦には傷一つ付けることは不可能なのだ。

それ故に艦娘は、性格や言動などよりも、資質が最優先にされ選ばれる。

——もつとも、人格的に致命的レベルの問題がある人間であつても、選抜されるなどという事は流石に無いのだが——

本来なら軍隊生活に適さない者であっても、艦娘になれる。叢雲などは正にその類であった。

彼女らを指揮する提督もそれを理解し、多少の無礼な振る舞いがあるろうとも笑って許せるような、艦娘運用に適した資質を持つ人間がなるのが一般的であった。

これは艦娘運用の総司令部である横須賀鎮守府の提督の裁量が、大きく関わっているらしいと言われている。

だが、かつて叢雲らを指揮していた提督は違っていた。

国の海軍本部から転属してきたその男は、基地に所属する艦娘達を厳しい規則で縛り上げた。

提督に対する態度、作戦行動中の振舞い、言葉遣いはもちろんのこと、非番時の生活態度、必要以上に大勢で集まり話すことの禁止、その他諸々。その時の艦娘達にとって、自由は皆無に等しかった。

前任提督のやり方は、風紀を正す、というよりも何かしらの私怨でも混じっているのでは？と思わせる程。

実際、その男の艦娘に対する接し方は、事務的で冷徹、とても信頼、愛情のようなものは感じられなかった。

慣例とのあまりの違いに、横須賀鎮守府に対し抗議の声を上げる者もいたが、返答らしい返答は無かった。

頑として方針を曲げないどころか、反抗する者には罰則まで容赦無く課してくるその提督の姿勢に、反発をしていた艦娘達は、やがて諦めを覚え出す。そして、渋々ながらも彼のやり方に従っていった。

だが叢雲は違った。

初対面時に提督へ辛辣な言葉を浴びせた叢雲は、その怒りを買ひ、戦闘に関する全ての事柄に関わる事を禁じられる。

実戦・演習に参加することは勿論、遠征・訓練への参加、艀装・兵装に触れることすら禁止された。

その間彼女に与えられた仕事は、基地内の清掃などをはじめとした雑用などだ。休む暇も殆どない程大量の。

叢雲が態度を改め謝罪すれば、彼もその禁止令を撤回したかもしれなかったが、叢雲は決して折れることは無かった。

そんな彼女を見かねた他の艦娘達が、説得をする事もあった。

意地を張ってもしょうがない。シヤクなのは皆同じ。このままじゃ叢雲が損をするだけだ。賢く振舞え、大人になれ……と。

だが叢雲は、それをも拒否し続ける。

確かに自分の態度、振舞いは「子供」っぽいだろう。そしてそれは、戦場に赴く者として失格なのかもしれない。

自分でもわかる。だが理不尽な事をする人間に、およそ信頼できない、してくれない人間に黙って従うのが「大人」なのか？戦場に身を置く者が、命を預けるに値しないとと思う人間に従えるのか？

嫌悪感と疑念を抱きつつ叢雲は、いけ好かない男の押し付ける雑務を淡々とこなし続けた。心と体は常に疲弊していたが、辛そうな表情を見せると、男は満足げな笑みを浮かべる時があったので、努めて平静に、時には余裕の笑みさえも浮かべつつ。

そんな苦難の日々を叢雲は過ごしてきた。

自分が知る限り最悪の人間であった、前任の提督がいなくなった日。

叢雲は男の目を盗んで密かに手入れしていた愛用の艦装を装着し、海へ飛び出した。そして、朝から休まず気を失うまで、一心不乱に訓練を続けた。その時の、海風と水しぶきが顔を打ち付ける何ともいえない快感は、今でもハッキリ覚えている。

叢雲は少しずつ主機の回転数を上げていく。徐々に速度を増し、洋上を駆けだす。

あの悪夢のような日々はもう過ぎ去った。今はひたすらに、自分を高めることに集中できる。

更に、自分は限られた期間ではあるが横須賀の精鋭、川内型の、かの有名な神通と同じ部隊に配属されたのだ。このチャンスは絶対に無駄にしない。

胸に熱い思いをたぎらせながら、叢雲は訓練を再開した。

「そんなことが……私、何も知らなくて……」

友人の過去を始めて知った吹雪。ショックを隠し切れない様子で彼女は俯く。

「別にあなたが気に病むことないのよ。私達も話してなかったんだし。ていうか、そもそも思い出す気にならなかったから、前の司令がいた時のこと」

陽炎が言う。

「でもさ、不知火とかは平気だったんじゃない？余計な事とか冗談とかあまり言わないし、仕事はテキパキこなすし、軍人向きな性格してるし。実際、結構気に入られてたっぽいじゃん？」

「そうでしょうか？」

「絶対そうだって」

陽炎の声に対し、表情一つ変えることなく答え、不知火は茶を一口飲む。

「ですが、陽炎と同様に私も前任司令の事は、あまり思い出したくはありません」

「どうしてよ？」

「あの方は、陽炎達に優しくありませんでしたから」

ポツリと告げられた不知火の言葉に対して、目をパチクリとさせた陽炎だったが、その発言の意味を理解すると、満面の笑みを浮かべ、不知火の頭を抱えるように抱き寄せ撫で始めた。

「苦しいです、陽炎」

そう言う不知火であったが、その表情に不快な思いをしている様子は感じられなかった。

「でも、前任の提督はどうしてこの基地を去ったんですか？」

夕張が鳳翔に問いかけた。鳳翔は一呼吸おいてゆっくりと口を開く。

「事故があつたんです」

「事故？」

「それは一体どういう？」

貴虎が言う。

「それは私がお話しした方が良いかもしれませんね」

神通が口を開いた。

「あれは私か他の方々と一緒に、輸送船の護衛任務に就いていた時でした……」

その日、ここ伊豆諸島の基地に所属していた神通は、とある輸送船の護衛任務を担当する事となった。

輸送船は横須賀へと向かう船であり、横須賀鎮守府に出向く予定であった前任提督も乗船していた。

当時の日本近海は、今よりも深海棲艦の動きが活発であり、制海権内の護衛任務といえども油断はならなかった。

護衛に就く艦娘の数も六人が基本、全員が綿密な計画と確実な指揮の下、信頼をもって行われなければならない。

提督の作戦立案と旗艦への伝達、旗艦から随伴の艦娘へのスムーズな意思疎通を図るために必要な事は、特に念入りに行われるのが常識である。

が、その時の前任提督はそれをしなかった。

いつもと異なり部下の艦娘達が全員、目の届く範囲にいるという事で、全ての指揮を自らが執り行おうとしたのだ。

無論艦娘達は異議を唱えたが、男はそれを聞き入れず、旗艦すらも任命せず、護衛任務の詳細までも艦娘達に教えようとしなかった。ただ一言「貴様らは黙って私に従えば良いのだ！」とだけ口にして。

その後、指揮のため甲板上に立つ提督から無線で下される指示に従いつつ、艦娘達は護衛航行を開始した。

そして出港して数時間後……輸送船は深海棲艦の襲撃を受けた。

輸送船の航路に立ちふさがるように、数隻の軽巡洋艦と駆逐艦が展開。

前任提督は、護衛艦全員でこれらを排除するように、と艦娘達に命じた。

万一に備え輸送船の傍らに誰か残すべき、と意見具申した者もいたが、それは聞き入れられなかった。

「ソナー及びレーダーには、目の前の敵艦以外の反応は無いとの報告を艦橋より受けている。一刻も早く、忌々しい眼前の脅威を排除せ

よ。従わない者は厳罰に処す」

その言葉に艦娘達は従わざるを得ず、全員が揃って敵艦の迎撃に向かう事となる。

通常の船舶に搭載されている電探の類は、深海棲艦相手には効果が薄い。その事は周知の事実のはずであったが、前任の提督は、それを全く意に介することは無かった。海軍出身の提督には、自らの経験、考えを過信しすぎるきらいがあった。この判断にもそれは如実に表れていた。そしてその慢心は、深海棲艦に付け入る隙を十分に与えてしまったのだ。

輸送船に立ちふさがった深海棲艦の艦隊、それはいわば陽動部隊であった。

不完全な索敵網と、手薄になった守りを悠々と潜り抜け、潜んでいた敵の潜水艦が接近。輸送船へ魚雷を発射した。

無論、突然の攻撃を回避しきれるはずも無く、数本の魚雷が命中。輸送船は航行不能に陥ってしまったのである。

更には、魚雷着弾の衝撃で、甲板上にて指揮をとっていた提督が、海へと投げ出されてしまう。

潜水艦の襲撃、提督の水没、それによる指揮系統の混乱。不測の事態が重なったことにより、最悪の状況に叩き込まれてしまった艦娘達。敵艦隊の迎撃に向かった艦娘の中には、輸送船の護衛に戻ろうとした者もいた。

しかし戦場と化した洋上は、艦娘達の状況報告や、輸送船からの被害報告などの無線通信が雑多に入り乱れ、お互いの状況、位置関係、敵艦の動き、どれも誰一人として正確に情報を把握できてはいなかった。

未だかつて経験したことのないイレギュラーな状況に、艦娘達は、ただ翻弄されるばかり。

艦隊全滅という最悪の事態を、誰もが思い浮かべだした。その時だった。

「神通、お前が旗艦を務めるんだ」

「輸送船の艦橋から無線が入ってきました。続けて戦況、被害状況、対

応策などの情報が私達に知らされました。それを受けて私達は冷静さを取り戻し、艦隊を二分、敵艦隊及び潜水艦部隊の撃沈に成功したのです。幸いにも私を含めた艦娘全員に大きな損害は無く、海に投げ出された前任提督も救助され、一命を取りとめました。そして、派遣されてきた横須賀からの救援部隊と合流し、無事に鎮守府まで到着してきましたんです」

「あの、神通さん。その指示を出したのは誰だったんですか？その時の司令は、海に落ちてしまったんじゃないやあ……」

吹雪の疑問に、神通は微笑を浮かべて答えた。

「それは、今この基地で私達を指揮してくださっている夷<sup>えいひす</sup>提督です」「司令官が!？」

「どういう事だ？輸送船に、提督が二人も存在していたというのは……」

「前任の提督の横須賀行き理由が、夷提督を横須賀まで連れて行く、というものだったのです。厳密に言うとおの方は、その時まで提督ではなかったのですが」

「提督ではなかった？」

「貴虎さん、あなたと同じように、今の提督も漂流者だったのです」

鳳翔が言った。

先の話の出来事の数ヶ月前、島の海岸線を散歩していた鳳翔は、浜辺に倒れこんでいる男の姿を発見した。

その男の体には銃創、火傷などの酷い怪我が刻まれており、意識は不明。治療に当たった医師曰く、生きてるのが不思議な状態とのことであった。

基本的に艦娘やその部隊が、海難事故被害者、漂流者などを保護した場合、身元を確認の上、しかるべき所まで送り返すのが原則となっている。

また、先のケースのように、保護された者の身元特定が困難、移送する事が危険を伴うと判断された場合、泊地・基地などの施設で治療を施す。

そして、移送可能の判断された場合、最も規模の大きな最寄りの鎮

守府へ傷病者は送られ、治療中に知り得た機密等を他言しないよう、誓約書へサインさせた上で、元の生活へと戻っていく、というのが一般的な流れであった。

治療の補助や身の回りの世話は、担当職員以外にも、救命処置等の学習の一環として艦娘が行う事があり、その場での彼女らとのやり取りについても、厳しい箝口令が敷かれる事となる。ちなみに、この時は鳳翔や神通が世話を担当する機会が多かった。

やがて車椅子を用いれば動けるほどに回復した男は、横須賀鎮守府へと移送される事となる。その時に、件の事態に遭遇したというわけであった。

「ちよつと待つてー！ってことは提督って民間人だったのよね？その指示に従ったっていうの!？」

夕張が信じられない、といった表情で言う。

「あ、その、それは……下された指示が、非常に理に適っていると思われしましたし、何より……」

「……何より？」

「安心感を感じたんです。その声に」

「いや、だからって……ねえ。実は軍の関係者だった、とかだったら納得いくけど」

「実際、そのの所はわかりません。提督の経歴について、私達は何も知らされていませんので」

と鳳翔。

「事実としてわかっているのは、艦隊の危機を救ったという功績が、横須賀の提督に認められたのと、前任の提督が艦隊指揮を続行するのが不可能と判断されたために、入れ替わりでこの基地へ今の提督が配属となったという事だけです」

「何だか、今の貴虎と状況が凄く似てるのね……」

「そうだな、私も驚いたよ」

夕張の言葉に、貴虎は相槌をうつ。

「提督って凄い人だったんだなく。那珂ちゃん憧れちゃうかも！」

と、今まで話に加わっていなかった那珂が、目を輝かせながら言う。



「へえ、那珂がそんな風に興味を示すなんて珍しいじゃん。武勇伝みたいな話に関心あったんだ」

と川内。

「だって、突然の大舞台で大成功して、スカウトされて、大役に大抜擢なんて、みんなが憧れるアイドルのシンデレラストーリーみたいでしょ？那珂ちゃん、そういうのに憧れちゃう！そうやって華々しくデビューして、スターの階段を駆け上がりたくない」

「って、そういう理由!?提督は、アイドルでもシンデレラでもないっての！」

と、川内は那珂の額を、軽く指で弾いた。

「痛っ！も〜！顔はやめてっば〜！」

那珂は涙目で、川内の肩をポカポカと叩く。

その様子を見て周りの者達は、思わず吹き出していた。楽し気な笑い声が周囲を包み込む。

貴虎もその光景に、思わず笑みをこぼす。

すると、食堂の入り口から声が聞こえてきた。

「あつ、おったおった！貴虎はくん！龍田はくん！司令はんが執務室で呼んどったで〜！」

黒潮が、大きく手を振りながら声をかけてきた。

「あら〜もうそんな時間なの？ざんね〜ん」

天龍と戯れていた龍田は、そう言うのと立ち上がり

「ごめんね天龍ちゃん。午後のお仕事まっっちゃうから行ってくるわ」

と、名残惜しそうに天龍に別れを告げ、貴虎のもとへとやってくる。

「貴虎さん、午後からは提督業務の講習よ。一緒に提督の所に行きましょ〜」

「ああ、わかった。では失礼する」

同席の艦娘達に一例をみると、龍田に連れられ貴虎は食堂を後にした。

入れ替わるように、二人を呼びにきた黒潮が、とてとてと歩いてきて席に着いた。

「そういえば、あんた今まで何してたの？」

「指令はんの手伝いしとった。あと、散歩やな」

陽炎の質問に答えながら、黒潮は卓上の饅頭を手に取りひと齧り。

「メツチャ美味しいなあ、この饅頭！」

満足そうに頬に手を当てる。

「やれやれまいったぜ」

と、呟きつつ離れた席にいた天龍もやってきた。

「相変わらずのラブラブっぷりだったね」

「うるせえよ」

川内の茶化しに対しそう返す天龍だったが、その声色に嫌悪や怒気のようなものは感じられない。

何だかんだ言いつつ、天龍自身も龍田とのコミュニケーションは嫌ではないらしい。

「にしても、こんな大勢で何を話してたんだ？」

「話って、何かあったん？」

「昔話を少々、前任提督時代の事を」

天龍と黒潮の質問に鳳翔が答える。それを聞いた天龍は、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「そうか」

と、ぶつきらぼうに一言呟き、お茶を口にする天龍。彼女はこの話題に乗る気は全く無い様であった。

それから一同は、再び会話を始める。すると程なくして……

「あら、ゾロゾロとこんなに揃ってお昼なんて珍しい。何かあったの？」

自主トレを終えた叢雲が、昼食のカレーを手にとってきた。

「……何なのその目。私の顔に何か付いてる？」

先程の鳳翔の話聞いていたせいかわ、その場にいた多くの者が、揃って無意識のうちに叢雲へと視線を向けていた。

途中から話に加わった天龍と黒潮は、キョトンとした表情を浮かべている。

一同の様子を不審がるように、叢雲は目を細める。

(まずい……)

一部の艦娘達に緊張が走る。

叢雲はプライドの高い艦娘だ。先の話にもある事からも分かるように。そんな彼女に同情、哀れみの目を向けていたと気取られれば、不機嫌になるのは間違いない。何より、昔の記憶に触れるのは憚られる。

「何でもありませんよ。それよりも、自主トレは満足に出来ましたか？」

神通が努めて平静を装って、声をかけた。

皆が心の中で「神通ナイス！」と彼女に感謝しつつ、自然に目をそらしたり、お茶を手にしたりする。

「ええ、問題なかったわよ」

と、席に着いた叢雲の手を、吹雪が突然両手でガシツと握りしめた。

「叢雲ー！」

瞳を潤ませながら、吹雪は叢雲の眼じつとを見つめる。

その様子に叢雲ならずも、その場にいた全員がドキツとした。

「なっ……いきなり何よ」

「一緒に頑張ろうー！訓練も演習も実戦も、一緒に！一緒に思う存っつ分やろうね！」

「え、あ、ええ……？そう、アンタも自主トレしたいの？……好きにすれば？」

「うんーやるー！私やるよー頑張る!!」

お互いの思いは、まったく噛み合っていないかったが、叢雲は吹雪の態度をそういう事だと判断したようだ。

一時は焦りを抱いた艦娘達も、その様子を見て、心の中で安堵の溜息を吐いた。

「そういえば、さつきここに来る途中で貴虎と龍田の二人とすれ違ってたわ。昨日、自分の首筋にナイフを突きつけた女と隣り合って平然と歩けるなんて、大した胆の座りっぷりよね貴虎ってば」

食事をとり始めつつ、叢雲が言う。

そういえば、といった具合で皆昨夜の出来事を思い出した。朝の基

地周辺の搜索や訓練をこなすのに気がいって、その事はすっかり頭から抜け落ちていたのだった。

「まあ、お互いスツキリと水に流した、って感じなんじゃないの?」

夕張が言う。

「ふくん、まあ私には関係ないから別にいいけど」

叢雲はスプーンですくったカレーを、口に放り込む。

「でも、本当に貴虎って得体が知れない気がするわ。一時的な記憶喪失になってすぐ戻ったって都合良すぎじゃないの?」

「そうかしら?」

「夕張、アンタ輸送船護衛の出港前にちよつと怪しんでなかった? 私たちと一緒に」

叢雲は、吹雪の方にも視線を向ける。吹雪は目を瞬かせた後に

「あつたねそんな事。でも変なことじゃないと思うよ」

と告げ立ち上がると、食堂備え付けの雑誌棚へ向かい、幾つかの雑誌を持ってきた。

叢雲は、その表紙に書かれた見出し文を口に出す。

「深海棲艦襲撃が人類の心に牙をむく!急増するPTSD!新たなる脅威!外因性短期記憶障害にせまる……?」

「鎮守府が発行し始めた広報誌なんだって。こないだ夕張さんに教えてもらったの」

「いや、私も龍田に教えてもらってね。あの輸送任務があった日に。これを読んでこういう事もあるんだなって、勉強になったわ」

スプーンを置き、パラパラと雑誌をめくる叢雲。軽く記事に目を通してみる。

輸送船団所属のA氏は、外因ショック性短期的記憶障害を煩っている。その直接的原因は深海棲艦、その襲撃である。

氏の所属する船団は某日、大陸と我が国を往復する輸送航路を航行中に深海棲艦の襲撃を受け、船団の半分以上が沈没するという甚大な損害を被る。

だが、輸送船団員にとって深海棲艦との遭遇は日常茶飯事ともいえる。事実、A氏はこれまでに何度も深海棲艦との遭遇を経験してお

り、ある時は自らが乗る船が沈められるという、衝撃的な出来事にも出くわした。

そんな彼が、何故ショック性記憶障害を煩ったのか、それは船が襲われた時の状況にあった。

深海棲艦の襲撃を受ける直前、輸送船団はシージャックにあつていたので。

漂流者を装った強盗団。罨にかかり、それを救助した輸送船団旗艦は、制圧されてしまう。

武装集団は銃撃戦の末、船員らを人質にとる。A氏は、その際に同僚達が殺害されるという衝撃的な光景を目の当たりにしてしまったのだ。

更にそこへ深海棲艦の襲撃、複数の衝撃的な出来事に直面したA氏の精神は、大きなダメージを負ってしまう。

これがA氏の記憶障害の原因のあらましである。

この様なケースについて脳神経学の権威である〇〇大学のD教授はこう語る……

なかなか記事は本格的で、著名な大学教授へのインタビューや各種データ表等もあり、読みごたえがありそうな内容だった。

「なるほどね」

と、本を閉じる叢雲。

「他にも戦術論とか、艦娘のコラムとか、ちよつとした娯楽情報とか、色々載ってる号もあるんだよ」

吹雪から更に渡された広報誌を、ペラリとめくる。目次を見ると、確かにそんな記事も見受けられる。

と、叢雲は編集スタッフリストの中に気になる文字を発見した。

【責任編集】重巡洋艦青葉】

「……コレ本当に信憑性あるの?」

思わず叢雲の口からそんな言葉が漏れた。

【第七話】 part 2

貴虎の眼前で、怪物と化した我が子に腹を貫かれる母親。その身体はドシヤリと音をたて、力なく地面に倒れ込んだ。

その光景を目にした人々は、恐怖の叫びを口にしながら、我先にと逃げ出していく。が……

人の群れ目がけて、燃え盛る火球が飛来した。その爆発に巻き込まれ、人々は一瞬にして吹き飛ばされる。

ある者は爆散し、ある者は壁に激しく叩きつけられ、ある者は火炎に包まれ悶え狂い、絶命する。

貴虎は見た。地平線を埋め尽くすほどの、人型の怪物の群れが近づいてくるのを。

そして、それを先導するように歩く人物の姿を。

黒のスーツを身にまとったその人物は、貴虎を一瞥し、ニタリと笑みを浮かべると、瞬時にその姿を変化させた。

一瞬にして緑と白の、軽装鎧のような装甲を身に纏ったその人物は、手にした弓を引き絞り、天へ向け光の矢を放つ。

放たれた光の矢は、上空にて弾けると、逃げ惑う人々に向け容赦なく降り注いでいった。

思わず目を覆いたくなる、地獄のような光景。そんな中に佇む貴虎の頭上にも、光の矢が降りてくる。

貴虎は矢を放った男を見据えながら絶叫した。

「もうやめろ！ 光実え!!!」

窓から射し込む朝日が、貴虎の顔を照らしだす。その眩しさに思わず顔をしかめる。

額を押さえつつ、室内をゆつくりと見渡す。必要最低限の備え付けの家具、書類の置かれた机。そして、窓辺には茶色の植木鉢。

「……夢、か」

貴虎は、安堵の溜息をはいた。

貴虎が提督見習いとして着任してから、一週間が過ぎた。

その間、艦娘の運用法、深海棲艦の特徴と戦いの歴史、戦闘作戦立案や各種任務の遂行方法など、提督業に必要なあらゆる事を貴虎は学んでいった。

仕事は毎日至って順調、貴虎自身、特に苦もなく順調に技能や知識を習得し続けている。

深海棲艦の活動も目立ったものは無く、戦闘らしい戦闘も起こっていない。

艦娘達との信頼関係も良好に築けつつあり、提督見習いとしては、順風満帆と言える日々を過ごしていた。

また一方で、ヘルヘイムの果実についての情報と、それに関する対応策が横須賀鎮守府から関係各所へ通達された。

果実の性質については、無用な混乱を避けるため詳細は秘匿され、新種の猛毒植物という触れ込みで情報は広められた。

しかし、今の有力な情報は無く、貴虎自身、あの果実は見間違いだっただけではないかと時折思ってしまう事もあった。そしてそのたびに都合のいい現実逃避をしているのではと思う事も。

だが、部屋に鎮座する鉢植え、サガラとの邂逅を思い出すと、この世界にヘルヘイムの脅威が存在しないなどとは言い切れない。

心に巢食う不安を払拭するように、貴虎は仕事に打ち込み続ける。仕事に集中している間は余計な事を考えずに済んだ。

しかしながら、彼の心は完全に安らぐことは無かった。連日見続ける悪夢が、貴虎を苦しめる。

いつしか彼に芽生え始めた二つの思いが、感情が、精神を揺さぶりだしていた。

「報告は以上です。書類の確認をお願いします」

一日の業務を終えた貴虎は、提督へ報告書の束を手渡す。提督は無言でそれを受け取ると、一枚一枚その内容を確認していく。紙の擦れる音が、静かな部屋に響き渡る。時刻は間もなく二十一時を回ろうとする頃だ。

「よく眠れていないみたいだな」

書類に目を通したまま、提督が呟く。

「目元に微かだが隈ができています」

貴虎は思わず目元を押さえる。洗顔等で鏡を見る機会はあるが、自分では特に気にも留めていなかった。

「……そうですね」

貴虎が答えると、提督は目を通し終えたのか、書類を机の上に置く。そして、一言告げた。

「まあ、一杯付き合え。こんな時間ではあるがな」

コンロの上のやかんを手に取り、沸騰したお湯をステンレス製のコーヒポットへ移す。

そしてペーパーフィルターに入った粉へと、少量のお湯を注ぐ。お湯を吸収したコーヒの粉が少しずつ膨らみ、ムクムクと盛り上がっていく。それと共に、芳醇なコーヒの香りが部屋の中に漂いだす。

十分に蒸らされた所で、〃の字を描くように、少しずつお湯を注いでいく。フィルター、ドリッパを通して豆の味をギュツと凝縮させた、焦げ茶色の液体が、ティーポットへと少しずつ満たされていく。「悪いがミルクや砂糖は常備していない、ブラックでも構わないか？」  
「大丈夫です」

手馴れた様子でコーヒを注ぐ提督に貴虎は答える。

二人分の量が溜まった所で、ドリッパを外し流し台へ。そして傍らにあるカップにコーヒを注ぎ貴虎へ手渡すと、提督は自らも片手にカップを持ち、器用に車椅子を動かし机に移動した。

貴虎は軽く会釈をし、コーヒを一口飲む。

苦味、酸味のバランスが整っており、豆の味がこの上なく引き出されている。その香りも申し分ない。

これ程までに完成された美味しいコーヒを飲んだ覚えは、貴虎には無かった。

「素晴らしい味のコーヒです」

「気に入ってもらえて何よりだ」

言うも提督もコーヒを口にする。

そして暫しの間、静寂が部屋を包み込む。



「一つ、お聞きしたいことがあります」

と、貴虎がその沈黙を破った。

「……昔の話を耳にしました。あなたが輸送船護衛の艦娘達の指揮を、見事に執られた事を。夷提督えいひすは軍に何か関わりのある方だったのですか?」

貴虎は一瞬の逡巡の後、一つの疑問を口にした。

「いや、俺は軍事に関しては素人だ。今は、そうでもないがな」

「それであの戦果を?」

「情報の整理には慣れていたからな、職業柄」

「以前は何をされていたのですか?」

「ここに来る前に最後にやった仕事は……人攫にせってところだな」

思いがけない一言に、貴虎は目を瞬かせる。すると提督は、フツと軽く笑い

「冗談だ」

と口にし、カップに僅かに残ったコーヒーを飲み干した。

「俺からも一つ聞かせてもらおうか。……何を悩んでいる」

「……………」

その問いかけに沈黙する貴虎。部屋には再び静寂が訪れる。

暫しの時が過ぎ、提督が口を開く。

「不安や悩みは、一人で抱え込み続けると心を蝕み、時には腐らせる。ただそれを口に出すだけで大分違うもんだが……まあ、無理強いをするつもりは無い。話す気になれないのなら、それでも構わんがな」

「……………このところ私は、毎晩悪夢を見えています」

自らの思いを口にする事に迷いがあった。それを言葉にするのは、何か憚られる気がした。

しかし、この人物になら話しても構わない。いや、話しておきたい。そう思わせる雰囲気、ある種の頼もしさのようなものが、夷提督からは感じられた。

貴虎は、連日見続ける悪夢の内容について、夷提督に打ち明けた。そして……

「私は、一刻も早く元の世界に帰るべきなのかもしれない。こうして

いる間にも、オーバーロード、そして……私の弟が世界を恐怖に陥れているとしたら、それを止めるのが私の義務であると思っと思っています。その為に、何としてでも元の世界へと帰る手がかりを探し出すべきだとも。ですが、この世界にもヘルヘイムの脅威が訪れている可能性があります。それに立ち向かう義務も、私は果たすべきであると思っています。命を救ってもらった恩もあります。それには報いなければならぬ。為すべきことを為さずに元の世界へ帰るなど、すべきではないと思います。しかし……」

そこまで告げて、貴虎は黙してしまふ。

「それまでに元の世界がどうなっているか心配、ということか」

提督の言葉に貴虎は、頷くこともせず口を結んでいた。

提督は一瞬、顎に手を当て思案するような仕草を見ると、貴虎の眼を見据えて言った。

「貴虎、お前は どうしたいんだ？」

「それは……私がすべきことは……」

「違う。何をすべきかじゃない、何がしたいかだ」

「何が、したいか？」

「お前は俺や部下の娘達に恩を返すことに義務を感じているようだが、そんな必要は無い。仮に、今すぐに元の世界に戻ったところで、誰も文句なぞ言わんだろう」

「ですが、ヘルヘイムの果実の件があります。それに対処しなくては」「だとしても、それはこの世界の問題だ。お前が関わる義務は無い」

「……………」

静かだが力強い夷提督の物言いに、貴虎は返す言葉が無かった。

提督は更に続けた。

「貴虎、何でも一人で背負い込もうとするな。人間ひとりが出来る事なんざ、たかが知れている。完璧な人間なんていないんだ。そして、人にはいずれ、嫌でも決断をしなければならぬ時が来るものだ。突然にな。その時まで、今の自分に出来る事をやっておけ、悔いの無いようにな」

「……………はい、ご鞭撻ありがとうございます。ごちそうさまです」

飲み終えたコーヒーカップを置き、貴虎は立ち上がる。

「では失礼します」

「……ちよつと待て」

踵を返し退室しようとする貴虎を、提督は引き止める。

「何ででしょうか？」

「届け物を頼まれてくれ。渡すのを忘れていたんでな」

提督に頼まれた夕張宛の書類が入った大きめの封筒を持って、貴虎は艦娘達の住む寮の廊下を歩く。

大半の者が就寝しているせいか、建物の中は静まり返っており、部屋の明かりも殆ど点いていない。

年頃の娘であれば、まだ起きて騒いでいてもおかしくない時間であったが、就寝が早いあたり、流石は軍関係の者達といったところであらうか。

渡された寮内の見取り図を頼りに、夕張の部屋へと進んでいると、廊下の先から一人の艦娘が歩いて来るのが見えた。

いや、言うなれば一人と数体が正しかった。

「島風か？」

「あつ、貴虎。どうしたの？」

貴虎の目の前で歩みを止めた島風は、彼を見上げつつ尋ねる。傍らにいる連装砲ちゃんも、同じような仕草をしていた。

「夕張の所に届け物があつてな。島風こそどうしたのだ？」

「私も夕張の所に行つてたの。ちよつと用があつて」

そう言う島風の手には、青い表紙のファイルらしき物が握られていた。

「そうか、偶然だな。……と、そういえば果実の運搬の件ご苦労だったな。朝早くから大変だったのではないか？」

「全然！そんなことないよ」

首を振って、快活に島風は答える。

「その日はすつとごく調子が良くてね、今までで一番早く横須賀まで着いたんだよ！」

一層明るく、興奮した様子で喋る島風。

「でも横ちゃん提督ってば、実が枯れるまで寄り道してたのかい？なんて言うんだもん。ひどいよね？」

と、口を尖らせて不満を言う島風を見て、彼女をからかったせいで、その怒りを買ったという横須賀提督との会話を思い出す。そういえば島風は速さに誇りを持っている艦娘だったなど。

「島風は自分の早さに、誇りをもっているのだな」

「うん！でね、海を早く滑るのが凄く大好きなんだ！でも駆けっこも誰にも負けないよ！貴虎も今度一緒にやろうよ！」

「そうだな、機会があればやらせてもらおう」

「ホント!?約束だよー」

パアツと輝くような表情を見せつつ、興奮気味に言う島風。

すると、貴虎の後ろから別の声が聞こえてきた。

「あくあ、そんな安請け合いしちゃって。大変だよ、普通の人間が島風と駆けっこするのは」

振り返ると、そこには頭の後ろに手を組んだ川内が立っていた。

「川内か。どうしたんだ、こんな時間に」

「あたし？これから夜戦訓練しようと思っただけ。一人でするのも張り合いがないから、夕張でも誘おうかなって」

「お前も夕張の所に行くのか」

「え、貴虎も？奇遇だね」

「でも夕張ちゃん、書類仕事に忙しそうだったよ？」

と島風。

「そっか、じゃあ今夜もダメかな。……あつ、島風アンタ暇？一緒に訓練しようよ」

「え〜ヤダよ。もう部屋に戻って寝るとこなんだもん」

眉をひそめ、露骨に拒否する島風。

「そんなこと言わないでさ、夜戦しよ！フットワークを磨くために、夜の駆けっこしたっていいしさ」

駆けっこ、という言葉聞いた瞬間、島風の頭がピクリと動く。連動して頭についている髪飾りも、ピクピクと動きをみせる。その様子

は髪飾りの形状もあってか、ウサギが耳を動かす様を連想させた。

「駆けっこ!? うん! やる!!」

「よーし! それじゃあレッツゴー!」

そうして二人(と数体)は、出口の方へと勢いよく走り出していた。

「無邪気なものだな」

二人の背中を見送ると、貴虎は再び夕張の部屋へ向けて歩を進めだす。

目的の部屋の前にたどり着いた貴虎は、部屋の扉を軽くノックする。が、暫く待っても反応は無い。

島風が先程まで訪れていたので、不在ということは無いはずだった。仮に部屋を出たとしても、この場所から先程の廊下までは一本道、必ず途中ですれ違はずだ。

(もしや寝てしまったのか?)

との考えがよぎったが、念のため貴虎はもう一度ノックをした。

(これで出てこなければ改めて出直そう)

すると次の瞬間、扉が勢いよく、バンと音をたてて開かれた。

最早我慢の限界だった。

連日連夜、決まってこの頃合いに、川内が部屋へやってきていた。

“夜戦”彼女にとっては魅惑の言葉かもしれないが、自分にとってはそうではない。逆に彼女のせいで、忌むべき言葉となりつつあるほどだった。

自分にはやる事がある。決して暇なのではないのだ。

やんわりと、そんなニュアンスを含めた言葉で断つても

「そんなに根つめてちゃダメだよ? 息抜きに体動かそ? 夜戦しよ!」  
などと、しつこく食い下がる始末。

以前、別の鎮守府で一緒の部隊だった時に、彼女の誘いに乗った過去の自分を、引つ叩いてやりたい衝動に駆られる。

あの時の軽はずみな自分の行動のおかげで、今も誘いを受け続ける

羽目になったのだから。

だが昔は昔、今は今なのだ、冗談ではない。息抜きの仕方は人それぞれ。夜戦をして息抜きになるなんて奇人は、お前ぐらいなものだろう。

と、本音を叫びたくなるのをグツと押し殺し、追い返す日々が続いていたが、今日という今日は……

手にしていた筆記具を叩きつけるように机に置くと、ドアの前に立ち深呼吸。

勢いに任せてドアを開き、そこに立っているであろう人物に怒鳴りつけた。

「うるさい!! いっつもいっつも!! 毎晩毎晩!! 私にはやらなきゃなんない事があるの!! いい加減にして!! この夜戦バ……カ?」

ドアの前に立つ長身の男は、怪訝な表情を浮かべつつ、目を瞬かせていた。

「……騒がしかったか。すまない、返事がなかったものでな。邪魔したのなら後ほど出直させてもらおう」

予想だにしていなかった人物の登場に、ポカンと口を開けて惚けていた夕張であったが、目の前の状況を理解すると、一瞬のうちにカアツと顔を赤く染めあげた。

「あ、あ、ぐ、ごめんなさい! 私てつきり……ど、どうぞ、入って!」手をバタバタと動かしつつ慌てふためく夕張は、貴虎を部屋へと招き入れる。

「ああ、失礼する」

部屋へと足を踏み入れる貴虎を目で追いつつ、夕張は後ろ手に扉を閉めた。

と、そこで夕張はハツとした。

(つて! 何で男の人を部屋に入れちゃったのよ、私つてば!)

夕張はそくつと室内を見渡す。所々に書物や資料が散らばった乱雑な様は、とても人に見せられたものではない。

そんな所へ、男性を招き入れたことに対する恥ずかしさと情けなさで、夕張の顔は一層真っ赤に染まっていた。

(もうやだ、提督にだって、こんなみつともない所見せたこと無いのに……)

体を微かに震わせながら俯く夕張。

「島風から聞いてはいたが、こんな時間まで随分と熱心なのだな」  
「えっ?」

顔を上げると、感心したような表情の貴虎の姿が目映る。

「仕事に集中していたのだろうか?邪魔してすまなかつたな」

「べ、別に大丈夫よ!丁度一息つこうと思つてた所だし……そ、それとさっきの事は気にしないで。その、ちよつとした気の迷いつてやつ?だから……さ」

「ああ、わかつた。ところで、これは兵装のデータか?」

貴虎は散らばつていた書類の一枚を手に取り尋ねる。そこには、艦娘用の兵装の写真や様々な数値、それに加えて夕張が手書きで書いたと思われる文字が並んでいた。

「ええ、そうよ」

「様々な種類の兵装データが集まっているようだが、こういうものを集めるのは、工廠の人間の仕事ではないのか?」

「基本的にはそうなんだけど、私は通常の艦娘の仕事以外にも、兵装実験や研究開発関連の仕事も受け持つてるの。それが兵装実験軽巡の、私の役割だから」

「なるほどな。だが、こんな遅くまで大変だろうか?私で良ければ何か手伝わせてもらおうが」

貴虎の申し出に対し夕張は、手を横に振つて答える。

「いいのいいの。半ば趣味でやってる所もあるから。気持ちだけ受け取っておくわ」

「そうか」

「ところで、こんな時間にどうかしたの貴虎?」

「ああ、これを提督から渡すようにと頼まれてな」

と言ひ貴虎は、手にした封筒を夕張に差し出した。

「そうだったの。わざわざありがとうね」

夕張はそれを受け取ると、中の書類を取り出し、目を通し始めた。

(……明石からのレポートか、中身は)

無言のまま書類を読みふける夕張であったが、次第に口の端からは、笑みがこぼれ出す。

レポートの内容に頭が刺激され、様々な思考が巡っていく。

(この前の対潜装備、私が使った時よりも性能が向上してみたい。……改修の成果か。あつ！こっちは新型の連装砲のデータね。……命中精度と対空性能の更なる飛躍、より高性能の上位種への改修の可能性……)

「……うふふ、早く触ってみたいな」

「触ってみたいとはどういう事だ？」

その声に夕張はハツとし、書類に落としていた目線を正面に向ける。

目の前に貴虎がいたことを完全に失念し、書類を読みふけていたのに気付いた夕張は再度顔を赤らめる。

「どうやら、知らないうちに声まで出してしまったらしい。」

「あ、う……ご、ごめんなさい！私ったらつい夢中になっちゃって！」

「いや、別に構わないが。それも兵装のデータに関する物なのか？」

「え、ええ、そうよ。横須賀にいる工作艦娘の明石から送られてきたレポート。私ってば、新しいデータとか研究成果を目にするるとつい夢中になっちゃって……ハア」

肩を落とし溜息をつく。

「……似ているな」

貴虎がポツリと呟きを漏らした。

「えっ？」

「いや、何でもない。ともかく、仕事に熱心なのは良いことだ。そこまです夢中になるとは、余程やり甲斐を感じているのだろうな」

「え、ええ、そうね。昔から開発とかデータの管理とかが好きだったし。やっててワクワクするんだ」

照れくさそうに頬を人差し指でかきつつ、夕張は答える。

「私の集めたデータが、新しい兵装の開発に繋がって、より強い装備が開発される。そしてそれが深海棲艦を倒すのに役立つって、全線で戦う



艦娘や、深海棲艦に苦しめられている人達の助けになっているって。そういう事を考えると凄く嬉しくて、誇らしい気持ちになるかな？……って何言ってるんだろ。こんな事言うなんて、恥ずかしいわよね、アハハハ」

「いや、実に立派な考えだ。恥ずかしがる事などない」

「そ、そう？ありがと、そういって貰えると嬉しいかな……ってそういうええ、さっき何か言わなかった？」

「ん？何がだ？」

「えつと、似てるとか何とか言っただけじゃなかったかしら？」

夕張が問うと貴虎は、若干バツが悪そうな表情をして

「聞こえてしまっていたか」

と言った。

「……以前の職場の、友……同僚に君が似ているような気がしてな」「そうなの？」

「ああ、彼も様々な研究やデータ収集、新たな発見に目が無くてな。だから思わず口に出してしまったのだが……」

「なるほどね、そういう事か」

「だが、私の思い過ぎだったようだ」

「どういう意味？」

「……君の方が立派な考えを持っているという事だ」

「えく？それだけじゃ意味が分からないわ。もっと詳しく話してよ」

貴虎の発言の内容が理解できない夕張は、不満そうに口を尖らせる。

対して貴虎は、少々考え込むような様子を見せる。

「……どうかしたの？」

「いや、何でもない。そうだな……」

と言いつつ貴虎は、一呼吸おいて話を始めた。

「私は前の職場で、とあるプロジェクトを任されていた。話すとき長くなるので詳細は省かせてもらうが、それが人類の、世界のためになると私は考え、誇りと信念を持って臨んでいたのだ。三人の仲間達と共に。……その内の一人、私が君に似ていると言った彼の研究は、プロ

ジエクトの中核を担うものであった。彼も他の者達も私と同じ志を持って、プロジェクトに臨んでいた、と私は思っていた」

貴虎はそこで視線を落とし、瞳を閉じる。が、すぐに夕張の方に向き直り話を続ける。

「だが彼らは人類や世界のためではなく、己が野望を果たすために動いていたのだ。愚かにも私は、そんな彼らの真意に気付くことなく過ぎしてきた。そして……裏切られた」

「裏切られた？」

「ああ、彼らの裏切りにあった私は……」

夕張の目には、貴虎の表情が話を続けていくにつれ、陰りを増していくように見えていた。

彼のそんな表情を目にするのは初めてだった。それを見てみると、何故だか自分も胸が締め付けられているような気分になる。夕張は固唾をのんで、彼から語られる言葉に耳を傾ける。

「崖から突き落とされた」

「え？」

予想だにしない一言に夕張は目を丸くする。そして暫しの沈黙の後……

「……ふっ！あははははは！ちよつと貴虎ってば、いきなり何言い出すのよ！」

彼女はお腹を抱えて笑い出した。

「ま、真面目な顔して何を言うかと思ったら、崖から落とされたって！突然変な冗談言わないでよ」

笑い続ける夕張を、貴虎は黙して見つめていた。

「……ふっ、そうか。そうだな……悪かった、変なことを言っつて」

肩をすくめつつ、苦笑を漏らす貴虎。

「まあ、今のは……たとえ話とでも思ってくればいい。結局のところ、私は彼らの裏切りによってプロジェクトとの関わりを絶たれてしまったというわけだ」

「ああ、たとえ話か。それもそうよね。要するに、その出来事が崖から突き落とされるくらいに衝撃的だった、つてことが言いたかったのか

「しら？」

「そんな所だ」

その説明に納得がいったのか夕張は、うんうんと頷いている。

「ともあれ、仲間や多くの人のために誇りをもって仕事をしている君を、彼と一緒にするのは忍びなく思つてな。さっきの発言はそういう意味だ。分かりにくかつたようで、すまなかつた」

「いいのよ、気にしないで。こつちこそ辛い思い出話をさせてしまつて、ごめんなさいね」

「それこそ別に気にしなくていい。私は平気だ」

頭を下げようとする夕張を、そう言つて制する貴虎。

「それにしても、ここは過ごしやすい所だな。心なしか、私が以前いた所より落ち着いていられる気がする」

「ありがと、そう言つてもらえると嬉しいわ」

「艦娘たちも職員の人々も皆、部外者である私に屈託なく接してくれている。ありがたい限りだ」

「もう、部外者だなんて言つて。貴虎は私達の仲間でしょ」

「仲間？」

夕張の発言に対し貴虎は、当惑したような表情を見せる。

「え？」

と声を漏らし、夕張も戸惑いの表情を浮かべ沈黙した。

暫しの間、室内は沈黙に包まれる。その静寂を最初に破つたのは夕張の声であつた。

「もしかして、嫌だつた……かな？ そう思われるの……」

彼女はおずおずとした様子で言う。

その声色と表情は、若干の憂いを帯びている様子であつた。

対して貴虎は、首を横に振りつつ答える。

「いや、そんな事はない。寧ろ私の方こそ、そう言つて貰えて光栄だ」  
「そう、良かった！ そんな事言うもんだから、もしかしたら嫌々ここに  
いるんじゃないか、つて心配になつちやつた」

一転して、ぱあつと表情を明るくして夕張は言う。

そんな彼女につられるように貴虎もまた、微笑を浮かべたのであつ

た。

するとその時、部屋に備え付けられた時計が、時刻を告げる音を鳴らし出した。

二人が時計を見ると、時刻は二十三時になった所であった。

「もうこんな時間か。そろそろ戻るとしよう。長々と話をしてすまなかつたな」

「ううん、そんな事ないわ。むしろ良い気分転換になって良かった。わざわざ来てくれてありがとう」

そうして「おやすみ」と挨拶を交わし、貴虎は部屋を後にした。

「さくて、続きに取り掛かるとしますか。データ今日中に、まとめちゃわないと」

大きく腕を伸ばして伸びをし「うん！」と頷いて気合を入れる。

そして席に着いた夕張は、再びペンを手に取り書類に向かい合う。

最初は貴虎の突然の来訪に、戸惑っていた夕張であったが、結局のところ、彼との会話は良い気分転換になった。

清々しい気持ちで仕事が続けられそうな気がした。

(……あ、そうだ。その前に、録画の設定しておかないと)

ふとそんな事を思い立つと夕張は、リモコンを手に取りテレビの電源を入れた。

いつも楽しみにしている、お気に入りの深夜番組の録画設定を確認する。

(うん、大丈夫ね。今日は三つ、全部設定完了してる)

翌日に出撃が無い日は、いつもリアルタイムで見ている夕張であったが、仕事に専念するために、今日は録画することに決めていた。見ようと思えば後で時間は、たくさん取ることができる。

ノリがいい時に仕事はまとめてやっておくのが吉だ。と考えての選択だった。

録画を終えた夕張は、そのままテレビを消そうとしたが、映っていた番組にふと目がいく。

それは芸能人のトーク番組だった。司会と思われるお笑い芸人の男性が、明るく無駄に大きい声で喋っている。

「本日は、思わずドン引きした異性に関するエピソード、というわけでやってきたんですけども、くくさんは何か身近なエピソードってありますか？」

ゲストの男性に声をかける。それを受けて話し始めたゲストは、有名な俳優であった。

夕張は、その男の出演した作品を見たことは無い。が、彼は度々女性関係で芸能ニュースに取り上げられる、演技というよりは、スクリーンダル方面で有名な俳優であった。なのでその顔には見覚えがあった。

「ちよつと前に気になっていた女性がいたんだけど、まあなんて言うか、非常に女性らしい？家庭的なイメージのある子だったんだ。周りの人からも、妻にするならこの人って言われるぐらいにね」

「ほうほう」

芸人が大げさに相槌をうつ。

「それで暫くお付き合ひして仲良くなつて、その人の家に行く機会があったわけよ。飲み会の後にね。で、行ってみたら部屋が散らかり放題なわけ」

「はく、ゴミとか洗濯物が散乱してる感じですか？」

「いやそういうのは無かつたんだけど、仕事の資料とか、それ関係の道具とか？彼女、仕事が忙しくて片付ける暇がないって言ってたんだけど、抱いていたイメージとの違いに、愕然としちゃってさ」

「ほく、それはそれは」

「で、僕A型だから？そういうの気になるタイプで、結局二人で部屋の片づけをしたんだよね、その後」

「あく、二人の愛を深めるつもりが、意外な展開になってしまったと」  
「おまけに、その途中で仕事について良いアイデアでも浮かんだのか、一人でニヤついたりボソツと声を漏らしたりなんかしちゃってさ。正直そんなのを見せられちゃうとねえ？でもって、彼女とはそれっきりってわけ。仕事に一生懸命なのは良いけどさ、そういう所はしっかり気を使ってもらわないとね？男としてはちよつと冷めちゃうよ」

「わかりますわかります。何ていうか、女子力が足りてないのを見せつけられると萎えてしまうつて感じ？」

「そうそう」

「ハハハハハ」

「それでさ。その」

と俳優の言葉が途切れる。夕張がテレビの電源を切ったのだ。

そしてリモコンを持ったまま、室内を見渡す。机の上には資料が乱雑に並び、一部は床に落ちている。

本棚に収められた資料は、並び順や高さがバラバラで、適当に詰め込まれた様子が誰の目にも明らか。

その他、まとまりなく壁に掛けられた衣服、棚上の小物や生活雑貨も、片付いているとは言えない有様。

「……」

リモコンが、ゴトリと音を立てて机に置かれる。

「うう……」

両手で顔を覆った夕張のうめき声が、部屋に響く。

暫くそのままの姿勢で固まっていたが、やがてフラフラと立ち上がると夕張は、落ちていた資料などを拾い集め、机の上に置く。そして再び、お世辞にもしつかり片付いているとは言えない部屋を見渡すと「あ~~~~っ！」

と、嘆息混じりの苦悩の声を上げ、ベッドにうつ伏せの姿勢で倒れ込んだのだった。

ふう、と息を吐いて、寝間着に着替えた貴虎はベッドに座り込んだ。

この異世界に迷い込み、昏睡していた時期を含めると、ひと月が経過しようとしている。

誰一人として、自分が知る者がいない世界にいても、貴虎は孤独感を感じてはいなかった。

むしろ沢芽市にいた頃よりも、満ち足りた気分になる時すらあった。

貴虎が直面する問題は、未だ何も解決してはいない。

だが、それに対する焦燥感は、少し前に比べると大分和らいだように思える。

「仲間……か」

そう呟くと貴虎は、部屋の明かりを消し、床に就いた。

その夜、貴虎が夢を見ることは無かった。

午後のティータイムの頃合いも過ぎ去り、厨房は夕食の準備で慌ただしくなり始めていた。

そんな音が響いてくる食堂の一角で、夕張はテーブルに突っ伏していた。

「はぁ……」

と溜息をつく。

昨晩は、あれから仕事も何も手につかず、結局眠ってしまった夕張。起床後すぐに思い立ち、部屋の片づけを始めるものの、様々な事に気がとられ上手く整頓できず。

更にはボヤボヤしていたせいで、日課の砲撃訓練にも遅刻。砲撃の命中精度も散々なものだった。

（何よ、あんな女性にだらしない三流役者と、くだらない芸人の言った事なんて気にしなくていいじゃない！どうせあんなデリカシーの無い事言うヤツらは今頃炎上してるハズよ！それに、貴虎が同じように思ったとは限らないし……）

と、心の中で何度も自分を励ましてみる。が、自分の部屋の惨状、そしてそこへ、異性を招き入れたことに対する恥ずかしさと後悔に、夕張は苛まれ続けていた。

「ハア……私って女子力無いのかなぁ……」

再び大きく溜息を漏らす。

「夕張さん、どうかしたんですか？」

と背後から声がする。

夕張が振り返ると、そこには陽炎と黒潮が立っていた。二人の手には小さな籠。

「え、ああ、何でもないわ。気にしないで。ところで二人ともどうしたの？そんなの手にして」

「これから森に木苺を取りに行くんです」

「木苺？どうしてまた」

「これやで、夕張はん」

黒潮が夕張の目の前に、雑誌を突き出した。それは例の鎮守府発行の広報誌であった。

そのページをパラパラとめくり、とあるページを黒潮は開く。

そこには色鮮やかで、写真で見ても美味しそうな様の伝わってくる、パイケーキの写真が載っていた。

ページの傍らには、灰色がかかった長い黒髪を赤いリボンで結わえた少女が、照れくさそうにはにかんでいる写真が。

彼女は横須賀鎮守府の甘味処『間宮』で働いている給糧艦娘の伊良湖であった。

記事によると、パイのレシピは彼女考案のものらしい。

「これって……」

「龍田さんが買ってきたベリーパイのレシピです。とは言っても、お店で出しているのとは少し違って、素人にも簡単に作れるように、アレンジされているみたいなんですけど」

「もしかして、それ作るの？」

夕張の問いに頷く陽炎。

「本当は鳳翔さんに頼んでみようかとも思ったんですけど、他のお仕事もあるのに頼むのは悪いかなって……」

「せやからウチらでやる事にしたんや」

「ふくん、そうなんだ」

「それで作ろうとしたら、肝心のベリー系の果物の備蓄が無かったです。そしたら……」

「ウチ、昨日散歩している時に、木苺が生ってる所を見つけたんを思い出してな。それ使えば出来る思うて、採り行ことしてた所なんです」  
「なるほどね……!？」

と、何気なく記事を眺めていた夕張の目が、ある一文に釘付けにな



る。

「お店の商品とは違う味付けと食感になっていますが、お菓子作りの初心者の方でも作りやすいレシピに改良してありますので、みなさんは是非作ってみてください。お菓子作りで女子力アップですよ！」

（女子力アップ……）

真剣な眼差しでページを凝視する夕張。

ページを見つめたまま微動だにしない彼女の様子に、陽炎と黒潮は怪訝な表情をしていたが

「じゃあ、私達は行ってきます。上手くできたら、夕張さんにもお裾分けしますね」

「ほな、行ってきます」

と告げ、その場を後にしようとした。

「待って！私も行くわ！」

突然夕張が発した大声に、ビクツと肩を震わせる二人の駆逐艦娘、その様子を見て自分の声の大きさに気付き、少々顔を赤らめる夕張。照れと動揺からか、手をあたふたと動かしつつ

「その、ほ、ほら、二人だけじゃ何かあった時危ないし、駆逐艦の嚮導は軽巡の役目だし……ね？」

取り繕うように早口でまくし立てた。

そんな夕張の態度に、顔を見合わせる陽炎と黒潮であったが、断る理由もないのでこれを了承。

かくして三人は、基地施設の裏手の森の中へと赴いていった。

激しい波が岸壁に打ち付ける。

荒々しくうねりをあげる海は、海岸線にあるもの、不用意に近づくと、様々のものを飲み込み、そしてその内に巻き込んだものを吐き出す。そんなサイクルの中で、激しい波しぶきと共に岸壁の上へと、黒い大きな物体が打ち上げられた。

大型の魚、もしくは小型の鯨か何かと見まごう、黒ずくめのその物体には、不気味な歯と小さな足のような物が生えていた。海に潜む忌

むべき脅威の一つ、深海棲艦の駆逐イ級であった。

だが、陸へと打ち上げられたそれは、風にあおられ微かに揺れるのみで、自ら動き出す様子は無く、身体は完全にその活動を停止していた。

もはや、朽ち果てるのを待つのみとなった駆逐イ級であるが、その残骸には奇妙な点があった。

駆逐イ級の全身には、植物の蔦のような物が絡みついていてるのである。それは海を漂っていた蔦の切れ端が偶然絡まった、などという単純なものではなく、誰がどう見ても蔦は明らかに、駆逐イ級の内部から「生えている」としか言いようのない有様であった。そしてその蔦には、色鮮やかな紫色の果実が数多く実っていたのである。

曇天の下、バタバタと羽音を響かせながら、何かが駆逐イ級の残骸へと近づいてきた。

吹き荒れる風の中を、黒い羽根を以ってバランスをとりながら飛んできた番いのカラスが、駆逐イ級の残骸の上に降り立つ。カラスは、カアと一鳴きすると、そのくちばしで器用に蔦をついばみ、やがて果実を引きちぎった。

そして、錠前の掛金を模したような形のヘタを啜え、その場を飛び去っていった。

続いてその場には、うみねこの群れがやってきた。

イ級の残骸に群がったうみねこは、そこに実った果実を啄ばみだす。うみねこは狂ったかのように果実を食べ漁る。

と、そのうちの一羽の体が突如として緑の光に包まれた。苦悶の鳴き声をあげるうみねこの体は、光と共に出現した植物の蔦や葉に絡めとられていく。それは、周囲の他のうみねこをも取り込みながら肥大化していき、遂には人の大きさ程までに膨れ上がっていったのであった。

森の中の一本道を、作業着姿の中年男性が駆け足で進んでいく。

背負ったリュックが、歩調に合わせてゆさゆさと揺れ、手に持った

工具箱がガシヤガシヤと音を立てている。

(全く、時間があるからって迂闊に昼寝決め込むんじゃないかな)と、自分の行いを反省する。

島に住む者から、良い景色の見える丘があると聞き、電気系統設備の整備士である彼は散歩がてら、弁当を持ってそこへ向かった。そして、美しい景観を堪能しつつ昼食を取ったところで眠気に襲われた。満腹感と心地よい海風に当たったせいだろうか、軽い仮眠のつもりが、ぐっすりと数時間も眠ってしまったのだった。

依頼された仕事を始める時刻には、ギリギリ間に合うかどうかと行ったところ。余裕をもって仕事を始めようと早めに現地入りしたのにこの有様。眠る前は晴れ渡っていた空も、いつの間にか灰色の厚い雲に覆われ、吹きすさぶ風が木々の枝葉を揺らし、ざわざわと音を響かせる。

「ちっ、俺としたことが」

舌打ちと独り言を漏らしつつ、作業着の男は森の中を駆け抜けていった。

「さてと……」

作業着の男が通り過ぎたのを見計らって、木の陰に身を潜めていた青年が姿を現した。

ふわりとした少し長めの髪に端正な顔立ち、モデルのようなスラリとした体躯。木々がざわめく森の中には些か不釣り合いに感じられる様相をしたその青年は、中年男性の走り去った方へ向かって、スタスタと歩き出した。

「しかし、何なんだろうねここは？ どうやら僕の知らない“世界”みたいだけど……折角だから探索してみるとしよう。丁度いい道案内も見つけたことだしね」

吹き抜ける風が、青年のジャケットの裾をバタバタと揺らしていた。

## 【第八話】 part 1

急速に発達した低気圧の影響により海は荒れ、激しい波が巻き起る。

曇天の空模様ではあるが、幸いにも雨は未だ降りだしてはいなかった。

その天気の下で、三人の艦娘が洋上を駆けていた。神通・叢雲・不知火である。

三人は今、基地周辺海域の哨戒任務に当たっている。とはいえ、最近この海域で深海棲艦を発見する事は殆どない。

だが、そんな状況といえど三人の艦娘の表情は真剣そのもの、気を抜いた様子は微塵も感じられなかった。

「今にも降り出しそう」

叢雲が苦い顔で空を見上げる。

「波が高くなってきました。加えて雨が降ってくれば、航行は困難となりますね」

その後ろを進む不知火は、警戒しながら周囲を見渡す。

「では、哨戒任務を中止して基地へ帰還しますか？」

先頭に行く旗艦の神通が言った。

「冗談、そんなのゴメンだわ」

「この程度の時化で航行を止めるなどあつては、艦娘の名折れです」  
叢雲、不知火は揃って神通の提案を否定する。

大規模な作戦行動時においては、荒れ狂う海を航行して、敵地へ向かう事も珍しくない。最悪の場合、今の様な荒天の状況下で敵と遭遇する事も。それを知った上で神通は、二人に言葉を投げかけたのだ。対して返ってきた二人の艦娘の答えには、一片の迷いも感じられなかった。

「わかりました。では哨戒を継続します」

「了解！」

「了解しました」

指揮下の駆逐艦娘の力強い声を受け、神通は口元に微笑を浮かべ

る。

(返事に意志の強さが感じられます。頼もしい限りですね。しかし……)

神通は、灰色の雲が流れる空へと視線を向ける。

(何か胸騒ぎがします。悪い事が起こらなければいいのですが……)

吹き付ける強風が、神通の長い髪を激しくなびかせた。

その少し前……

激しく吹き荒れる風の中、深海棲艦の残骸に生っていた果実を咥えながら飛行するカラスは、腹を空かせた我が子の待つ巣へと向かっていた。

と、その目の前の空間が波打つように歪みだした。それと共に、突如として灰色のオーロラのようなものが出現する。

驚愕したカラスは、衝突を回避しようと羽をはばたかせ、急制動をかける。が、その瞬間、突風が吹きすさんだ。

その風にあおられた二羽のカラスは、バランスを失い体勢を大きく崩してしまう。そしてカラス達は、思わずくちばしに咥えられた果実を離してしまう。二つの果実は森の中へと吸い込まれるように落ちていった。

どうにか体勢を立て直したカラスは、獲物を失ったことに対し口惜しそうに一鳴きすると、その場を飛び去っていった。

一方で森に落ちた一つの果実の周りには、野鼠の群れが集まりだしていた。

基地裏手の森、その更に奥深くにある開けた一角、そこには夕張・陽炎・黒潮、三人の艦娘達が集まっていた。

「うん、みんな集まったね。それじゃあ、成果を発表しましょうか!」

「ですね!」

「負けへんで!」

「じゃあ行くわよ。せーのっ！」

夕張の掛け声を合図に三人は、後ろ手に持ったカゴを一齐に突き出した。

その中には真つ赤に熟した木苺がいっぱい詰まっていた。どのカゴにも満載である。

「あくこれは……」

「引き分け……かな？」

「せやなあ」

あつさりとした勝負の結末に、一時は気分が盛り下がる三人であったが、それぞれのカゴと互いの顔を見合わせると、ニンマリとした表情を浮かべた。

「勝負は引き分けだけど、これだけあれば十分な量が作れそうね」

「それだけじゃ使い切れそうにないから、ジャムなんかも作ってみます？」

「あ、それ凄くいいかもー」

「にしても、こないぎょうさん取れるとは思わなかったわ。この辺は穴場やったんなあ」

三人で会話に花を咲かせていると

「……ん？」

夕張の頬にヒヤリとした感触が走った。手で触れると、水滴が付いているのがわかった。夕張は空を見上げる。

「あ……雨だ」

陽炎と黒潮も視線を上へ。そこには黒々とした雨雲が広がっていた。三人が木苺集めに夢中になっている間に、天候はすっかり悪くなっていったようだ。すぐに二人の顔にも、雨粒がポタポタと落ちてくる。

初めは弱かった雨粒の勢いは、瞬く間にその強さを増し、あつという間に土砂降りの大雨になる。

「うわ、最悪ー」

艦娘は海で戦いを行うため、水に濡れる事には慣れている様に思える。だが実際には艀装の防御効果により水濡れを軽減しているだけ

であり、普段の生活においては、他の人間と同様に水に濡れてしまう。それによつて体を冷やしてしまえば、当然風邪をひくこともある。

「あくあ。もう濡れて帰るしかないか。傘持ってくれば良かったな」

「その心配は無いで、夕張はん」

「え？」

「ウチについてきたつてや」

得意気にそう言うと、黒潮が小走りで駆け出した。

夕張と陽炎は、黒潮の行動に疑問を抱きつつも、駆け足で彼女の後を追いかけていった。

部屋の中には紙の擦れる音、カリカリとペンで書き物をする音が静かに響いている。

（神通、叢雲、不知火、今日出撃している者の組み合わせは二日後まで継続させ、次は夕張、陽炎、吹雪で哨戒部隊を組ませるとしよう。残るは天龍と……）

貴虎は考えを巡らせつつ、ペンを走らせる。

提督業、艦娘運用における戦略のいろはを学びつつある貴虎は、徐々に仕事を任されるようになっていた。

今やっている哨戒任務のスケジュール組みも、その一つである。

「こんな所か」

スケジュールを組み終えた貴虎は、右手に持ったペンを置く。

こわばった筋肉をほぐすため首、肩を軽く動かす。そんな時、彼の視界の端に鉢植えが映る。

DJサガラの残していった、黄金の果実の力的一端。授けた本人にすら分からない、未知の可能性を秘めた物。

それは未だに、変化の兆候すら見せてはいない。だが、もし仮にその力が発現したとして、ヘルヘイムの脅威が確認できていない現在、それは何かの役に立つのであろうか？そんな疑問が時折、貴虎の脳裏に浮かんでくる。

（だが、何もなければ、それはそれで構わない。この世界の者が、我々

の世界と同じ危険に曝される必要はないのだからな)

物思いにふけっていた貴虎は、ふと時計を見上げる。時刻は日没の少し前ごろ、食堂で夕食を取り始めるのに丁度いい頃合いであった。貴虎は机の上の書類を引き出しにしまうと部屋を後にし、食堂へと向かっていった。

部屋の主が居なくなり、暗くなった室内は、シンと静まり返る。

と、そんな静寂と暗闇を打ち消すように、鉢植えから微かな光が溢れ、瞬きだした。

その輝きは、川辺にて命の炎を燃やす蛍のように儂く、しかしながら力強いものであった。

別棟の玄関口まで来た所で貴虎は、遠くから近づいてくる人影を目にした。

早足気味に近づいてくる作業着に身を包んだ青年。その手には工具箱が握られている。

彼も貴虎に気付いた様子で、視線が合わさると軽く会釈をする。

「お疲れ様です。こちらの責任者の方ですか？」

貴虎の正面に立った青年が尋ねてきた。

「いや、私は違うが」

「そうですか。実は、この建物の空調設備の修理・点検を頼まれました、お伺いさせて頂いたのですが」

「では、提督を呼んでみましょう」

「あ、大丈夫です。その、提督さんのお部屋が、こちらで合っているのかが知れたかっただけです。問題無いようでしたら、早速作業を始めさせて頂きたいのですが」

「分かりましたお願いします」

作業着の男は再び会釈をすると、ガチャガチャと工具箱を鳴り響かせながら、建物の中へと進んで行った。

(空調の修理か。私には快適に感じられていたが、知らない所でガタがきているのか?)

小さくなっていく男の背を見ていた貴虎は、入り口へと向き直ると、歩を進め始める。



貴虎が外へ出た丁度その時、ポツポツと雨が降り出した。程なくして勢いを増したそれは、あつという間に地面濡らし、水たまりを作り始める。

「……雨か。急ぐとしよう」

貴虎は食堂へ向け、勢いよく駆け出して行った。

屋根に激しく打ちつける雨音と、強風にあおられ軋む材木が立てる音に不安を覚えつつも、落ち着いて休める場所へ辿り着けた夕張は安堵する。

「どうにか雨は凌げそうね。それにしても、森の中にこんな小屋があつたなんて知らなかったわ」

雨粒に濡れた顔を手で拭いしつつ陽炎が言う。

「こないだ山菜採りに来た時に見つけたんやで。けど、こんな早う役立つとは思わなかったわ」

「ホント、黒潮のおかげで助かったわ。ありがとう」

陽炎の言葉に対し、黒潮は得意気な表情を浮かべる。

突然の豪雨に襲われた夕張達は、黒潮の案内で小さな山小屋の中へと逃げ込んでいた。

この小屋は、深海棲艦が出現する以前、この島の元々の住民が生活を営んでいた頃に使用されていたものである。

島民が疎開し、基地を建設する際に、多くの建物は取り壊されていたのだが、島の奥にあったこの小屋は、手つかずの状態で残されていた。無論手入れは行き届いていないので室内は荒れ放題であったが、雨風を凌ぐには十分だった。

「うわ〜服がビショビショ」

夕張はスカートの裾を掴み、ギョツと力を込めて絞る。浸み込んでいた雨水が、ポタポタと音を立てて床に滴り落ち、小さな染みを点々と作っていく。

更に上着を脱いで絞る。スカートより多くの水を含んでいたのか、上着から零れ落ちる水滴は、床上の染みを水たまりへと変えていく。

陽炎達も同様に服の水分を落とし始めた。

夕張は下着も乾かそうかと考え、それに手をかける。が、女性ばかりの空間とはいえ、流石にそこまでするのは気恥ずかしいと思いき、十分に絞った上着を再び着用する。

肌にまとわりつくような湿り気が若干不快だったが、ビシヨビシヨに濡れたままよりは、大分マシというものだ。

「何だかワクワクするわね」

陽炎が口を開く。

「どういう事や?」

「子供の頃にさ、友達と一緒に秘密基地とか作った思い出って無い? そんな事思い出してさ。」

「あくあつたなあ」

「懐かしいわね」

「夕張さんも経験あります?」

「もちろんよ。私の時は男の子のグループに混じってやってたなあ」

「ウチもそうや」

黒潮が手を挙げて応える。

「最初は男の子が計画を立ててコソコソやってるんだけど、女子グループにバレて、結局一緒になって作るのよね」

「絶対に秘密だぞ!」とか言っておいて、ドンドン広まっちゃうんですよ」

「そうそう!懐かしいわ」

夕張が遠くを見つめるような瞳を天井へ向ける。

「でも……あの頃は、本当に自分が基地で働いたりする事になるなんて、思いもしなかったなあ」

いつ終わるとも知れない、深海棲艦との戦いの日々。いつどうなってもおかしくない、死と隣り合わせの生活。

今所属している基地は前線からは遠く、夕張は激戦区と呼べる戦場とは、とんとご無沙汰である。だが、今この時にも戦いを繰り広げている者はおおり、日々体に傷を刻んでいる。夕張達もそれとは無縁ではない。命令が下されれば、過酷な環境に身を投じ、命を懸けて戦わな

ければならないのだ。

夕張の脳裏に、そんな思いがよぎる。いつの間にか彼女の表情は、真剣な面持ちになっていた。

「夕張さん……」

陽炎の不安げな声に、ふと我にかえる夕張。

「つて、辛気臭くなっちゃったね、アハハハ。でも自分で選んだ道なんだから、しつかりしなきゃ！」

夕張はスツと立ち上がると、握り拳を作り右腕をグツと天へ向け突き上げる。

「我が選択に一片の悔いなし！……つてね。」

「……何ですかそれ？」

「えっ？」

得意気な表情の夕張とは正反対に、陽炎と黒潮はポカンとした表情を浮かべている。

「あ、え〜つと知らない？結構有名なセリフなんだけど」

「う〜ん……黒潮知ってる？」

「いや、わからへん」

陽炎と黒潮は小首を傾げる。

「あ、はははは。ま、まあ気にしなくていいよ、うん」

（これがジエネレーションギャップつてもものなのね……そんなに歳は離れてないと思うんだけどなあ）

そんな事を思いつつ、ほのかに染めた頬を、指でポリポリとかく夕張。

と、その時、窓の外で白い光が瞬き、少し遅れてバリバリと激しい音。

山小屋のすぐ近くで落雷があつたようである。三人の艦娘は、その衝撃に体をビクツと震わせた。

「結構近かったみたいね」

「おお、天が震えておる……」

「ビククリしたわあ。この辺に落ちたんかな？」

膝を抱えて座っていた黒潮は、立ち上がると窓の方へ近づいていっ

た。そして窓辺に立ち、外の様子を窺い始める。次の瞬間、再び雷鳴が響き渡った。

閃光は室内をほんの一瞬真っ白に染め上げ、爆音の衝撃が周囲の空気を震わせ、建物をも軋ませる。

先程とは比べ物にならない程の落雷の激しさに、夕張は思わず身震いをした。

「さっきより近いわね……」

「すぐ近くに落ちたみたいですね」

言うとは陽炎は、黒潮の方へと視線を向ける。すると彼女は小刻みに体を震わせていた。

黒潮が落雷の衝撃に驚いているのだろう、と思った陽炎は

「大丈夫よ、そんなに怖がなくて。昔やった嵐の中の航行演習の時の落雷に比べたら、大したことないわよ。それに今は部屋の中にいるんだから、こんなのへっちゃらよ、へっちゃら」

と笑い混じりに声をかける。黒潮の不安と恐怖を紛らわせようとする彼女なりの配慮だった。

すると窓の外へ顔を向けていた黒潮が、ゆっくりと陽炎の方へと振り返りはじめる。

体は外の方へ向けたまま、首だけをゆっくりと動かしながら。

その目は大きく見開かれ、口を何か言いたげにパクパクと動かしている。外を指さした右手は、ガクガクと小刻みに震えている。

「あ……ああ……」

「ちよつと、そのリアクションはオーバー過ぎるんじゃない？あんだ、そんなに雷苦手だったっけ？」

陽炎の問いかけに、黒潮は首をフルフルと横に振る。そして唾をゴクリと飲み込み、絞り出すように声を出す。

「……ちやうねん。か、か、か」

「か……蚊？」

「か、怪物やー！怪物がおったんやー！外に！」

「怪物う？」

陽炎は腰を上げると黒潮の隣に向かい、外を覗きこむ。目を凝らし

て遠くを見つめ、左右にも注意深く目を向ける。

「何もいないじゃない。何かの見間違いじゃないの？」

「そないな事無い！ウチはハッキリ見たんや！稲光に照らされたごっつい怪物の影！」

両手で大きな円を描くようなジェスチャーをしながら、激しい剣幕で黒潮は叫ぶ。

その剣幕に陽炎はたじろぎつつも

「わかった、わかったから落ち着いて」

と、両手を前に突き出し黒潮をなだめる。

壁際に座っていた夕張も、尋常ではない黒潮の様子が気になり、彼女らの元へ近づこうとした。

が、そんな夕張の耳に、奇妙な音が聞こえてきた。

「ん？」

夕張は耳をすましながら周囲を見回す。聞こえてくるのは吹き荒れる風と、雨の音だけである。

気のせいか、と思い直し夕張は立ち上がる。

……バシヤリ……バシヤリ

聞こえてきた音に、ビクリと体を震わせた夕張は、背にしていた壁の方へ素早く振り返った。

雨の音に混じって聞こえてきた謎の音。それは壁の向こうから響いてきているようである。

不規則にたてられるその音に、意識を集中する夕張。

(何かの……足音?)

ガリッ!……ガリッ!

(!?)

目の前の壁、その向こうから異音がする。それは何者かが爪を立てて、木を引つ掻く音の様だった。

夕張に緊張が走る。その音は暫くの後に収まり、代わって水たまりを踏み歩くような音がする。が、それもすぐに聞こえなくなる。辺りには再び、風雨の音のみが響き渡る。

「……陽炎、黒潮、二人とも、こっちに来て」

「え？」

言われた陽炎が小首を傾げる。

「早く！」

「は、はい」

黒潮を連れて、陽炎は夕張の傍へと駆け寄る。

「どうかしたんですか夕張さん？」

「黒潮の言ってた事、本当かもしれない」

「え？」

「ホンマか夕張はん!？」

「とは言っても、正体不明の怪物がいるなんて、私もちよつと信じにくい。でも何かがいるのは、確かな気がする」

「……」

「ほら、そんな顔しないで。とにかく今は警戒しましょう」

複雑な表情をしている黒潮に笑いかけると、夕張は改めて周囲を見渡した。

室内には幾つかの家財道具が、ほつたらかしにされている。元々軽い休息のための小屋だったようで、おいてある家財道具等は、普通の家のそれに比べ随分と少ない。夕張は万が一に備え、薪ストーブの傍に置いてあった火かき棒を手にする。武器として扱うには心もとないが、丸腰よりは幾分かマシというものであろう。

「ひゃあ！」

突然、陽炎が声をあげた。

「陽炎！何かあった!？」

「だ、大丈夫です。首筋に冷たい感触があったんで驚いたんですけど……」

と、陽炎は天井に視線を向ける。夕張もそれを目で追う。すると天井の数か所から、雨漏りが発生しているのが見えた。どうやら彼女は、その水滴に驚き声を出してしまったらしい。

「もう、脅かさんと言ってや」

「へへへ、ごめんごめん」

頭をポリポリとかく陽炎。その様子に夕張と陽炎が苦笑し、緊張し

た空気がほんの少し和らいだ。と思われたその時

ドンッ！ドンッ！とドアの方から、何かを叩きつけるような音が響いてきた。三人は思わず息をのむ。

夕張は陽炎と黒潮を保護するように一歩前に出ると、手にした火かき棒を両手で握り、構えをとる。

なおもドアは音を立て続けている。どうやら何者かが、体当たりをしているようだった。繰り返される衝撃にドアが軋み、ミシミシと音をあげて歪んでいく。

夕張の手にじつとりと汗がにじむ。手の震えを気力で押し止めながら、ドアの方をじつと見つめる。

深海棲艦と勇ましく戦う艦娘と言えども、丸腰の状態では、その力は普通の女性と何ら変わらない。普段から体を鍛えているため、常人よりは強靱な肉体と体力を備えてはいるが、猛獣や武器を持った者を相手にするのは、流石に厳しいというもの。だが、それでも夕張は、自分より年下の娘達を守るために、勇気を奮い立たせていた。

(怪物でも何でも、やれるもんならやってみなさい！私がやつつけてやるんだから！)

次の瞬間、衝撃に耐えきれなくなったドアが、メキメキと音を立てて碎け折れる。

それと共に姿を現した異形のモノに、艦娘達は驚愕の声を上げた。

【第八話】 part 2

食堂のある建物まで走り着いた貴虎は、息を整えつつ、服や髪に着いた雨水を払い落とした。なるべく雨除けになる物の下を駆け抜けて来たのと、防水加工が施されているおかげで、身に着けた軍服は大きく濡れてはいなかった。髪の毛を取り出したハンカチで拭く。多少の湿り気が残っていた気がしたが、大事無いと判断し、後は自然に乾くまで放っておくことにした。

雨足は一層と強まり、時折稲光が空を白く染め上げていた。その様を一瞥すると、貴虎は食堂へ向け歩を進めていった。

食堂に入るとテーブルの一面に三人の人影が。

座っていたのは提督・龍田・天龍で、貴虎に気付いた龍田が手招きをしている。

天龍は「よう」と手を軽く上げ、提督は貴虎の方を軽く一瞥した後、そのまま食事を続ける。

食堂の職員から定食の乗せられたお盆を受け取ると、貴虎は三人の座る席へと向かっていく。

「お疲れ様です」

「仕事は順調か？」

提督が言う。

「はい、丁度一区切りついた所です」

貴虎は、お盆をテーブルの上に乗せ席に着いた。

「仕事って何やってんだ？」

隣に座っていた天龍が、声をかけてくる。

「哨戒任務の編成及びスケジュール表の作成だ。暫くは私が担当する事になった」

「ふーん、なるほどな」

軽く相槌を打ち、天龍はスプーンで目の前のカレーをよそって口に運ぶ。

「面倒くさくねえか？人の予定をやり繰りするなんて、オレは考えるだけで頭が痛くなってきちまうんだけど」



「この程度の仕事など、何の問題も無い。むしろ楽な部類だ」

「天龍ちゃん、細かい事考えるの苦手なものね」

「うるせえ、どうせオレは頭良くねえよ」

口を尖らせた天龍は、皿を手で持ち、残りのカレーを一気にかっこんだ。

龍田が「あーん、拗ねちゃ嫌よ天龍ちゃん」と言いつつ、水の入ったコップを手渡した。

まだ口の中に残るカレーを、天龍は手渡された水と共に飲み干していく。

天龍の言動を茶化すようにしつつ、一方で彼女を気遣う行動をする龍田。二人が一緒にいる時は、大抵こういう流れが見られる。数日この場所で生活して、これが龍田なりのコミュニケーションの取り方なのだろうと、貴虎は理解していた。

そんないつものやり取りを眺めつつ、貴虎は食事をとり始める。

「龍田、例の点検工事はどうなっている」

提督が口を開いた。

「第四会議室の空調工事なら、今日中に終わる予定ですよお」

「そうか、なら明日いっぱい資料と書類の整理を済ませておけ」

「了解しましたあ」

「第四会議室つてずっと使われないで、書類置き場になってる部屋だよな」

と、天龍。

「ええ、そうよお。だからいつそのこと改装をして、資料の閲覧室にしようって事になったの。それで手始めに壊れたままの空調を整備してもらおうの」

「そいつは良いな。あそこ夏場に入ると暑くてたまんないんだよ。書類を探したら数分と経たずに、汗だくになっちまうんだもん」

その暑さを思い出しか、天龍は手を団扇にして扇ぐ仕草をする。

「別棟以外にも空調の整備は入るのだな」

何の気なしに貴虎が呟くと。

「え？どういふこと貴虎さん？」

龍田が不思議そうな表情で聞いてきた。

「さつき私と入れ替わりに、空調整備の作業員が別棟にやってきたのだが」

「そんなはずないわあ。別棟の空調は、この前点検したばかりよお」

「そうなのか？では、彼が場所を間違えてしまったという事か？」

「それも無いわよ。作業員さんは、本土から泊まり込みで来ている他所の人だけど、何度もウチに来てる人だから。場所を間違えるなんて事はありませんわよお」

「……貴虎、そいつに何か妙な所は無かったか？」

向かいに座る提督が、真剣な表情で聞いてくる。

「妙な所？……いえ、特には」

「些細な事で構わん、言動、態度、動き。何かしらの接触はあったはずだ」

「私に対し、こちらの責任者かと尋ねてきましたが。あとは、そのまま別れただけで……」

貴虎の言葉を聞くや否や提督は

「天龍、貴虎すぐに別棟に行つてその作業員を捕まえてこい」

と命令を下した。

「え？いきなりどうしたつてんだよ提督」

天龍が戸惑いの声を上げる。

「軍の関係者は責任者なんて言い方はしない、階級や役職で呼ぶのが普通だ。が、それ以前に何度もこの基地に出入りしている人間が、俺の顔を知らないはずはない。貴虎が出会ったそいつは、ニセモノだ」  
「っ!？」

「マジかよ?」

貴虎と天龍は驚愕する。

「ちっ!わかった。行くぜ貴虎!」

「ああ!」

席を立った二人は即座に駆け出した。と、そこへ

「大変大変大変だよー!!!」

那珂が大慌てで食堂へと駆け込んできた。そして、丁度出て行こう

としていた貴虎に勢いよく衝突してしまふ。

「うわわあー！」

ぶつかつた衝撃で那珂は後ろに倒れそうになるが、貴虎が素早くその腕を掴み、引き寄せた。

おかげで抱き抱えられるような形になりつつも、なんとか那珂はフランスを保つて立ち直る。

「大丈夫か？」

貴虎の問いかけに対し

「あ、ありがとうございます……」

と那珂は言う。突然の衝撃に彼女は呆けていたが、ハツと我に返ると、素早く提督の元へ駆けていき大声で告げた。

「人が、倒れて縛られてた！」

---

話は少し前に遡る。

「すみません那珂さん。書類を運ぶのを手伝わせてしまつて」

「気にしないでいいよ。後輩を大切にするのも、先輩アイドルの大事な務めなんだから」

「ありがとうございます」

作戦立案、研究などに使用した書類の片づけを命じられた吹雪。そのために第四会議室へ向かう途中で、彼女は那珂と出会う。那珂は事情を聞くと、進んで手伝いを始めたのであった。

「それにしてもくワイイ後輩アイドルが出来て、那珂ちゃん幸せだよ」

吹雪へ向けて那珂は、満面の笑顔を向ける。

「ア、アイドルっていつの間に……」

「え？こないだ一緒に踊ったじゃん。だから吹雪ちゃんもアイドルの仲間入りだよ！」

一層にこやかに became 笑顔で、嬉しそうに告げる那珂。が、その一方で吹雪は乾いた笑い声を漏らす。

「は、あはは。わ、私には那珂さんみたいなパフォーマンスするのは、

荷が重いかなって……」

「あーそれダメ！」

那珂がピシヤリと言う。

「あ、え？」

「那珂さんなんて、他人ギョーギな言い方は可愛くないからダメだよ！那珂ちゃんって呼んでね」

「え……でも先輩にちゃん付けするのは、ちよつと」

「いいからいいから、呼んでみて。せーの！」

「えーつと……那珂、ちゃん？」

「うん！その調子！ハイもう一回！」

「な、那珂ちゃん！」

「うん！吹雪ちゃんベリーグッド！」

満面の笑みを浮かべる那珂。

「こんな風に呼び合えば、みくんなすぐに、とくつても仲良くなれて、自然に笑顔になれる気がするでしょ？」

「は、はあ」

「女の子はみんなアイドル！笑顔が一番なんだからね！」

資料を小脇に抱えたまま、片手でVサインを作り、那珂はその手を高く掲げる。

吹雪は戸惑った様子で、マイペースに話す那珂を見ていたが、次第にその屈託の無い笑顔に釣られるように、笑みを浮かべていたのだった。

「そうですね、笑顔は大切ですよ！」

「分かってきたねー吹雪ちゃんも。それじゃあ、みんなをもつと笑顔にするために、後で歌とダンス練習をしよう！」

「そ、それは遠慮したいかな、なんて……あ、そろそろ会議室ですよー」  
流石にこれ以上付き合うのは危険だと判断したのか、吹雪は目的の会議室へ向け駆け出していく。

「もく連れないなく吹雪ちゃんってば」

那珂は不満げに口を尖らせながら、吹雪の後を追った。

吹雪がゆつくりとドアを開く。するとドアの隙間から、むわつとし

た熱氣と古ぼけた紙の臭いが溢れ出す。

その不快さに吹雪は顔をしかめた。

「うわっ！何これ！」

遅れてたどり着いた那珂が、目を丸くする。

「この部屋は空調が壊れてて、いつもこの調子なんです」

「うゝ入りたくないなあ」

「私も嫌ですよ。でもワガママは言ってもらえません。さつさと用事を済ませちゃいましょう」

吹雪は入口のそばのスイッチに手をかけた。すると、数度の点滅の後に、天井に備え付けられている蛍光灯が室内を照らし出す。

「さあ、行きましょう。那珂ちゃん」

「うゝ……ムシムシして気持ちわるゝい」

那珂は部屋の暑さに顔をしかめつつ、額を拭う。入って間もないというのに、籠っていた熱氣のせいで額に汗がにじんでいた。

「……ううっ……うう」

「あれ？那珂ちゃん、何か聞こえませんか？」

那珂の前を歩く吹雪が振り返る。

「え？」

吹雪に言われ、那珂は耳を澄ましてみる。

「……うう、うう」

「何だろう……誰かの、声？」

謎の声らしきものの出所を探り、部屋の中を見渡す二人。

「あつ！あそこです！」

吹雪が指さした先にある机の影で、何かが蠢いた。

那珂と吹雪は顔を見合わせて頷くと、ゆっくりその場所へと近づいていく。

「!？」

二人は驚愕した。そこには猿ぐつわを咬まされ、両手足を縛られた下着姿の男が横たわっていたのだった。

「だ、大丈夫ですか!？」

吹雪は倒れている男の傍に駆け寄り、猿ぐつわに手をかける。どう

やら男は気を失っているようだった。

続いて那珂は、男を縛り上げているロープを解こうと試みる。しかし固く縛られたロープは簡単には外れない。

吹雪が猿ぐつわを外すのとほぼ同時に、男が意識を取り戻した。

「うっ……っ、ここは？」

呻くように声を絞り出した中年の男。吹雪はその顔に見覚えがあった。

「あなたは！」

「知ってるの吹雪ちゃん？」

「はい、時々本土からやって来る作業員さんです。横須賀鎮守府所属のはずなんですけど、那珂ちゃん知らないんですか？」

「横須賀って働いている人がいっぱいいるからなあ。那珂ちゃん、この人の事はわかんないや」

「き、君達は、ここの艦娘か？」

「はい。それにしても、一体どうしたんですか？」

吹雪の質問に対し、朦朧とする意識の中、男は記憶を辿りだす。

「う……俺は、空調整備のために、この部屋に来て……そうだ、突然後ろから頭に衝撃を受けて……」

「誰かにぶたれちゃったって事？」

那珂の言葉に男は頷く。

「一体誰がこんな事を……」

「とにかく提督に知らせなきゃ！那珂ちゃんが行ってくる。吹雪ちゃんも作業員さんを見ていてあげて」

「はい、よろしくお願いします！」

「作業員さん、ロープ切る道具も持ってくるから、ちよつと我慢しててね」

そう告げると那珂は、提督達の元へと駆け出して行った。

「……やはりな」

報告を聞いた提督は、貴虎と天龍へ目配せをする。それに無言で頷くと、二人は別棟へ向け全速力で駆け出した。

「え、何？どういう事？」

「緊急事態よ、理由は走りながら話すわあ。那珂ちゃんついて来て、みんなを集めるわよお！」

「う、うん！」

そうして龍田と那珂も食堂を後にする。

独り残った提督は静かに目を閉じ、深呼吸をする。そして、ゆっくりと車椅子を動かし始めた。

「二通り見て回ったけれど大した物は無いな。偶然たどり着いた世界、期待するだけ無駄か」

別棟の廊下を進みつつ男は一人ごちる。手持ち無沙汰なのか、かぶっていた作業帽を手に取り、右手でクルクルと

回している。

「さて、ここが最後の部屋かな」

男は貴虎の部屋のドアを開けて、足を踏み入れる。

廊下からの光が差し込む薄暗い室内を、ぐるりと一周歩いてみるが、男の目に留まるような逸品は見受けられない。

「机にベッド、本棚……他の部屋と同じような、殺風景とした部屋だね。それと、土だけが入った鉢植え。寂しさが際立つなあ」

男は完全に興味を失った様子で、手にした作業帽を目深にかぶり直す。部屋を後にしようとした。

と、その時

「ん？」

突如として目の前のドアが、部屋全体が、淡い黄金色に染まりだす。

男は何事かと後ろを振り返る。すると、机の上に置いてある鉢植えから光が溢れだしているのが目に映った。

「これは……」

机の上の鉢植えを男は手に取る。すると、鉢植えの中央部の土がわずかに盛り上がり始めているのが見られた。

覆いかぶさる土を押しつけて、何かが飛び出そうとしている。男は

固唾を飲んでその様子を見つめる。

そして一瞬の後、土を掻き分けるようにして双葉が中から姿を現した。宝石のように透き通る緑色をしたそれは、黄金色の輝きに包まれている。やがて溢れ出る光は徐々に弱まってゆき、部屋は再び薄暗い闇に包まれる。

その奇跡とも呼べるような光景を見ていた男は笑みを浮かべ、植木鉢を手に取り静かに、だが興奮を抑えきれないといった様子で呟いた。

「素晴らしいね、こいつは大したお宝だ」

と、その時、一带に警報音が鳴り響きだす。

「意外と早かったね。まあ思わぬ収穫もあったし、そろそろ退散するとしよう」

そう呟くと、男は手にした帽子をかぶり直し、植木鉢を抱え、貴虎の部屋から飛び出した。そして部屋のすぐ近くの階段を駆け下りはじめる。丁度その時、階段の踊り場へと、白い軍服に身を包んだ男が駆け込んで来た。

「何をしている貴様！」

貴虎は階上の男へ向け叫ぶと、全力で階段を駆け上がる。対して侵入者は身をひらりと翻し逃走を図る。

追跡してくる貴虎を尻目に、廊下を一目散に駆けていく。その先には、もう一つの階段があった。探索する間に男は建物の構造を把握していた。そのまま一気に階下へと駆け下りて、貴虎を撒こうという算段である。しかし……

「もう逃げ場はねえぞ！」

反対側の階段を昇ってきた天龍が、男の退路を塞ごうと立ちはだかった。男は、天龍の姿を確認すると同時に急停止する。

そして後を追いかけてきた貴虎も、男と数メートルの間合いをとつて立ち止まる。そのまま飛びかかる事も出来たが、万が一に備え警戒するに越したことはない。

「うーん、まさかこんなに早く来られてしまうとはね。まいったまいった」



挟み撃ちにされ、不利な状況に陥ったにも関わらず、おどけた調子で男は言う。

「随分と余裕だな。舐めやがって」

「無駄な抵抗はやめて、大人しく投降しろ。さもなくば……」

男に向けて警告を告げる貴虎は、彼の手にしたある物に気付き、眉をひそめた。

「その鉢植えは?!」

「悪いけど、こんな所で捕まる気は無いよ。こんな素晴らしいお宝を手に入れたんだから」

見せびらかすような仕草で鉢植えを振ると、男は廊下の窓へと向き直り、それをぶち破って外へと飛び出した。

「なっ?!」

「ここは三階だぞーマジかよ?!」

驚愕する貴虎と天龍は、男が破った窓へと駆け寄り、下に目を向ける。だがそこに人影は無い。

「こつちだよ、お二人さん」

顔を上げ、声のした方向へ目を向ける貴虎と天龍。するとそこには、木の枝の上に立つ男の姿があった。

「じゃあね」

ひらひらと手を振ると、男は軽やかに跳躍し、地面へと降り立つ。男の姿は夕闇と、生い茂る木々に紛れて、あっという間に見えなくなってしまう。

「くそッ！逃げられた!」

天龍が苛立たしげに、窓枠を拳で叩く。

「追いかけるぞー!」

と言うや否や貴虎は、窓枠に足をかけ跳躍した。

貴虎は地面へと落ちる瞬間に、体を転がし衝撃を分散させる。転がる体が、水たまりに溜まった雨水を周囲に飛び散らせた。

勢いよく数回転した貴虎は、何事もなかったかのように、スツと立ち上がる。地面がぬかるんで柔らかくなっていたおかげで、体にこれといった痛みは無かった。

と、後ろの方でバシヤリ！ドスン！と音がする。

振り返ると、天龍が尻餅をついて倒れているのが目に映る。どうやら着地の際に足を滑らせたらしい。

「大丈夫か？」

差し伸べられた手を取り、天龍が立ち上がる。

「俺としたことが、滑っちゃった。でも大した事ねえよ」

そして、貴虎と天龍は男の後を追ひ、森の中を駆けていった。

「しっかし、あの男と言いお前と言ひ、ムチャしやがんな」

「この雨と地面の状態なら大丈夫だと思つた。お前の方こそ平気なのか？」

「へっ！あれくらいで怪我するほど、ヤワな鍛え方してねえよ」

「そうか。だがそれにしてもあの男、何処へ……」

「このまま闇雲に二人で走つてもしょうがねえな。二手に分かれようぜ」

「ああ」

「オレは港に近い方へ行つてみる。ヤツがこの島から出るとしたら、そこしか無えからな」

「わかつた。私はこのまま森の中を搜索する」

「おう、じゃあな！」

天龍は右手側に進路を変えて走りゆく。その後ろ姿を一瞥すると、貴虎も正面へと駆け出すのであつた。

【第八話】 part 3

執務室の扉が静かに開く。

夷提督<sup>えいひす</sup>は、明かりを点け部屋の中を見渡す。所々に物色された後がある。侵入者がここへ来たのは明らかだった。

車椅子から立ち上がり、片足を引き摺るように歩きながら、備え付けの金庫へと近づく。

金庫の扉は開け放たれている。無理やり抉じ開けられたのではなく、しつかりとした手順をもってロックを外されていた。それを見るだけで、侵入者が素人では無い事が窺い知れる。

しかしながら、その中に保管されていた機密文書は手つかずであった。

「これが狙いではなかったか……」

ポツリと呟くと提督は、金庫の置いてある棚をゆっくりと横にずらし始める。

棚を動かし終えた提督は、その場にしゃがみ込む。棚の置いてあった床の上には、小さな扉が取り付けられていた。

それを開き、内側にしまい込まれていた物を取り出し、机の上に置く。ゴトリと重い金属音をたてて置かれたそれを、提督はジツと見つめる。

(できればコレは使いたくないんだがな……)

「……奴は何処へ？」

貴虎は、肩を上下させながら呼吸を整える。

行方を晦ました侵入者が向かったと思われる方へ走っていた貴虎は今、演習場の前にやってきていた。

ぐるりと周囲を見渡すが、人の姿はおろか、何の痕跡も見当たらない。

(一度天龍と合流してみるべきだろうか)

と、貴虎が再び走り出そうとした時、演習場の方から足音が聞こえ

てきた。

「貴虎さん！」

演習場の入口の方へ視線を向けると、鳳翔が貴虎の元へと駆けてくるのが見えた。

「鳳翔さん？」

見ると鳳翔は、手に長弓を持ち、矢筒を背負い、左肩に長い板のよきな物を装着していた。その意匠は、飛行機用の滑走路を思い起こさせる。

「状況は通信で聞きました。私も捜索に協力致します」

「ありがとうございます。だがその姿は、もしや……」

「はい、これが軽空母たる私の艦装です。そういえば、お見せになるのは初めてでしたね」

艦娘について勉強する過程で貴虎は、空母の艦娘の艦装についての知識は得ていた。

空母の艦娘の艦装には、大きく分けて二つの種類がある。弓道を基調にしたものと陰陽道を模したもの。前者は弓矢を用いて、後者は式神を用いて艦載機を運用する。無論、鳳翔は前者のタイプである。

だが貴虎は、それを知識として得てはいたものの、まだ実際に目にしたことは無い。

従って、撃ちだされた矢・紙切れが航空機へ変化するという事については、半信半疑であったものの

「貴虎さんは、雨の当たらない場所で暫く休んでいて下さい。私が艦載機で侵入者を探し出します」

そう告げる鳳翔の淀みない微笑みに、どこか頼もしさを感じ、抱いていた疑念を払拭する。

「分かりました。お願いします」

貴虎は、演習場の入口傍の軒下へ立ち、鳳翔の様子を見守る事とした。

激しい風雨が打ちつける中、鳳翔はそれを全く意に介さずに、矢筒から矢を取り出し弓へと番える。

そして姿勢を整えたまま、時が来るのを待つ。

「……風向き、良し」

風向きが追い風へと変わる。その瞬間を肌で感じ取ると鳳翔は、力強くも、しなやかさを感じさせる動作で弦を引きしぼり矢を放つ。

放たれた矢は真つ直ぐに飛んでいき、暫くの後に一瞬だけ白い光に包まれる。次の瞬間、三機の白い戦闘機「零式艦戦21型」へと矢が姿を変えた。

その大きさは、実物の戦闘機には遠く及ばない程、ラジコン飛行機と言っても差支えがない位に小型であったが、風を切るプロペラ音、唸りを上げるエンジン音の猛々しさは、本物のそれに全く引けを取らないように感じられる。

三機の21型は、前に広がる森の木々の手前で急上昇をすると、そのまま高度を上げ、森の上空を飛行し始めた。

「これが空母の艦娘の力……」

空母艦娘が艦載機を飛ばす瞬間を目の当たりにし、驚嘆する貴虎。矢が飛行機へと姿を変えするという、不可思議な現象自体もそうではあるが、それを行った鳳翔の悠々たる動作と佇まい、そこから溢れ出る、普段の鳳翔からは見られない、凜とした空気もまた貴虎に驚きを与えていた。

（日没直前の悪天候、風も強く航空機運用をするには非常に厳しい環境ですが、闇雲に走り回るよりは遥かに良いでしょう）

鳳翔は上空へと視線を向け、瞳を閉じ、意識を集中し始めた。

初めは真つ暗だった視界が、次第に晴れわたっていく。やがて鳳翔の意識は、飛行する零戦21型の一機とシンクロし、まるで自分自身が宙を舞い、森を見下ろしているかのような感覚に包まれる。

（この短距離なら、索敵機でなくとも十分に対応できますが……）

シンクロした機体から眼下を見渡す。そこからは風にさざめく森の木々が見えるだけで、侵入者の様子は全く窺い知る事ができない。他の機体からの索敵情報も鳳翔に送られてくるが、その中に有益なものはない。

（やはり、もつと森に近づかないと……でもこの悪天候の中、無暗に突

入しても衝突の可能性が……艦爆を出撃させての絨毯爆撃で燻り出すのは……ダメ、そんなのは危険過ぎます)

鳳翔が手をこまねいていると、他の機体から再び情報が送られてきた。

(これは……試してみる価値はあるかもしれませんが)

その情報を受け取った鳳翔の脳裏に、考えが浮かんだ。

瞳を開き、意識を航空機から切り離すと、鳳翔は矢筒から新たに取り出した一本の矢を番え、放つ。

航空機へと姿を変えたそれは、グングンと高度を上げ、目的の場所へ向けて真っ直ぐに飛行していった。

森の中を駆けていた男は後方を確認し、誰もいないと分かると速度を緩め、ゆったりとした歩調で歩き出す。

「たまたま迷い込んだ世界で、こんな貴重なお宝が見つかるとはね。思わぬ幸運だ」

手に持った鉢植えをかざす様にしながら、じつくりと眺める。

(それにしても、このお宝、そして彼が何故こんな所にいるのか、考えてみれば謎だらけだ。少なくとも、ここは本来彼がいるべき世界でない、という事は確かなんだろうけど……)

男は思考を巡らせていたが、フツと笑いを漏らし独りごちる。

「まあ、僕には関係ない事だ。ひとまずこの世界の探索を続けるとしよう。掘り出し物が他にも見つかるかもしれないし」

そうして再び駆け出そうとした時、ふと視界の端、遠方で何かがひらめくのが見えた。

男は異様な気配を感じると、瞬時に近くの木の陰に身を潜めた。次の瞬間、凄まじい轟音と衝撃が周囲の空気をピリピリと震わせた。更に少し遅れて熱風が吹き付ける。

「流石にそう簡単には、行かせてくれないか」

木の陰から飛び出した男は、踵を返し素早く走り出す。その背後で再び爆音が鳴り響いた。

森の上空で、三機の零戦21型が円を描くように旋回をしている。時折、風雨の影響でふらつきながらも、編隊の間隔は常に一定に保たれていた。

その編隊の輪の中心を目掛けて、一機の爆撃機「九九式艦爆」が飛び込んでいった。その一帯は森が開けており、飛行の障害になるものは何も無い。目標へ向け降下する途中で、上昇してくる——先に突入していた——もう一機とすれ違う。

標的は、森の中の池の中央部に佇む大岩であった。最初の爆撃を受けて、その中心部は大きく抉れている。

突入した艦爆は、そこへ向け搭載していた爆弾を投下する。岩に命中した爆弾の爆発が、周囲を赤く照らし出す。

そして入れ替わるように、三機目の艦爆が池を目掛けて突入してきた。その後ろには、上空を旋回していた零戦の編隊が連なっていた。

航空機から鳳翔に送られてきた観測情報により、森の中の一面が開けている事、そこに池と大岩が存在するという事が分かった。それを知った鳳翔は、賭けに出たのだった。

大岩を爆撃し、その衝撃により侵入者を燻り出す。更に爆炎で薄暗い森の中が照らされるほんの僅かな時間で、侵入者の姿を見つけようと試みたのだ。

万が一爆弾が目標を逸れても、池に落ちれば火災が広がる心配はない。仮に炎が木々に燃え移ったとしても、森が大きく開けたこの場所なら、降り注ぐ雨によって速やかに消火される。そう判断して作戦を実行した。

もちろん不確定要素は沢山あった。池から遠く離れた所に侵入者がいってしまったら、森が照らされる僅かな時間で侵入者を見つけることが出来なければ、作戦は破綻する。だが彼女はそれに賭けた、可能性は低いと理解していても。

(お願い、見つかって！)

鳳翔は祈りながら、零戦の一機と意識をシンクロさせた。

眼前の艦爆が投下した爆弾が着弾する直前に、三機の零戦は機首を水平に上げ、森の中へと散開していった。程なくして爆炎で森の中が照らし出される。

(……!?見つけた!)

視線の先には、逃走する男の後ろ姿があった。鳳翔は賭けに勝ったのだ。

しかし彼女は気を緩めない。これからが本番だとばかりに口を、意識を引き締め、気合いを込める。

すると零戦の気配を感じたのか、男は一瞬振り返る。その顔は帽子に隠れて表情を窺い知る事はできないが、直後に走る速度を上げた事から、警戒はしているのだろうと推測出来た。

(手荒な事はしたくありませんが)

男の後方を飛行する零戦は、翼を傾け森の木々をかわしながら機銃掃射を開始した。放たれた弾丸が逃走者の横、人間一人分の間隔を開けた位置に着弾し、泥を中空に巻き上げる。威嚇射撃だった。

だが男は、それに怯むことなく走り続ける。そして零戦が二度目の機銃掃射をしようとした瞬間、男は右手で懐から何かを取り出し、振り返ることなくそれを零戦へ向けた。

その一瞬の後、零戦の片翼に複数の穴が開けられた。バランスを失った戦闘機は、きりもみ回転をしながら地面へと激突。同時に鳳翔の視界はブラックアウトした。

「っ！」

戦闘機から意識を切り離された鳳翔は、瞳を開けかぶりを振る。

「大丈夫か？」

貴虎が鳳翔の傍へ駆け寄る。

「一機落とされました。相手は銃のような物を持っています。」

「一筋縄ではいかないようだな」

「ですが、みすみす取り逃がす訳にはいきません。何としてでも追い詰めます」

強い意志を宿した瞳で、森の奥を見やる鳳翔。再びその瞳を閉じ、彼女は意識を集中させた。



夷提督は車椅子に腰をかけ、執務室を後にした。丁度その時、龍田が小走りに近づいてきた。

「通信が入りました。鳳翔さんの機体が、侵入者を発見たらしいですよお」

「分かった。俺もそちらへ行こう」

「提督自ら危険な所に赴こうなんて、秘書艦としては感心しませんね」

「自分の家を土足で荒らし回る輩の顔を、拝んでおきたくてな。お前もそう思うだろう」

龍田はクスリと笑い、頷くと、提督の背後へと回りこむ。

「それじゃあ飛ばしますよ、振り落とされしないで下さい」

龍田に押され動き出した提督の座る車椅子は、徐々にそのスピードを上げていった。

「貴虎さん、その茂みに隠れて下さいー！」

暫しの間沈黙していた鳳翔が、突然声をあげた。

貴虎は彼女の言う通り、傍の茂みに身を潜める。鳳翔もすぐ隣にしゃがみ込んだ。

すると雨音に混じって、こちらへ向けて駆け込んでくるような足音が聞こえてきた。

茂みの隙間から覗き込む。すると、森の中から作業着に身を包んだ男が飛び出してくるのが見えた。その後方には、鳳翔の放った戦闘機が。その機銃が小刻みに音を立て、弾丸を吐き出す。瞬間、男は方向を転換し、演習場の入口へと駆け込んでいった。

その様子を見ていた鳳翔は、小さく頷いた。

鳳翔は残った二機の戦闘機を巧みに操りながら、森の中を逃げる男を追い回し続けていた。正面、側面、背後、上方、狭く見通しの悪い中、様々な軌道を交え、敵を翻弄し続けた。途中で更に機体を一機撃

墜されてしまったものの、彼女は目論見通り、男を演習場前へとおびき出すことに成功した。戦闘機の追撃を振り切る為に、室内へ入ろうとすると予想しての作戦だった。

「貴虎さん追いかけて下さい！」

その言葉に力強く頷き、茂みから勢いよく飛び出した貴虎は、全速力で男の後を追いつめた。

水に濡れた床上の痕跡を確かめながら、廊下を駆けていく。すると貴虎の背後から声がかかる。

「貴虎！」

振り返ると天龍が向かってるのが見えた。その手には、刃が赤く着色された独特な形の刀が握られていた。

天龍は貴虎に追いつき並走する。

「それは？」

貴虎が問いかける。

「へへっ、オレ様自慢の武器だ。話は通信で聞いたんだけどな、コレ取りに行つてたら少し遅れちゃった。それはそうと、野郎この先にいるんだな」

「ああ、鳳翔さんのおかげだ」

「ホント凄えよなあの人。この悪天候の中で正確に艦載機飛ばすなんて、普通じゃ出来ねえよ。今度はオレらがすっかり頑張らねえと。鳳翔さんに会わせる顔が無くなっちゃうぜ」

「だが奴は銃で武装しているようだ。気をつけろ」

「拳銃なんぞ、深海棲艦の砲撃に比べたら豆鉄砲みたいなもんだ。武装した艦娘の装甲は易々と貫けねえよ」

天龍は自身有り気に、纏っている制服を手のひらでシュツと撫でる。

貴虎は前方へ視線を向ける。その先には武道場の扉があり、侵入者の物と思われる足跡は、その先に続いていた。

扉の前にたどり着いた二人は、勢いよくそれを開く。薄暗い武道場の中央には、作業着姿の男が佇んでいる。

「さあ、追いかけてこはおしまいだ。神妙にお縄につきやがれ！」

侵入者へ刀の切っ先を向けつつ、天龍が叫ぶ。

「ふふっ、僕としたことが、ただの人間に追い付かれてしまうなんて。不覚だよ。でも、さしたる苦勞も無しに成果を上げてしまうのも味気ないと思つてた所だし、丁度いいのかな？」

入口の方へ向き直り、肩をすくめる青年。その態度には大きな余裕が見てとれた。

「それにしても、思いのほかやるようだね、眼帯のお嬢さん。それと……呉島貴虎くん」

「何故俺の名を!？」

青年が自分の名を言い当てた事に驚愕する貴虎。

「何だ？貴虎、あいつお前の知り合いか？」

「いや、知らない男だ」

貴虎の名を知る得体の知れない青年、彼は貴虎の戸惑う様を見て、不敵な笑みを浮かべている。

「一体貴様は何者だ！何の目的でこの基地に潜入した！答えろ！」

貴虎が叫んだその時、背後から声が聞こえてきた。

「丁度いい、俺にも是非聞かせて貰いたい」

提督、龍田、続いて鳳翔の三人が演習場内へとやってきた。

「提督？何故ここに」

「無礼な客人に対するおもてなしだ」

「そうよお、とっておきの……ね」

龍田が歩み出る。その手には、赤い刃の付いた薙刀のような武器が握られていた。

彼女は天龍の隣に立ち構えを取る。その様を見て天龍は、ニヤリと笑い自らの武器を握り直す。

「さて、貴虎の質問に答えてもらおうか」

目深にかぶった軍帽の影から鋭い眼光を飛ばしつつ、提督が言う。「断る、と言ったら？」

「ド派手な歓迎パーティーを開くことになるな。そこの娘達が盛大にもてなしてくれるだろう」

「そいつは魅力的だ。でも、僕の趣味じゃないな」

そう言うと男は懐に手を伸ばし、奇妙な意匠の施された銃を構えた。

だが、彼の前に立ちはだかる貴虎、天龍、龍田の三人にはいずれも怯んだ様子は見られない。

「私達三人を相手に、銃一丁は分が悪いぞ」

「良いこと教えてあげるわ。私たちの制服も、貴虎さんの軍服も防弾処理が施されているのよ。並みの銃なんかじゃ太刀打ちできないわあ」

「無駄な抵抗はしねえ方が身のためだぞ」

三人は少しずつ男との間合いを詰めていく。悠々と歩み寄る彼らからは、歴戦の勇士の風格が漂う。それは普通の人間であれば、気圧されてしまう程に……

だが青年は、それでもなお余裕の態度を崩さない。

「やれやれ、仕方がないな」

青年は再び懐に手を伸ばし、何かを取り出す。それは一枚のカードであった。手にした銃をクルリと一回転させ、そのカードを銃の側面のスロットに挿入。同時に銃身を引き延ばす。

【KAMEN RIDE！】

銃から謎の音声と、けたたましい電子音が鳴り響く。それに対し貴虎達は身構える。

が、青年は銃口を、近づくと三人から逸らし天井へと向けた。その様子に訝しむ一同。

それをよそに青年は、力強く声をあげ、銃のトリガーを引いた。

「変身！」

【DIEND!!】

銃口から光が放たれ、男の頭上で広がると共に、バーコードのようなマークを虚空に刻む。

同時に男の体の周りには人型の残像が三つ出現し、前後左右へと動き回り、男の身体と交錯を繰り返す。

やがて残像は、男の体に重なり一体化。そして強化装甲とマスクを身に付けた戦士が出現する。

更に空中に浮かんだマークが、青い板のようなエネルギーを形成。回転しながら落下するそれは、戦士の頭に突き刺さる様に同化し、青と黒のストライプが特徴的なマスクを造り上げる。その変化は一瞬の出来事であった。

「その姿は……」

「アーマードライダーだど!？」

突然のことに艦娘達が呆気にとられている中で、夷提督と貴虎だけがそう言葉を発した。

強化装甲を身に纏った男の姿。それは貴虎の知るアーマードライダーのそれに酷似していた。

驚愕する貴虎を見て満足気な男の笑いが「フツ」とマスクの奥から漏れる。

「アーマードライダー、君の居た世界ではそう呼ばれてるんだったね。だが僕は、そう呼ばれるのは好みじゃないな」

男は銃を弄ぶようにクルリと回す。

「僕の名前はデイエンド。数多の世界を股にかける通りすがりの仮面ライダーさ、覚えておきたまえ」

「仮面、ライダー……?？」

「が  
デイエンド、そう名乗った男の姿に唾然としていた艦娘達であった

「はあ? 可燃だかライターだかなんだか知らねえが、そんなこけおどしで俺たちが怯むとでも思ってたのか!？」

いち早く我に返った天龍が威勢よく叫ぶ。

「そうねえ、見た目だけは強そうになったみたいだけど、それだけで何とかできる程、私達は甘くは無いわよお」

龍田が薙刀を構え直し臨戦態勢をとる。

「天龍、龍田! 油断するな、奴は危険だ!」

前に出ようとする二人を、貴虎が手で制する。

「いや、彼女達の言う事も、もつともだ」

「何?」

「正直言っつて君達の実力は僕には分からない。数の上では不利。もし

かすると僕の勝つ見込みは少ないのかもしれない」

「だったらウダウダ言っただとつとと降参」

天龍が言い終わらないうちに

「なので、万全を期して助っ人を呼ばせてもらおう」

素早く動いたデイエンドの手には、新たなカードが握られていた。

一瞬のうちにそのカードを銃に装填すると、デイエンドは再び銃口を上に向けて引き金を引いた。

【KAMEN RIDE!】【RIOTOROOPER!】

電子音声と共に銃口から放たれた光弾が人型を形成。交錯する人型の残像が実体化し、銀色の面に銅色のアーマーを身につけた三人の戦士が出現した。

「何だ?!」

「君達の後ろの弓道袴のお嬢さんを合わせて四対四、これで数の上では対等になったわけだ」

「くっ、次から次へと妙なマネしやがって……」

歯噛みする天龍。

「面白い手品ねえ。私にもタネを教えてほしいわあ」

余裕ありげに言う龍田であったが、その首筋には、汗が一筋伝わり落ちる。

「提督、下がって下さい。私も出ます」

鳳翔が一步進み出る。弓を握る手に力がこもり、ギリリと音をたてる。

「おっと、勘違いしないでくれたまえ。僕は無駄な争いをするつもりは無い」

「どういう事だ」

「……交渉か」

夷提督が言う。

「その通り。察しが良くて助かるよ。こうでもしないと、いつ襲い掛かられるか分からないしね」

「交渉だと?」

「僕はお宝が手に入ればそれで構わない」

デイエンドは植木鉢を手にし、目の前に掲げた。同時に鉢が淡く発光を始める。

「!?」

それを目の当たりにした貴虎の瞳が、大きく見開かれる。

「なるほど、お前の目的はそれか」

と提督。

「うん、これを僕に譲ってくれるのなら、大人しく退散させてもらおうよ。どうだろう、貴虎くん？」

デイエンドは問いかける。皆の視線が貴虎に注がれる。

「……貴様は、それが何なのか分かってるのか？」

「黄金の果実。世界を変える程の強大な力と可能性を秘めた物。これを巡って、君のいた世界では争奪戦が繰り広げられている。まあ、これは果実そのものに比べ、随分と力は少ないみたいだけどね」

デイエンドの言う事は正解だった。もし彼が何も知らずに鉢を奪おうとしていたのなら、付け入る隙はあったかもしれない。だが彼は貴虎のいた世界、黄金の果実についての知識を持っていた。

そして、彼が手にしている黄金の果実の力の一片は、その力を確実に発現させている。

この事が貴虎の決断を鈍らせる。

(この場の皆の安全は確保したい。だが、あれを手にした男が力をどうするか分からない以上……)

困惑の表情を浮かべる貴虎に対して、デイエンドは更なる提案を持ちかけてきた。

「迷う必要は無いと思うんだけど、条件に不満があるなら仕方ない、出血大サービスだ。貴虎くん、もし望むなら元の世界にキミを連れ帰ってあげても構わないよ」

「何だ?!」

「信じられない、といった表情をしてるね。でも、実際僕にはそれが可能なんだ」

その時、貴虎の頭にサガラとの会話が思い起こされる。

「お前の力で私を元の世界に戻す事は可能か？」

「残念だがそいつは無理だ。俺に普通の人間を次元移動させるような力は無い」

「そうか」

「すまないが、それは自分で方法を……いや、異世界を渡り歩く戦士の力を借りれば、あるいは……」

(もしやこの男が……)

「デイエンドは先程自らのことを「数多の世界を股にかける、通りすがりの仮面ライダー」と称していた。

そして彼が突如としてこの基地に現れたという事実、貴虎のいた世界と黄金の果実の知識を持つているという事、それらを合わせて考えると、彼の言葉には信憑性が感じられた。

「さあ、決断するならば早くしたまえ。僕の気が変わらないうちにね」  
「元の世界？黄金の果実？一体何の話をしてるんだ？」

貴虎の後ろに控えている天龍が首を傾げつつ、小声で隣の龍田に話しかける。

「私にも分からないわあ。でも確かに言えるのは、私たちの命運は、貴虎さんの決断にかかっているという事ねえ」

「デイエンドの提案は、貴虎にとつて非常に魅力的と言えた。この場の全員の安全が保障され、更に貴虎が元の世界へ戻る手引きをしてくれるのだ。それを断る理由など無いように思われた。だが、それでもなお貴虎は、素直に首を縦に触れない。心の奥底で引つかかる何か、それを拒ませる。」

そんな時だった。

「司令！大変よ、夕張さんが!!」

「怪物に、怪物に……」

息を切らせ、顔を青ざめさせた陽炎と黒潮が、演習場へと飛び込んできた。

一同がそちらへ視線を向ける。その一方で、目の前に広がる異様な光景に、二人の駆逐艦娘は面食らっていた。



「つて……え？何なの、この状況……」

呆氣にとられた様子で陽炎が場内を見回す。黒潮は口を開けてポカンとしている。

「賑やかな登場だね。いいよ、用件があるなら先に済ませてくれたまえ」

以外にもデイエンドが陽炎を促した。

「え、あ……うん」

見知らぬ謎の仮面男に声をかけられ、戸惑い気味の陽炎。

「夕張に何があった。怪物とは何の事だ」

提督の問いを受け、自分たちが遭遇した出来事を思い起こすと、陽炎は大声で喋りはじめた。

「そ、そうでした！私達が山小屋にいたら、突然見た事も無い怪物に襲いかかかれて！夕張さんが囷になって私達を逃がしてくれたんです!!逃げてきたら、みんながこの建物に向かっているのが見えて!!」

「お願いや！夕張はんを助けに行っただってや!!」

「夕張が怪物に!?!」

貴虎をはじめ、皆が驚愕の表情を浮かべる。

「そうですー！なんかこう、ずんぐりむっくりの灰色で膨れ上がった上半身に、丸い顔がついていて!」

ジェスチャーを交え説明する陽炎、それを聞いた貴虎は怪物の正体を即座に理解した。

「まさか……インベスが!?!」

最も恐れていた事態が起こってしまった。インベスは、ヘルヘイムの果実を食してしまった生物の成れの果て。それが現れたということとは、この世界におけるヘルヘイムの浸食の事実が確定してしまったという事。一刻も早くそれを抑えなければ、この世界には貴虎のいた世界と同様の悲劇が訪れる。

そして正に今、夕張がその犠牲になろうとしている。その現実には貴虎は、目の前が真っ暗になる思いだった。

「話は済んだかい？じゃあ答えを聞かせてもらおうか」

絶望に打ちひしがれる貴虎に対し、デイエンドは容赦なく決断の時

が来たことを告げる。

貴虎はゆつくりと、力無くデイエンドの方へと向き直る。

「私は……」

今ここでデイエンドの提案を受け入れる。それは最も合理的な判断だ。反抗するなど余程のバカか、我儘な子供のする事。

そうすれば少なくともこの場の者達の命は助かり、皆が夕張の救出へと向かう事ができ、彼女を助ける事が出来るかもしれない。しかし、貴虎は危機に瀕するこの世界を見捨てて逃げる事になってしま

う。  
黄金の果実を渡し、この世界の為に貴虎が残るという選択肢もある。だがそれは、貴虎が自分の元いた世界を見捨てる事を意味する。元の世界へと戻る方法が分からない今、頼りになるのは目の前の男が持っているであろう能力のみ。このチャンスを逃せば、二度とチャンスは巡ってこないかもしれない。

(選べるのは二つに一つ、だがしかし……！)

ギリリと歯噛みをする貴虎、両の手の拳を強く握りしめて、視線の先のデイエンドを見据える。

そしてゴクリと唾を飲み込み、口を開こうとした。

刹那

貴虎の視線は、デイエンドの持つ鉢植えに釘付けとなる。

そこから溢れ出る黄金色の光、それはやがて大きく大きく膨れ上がり……貴虎の身体を包み込んだ。

気が付くと貴虎は、廃墟と化した街に立っていた。眼前には怪物を引き連れた一人の男。

黒のスーツを身にまとったその人物は、貴虎を一瞥しニタリと笑みを浮かべると、瞬時にその姿を変化させた。

一瞬にして、緑と白の軽装鎧のような装甲を身に纏ったその人物は、手にした弓を引き絞り、天へ向け光の矢を放つ。

放たれた光の矢は上空にて弾けると、逃げ惑う人々に向け容赦なく降り注いでいった。

思わず目を覆いたくなる、地獄のような光景。そんな中に佇む貴虎

の頭上にも、光の矢が降りてくる。

貴虎は、矢を放った男を見据えながら絶叫する……

その瞬間

宙から飛び込んできたもう一つの光が、降り注ぐ矢を打ち消した。否、光のように見えたそれは、橙色の鎧を身に纏った武者であった。威風堂々としたその佇まいは、見る者に希望、そして活力を与えてくれる。

刀を構え走り出す橙色の鎧武者の後姿は、やがて神々しい輝きを放つ白銀の鎧武者へと変化し、敵の集団へと突撃する。

鎧武者が貴虎の心に何かを告げた……そんな気がした。

そして貴虎の意識は、白い光の奔流へと飲み込まれ、遠のいていく。

「……っ!?!」

目を開き周囲を見渡す。そこは演習施設内の武道場だった。

「いい加減に、これ以上待たせるのはよしてくれないか。早くしてくれたまえ」

若干の苛立ち混じりの声で、デイエンドが言う。

周りの者も皆、固唾を飲んで貴虎に注目していた。先程までと殆ど変わらないその光景。

(今のは……幻覚?)

困惑する貴虎であったが、その心と意識は、雲一つない快晴の空の如く澄み渡っている。そう感じられた。

後ろを振り返る。不安げな表情の艦娘達。だが一人だけ、車椅子に座した提督だけは、真っ直ぐに貴虎を見据えていた。

貴虎は無言で頷くと、眼前の青年に向け、言葉を告げた。自分の命を救ってくれた少女の笑顔を思い浮かべながら……

「断る」

それを聞き、肩をすくめて、やれやれといったポーズでデイエンドは言う。

「全く、そんな愚かな選択をするなんて。もっと賢い人かと思っただのにねえ。交渉決裂だ。ここらで、おさらばさせてもらうとしよう」  
「それもさせない」

「……何だつて？」

「お前に黄金の果実の力は渡さない。逃がしはしない。この場にいる者もやらせはしない。インベスを倒し夕張を助ける。この世界をヘルヘイムの脅威から救う。そして貴様をねじ伏せ、元の世界に戻る方法を聞き出す。全てやってみせる」

「馬鹿な事を言うね、そんなの出来るわけないだろう」

呆れたと言わんばかりの態度でデイエンドが言う。だが

「出来るか出来ないかではない。私が『そうしたい』のだ。救って見せる、この世界を！私の仲間、仲間と言ってくれた者を！全て！」

力強く言い放った貴虎は、心の中で思いを巡らせた。

(……お前ならきつとこうするんだろうな、葛葉……感謝する)

自分が何度打ちのめそうともしつこく立ち上がり、青臭い理想を捨てることなく、ただひたすらに、真っ直ぐ、がむしやらに立ち向かってきた男の姿が頭に思い浮かぶ。自分には歩けなかった道を、歩くことを諦めてしまった道を、時に傷つき、醜く足掻きながらも進み続ける、その男の姿が。

「やれやれ、折角の親切を台無しにするなんて。まあ、そっちがその気なら僕も容赦はしない。聞き分けの悪い子にちよつとだけお仕置きだ」

若干不機嫌そうに言ったデイエンドが、軽く片手を上げる。それを合図に傍らに控えていた銀面の戦士が、短剣のような武器を構え臨戦態勢をとった。

「すまない、私の決断のせいで皆に迷惑をかける事になってしまった」  
詫びる貴虎に対し、天龍が「フツ」と笑いかける。

「気にすんな。おかげであのムカつくスカした野郎を、思う存分ぶちのめせるんだ。逆に感謝したいくらいだぜ」

「そうねえ。私も天龍ちゃんと同じ意見よお。それに、あの人の上から目線の喋りには、ずっとイライラしてたの。こっちがお仕置きしてあげないと気分が晴れないわあ」

にこやかに微笑みながら言う龍田であったが、その眼光は、目の前の敵を鋭く射抜いていた。

「致し方ありませんね」

「何だかよくわからないけれど」

「やるしかなさそうやな」

後ろに控える鳳翔、陽炎、黒潮も一歩前へと進み出る。

その様子を見た貴虎は無言で頷き、敵の方へと向き直る。

(さて、これからどうする……)

貴虎は頭の中で策を練り始める。

デイエンド、彼が呼び出した三人の戦士。その実力は不明だが、少なくとも貴虎の知るアーマードライダー達と同等の力は持っているものと予想される。

こちら側で武装しているのは天龍と龍田、鳳翔の三人のみ。彼女らがどこまで渡り合えるかは分からない。鳳翔の艦載機も、室内では思う存分その力を発揮できないであろうことは明白。

警報が出てかなりの時間が経っている。せめてそれを聞きつけた援軍が来るまでの時間を稼ぐことが出来れば、状況は変えられる可能性はある。だが、時間をかけすぎれば夕張の命が危ない。

(万が一の場合、危険ではあるが、捨て身の突撃で皆が行動を起こす時間を稼ぐのが得策か。そして夕張の救助にも向かわせて……)

と、貴虎が考えを巡らせていた時

「貴虎、とついでにコソ泥野郎、一つ良いことを教えてやろう」

後ろへ控えたまま黙っていた夷<sup>えびす</sup>提督が進み出る。

「提督？」

その行動に貴虎が怪訝な表情を浮かべる。

加えて、他の者が下がっているようにと促そうとするが、提督は目でそれらを制する。そして貴虎達の傍へ。

「男の仕事の八割は決断、そこから先はおまけみたいなもんだ。そして……これが俺の仕事だ」

夷提督は、ゆっくりと車椅子から立ち上がる。

「体が本調子になるまで無理はしないつもりだったが、やむを得ん」

そう呟く提督の手には、金属製の奇妙な物体が握られていた。

赤と黒を基調とした配色に、左右非対称の、L字を描いたような形

状をした機械を腹の下にかざす。

すると機械から黒いベルトが伸びだし、たちまち提督の腰に巻きついた。

「なっ……それはまさか！」

今まで余裕の態度を崩さなかったダイエンドが、初めて動揺を露わにした。

提督は左手で軍帽を脱ぐと、右手で懐から何かを取り出し、前へと突き出した。それは、パソコン用のメモリースティックを模したような黒い小箱であった。

その表面には、アルファベットの“S”とドクロを掛け合わせたようなデザインのパターンが描かれている。

「スカル！」

小箱から力強い音声が響き渡った。提督はそれをベルトのバックルとなった、機械のスロット部分に差し込んだ。

「変身」

提督は、そう告げると同時にスロットを右に倒す。すると周囲に一陣の風が巻き起こった。その風の中心に佇む提督の体は一瞬のうちに変貌を遂げた。

風が収まるとそこには、白銀のラインがあしらわれた黒の強化装甲に身を包み、くすんだ白マフラーを首に巻き付けた、骸骨マスクの超人が出現していた。

骸骨マスクの超人“スカル”は手に持った軍帽をかぶり直すと、まるで銃を構えるような動作でもって右手をダイエンドへと突きつけた。そして穏やかでいて、力強く、強固な意志を込めた一つの言葉を放った。

「さあ、お前の罪を、数えろ」

【第九話】 part 1

「ハアハア……」

雨の降りしきる森の中を夕張は駆けていた。その手には歪んだ火かき棒が握られている。

彼女らが雨宿りしていた山小屋の扉を破壊し、入り込んできた灰色の怪物。その姿に初めは面食らったものの、夕張は果敢に立ち向かい、陽炎と黒潮を逃がす時間を稼ぐことに成功した。

そして夕張自身も、怪物を火かき棒で滅多打ちにして怯ませた隙に逃げ出すことが出来た。怪物が想像よりも強力な戦闘力を持つていなかったのが幸いだった。

怪物から逃げる夕張は、後ろを振り返る。その視線の先には薄暗い森の木々があるのみで、怪物の追ってくる様子は見受けられない。どうやら一先ずは撒くことが出来たらしい。

「ふう」

安堵の溜息を吐き、夕張は走る速度を少し落とす。全力疾走して来たせいで、ひどく体が疲労しているのがわかる。正直言つてすぐにも休みたいところだが、立ち止まるわけにはいかなかった。万が一あの怪物が基地に辿り着いたら、その場にいる人を襲わないとも限らない。それに陽炎と黒潮の安否も気になる。

「……痛ッー」

脇腹の辺りに痛みを感じた。見ると上着が裂け、その下に軽いひつかき傷があるのがわかった。

（あゝ、あの時に……でもこの程度の傷、気にしてなんかいられないわ！頑張って走らなきゃ！）

と、自分を奮い立たせつつ夕張は、疲労の溜まりつつある脚を動かし続けた。

「て……提督なの？」

「あ、ああ……て、提督が……ガイコツの怪人になっちまったあああ

!!」

提督の変貌する様を間近で見ている龍田と天龍が、驚きの声を上げる。

後ろに控えていた鳳翔達も驚愕し、目を見開いていた。

貴虎とて例外ではなく、突如として変身した夷提督えびすを困惑の眼差しで見つめている。

「提督、あなたも……」

その一方で

「フッフ……」

デイエンドだけが不適に笑っていた。

「まさか、キミだったとはね。帽子に隠れてよく顔が見えなかったから気付かなかったよ」

「ほう、俺の事を知っているのか」

「ああ、勿論。僕は全てのライダーに関する知識を持っている。でなければ世界を巡るのに色々と不便だしね。それに、以前キミの力を借りて戦ったこともある。まあ言ってみれば、キミには間接的とはいえ恩があるようなものだけど……」

パチンと指を鳴らす。

「今はそんなの関係ないね」

デイエンドの合図でライオトルーパー達がスカルに襲い掛かる。

対してスカルも駆け出して応戦した。

トルーパーの一体が、短剣型になった固有武装のアクセレイガンを振りかざす。スカルはその短剣が振り下ろされるより先に、敵の腹部へと拳を叩き込む。重い一撃を受けたトルーパーは堪らず後ずさる。攻撃後の隙を狙い、スカルに向けて残り二体のライオトルーパーも、左右から短剣を振り下ろした。

「はっ」

スカルは床を転がって、その攻撃をかわす。振り下ろされたアクセレイガンの刃が、床を切り裂き傷を刻んだ。

すぐさま立ち上がり、体勢を立て直したスカルが天井を仰ぎ見る。そして再び敵に対して向き直った。



「貴虎、奴が盗った物は俺が取り返す。自分の仕事場であんなコソ泥に盗られたとあっちゃあ、俺の沽券に関わるからな。夕張の事はお前に任せる。陽炎、貴虎を案内してやれ」

目の前の敵を見据えたまま、後ろの貴虎と陽炎に向け提督は告げた。

「指令!?でも!」

「わかりました、よろしくお願いします」

「貴虎さん!?!」

「行くぞ、陽炎。私を夕張の所まで導いてくれ」

突然下された命令と、目の前の状況に狼狽していた陽炎であったが、貴虎の真剣な眼差しを見てとると、自らも覚悟を決め頷いた。そして二人は全速力で外へ向け駆け出していった。

一方で体勢を立て直したトルーパー達は散開し、再び短剣を構えてスカルへと切りかかっていく。

「危ねえ提督!」

「助太刀しあます!」

混乱から立ち直った天龍と龍田が駆け出そうとする。

「来るな!」

スカルが一喝した。

ビクツと体を震わせ、動きを止める天龍と龍田。スカルがわずかに横顔を二人の方へ向け、何か合図を送るかのように微かに頷く。そしてトルーパー達が正に攻撃を加えんとする瞬間、スカルの胸元にある――まるで人間の肋骨を思わせるような――白銀のラインが前方へ向けゆつくりと開くような動きを見せた。

更に、その前方の空間が揺らぎだしていく。それと共に紫色の球状のオーラが出現。中心部にドクロのような意匠を形成し、徐々に肥大化するそれは、強烈な光とエネルギーを発し、スカルへと接近するトルーパー達を弾き飛ばした。

スカルは身につけたベルト“ロストドライバー”のスロットから素早く“ガイアメモリ”を抜き取り、右腰にある別のスロットへそれを装填すると、手のひらで叩くようにスイッチを押した。

「スカル！マキシマムドライブ！」

電子音声が響き渡ると同時に右足へと力を込めたスカルは、目の前のエネルギー球へ渾身の回し蹴りを叩き込んだ。

背後から聞こえてきた爆音に、陽炎は思わず足を止めて振り返った。演習場の方で、もうもうと煙のような物が立ちこめているのを見てとれた。

「大丈夫だ。提督に任せておけば、きつと」

静かな、落ち着いた声色で貴虎が言う。

「……うん、そうよね」

そう言つて頷くと陽炎は、素早く回れ右をして再び走り出した。

（みんな、頑張つてね。夕張さんを連れてすぐに戻るから！）

武道場内に舞い上がった粉塵が、徐々に晴れていく。

デイエンドは周囲を見渡す。スカルと娘達の姿は既になく、壁の一部に大きな穴が空いていた。

どうやら一同は、そこから外へ逃げたらしい。

（大口を叩いておいて逃げ出すとはね。……いや、あえてそう言つておいて意表を突いたつて所かな？）

そう思案し頷き、デイエンドは呟く。

「まあいいか。邪魔者はいなくなつたことだし、やっぱり暫くこの世界を巡つて、更なるお宝を探してみるのも良いかもしれないな」

その時、頭上から「ポンツ」という奇妙な音がした。

デイエンド、そしてトルーパーズが音のした方を見やると、天井の骨組みに逆さになってぶら下がっている少女の姿があった。少女はニツと笑うと、レンズ部分が真っ黒に塗りたくられたゴーグルを装着する。

次の瞬間、凄まじい光の奔流が場内を照らし出した。

「くっ……！」

突然に溢れだした眩い光に、目を眩ませられたデイエンド。マスクのおかげで眼への致命的なダメージを負うような事は無かったものの、シヨックから立ち直り、その目が慣れるまでには僅かばかりの時間を要した。

「……やられた」

彼の手に握られていたはずの、鉢植えが消えていた。

恐らく先程の少女の仕業だろう。デイエンドが光に怯んだ僅かな隙について奪い取ったのだ。そう判断したデイエンドは、ライオトルーパーズに彼女を追わせるように指示する。

彼らは一斉に駆け出し、スカルの攻撃によって破壊された壁から外へ飛び出していった。

外へ出た彼らが周囲を見渡そうとした時、風を切るプロペラ音と共に、激しい衝撃が身体を襲った。

小型の零戦による、機銃掃射が浴びせかけられたのだ。

トルーパーズの眼前を、銃口から煙の尾をなびかせて飛び去っていく零戦。

「こつちですよ！」

声のした方に振り向くと、弓を構えた鳳翔が第二射を放とうとしていた。トルーパーズの一人がガンモードとなったアクセレイガンを構え、鳳翔に狙いを定める。

「おりゃああああ!!」

その瞬間、天龍がトルーパーズの頭上の木から飛び出し、大剣を振り下ろした。

「えいっ！」

更に、木陰から走り寄った龍田が、すれ違いざまに薙刀による一撃を、トルーパーの胸部に叩き込んだ。

トルーパーズを奇襲した天龍と龍田は二手に分かれ、別々の方向へと走り去っていく。

敵が彼女らの攻撃に気を取られている隙に、鳳翔もその場を素早く離脱していた。

そんな艦娘達を先に排除すべきと認識したトルーパー達は、三方向

に分かれ駆け出して行ったのだった。

「やっぱ夜戦は良いよねー！気分最高ー！」

演習場を飛び出した川内は、森の中を一人駆ける。

薄暗くなつた演習場で、彼女は早めの夜戦訓練の準備をしていた。今までであれば深夜、場合によっては明け方まで訓練に明け暮れていた川内であったが、この基地に配属されてからは周囲からの圧力――主に横須賀提督からの命令が、最も強いのであるが――もあつて、そういった事が出来なくなっていた。

そのため生活リズムも変化し、夜中の二時を過ぎると猛烈な眠気に襲われるまでになつていたため、訓練の時間を前倒しせざるを得なくなつていたので。故に、悪天候のため早くから暗くなりだした今日などは、彼女にとって至福の時を長く味わえる格好の日であつた。

先刻まで武道場の天井の骨組みを歩いたり、ぶら下がったり、といった具合でバランス感覚を養う訓練――川内がそう称しているだけで、艦娘の戦闘に役立つかは不明――をしていた彼女は思わぬ形で『実戦』へと臨むことになつたのである。

眼下で起きていた謎の侵入者とのやり取り、提督の変身などの出来事に、他の者達と同様に目を見張つた川内であつたが、天井を見上げた提督と視線が合った時、自らのすべきことを瞬時に理解し、実行したのだった。

提督達が脱出し敵に隙が出来た瞬間、訓練用にかつそり持ち出し、腰に下げていた照明弾を手にして発射。そして素早く、命綱として体に巻き付けていたロープを伸ばして着地し、鉢植えを奪い取って外へと飛び出したのである。

普段では味わえない、スリリングな体験に興奮し、顔をほころばせて走る川内。

そんな彼女の目の前で、銃声と共に足元の土と草が弾け飛んだ。

「うわっ！」

驚きの声を上げ、川内は急停止する。

「まったく、部屋の中で派手な『花火』を撃った上に僕のお宝を奪って逃げるなんて、とんだイタズラっ娘だね」

木陰からデイエンドが姿を現わした。

「あんた随分とすばしっこいんだねえ。こんなに早く先回りしてるなんて」

「この程度のこと造作もないよ。それよりも……」

デイエンドは、銃をクルクルと回して構えなおした。

「僕のお宝はどうしたのかな？」

「さあ何の事かしら？そんなモノ知らないよ」

川内は降参のポーズをするかの如く、軽く両手を上げてヒラヒラと動かす。その手には何も握られていない。

「イタズラっ娘のうえに嘘つきだなんて。どうやら、おしおきが必要みたいだね」

溜息混じりに言葉を吐くと、デイエンドは銃口を川内へと向ける。

川内はじりじりと後ずさりをしつつも、腕を曲げ、袖に取り付けられている砲を構えた。

(この中に入ってるのは訓練用の模擬弾。まともによりあっても勝てないだろうし、どうしたもんかな……)

雨粒に混じって、冷や汗が彼女の背を伝う。拳をギリリと握りしめ、眼前の敵を注視し、発砲をしようとした……

次の瞬間

「とおー」

木陰から跳躍した骸骨頭の超人が、デイエンドへ向け拳を叩きこんだ。

だがデイエンドは、バックステップでこれを避ける。両者の着地の衝撃で、泥水が周囲に飛び跳ねた。

「ありがと提督！助かったよ」

「お前の方こそ、よく俺の策に気付いたな」

「へへへっー」

鼻の下を人差し指でこすり、得意げな表情の川内。

「お前はあいつらに加勢してやれ。こいつは俺が引き受ける」

スカルが親指で指し示した方向では、天龍らがトルーパーズと交戦する音、剣戟や銃声が聞こえてくる。

「わかった、夜戦なら私にまかせといて！」

ニツと笑うと川内は反転し、仲間達の元へと駆け出して行った。

それを見送るとスカルは、デイエンドの方へと向き直る。

「お前の獲物は、どっかに行ってしまったみたいだな。諦めて退散したらどうだ」

だがデイエンドは、そんな呼びかけを意に介すことなく「フツ」と笑う。

「なかなかやるね、さすがは仮面ライダースカルといったところかな」

「俺にはお前のようなヤツと同じような『仮面ライダー』なんて名前で呼ばれる趣味は無いんだがな」

「ライダーにも色んなのがいる、みんなが僕の様な振舞いをするわけじゃない。それと、君のお弟子さんは仮面ライダーという名を、いたく気に入っているみたいだけど……」

「何？」

「おや、興味あり気な感じだね？君がいなくなってから、あの世界がどうなったのか。それを知りたいのなら、教えてあげてもいいけど」

「……………」

「でも、タダってわけにはいかないね。情報に見合ったお代を払ってもらわなきゃ。うくん……キミのベルト、ロストドライバーにスカルメモリと交換ってことでどうだい？それも結構レアなお宝だしねえ」

「……………」

「それだけじゃない。大人しく僕が退散するという約束もおまけで付けよう。もちろん兵隊さんもだ。悪い条件じゃないだろう？」

「……………断る」

「ふう、キミも貴虎君と同様に物わかりが悪いねえ。こんな好条件を突っぱねるなんて」

「それだけ情報があれば十分だ。全部わかった」

「何だって？」

デイエンドは、マスクの下に怪訝そうな表情を浮かべる。

「俺がいなくなった後、アイツは俺の持ってた荷物に手を出して戦ったんだろう。あの囚われのボウズと一緒にになってな。そして、今も戦い続けている。大方そんな所だろうな」

「……まいったねえ」

首の後ろに片手を回すデイエンド。そのマスクの下の素顔は、苦笑を浮かべている。

「ついでに……いつまでたつても帰らない俺に、しびれを切らしてやって来た俺の娘も、一緒になって何かやってるんだろうな、あいつらと」

「ハハハ、流石は名探偵さんだ。そこまでお見通しとは、恐れ入ったよ」

「……なるほど。最後のは当てずっぽうだったんだが、何事も言ってみるもんだ」

「なっ！……重ね重ね、まいったね。まんまとカマをかけられてしまったようだ。本当に食えない人だ」

「情報提供の礼に、こんなモンよりずっと良い宝をやろう」

人差し指でコツコツとロストドライバーを叩き、スカルが告げる。

「へえ、それは一体どんな物なんだい？」

「俺の部屋にある棚に羊羹が入ってる。競争率が高くて滅多に手に入らない逸品だ。それをやるから、とつとと自分の家に帰るんだな」

「羊羹だって？そんな物が僕の狙うお宝と釣り合うわけがないだろう。話にならないな」

「そうか、なら交渉は決裂だな」

言うときスカルは彼専用の拳銃「スカルマグナム」を手に取り構えた。対してデイエンドも「デイエンドライバー」を構えてその銃口をスカルへと向ける。

お互いに銃を向け合ったまま、対峙する二人は、黙したまま睨みあう。雨粒が木々を打ち付ける音、それに混じり遠くで艦娘達とトルーパーの戦闘する音が響いていた。

「……」

「……」

「何だ？」

「僕が背負う罪の数さ。さつき君が問いかけただろう？」

「随分と慣れた手口をしているから、熟練の賊かと思ったが、お前、盗みに入るのは初めてか？」

「何を言ってるんだい、世界中のお宝は僕が手にして然るべき。僕がお宝を盗るのは罪でも何でもない。もっと別の事さ、別の……と、お喋りが過ぎたね」

デイエンドは腰のホルダーから新たに一枚のカードを取り出し、銃へと装填した。

「最近手に入れたこの新しいカード、君で試させてもらおうとしよう」

【KAMENRIDE！ MAGE!!】

電子音声と共に発射された光の残像が実体化し、新たな三体の戦士が出現した。

その戦士達は、宝石の原石のような形の橙色のマスク、左手の大きな鉤爪の付いたグローブ、人間の手のひらを模したような形のバックルが付いたベルトが特徴的であった。

そして三体の戦士は、スカルへ向けて一斉に突撃を開始する。

スカルは右手で構えた銃のトリガーを引き、敵の集団へ向け銃弾を放った。



## 【第九話】 part 2

「くそっ！」

天龍が舌打ち混じりに吐き捨てるように言う。

彼女の振るった刀は、ライオトルーパーに容易く受け止められなかった。

（短剣でオレの刀を止めるなんて、凄げえパワーだ……）

チラリと視線を愛刀の刃へと向ける。数回打ち合っただけでも関わらず、天龍の刀には所々に刃こぼれが見受けられた。

敵の力もさることながら、使っている武器そのものも特殊な造りをしていると思われる。

「チッ！」

このまま打ち合いを続けても分が悪いと悟った天龍は、バックステップでライオトルーパーと距離をとった。

刀を振り回し、相手を牽制しつつ間隔を徐々に開けていく。

（癪だがオレがまともにも相手しても、アイツには勝てる気がしねえ。木々の影に隠れながら移動して他の武器を調達するか、他のヤツらと合流するしかねえな）

トルーパーから十分に距離を取った所で、天龍は体を反転させ駆け出した。

それに対してライオトルーパーは、急いで追いかけるような素振りは見せなかった。

悠々と歩きながら、手にした短剣を拳銃の形へと変形させた。そして、そのトリガーをゆっくりと引く。

銃口から連続して光弾が放たれる。光弾は天龍の脇をかすめて飛んでいった。

「なっ、なんだよあれ！」

後ろを振り返りつつ逃走する天龍は、顔を青ざめさせた。彼女の前方にあった木の一本に、パツクリと大穴が空いていたのだ。

「あんなもん当たったら、タダじゃすまねえぞ！」

天龍は敵に狙われまいと、木々の間を縫うように、ジグザグな軌道

を描きつつ駆け抜けていく。

と、天龍の視線の先で光が弾け、耳に何かが砕けるような音が入ってきた。ハツとしてその方向へ目を向ける。

トルーパーの銃撃によつて撃ち抜かれた木が、バキバキと音を立てて、天龍めがけて倒れ込んできた。

急制動をかけて、それをかわそうとする天龍。しかし、ぬかるんだ地面に足を取られ、思い通りに方向転換が出来ない。

歯噛みする天龍の眼前に木の幹が迫ってくる。

「危ないっ！」

突如として横から跳びすきった何者かによつて、天龍の身体は跳ね飛ばされた。

地面を転がった彼女の真横で、地響きを伴って大木が倒れ込んだ。

「痛ッててて……」

「大丈夫？ 危機一髪だったね」

仰向けに倒れていた天龍が目を開けると、そこにはニツとした笑みを浮かべた川内の顔があった。

「川内か、おかげで助かったぜ」

川内が差し伸べた手を取り、天龍は立ち上がる。そして、傍らに転がった刀を拾い上げた。

「さあ、夜戦はこれからが本番だよ。敵さんもそのつもりみたいだし」

小型の砲が取り付けられた腕を曲げて、構えをとる川内。

その視線の先には、悠然と歩いてくるライオトルーパーの姿があった。

川内は、素早く狙いを定めると即座に砲撃を放った。激しい砲声と共に弾が放たれる。

ライオトルーパーは、横に跳びすきってそれを避ける。砲が着弾した地面が泥と草を跳ね上げる。

続けざまに第二射が放たれた。それは体勢を崩したトルーパーへ向けて、一直線に飛んでいった。

避けられないと判断したトルーパーは、両腕で頭を庇うようにして防御姿勢をとる。

すると、ガンツ！カンカン！と砲撃にしては軽く、甲高い音が響いた。

もちろん川内が発射したのは実弾ではなく、訓練用の模擬弾。派手な砲撃音に不釣り合いな、あまりに軽い衝撃に拍子抜けしたような様子のライオトルーパーであったが、気を取り直すと体勢を立て直し駆けだした。しかし、僅かな間に川内と天龍の姿は消えていた。どうやら闇に紛れて逃げ去ってしまったらしい。

ライオトルーパーは銃を構え直すと、それを撃ちつつ二人の艦娘が逃げたと思われる方角へと突き進んでいった。

薙刀とアクセレイガンの刃とがぶつかり合い、激しく火花を散らせる。

龍田は攻撃を加えると、即座に敵との距離を開く。そして木陰や障害物を利用して身を隠す。彼女と戦っているトルーパーは、それに対応するため、武器を銃へと変形させようとする。だが、その隙を見計らい飛び出した龍田が、再び斬撃を叩きこむ。

こうして付かず離れずの戦いを続ける事により、龍田は相手のペースを乱し続けていた。

(このまま戦い続けても埒が明かないから、どうにかしたい所だけどお……)

勢いよく振り回された龍田の刃が、今度はライオトルーパーの胴を捉えた。が、甲高い金属音を響かせる強固な装甲に攻撃は阻まれる。薙刀の柄を握る龍田の手に痺れが走る。思わず取り落としそうになるのを、すんでの所で堪え、龍田は物陰へ移動し身を隠した。

(私の武器じゃあ簡単にはダメージが与えられないみたいだし、どうしたものかしらねえ……)

考えを巡らせながら龍田は、敵に感づかれないように姿勢を低くしつつ、忍び足で移動する。

(やっぱりこのまま時間を稼いで、装備を持った増援を待つのが得策ね。艦娘の砲を当てれば流石に、この人達もひとたまりもないはずよ

ねえ)

そして、トルーパーの死角へと回り込むことに成功した龍田は、横薙ぎの一撃を放とうと構えをとった。

と、その時

「ああつー！」

(!?——あの声は、黒潮ちゃん!?)

龍田の耳に悲鳴が聞こえてきた。その声がした方を見やると、薄暗がりの中で黒潮がうずくまっているのが見えた。

そこへ迫る一体の銀面の兵。

二者の間には、地面に倒れ込んだ黒潮を守らんとする鳳翔が立ちはだかつていた。

「いけない！」

二人を助ける為に駆けだそうとした龍田の耳に、ヒュツと風切り音が聞こえた。

それに反応し素早く振り返った龍田は、薙刀の刃を眼前にかざす。キンツ！という金属音と共に火花が飛び散る。龍田が相手していたライオトルーパーの短剣と、薙刀の刃とがぶつかり合う。そのまま二人は罅迫り合う体勢となった。

(迂闊だったわ)

龍田の頬を汗が伝う。こんな状況になつては先程までのように、逃げながら戦う事は不可能。少しでも力を抜いてしまえば、敵の短剣が容赦なく龍田の身体に突き立てられる事だろう。黒潮と鳳翔を助けるどころか、自分の身を守るのが今の龍田には精一杯だ。

「鳳翔さん！黒潮ちゃん！」

龍田の叫びが薄闇の森の中にこだました。

艦載機による攻撃、天龍と龍田の連携で敵を分断し、そのうちの一体を誘い出した鳳翔は、黒潮を伴って森の中を駆けていた。

走り続けて結構な時間が経つ。鳳翔は、ふと隣の黒潮を見やる。すると彼女は鳳翔の視線に気づいたのか、口角を吊り上げてニツと笑ってみせた。そして再び前を見て走り続ける。その息遣いは大分荒く

なっているように思えた。

(強がっているようですが、黒潮さんは大分疲弊しているようですね)

鳳翔は黒潮の様子を見て察した。

無理もない。彼女は陽炎と共に必死になって、謎の怪物から逃げてきたのだ。そして、ようやく辿り着いた場所では別の敵の襲撃、肉体的にも精神的にも辛いであろうことは明らかだった。

(あの者達に応戦するにも黒潮さんは丸腰、私の艦載機を飛ばそうにも敵との距離が近すぎる。開けた場所ならまだしも、こうも木が生い茂った場所で、策も無く闇雲に艦載機を発艦させるのは……ここは何としてでも逃げ切らなくてははいけませんね)

鳳翔が思索していると

「ああっ！」

目の前を走る黒潮が、地面から飛び出るように生えていた木の根につまづいて転んでしまった。

疲労していた黒潮はバランスを崩し、まともに受け身を取る事も出来ず、走る勢いそのままに地面を転がり倒れ伏してしまう。

「黒潮さん！」

と叫ぶ鳳翔の背後から、何かの迫ってくる気配がした。

振り返り目を見開く。その先には、銃を携えたライオトルーパーの姿があつた。

その者は悠然とした動作でもって、銃口を倒れた黒潮へと向ける。

「いけません！」

鳳翔は即座にトルーパーと黒潮の間に割って入り、その両腕を大きく横に広げた。

「アカン！ 鳳翔はん！ ウチに構わず早う逃げや！」

うつ伏せの体勢のまま、顔を上げて黒潮が叫ぶ。

「それは出来ません」

鳳翔は黒潮の方を振り返らずに、射抜くような視線をライオトルーパーに向けたまま口を開く。

「いざという時に、皆さんを守るのが私の務めですから」

「それはごつちのセリフや！ 空母の護衛は駆逐艦の務めや！」

「洋上での作戦行動中はそうかもしれませんが、今は状況が違います」  
「せやけどー！そんな」

「それに……」

黒潮の言葉を遮るように自らの言葉を重ねつつ、鳳翔は口元に微笑を浮かべる。

「ここで逃げたら提督に顔向け出来ません」

そして鳳翔は、ゆっくりと瞳を閉じた。

ライオトルーパーがターゲットを正面に立つ鳳翔へと変更、そして銃のトリガーにかけた指に力を込めた。

黒潮は口を大きく開き叫びを上げる。同じように大きく見開かれたその瞳からは、一筋の涙が零れ落ち、雨粒と共に地面に吸い込まれていった。

「どっかー！ーん!!!」

底抜けに明るく、よく通る声と共に、爆音が鳴り響いた。

何処からか放たれた砲撃が、鳳翔へ銃口を向けていたライオトルーパーの側面に直撃。猛烈な勢いで吹き飛ばされたライオトルーパーは大木に激突し、その身体で枝をへし折りながら地面に転がり落ちる。

「お待たせっ！艦隊のアイドル那珂ちゃん、現場到着う！」

トルーパーへ向け砲撃を放った艦娘——那珂は満面の笑みを浮かべ、左手で作った横倒しのピースサインを目元へ近づけてウイंकをする。

「那珂ちゃん！」

「那珂はん！」

「良かった、みんな無事だったんだね！」

鳳翔と黒潮の元へ駆け寄る那珂。差し出された鳳翔の手を取り黒潮は立ち上がる。

「ありがとう。那珂ちゃんのおかげで助かったわ」

「おおきに、那珂はん」

「いいのいいの。それよりも黒潮ちゃん、はいコレ」

そう言って那珂は、片手に持っていた荷物を黒潮へと手渡す。

首かけ紐が括り付けられた金属製のそれは、陽炎型の一部艦娘の愛用する型式の連装砲であった。

「おおっ！これがあれば百人力や！」

黒潮は早速、連装砲を身につけて、砲の両サイドに取り付けられた取っ手を握りしめ、構えてみせる。

その時、吹き飛ばされて倒れ込んでいたライオトルーパーがゆつくりと起き上がる。そして何事も無かったかのように立ち上がると、三人の艦娘めがけて歩を進め出す。

だが、その場の艦娘達は、最早その敵の姿に恐れを抱いてはいなかった。いや、それを掻き消すほどの戦意と勇気が心に満ち溢れてきたのだった。

那珂はその場でクルリとターンを決めたあと、腕を曲げ砲撃の体勢をとり、黒潮も那珂の横に並び立ち、愛用の武器の狙いを目標へと定めた。

鳳翔は彼女らの後ろへと身を引き、艦載機を発艦すべく弓に矢をつがえる。

と、同時に響き渡った砲撃音が戦いの再会を告げた。

一方、龍田の元にも援軍が到着していた。

「どりゃあああああ!!！」

勇ましく声を張り上げながら跳躍する天龍が、龍田と交戦していたライオトルーパーに向けて刀を振り下ろした。

龍田と唾ぜりあっていたトルーパーは、跳びすさつてその攻撃から逃れる。

「天龍ちゃん！」

「無事だったか龍田!？」

「私もいるよ、お忘れなく」

「川内ちゃんも」

駆け寄ってきた川内が、親指を立てて口元に笑みを浮かべる。

「へへっ！そして更にもう一人」

天龍が得意気に言うとはぼ同時に、一度距離を開いたライオトルー

パーが、再び間を詰めるべく駆け出していた。だが……

「いつけえ!!」

ライオトルーパーの眼前の地面に、轟音と共に砲弾が着弾。彼は思わずその動きを止めてしまう。

「吹雪ちゃん?」

声のした方向へ向いた龍田の目に飛び込んできたのは、砲口から煙を立てている連装砲を、両手で構えた吹雪の姿であった。その勇ましさと共に緊張感とを持った眼差しは、敵へ真っ直ぐに向けられている。

「オラア!」

龍田の目の前に立っている天龍もまた、腰にぶら下げていた砲を構えて砲撃を開始した。ただしそれは、普段彼女が背負った艤装に装着されたものではなく、吹雪と同形式の駆逐艦用連装砲だった。

砲撃は敵に直撃こそしなかったものの、敵への牽制及び衝撃による微量のダメージを与えることには成功しているように思えた。

「はい、これ龍田の分だよ」

川内が龍田に吹雪型駆逐艦用の連装砲を手渡す。

「逃げる途中で合流した吹雪に渡されたんだ。龍田が使うといいよ」

「駆逐艦用でも結構やれるぜ!」

楽し気な声色で天龍が告げる。

「行くぜ龍田! オレらであの仮面野郎を倒すんだ!」

「……………」

暫しの沈黙の後

「そうねえ、私達に手を出した事を一生後悔するくらいに、たつぷりとお仕置きしてあげようかしらあ」

闇に映える、ある意味で誰よりもにこやかな——見る者が見れば震え上がるような——笑みを浮かべた龍田は、天龍と共に、先程まで自身と交戦していたライオトルーパーへと突撃を開始したのであった。

「いやー、ノってるね龍田ってば……と、吹雪!」

天龍、龍田の背を見送った川内は、吹雪へ呼びかける。それを受け



川内の方を振り向く吹雪。

「あたしらはアイツの相手だ」

そう言っつて後方を振り返り川内が指さした先には、彼女らを追いかけてきた、残り一体のライオトルーパーの姿があつたのだつた。

「了解です！」

返事をした吹雪は、即座に連装砲の狙いを定め、砲撃を開始した。

「それじゃあ、アイツに私たちの魅力をたっぷり教えてあげようか、夜戦でね！」

【第九話】 part 3

息を切らせながら、夕張は森の中を駆け抜ける。

怪物の事、逃がした陽炎と黒潮の事が脳裏にチラつく。押し寄せる数々の不安が心を、蒸し暑さとぬかるんだ地面が身体を疲弊させる。だが、彼女は挫けることなく走り続ける。仲間を思つて。

ふと夕張は、何かの気配を感じた。例の怪物が追ってきたのかと思ひ、走りながら後ろを振り返る。だが視界には薄暗い森の風景が広がるのみ。どうやら後ろには何もいないらしい。夕張は足を止めると同時に周囲を見回す。

すると、前方で何かが動いたように思えた。

(もしかして、先回りされた?)

夕張は警戒しつつ目を凝らして、目の前を見据える。

すると薄暗い闇の中を、人影らしきものが近づいてくるのがわかった。それは先程自分達を襲った、ずんぐりむっくりの怪物とは異なるシルエットのように見えた。その手足は幾分かスレンダーで、ずっと人に近い姿に感じられる。

(少なくともあの怪物じゃ無さそうね。誰かしら?)

一安心した夕張は「おっい！」とその影に呼びかけつつ、大きく両手を振る。

きつと陽炎らの報告を受けて、救援に来てくれた者だろう。そう合点した夕張の顔は、自然と綻んでいた。

だが、目の前の影が近づくにつれ、何か違和感が大きくなっていった。

肩の部分が人にしては随分と盛り上がっており、やたら角ばっているような印象を受ける。初めは艦娘の艦装か何かだろうと思つていたのだが、その形は彼女にとって見覚えの無いものだった。

更に目を凝らすと、頭部に鋭い物が付いているのが薄っすらと見て取れる。頭部に艦装を付けた艦娘といえば天龍が思い当たる。だが彼女の頭部に付けられる艦装に比べて、それは鋭く、大きすぎた。

怪訝そうな表情の夕張の前に、やがてその影の主は姿を現わした。

その姿を目にした夕張の表情は恐怖に歪んだ。それは怪物であつた。

茶色の身体に水色のラインが胴体と手足に走り、肩には羽のように広がった鋭く尖る枝角。頭部には、その顔の倍以上の長さを誇る二本の角が、天を指すように伸びていた。

怪物の容姿は例えるなら鹿。鹿と人間を掛け合わせたようなモノであつた。

「あ、ああ……」

目を見開き、か細い声をあげて後ずさりする夕張。

怪物は獣じみた息遣いをしながら一歩、また一歩と近づいてくる。怪物の顔、それに刻まれた線のような、眼と思わしき部分がギラリと光り、夕張を睨みつけるような仕草を見せた。

次の瞬間、夕張は悲鳴を上げ、怪物に背を向け全力で逃げ出していた。

シカ型の怪物は、両腕を広げて天を仰ぎ見るような仕草で咆哮する。

そして、逃げる夕張を追いかけだした。

夕張は走つた。残つた力を全て振り絞るようにして走つた。

手を、髪を大きく振り乱し、森の中を駆け抜ける。時折後ろを振り返る。しかしながら怪物との距離は一向に開かない。それどころか、逆に怪物に距離を詰められつつある。

夕張の身体が疲弊してるのもそうであるが、シカ型の怪物の動きが素早いのも要因だつた。

背中越しに怪物の足音が、荒い息遣いが聞こえてくる。徐々に大きさを増し近づいてくるそれらに夕張は恐怖した。

普段、異形の海の怪物『深海棲艦』と戦いを繰り返す艦娘である彼女も、艦装を身に付けていない状態では、ただの人間、ただの少女である。一人きりで薄暗い森の中、未知の怪物に追いかけられる。

夕張の体力と精神力は限界に近づいていた。

「きゃあっ！」

膝の力が抜けた一瞬、ぬかるんだ地面に足を取られバランスを崩

す。そのまま地面を転がった夕張は、大木に背中をしたたかに打ち付けてしまった。激痛が身体を駆け抜ける。

「ゲホッ、ゲホッ！」

思わず咳き込む。一瞬意識も遠くなりかけたが、わずかな気力を振り絞りこれを耐え抜く。

疲労が溜まり、水に濡れて重くなった身体。それをどうにか動かして立ち上がろうとする。

「痛ッ！」

夕張の右足に激痛が走った。足首を抑え、傷みによって歪む臉を何とかして開きながら見やる。右の足首には幸いにも、折れているような様子は見受けられない。だが少なくとも、捻挫ぐらいの怪我は負っているように思われた。

再度体に鞭打って立ち上がろうと試みる。しかし、足首に激痛が走り、夕張は地面にへたり込んでしまう。

——ピシャ、ピシャ——と音がする。

夕張は恐る恐る顔を上げた。目の前にはシカ型の怪物の姿。同時に雷鳴が轟き、稲光が怪物を照らし出す。

「い、嫌……」

地面にへたり込んだまま後ずさりする夕張。地面を、泥を掻き分ける手に何か当たった。目を向けるとそこには、先程まで彼女が手にしていた火かき棒があった。どうやら転んだ時に取り落してしまっていたらしい。

後ずさりする夕張に対し、怪物はゆっくりと歩みを進め近づいていく。

「こ、来ないで————!!!」

夕張はそのままの姿勢で、両手で持った火かき棒をやたらめったらに振り回した。ブンブンと音を立てて火かき棒が空を切る。

ガキッ!!と音が鳴り、夕張の手に確かな手ごたえが。

(当たった！)

微かな希望をもって、その方向を見やる夕張。だが、その眼に映ったのは、火かき棒の先端を片手で握りしめた怪物の姿だった。

「ヒッ！」

夕張は思わず火かき棒から手を放してしまう。そして怪物は無情にも、手にした火かき棒をいとも容易く折り曲げ、放り棄てた。

怪物の手が夕張に向かって伸びていく。それから逃れようと夕張は、更に後ずさろうとするが、その背中は木に阻まれてしまう。

夕張は恐怖に体を震わせ、瞳から大粒の涙を流した。

迫る怪物の魔の手。そして、怪物の額が不気味に蠢きだし、徐々に横へと開き始める。そこには鋭い牙の生えた、口のような物が……

（やだ、やだよ。こんな所で怪物に襲われて、食べられて死ぬなんて……そんなの、そんなのって）

怪物の手が、ガタガタと小刻みに震える夕張の頭を掴みかける。

「いやあああああー！ー！！」

闇に包まれた森の中に、夕張の悲鳴が響き渡った。

「はああああああ！！」

雄叫びを上げる一人の男が、怪物へと飛びかかった。そしてそのまま、もつれ合うように両者は地面を転がっていく。

「……え？」

一瞬の放心の後に、夕張は涙に濡れた瞳をゆっくりと動かし、怪物の転がっていった方向を見やる。するとその視線の先には、シカ型の怪物と対峙する、軍服を纏った男の背中があつた。白かつた軍服は雨と泥に濡れて、所々茶色に染まっている。

「貴虎、なの？」

「夕張さん！」

息を切らせながら陽炎が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか!?!どこか怪我とかしてませんか!?!」

夕張の肩を掴んで呼びかける陽炎。

「……陽炎？」

「良かった、無事で。本当に良かったです」

瞳を潤ませた陽炎は、夕張の身体を抱きしめた。困惑した表情の夕張もまた、両手を陽炎の背中へと回し、その身体を抱き返す。

目の前の少女の体温の暖かさが、とても心地良く思えた。

(やはりインベスだったか。しかもこいつは進化した上級種。厄介なことになった)

怪物、シカ型のインベスは、いきり立った様子で貴虎へと襲い掛かる。強靱な手足から繰り出される攻撃を、貴虎は紙一重でかわしている。

(武器も無しに、コイツと戦うのは分が悪すぎる)

数々のインベスと戦い、それらを屠ってきた貴虎といえども、味方の援護なしで生身での戦闘は厳しい。

かつての経験のおかげで攻撃に対処できてはいるが、それもいつまで持つかはわからない。ここに辿り着くまでに体力も大分消耗していた。

初めはインベスの攻撃を避けきっていた貴虎。しかし体勢を崩した一瞬、敵の攻撃が貴虎の動きを捉えた。

「くっっ！」

インベスの拳を腕でガードして、致命傷を負う事はさけられた。しかしながら腕を襲う激痛に体が悲鳴をあげる。

更に、それで貴虎が怯んだ隙を付いてシカインベスは、猛ダツシユと共に貴虎へと体当たりを仕掛ける。

貴虎はこれを回避できず、その身体を大きく跳ね飛ばされてしまった。

「がはっ！」

地面に叩きつけられ、そのまま転がる貴虎の身体。幸いにも雨で軟らかくなった地面が衝撃を吸収してくれたおかげで、落下によるダメージは殆どない。だが、シカインベスの繰り出す打撃は、確実に貴虎へダメージを蓄積させている。

(だが、今のこの状況なら……)

ふらつきながらも起き上がった貴虎は、陽炎へ向け告げた。

「陽炎、夕張を連れて逃げろ！」

「でも貴虎さんが！」

「そうよ！このままじゃ、あの怪物に貴虎は……」

「大丈夫だ！俺の事なら心配無い！早く行くんだ！」

そう叫んでシカインベスと取っ組み合う貴虎。鋭い枝角が、彼の体に傷を刻んでいく。

夕張と同様に、不安げな表情を見せていた陽炎であったが、奮戦する貴虎の姿を見て決心したように頷くと

「行きましよう夕張さん！貴虎さんの頑張りを無駄にしない為に！」

夕張へと手を差し伸べる。対して戸惑いの表情を浮かべていた夕張であったが、怪物を懸命に足止めしようと足掻く貴虎の姿を見て心を決めた。陽炎の手を取り、彼女の肩に手を回して立ち上がろうとする。

「痛っ！」

捻挫した足に痛みが走る。

「大丈夫ですか!？」

「私は平気よ。それよりも早く……」

陽炎の肩を借り、夕張は怪我をした足を引きずるようにして歩き出す。

(行ってくれたか……)

去りゆく彼女らの後ろ姿を見て、貴虎は安堵する。

シカインベスの注意は完全に自分へと向いている。このまま注意をひき続けて、彼女らの逃げた方とは反対の方向へ誘導し、隙を見て自分も撤退する。そうすれば少なくともこの危機を乗り切る事は出来る。

もつとも、基地へ引き返しても例のデイエンドと名乗った侵入者の脅威があるため、安全とは言い難い。それに関しては、提督が上手く事を運んでいてくれるのを祈るしかなかった。

そう考えつつ、シカインベスと交戦し続ける貴虎。そんな彼の目に飛び込んでくるモノがあった。

(あれは!?)

眼前のシカインベスの肩越し、数十メートル程離れた所に灰色の人

影。

(もう一体のインベスだ?!?)

それは山小屋で夕張達を襲ったインベス。シカインベスなどの強力な個体へと変貌する前の姿。言わば“初級インベス”と呼べるものだった。

(目の前のヤツ一体ならまだどうにかなるが、もし二体同時に相手をしなければならぬとなると……)

その時、シカインベスが後ろを振り返る。どうやら初級インベスの存在に気が付いたらしい。そして唸り声のようなものを上げる。

(くっ、アイツをこちらに呼び寄せるつもりか!)

だが次の瞬間、シカインベスは一目散に後方の初級インベスの元へと駆け出して行った。

困惑しつつも貴虎は、何かと視線を初級インベスの方へ向ける。すると何かを手にした初級インベスが、まるで小躍りをするかのような動きをしているのが見えた。手に握られているのはヘルヘイムの果実であった。そして、口元へとそれを持っていき食そうとする。だが次の瞬間、初級インベスの体は宙を舞う。シカインベスが猛突進を喰らわせてきたのだ。

地面を転がった初級インベスは立ち上がると、地団太を踏んで怒りを露わにする。

一方でシカインベスは、自らが吹っ飛ばした者の事など気にも留めない様子で、地面に落ちた果実を拾い上げる。そして開いた額の口に放り込んだのだった。

(食料を巡っての仲間割れか?ならばこの好機を逃す手は無い)

と貴虎は木陰に隠れて思案する。だが……

「!?’

貴虎は驚愕した。

果実を取り込んだシカインベスが体をブルツと震わせたかと思うと、緑の光と共に溢れ出した植物の蔦や葉が、インベスの体をたちまち包み込んでいき、肥大化していった。

やがて緑の光と植物は弾け飛び、そこには筋骨隆々に巨大化した下



半身、さらにそれ以上に大きく膨れ上がった胴体と、巨鳥の羽の如く広がった枝角を肩に携えた姿に変貌を遂げた、シカインベスがいたのであった。

(ロックシードも用いずに更なる進化だ?!?どうなっている)

巨大化したシカインベスは、有り余った力を解放するかの如く、腕を大きく振り回した。周囲の木々はその怪力により次々になぎ倒されていく。そしてそれは、哀れにも果実を奪われてしまった初級インベスの頭上へと倒れ込んでいく。地響きと共になぎ倒された木々の下敷きになった初級インベス。その身体が動きだす事は二度と無かった。

続いてシカインベスは、大地を揺るがさんばかりの咆哮を上げた。周囲の空気がビリビリと震える。そして泥や草花を巻き上げながら地響きを起こして、猛スピードで走り出す。その方向は……

「しまったー！」

陽炎の肩を借りて歩いていた夕張の耳に、奇妙な遠吠えが聞こえてきた。

不思議に思い、後ろを振り返る。陽炎もほぼ同じタイミングで後ろを振り返った。それを見て、気のせいでは無い事を悟る夕張。二人はお互いに顔を見合わせる。

「もしかしてあの怪物かしら?」

「かもしれないですけど……」

陽炎は言外に、今から戻っても仕方がない、といったニュアンスを含ませる。無論夕張もそれを承知の上。貴虎の事は心配であったが、彼のためにも今は基地へと向かうのが先決。そう考え正面へと向き直ろうとする。

「……?」

すると続けて夕張の耳に地響きが聞こえてくる。それは徐々に大きさを増し、更には大地までもが震動し始める。

謎の音の正体は何か、それを確かめるために自分たちの歩いてきた方向を、目を凝らしてじつと見つめる。すると巨大な獣の様な何か

が、近づいてくるのが目に映った。それは瞬く間に彼女達との距離を詰めていく。

「危ない！」

咄嗟の判断で夕張は陽炎と共に、横っ飛びに身を投げる。その隣を謎の獣が駆け抜ける。

「な、何ですか一体?」

体を地面に伏したまま顔を上げる陽炎。彼女の視線の先、数十メートル程で急停止した巨獣が飛び跳ねる。

腕を振り回し、自らの胸を太鼓のように打ち咆哮する。

暫くの後、それはクルリと後方へと向き直る。そして片足を後ろへと何度も何度も蹴り上げる。

「まさか……」

夕張は、牛が闘牛士へ向け突進する直前の光景を思い浮かべた。自分の予想通りに怪物が突進してきたら、陽炎共々その巨体に押しつぶされてしまう。隣に伏せる陽炎も全く同じ事を考えているのか、顔を青ざめさせている。

夕張は負傷していない陽炎だけでも逃がすべく、彼女の身体に手をかけ抱き起こそうとする。

と、その時、彼女の眼前に人影が立ちはだかった。

「どうやら……間に合った、ようだな」

「た、貴虎!」

息を切らせながら上下する肩越しに見える彼の横顔は泥と痣、擦り傷から滲む血で汚れていた。軍服も所々が破け、その下に負った傷から血が流れている。それは怪物との戦いの激しさを物語っていた。

貴虎は、今にも突撃しようとしている怪物の方へと一歩、また一歩と近づいていった。

「ダメー!私の事はいいから、陽炎を連れて逃げて貴虎!」

怪物が後方への蹴り上げを止めて、荒い息を吐いた。

その姿を見て貴虎は、フツと笑みをこぼす。そして手近にあった、鉄パイプ程の大きさの杖を拾い上げて構えをとった。

「お前たちは、大切な仲間が俺が守る!この命に変えてもだ!」

シカインベスが力を込めた足で大地を蹴り、猛烈なスピードで突進を開始した。

快速で森の中を駆け抜ける少女が一人いた。仲間から受け取った荷物を脇に抱えて。

「にひひっ！やっぱり誰も私に追いつけないね」

島風は得意気に笑いながら、なおも走り続ける。

彼女が抱える荷物、それは川内がディエンドから奪い返した植木鉢だった。

川内は武道場を飛び出した直後、川内の訓練に付き合うために外で待っていた島風に、それを託したのだ。とにかく遠くへと走るようにと言われた島風は、自慢の脚を活かして、敵に感づかれる前に演習場付近から離脱していた。

川内との夜戦訓練に付き合っていたおかげで、目はいつも以上に闇に慣れていた。そのため、夜の森でも苦も無く走れている。

「でも、どこまで行けばいいんだろう？このままじゃ、あつという間に島を一周しちゃうよ」

そう呟いた時だった。

「うわあつ！」

彼女が手にした植木鉢が突如として黄金色の輝きと熱を発しだした。

島風は思わず手に持った鉢を離してしまう。

「あつ！」

しまった、という表情をする島風。だが次の瞬間、目に映る不可思議な光景に彼女は啞然とした。

「……浮いてる」

そのまま地面に落ちて割れるかと思われた植木鉢は、ふわふわと下に揺れながら宙に留まっていた。そして、スーッと島風の目線ほどの高さへと浮き上がってくる。

「きれい……」

周囲を優しく照らす黄金色の光に、島風は思わず見とれてしまう。

暖かな光を放つ植木鉢は、やがてその姿を黄金の光球へと変化させ、凄まじい勢いで空へと飛び上っていった。眩く輝く光の尾を描きながら。

自分の元へ突進してくるインベスを見据える貴虎の脳裏に、死に対する恐怖は無かった。彼に恐怖があるとすれば、後ろにいる少女達を死なせてしまう事、それだけだった。

手にした得物は木の枝、目の前の怪物を相手にするには無謀。そして、その振舞いはあまりに無策すぎる。

だが彼の体は、自然とそれをせずにはいられなかった。

(私にもこんな無鉄砲な所が残っていたとはな)

自嘲する貴虎。そして眼前に迫りくるインベスを前にして、腕へと力を込めた。

刹那、天が瞬いた。

貴虎とインベスとの間に、一柱の黄金色の光が顕現した。それは迫りくるインベスを激しく吹き飛ばした。

そのあまりの眩しさに貴虎は、思わず手にした枝を地面に落とし、両腕で頭を覆う。

(何が起った!?)

顔をしかめながら、瞳をゆつくりと開いていく貴虎。

彼の眼前にそびえる光の柱。その中には、二つの小さな影が映っていた。

何かに導かれるかの如く貴虎は、光の中へと手を伸ばし、その影に手を触れた。

掴んだ影の感触は、彼にとって非常に馴染み深い物だった。それと同時に光は収束し、貴虎の手の内にある物体に収まるようにして消えていった。

「これは!？」

貴虎の手に収まっていたのは、中央に大きな窪み、傍らに黄色い刃の小刀を携えた奇妙な形の黒い機械。

そしてもう片方の手には、緑色の果実を模した、錠前のような物体。

「戦極ドライバーとロックシード！何故ここに!？」

困惑する貴虎、その一方で吹き飛ばされたシカインベスが、巨体に見合わぬ機敏な動きで跳ね起きた。

そして再び、貴虎の元へ突進を開始した。

（いや、そんな事、今はどうでもいい。この力さえあれば！）

貴虎は手にした機械を腰の高さにかざす。すると黄色いベルトが瞬時に伸び、戦極ドライバーが体に装着される。

「変身ー」

右手のロックシードのスイッチを押す。掛け金が伸び上がり、ロックシードが開錠される。

「メロンー」

電子音声が響き、貴虎の頭上へ黄金の輝きが収束、輝きが弾けると共に緑色の果実のような球体が出現した。

猛スピードで突っ込むシカインベスが、眩い輝きを身に受け、顔を覆い悶え苦しんだ。

貴虎はロックシードをドライバーの窪みにはめ込み、掛け金を手で押し込んで錠前を閉じる。

「ロックオンー」

合戦の始まりを告げるようなホラ貝の音色と、リズムカルな音楽が周囲に響き渡る。

貴虎はドライバーの小刀を振り下ろし、ロックシードを割り開いた。

「ソイヤッー」

頭上の果実が落下し、貴虎の頭に覆いかぶさると同時に、その身体が白の戦闘服に包まれる。

「メロンアームズー天・下・御免!!」

緑の果実が彼の上半身を覆うように展開する。

優美な琴の音色が、ドライバーから奏でられた。

溢れる黄金色の輝きに目を晦ませられたシカインベスは、ブルブルと首を一振りし立ち直ると、改めて顔を正面へと向ける。

するとそこには、腰に刀を携え、左手に盾を構え、網目状の模様が

刻まれた緑色の装甲を身に纏った鎧武者が、悠然と立ちはだかつていた。

鎧武者は腰の剣を右手で抜き、構えをとると

「はあああああ!!」

気迫に満ちた雄叫びを上げ走り出したのだった。

降りしきる雨は、いつしか止んでいた。

【第十話】 part 1

巨大な怪物の剛腕が、緑と白色に彩られた装甲を身に纏う鎧武者、則ち「アーマードライダー斬月」と化した貴虎へ幾度も振り下ろされる。巨体に似合わぬ素早い動きで、矢継ぎ早に繰り出される拳撃。しかしながら、その拳が斬月の身体を捉える事は無い。彼はインベスの動きを的確に読み、紙一重で攻撃を避け続ける。いや、そのみならず腕が振り下ろされる度に、斬月は手にした刀によって一太刀、また一太刀とシカインベスに傷を刻んでゆく。

攻めれば攻めるほど逆に傷を負ってゆくシカインベス。戦局の天秤は最早、完全に斬月の方へと傾いていた。

眼前で繰り広げられる未知なる戦闘。それまでに起こった不思議な出来事の数々。

目まぐるしいまでの状況の変化に対し、理解の追いつかない夕張は、ただただ茫然とするばかりであった。

そんな彼女の傍らに立つ陽炎が呟いた。

「貴虎さんも、提督やあの男の人みたいに変身するなんて……」

「提督……も？それに、あの男の人ってどういう事？一体何を言っているの？」

「そ、それはですね……」

夕張の質問に対し、陽炎は混乱気味の自らの記憶をどうにか整理しつつ、先程までに起こった出来事を夕張に説明していく。

「……………」

陽炎の話を聞く夕張の頭もまた、事実が明らかにされていくたびに困惑の度合いを増していく。驚きの言葉すら出てこない程に。

平時であれば、ただの作り話として笑い飛ばす事も出来たであろう。しかし彼女が体験した出来事、今まさに目の前で繰り広げられている光景がそれをさせてくれない。

（訳がわからない、一体この島で何が起きているっていうの？）

そして時は、貴虎がインベスと対峙し、戦極ドライバーを手にする

少し前へと遡る。

琥珀色の仮面を付けた兵士が、人の手形を模したベルトのバックルに、指輪のはめられた右手をかざす。

【アロー・ナーウ】

ベルトから低い鐘の音。加えて、呪文のようでいて且つどこか電子的な雰囲気を思わせる音声が響くと共に、淡い光が溢れ出す。そして兵士の正面の虚空に魔法陣が出現した。

魔法陣より飛び出した幾本もの光の矢が、えびす夷提督——仮面ライダースカル——へ向けて放たれる。迫り来る光の矢の雨を、スカルは後方へ跳びすさり紙一重の所でかわしきる。標的を仕留めることなく地面に突き刺さった光の矢は、暫しの後に跡形もなく霧散した。

矢を躲したスカルが着地した隙を付いて、別の兵士が鋭い鉤爪の様な武器が付いた腕を振り下ろした。

「ふんっ！」

鉤爪が装甲に傷を刻むかと思われた寸前、スカルは敵の腕を掴み取った。そして腰を深く落とし、腕を引き寄せる。バランスを崩しよろめく相手へ更に足払いを仕掛け、地面に倒し伏せた。トドメと言わんばかりに吐き出される「フツッ！」という低い掛け声、首筋へ向け振り下ろされるスカルの手刀。だがしかし……

「ぐッ！」

三体目の敵が手にしていた槍の様な武器が、スカルの胴を打ち据えた。思わず彼が怯んだ所へ、流れるような連打を琥珀面の兵士が浴びせかけていく。

そして、フィニッシュとばかりに繰り出された猛烈な勢いの突きによって弾き飛ばされたスカルは、地面に身体をしたたかに叩きつけられる。好機とばかりに倒れている彼に向かって、先程光の矢を放った兵士が新たな攻撃を仕掛ける。

【サンダー・ナーウ】



新たな音声と共に、今度は緑色に眩く輝く電撃が放たれた。

同時に響く銃声。

電気の帯はスカルの身体を捉えることなく、彼の上方へと逸れていった。そして電撃を放った兵士は、腕を押さえて跪いていた。

帽子のズレを、片手で直しながら立ち上がる仮面ライダースカル。もう片方の手にはスカルマグナムが握られていた。

「倒れたと同時に追撃を予見し銃を手に。そして正確に相手の腕を狙い撃って攻撃を逸らす。まったく、溜息が漏れそうになるくらいの鮮やかな射撃。正に神業だね。同じ銃使いとして惚れ惚れするよ」

スカルへ向かって賛辞を述べつつ、デイエンドが軽く二、三度拍手をする。

「奇妙な技を使う手下に戦いを任せて、自分は高みの見物か。俺も舐められたもんだな」

「僕と一緒に戦ってしまっただけは、戦いは呆気なく終わってしまったからね。極上のお宝が最も輝く瞬間を目に焼き付ける、それもまた楽しみの一つなのさ」

悠々と語るデイエンドは更に告げる。

「それと一つ教えてあげよう。彼らの使う技は『魔法』さ。彼らは魔法を使って戦うライダー、仮面ライダーメイジ」

「魔法使い、か。まるで御伽話のようだな」

「ではショータイムの続きだ。魔法使いの兵隊さん、骸骨魔人を退治して、お宝を僕の手に乗せてくれたまえ」

デイエンドがパチンと指を鳴らす。それと同時に三体の仮面ライダーメイジは、再び仮面ライダースカルへと襲い掛かる。左からは鉤爪を構えた、右からは槍状の武器『ライドスクレイパー』を手にしたメイジが、各々の武器を振り下ろす。

「魔法使いなんてのは……」

ボソリと呟いたスカルが瞬時に大きく真上へと跳躍。樹上へと飛び移り、三体のメイジの攻撃から逃れる。

樹上のスカルへ向け、残りの一体のメイジが魔力解放のためにベルトのバックルへと、電撃の魔法の力が込められた指輪をかざした。

「子供に夢でも見せてりやいい。いい歳したオヤジなんか構ってないでな」

スカルマグナムの銃口が、地上のメイジにピタリと向けられていた。

《スカル！マキシマムドライブ！》

跳躍すると同時にスカルは、ガイアメモリをスカルマグナムへと装填していた。

メモリの力によって強化された弾丸が、銃口から放たれる。狙いすまされた一撃は、スカルを撃ち抜かんとかざされていたメイジの手へと、吸い込まれるように飛んでいった。そして紫色のオーラを纏った弾丸によって、メイジの指輪が打ち砕かれる。

微かなエメラルドグリーンの煌めきを放ちつつ、指輪を構成する素材である魔法石の破片が周囲に飛び散った。

刹那、

指輪を砕かれたことによって、行き場を失い暴走した電撃の魔力が、メイジの身体の表面で弾け飛んだ。自らの電撃によって、メイジはその身を焼かれる事となったのだ。眩く弾ける電撃により身体を痙攣させられながら、メイジは無残にも倒れ伏したのだった。

その様子を目の当たりにし、残り二体のメイジは動揺したかのような仕草を見せる。しかしながら、それも一瞬の事。危機を察知し、即座にメイジらは後方へと跳びすさる。二人のいた位置にスカルマグナムの銃弾が降り注いだ。

（ふむ。ガイアメモリの能力による肉体の強化。加えて敵の行動を常に先読みするほどの洞察力。或いは推理力と言うべきか？怪我人と思つて侮つていたけど、なかなかどうして予想以上の曲者だね）

視線の先にて、メイジと再び格闘戦を繰り広げ始めたスカルの姿を見て、デイエンドは嘆息したのだった。

彼の視界の端で、倒されたメイジの姿がスツと消滅した。それを気に留める者は誰もいなかった。

常人では数メートル先を見通す事はおろか、手元をハッキリと見る事すら困難な程に暗い森の中。しかしながら、ここでは剣戟音が幾度となく響き渡り、弾け飛ぶ火花が宙を舞っていた。

陸地の夜よりも暗い宵闇の大海を航行し、任務を遂行する事など常である艦娘の天龍。

夜間での集団戦闘をも、難なくこなす事が可能なライオトルーパー。

両者にとってこの程度の暗がりには、戦闘において多大なる支障を来すようなモノではなかった。

「はあああつー！」

雄叫びと共に振り下ろされる天龍の刀。その重く激しい一撃をライオトルーパーは、いとも容易く短剣で受け止める。

と、即座に天龍は跳ぶように一步後退。続けざまに右側からの横薙ぎの一撃を、叩きつける様に繰り出した。

だが、それもまたトルーパーに呆気なく受け止められる。

「クッ！」

歯噛みした天龍は数歩後退し、刀を構え直した。

（オレの全力を受け止め続けて平然としてられるだけの力と体力、切ったり撃つたり色々となす妙な武器、おまけに暗所での戦闘も達者ときやがる……。提督と同じような、何ちゃらライダーとかつてのは、こんなに強えモノなのかよ）

思案する天龍は、より刃こぼれの増した愛刀と、ライオトルーパーの手にしたアクセレイガンを交互にチラリと見やる。

（ヤツの武器には消耗してる様子が見られねえ。やっぱりこれ以上打ち合って耐えきれぬかは怪しい所だな……）

ライオトルーパーが手にしている短剣——アクセレイガン——の刃は、フオトンブレードエネルギー”という特殊なエネルギーを纏っている。フオトンブレードは出力が強力であれば、触れた生物などを一瞬にして灰と化してしまう程の強大なエネルギーを秘めている。もつとも、ライオトルーパーの武器に使用されているエネルギーは、大幅に出力が抑えられたものであり、物を瞬時に灰化させてしま

えるような力は持ち合わせていない。

だが低出力のエネルギーであっても、それは刃に高熱を発生させ、並の物体であれば容易く切断してしまえる程の性能を持っていた。

——それと渡り合う事が出来ている艦娘の武装も、並大抵の物では無いのだが——

無論、天龍がそこまでの情報を知りえているわけでは無い。しかしながら、尋常ではない速度で劣化してゆく愛刀の様子に只ならぬ脅威を感じていた。

実力の知れない未知の相手に対し、天龍は本能的に危機感を覚えていた。そしてそれは、彼女の戦い方を彼女らしからぬ程に慎重なものとさせていた。

(つたく、攻め難いつたらありやしねえ！)

天龍は柄を握る手に力を込めると共に、再度攻撃を試みる。が……  
「!?」

刀の先からピシリという異音と共に、微かな振動が天龍の手へと伝わった。

(やべえー！こんなタイミングで！)

それは彼女の愛刀の刃に、亀裂が走った事を意味していた。

これに動揺し天龍は、攻撃の手を一瞬遅らせてしまう。

トルーパーは、生じた隙を見過ごさなかった。勢い、角度、諸々が中途半端な刀の撃ち込みを、短剣の刃でもって滑らし受け流す。

それにより天龍はバランスを大きく崩し、前のめりに倒れてゆく。

ライオトルーパーは、アクセレイガンを素早く逆手に握り直し、天龍の背へ向けて突き立てる………その瞬間

「え〜〜いつ〜」

間延びした掛け声。それに似つかわしくない、雷光のような鋭い突きが共に繰り出され、トルーパーの胸を脇から打ち据えた。

不意打ちを受けたトルーパーは、体勢を崩してたたらを踏む。

生まれた一瞬の隙の間に、倒れ行く天龍の服の襟を、声の主——龍田——が片手で引っ掴んだ。

「ぐえっ！」

喉を締め付けられた天龍が呻き声を上げた。しかし、そんなことはお構いなしに、龍田は天龍を後方へと放り投げる。

泥を跳ね上げながら転げる天龍を尻目に、自らも後方へと跳びすきりつつ、龍田は腰に下げていた吹雪型駆逐艦用の連装砲を手にする。

そしてトルーパーへ向けて砲撃を放ったのだった。

撃ち出された砲弾は、突きを打ち据えられたトルーパーの脇腹付近へ着弾。爆発の衝撃が、その身体を数十メートル先へと吹き飛ばした。

「っ、ぺっー……龍田！お前なあ！」

僅かに口に入った泥水を吐き出しつつ、声を荒げて天龍が言った。

「あら〜ごめんなさいねえ〜」

相変わらずの暢気な口調の龍田へと、詰め寄って行く天龍。彼女は相棒に向け更に文句を告げようとするが

「らしくないわよ、天龍ちゃん」

龍田の人差し指を口へと当てがわれ、押し黙ってしまふ。

「刀にヒビが入ったくらいでなくには？ヒビが入っても刃が折れるまで、折れたなら残った刃で、刃が無くなったら残った柄で殴る。それも壊れちゃったら、手あたり次第使える物を何でも使って攻撃する。その位のガッツは持つてはるはずよ、あたしの良く知る天龍ちゃんは」

目を細め、笑みを浮かべて言う龍田の手を横にのけて

「……ハア。つたく、ムチャクチャ言いやがる」

ため息混じりに呆れて呟く天龍だったが

「わかったよ。ゴチャゴチャ考えるのはヤメだ。お前の言う通りガン攻めてやるよ。その分フオローぬかるんじゃねえぞ！」

「もちろんよ。いつも通り、ちやくんと天龍ちゃんの空けた穴は埋めてあげる」

そう言うと二人は、握った拳を頭上でぶつけ合った。そして砲撃の衝撃から立ち直り、体勢を整え始めた敵へと向かって全力で駆けていったのであった。

重低音を響かせてエンジンが唸りを上げ、高速回転するプロペラが空気を切り裂いていく。木々の間をすり抜けて飛ぶ、三機の零式艦戦21型は、目標の敵影へと一直線に向かって行く。

間もなくして射程圏内へと入り込んだ21型の編隊は、前方より走り来る敵へ機銃の掃射を開始した。

が、その瞬間。一機の21型が光弾に貫かれ爆散。跡形もなく消滅したのだった。

僚機の撃墜を受け、残る二機は敵の射線から逃れるべく、進路を変え散開する。

しかし木々の生い茂る森の中、敵に相對しながらのそれは困難を極める。

残ったうちの二機——撃墜された21型に最も近かった——は左方向へと旋回。機体を九十度傾け、木々の間を通り抜ける。一度、二度と障害を辛くも躲していくが、強風にあおられた枝葉がその行く手を遮る。回避行動を取る間もなく接触した機体は、バランスを崩し地面へと墜落。爆発炎上する。

最後の二機は、近くに運良く開けていた木々の切れ目に向け機首を一気に上げ、上空への退避を試みる。

だがしかし、それを追って地上より放たれた数発の光弾に敢え無く撃ち抜かれ、他の機体と同様の運命をたどる事となったのであった。

そして三機の零式艦戦に狙われていた敵、ライオトルーパーの一人は上方へ向けていた視線を落とし、周囲を見渡すと歩を進め出したのだった。

「っ！……やはり……厳しいですね」

「鳳翔さん大丈夫？」

疲労で呼吸が荒くなっている鳳翔に、那珂が声をかける。取り出したハンカチで、鳳翔の額に浮かぶ汗を拭う。呼吸を整えつつ鳳翔は、那珂へ向け軽く頭を下げた。

「アカン。どんどん攻撃が通じなくなってきた」

そして、傍らの黒潮が不安げに呟いた。

三人はライオトルーパーの追跡から逃れつつ戦闘をこなしていた。

不慣れな場、状況での戦いは、彼女達の——特に主戦力である鳳翔の——集中力と体力を確実に奪っていった。

そして、次第に状況は彼女らにとって不利になってきている。

要員としては、三人のうち最も強力な戦力である、鳳翔の艦載機による攻撃が通用しなくなってきたのが大きい。初遭遇時こそ半ば奇襲に近い戦法により優勢に事を運べていたが、戦鬪を重ねたトルーパーは艦載機による攻撃に対し、的確に応戦し始めていた。

言わずもがな森林の中は、元々艦載機を運用するには適さない環境である。そんな中で普段以上に神経を使っている鳳翔の疲労具合は、他の二名の艦娘の比では無かった。

(手持ちの矢は残り三本。機動力のある艦戦は今ので全て撃墜され、残るは小回りのききにくい艦爆のみ。闇雲に発艦させれば墜落、若しくは撃墜されるだけ。……………この状況を打破する手、全く無いわけではありません。ですが……………)

肩を上下させ呼吸を整えつつ思索する鳳翔。その表情には苦渋の色が浮かんでいた。

だが暫しの逡巡の後、彼女は意を決して口を開きかける。…………と

「鳳翔さん、ここは那珂ちゃん達が引き受けるよ」

「え?」

「やっぱりあの仮面の人を舞台から降ろすのは、鳳翔さんじゃないと難しいと思うんだ。那珂ちゃんと黒潮ちゃんで仮面の人を釘付けにしておくから、鳳翔さんは最高のタイミングを見つけて、花火を打ち上げちゃって。ドッカーンって!……………あ、でも爆撃するなら打ち上げじゃない? 打ち落とす?……………ん?」

人差し指を頬に当て小首を傾げる那珂。その提案の内容と不釣り合いな緊張感のない彼女の様子に、鳳翔は目を瞬かせる。

那珂の提案は、正に鳳翔が考えていた事と合致していた。

二人に囿となつてもらい、その間に遠距離より艦爆隊を発艦。隙を見て高高度からの一斉爆撃を試みるという作戦。

「せやな。それしかあらへんな」

黒潮も提案に同意を示す。

「空母を護るために囷を引き受けたり、無事に艦載機を発着艦できる  
よう露払いするのは水雷戦隊の勤めや。ウチらにドーンとまかし  
たつて下さい」

自身の胸元を拳で叩き、力強く言い放つ黒潮。その表情はとても誇  
らしげに見えた。

「今は那珂ちゃん達が徹底的にサポートする番。だから鳳翔さんの最  
高の舞台、あの仮面の人に見せつけてあげてよ」

満面の笑みを浮かべ、身体の正面で両手を握りしめ、小さくガッツ  
ポーズをする那珂。

自身が口にした事をした事を先に言われたばかりか、力強い言葉で  
背中を押されてしまった。二人につられるように、鳳翔の表情にも思  
わず笑みがこぼれた。

「……ふふつ、わかりました。この場合は二人にお任せします。皆で頑  
張りましょう！」

鳳翔は軽く会釈をすると踵を返し、低い姿勢を保ちつつ駆け出し始  
めた。

と、その時。一条の光が彼女らの頭上を掠めるように走ったのだっ  
た。

「っ!？」

思わず飛び出そうになった悲鳴を、すんでの所で押しとどめ、三人  
は地面に倒れ込むように姿勢を低くし身を伏せた。

三人からそう遠くない距離で鳴り響く、木の破碎音と落下音、衝突  
音。

続けざまに多数の光弾が、彼女らの頭上を飛び交っていく。

光弾に幹をえぐり取られた木が、グラリと地面へ地響きを立てて倒  
れ込んだ。それは丁度、那珂と黒潮、少し離れた鳳翔を分断するよう  
に。

(アカン！見つかってもうた！)

そう思った黒潮は匍匐前進で僅かに移動し、木陰から顔を覗かせ  
た。

彼女の視線の先には、銃を撃つライオトルーパーの背。



ライオトルーパーは四方八方へと銃を乱射していた。幹との分かれ目を撃ち抜かれた枝葉が、地面へと次々落下してゆく。銃撃によって削られた木々が、将棋倒しのように倒れてゆき、激しい地響きの音が辺りを包み込む。

(ん?……敵さん、ウチらを見失ってヤケになつとる?……:……ちやう! そうやない! アイツの狙いはまさか!?)

「いつけえ!」

吹雪の手にした連装砲から次々に砲弾が放たれ、ライオトルーパーの周囲に着弾する。

さしもの敵も吹雪の攻撃を警戒してか、慎重に回避運動をとっている。迂闊に近づくようなマネはしないようで、障害物などを上手く活用し、攻撃の威力や射程などを探りながら、少しずつ着実に吹雪らとの距離を詰めていく。その姿に対し、攻勢に出ているはずの吹雪の方が、逆に焦りを感じ始めていた。

だがそんな気持ちに臆すまいと、歯を食いしばって砲撃を続けていく。

「私達が力を合わせればきつと勝てますよね!……って川内さん何をしてるんですか!?!」

「ん?」

吹雪の隣に立っていた川内は、悠長に腕組みをして、吹雪とトルーパーが戦う様子を眺めていた。

「ちよつと敵さんの観察をね。そもそも私たちの攻撃がどの程度通じるか分からないし」

「そんな!? さつきあんなに威勢よく啖呵を切っていたのに!」

「それにさ、今私が撃てるのって模擬弾だからね」

あっけらかんと言いつつ川内。吹雪はむくれたような表情で前に向き直り、砲撃を継続した。

川内はトルーパーと吹雪を交互に見やりつつ、考え込むような仕草をする。そして暫くして

「よし！とりあえず逃げるよ！」

と言うや否や、踵を返して走り出したのだった。

「ちよ、ちよつと川内さん!？」

「ほらモタモタしないで、走って走って！」

川内の行動の意図が全く分からず困惑する吹雪であったが、即座に方向転換し、彼女の後を追い始めた。

川内は敵の追走を振り切るために、わざと足場の悪い所や、木々の密集している狭い隙間を駆け抜けたり、茂みに飛び込んだりと森の中を縦横無尽に駆け回っていた。

吹雪は置いて行かれまいと、川内の後を必死になつてついて行く。

「ハア……ハア……」

「吹雪、大丈夫？」

息を切らせる吹雪の隣へと、走る速度を緩めた川内が近づき並走する。

吹雪は息を切らせ、途切れ途切れながらに応えた。

「あんまり……大丈夫じゃ、ないです。一体、何なんですかもう……」

「ごめんごめん。あのまま戦つても、状況が悪化するだけ思ったからさ。取りあえず逃げながら時間を稼いで対策を考えよう」と

「それなら、そうと……先に言つて……ください。ハア、ハア」

「いやあ、アハハ。それにしてもアイツら何者なの？私は天井から一通りの様子は見てたけどさ、会話はさっぱり聞こえなくなつてさあ」

「私にもよくわかりません。別の世界から来た、というような事は言つてましたけど……」

「別の世界か、何だかマンガとか映画の話みたいだね」

「だけど、あの光景を見たら信じざるを得ないです」

吹雪の脳裏にデイエンドの変身、そして彼がトルーパーズを呼び出した時の様子が思い起こされる。加えて提督までもがデイエンドの言う「仮面ライダー」という者に変身したのを……

(別の世界の人達、もしかして提督も同じ所から?)

「それにしてもさあ」

との川内の声に、思考の海を泳ぎ出そうとしていた吹雪の意識が引

き戻される。

「随分とアンバランスな装備を持ってきたもんだねえ」

そう言いつつ吹雪を眺める川内。

「緊急事態でしたから。那珂……ちゃん、と手分けして他の人の分の兵装を掻き集めてきたんです」

吹雪は普段出撃する際に“缶”と呼ばれる艀装を背負っている。それは艦娘の装備の中核となるもの、言わば制御装置のようなもので、これがあることにより各種兵装は100%の力を発揮できる。その形状や大きさは艦種、型式により異なっており、吹雪のように大型の装備を背負う艦娘もいれば、川内のように制服と一部一体化し、比較的コンパクトにまとまった形式の装備を身に纏う艦娘もいる。

「私は完全武装すると、陸上では逆に戦いにくくなってしまいますから」

「だったらその足のやつは、いらなかったんじゃない？」

川内は吹雪の足元を見やる。そこには普段彼女が出撃の際につけている海上航行用の艀装があった。それがああるせいか吹雪は若干走りづらそうだった。

「こ、これはいつものクセでつい履いてきてしまっ……」

加えて腰には急ごしらえで持ってきたと思われるいくつかの武装、予備の連装砲の他に対空用の機銃など、あまり現状では役に立たなような装備が、バンドのような物で括り付けられていた。

（本当に慌ててたんだねえ、“あんなもの”まで持ち出して……）

吹雪の武装を眺める川内。と、その視線がある一点に釘付けになった。

（あれは……それにこの場所……）

川内は足を止め周囲を見渡し始める。

（あそこならコレを有効に使える？）

「川内さん？」

不意に足を止めて思案する川内を、吹雪は訝しむ。

更に何か話しかけようとする吹雪を、川内は手で制した。集中して考え込むその仕草に、思わず開きかけた口を噤む吹雪。

(そう、どんな相手だろうと私達は私達の戦い方をするしかない。そして勝つんだ！)

大きく目を見開いた川内は、吹雪の両肩をガシツと掴む。そして突然の事に戸惑う彼女の目を見て、自信たっぷりに言い放った。

「これなら行ける！絶対勝てるよ！」

満面の笑みを浮かべた川内は、意気揚々と自らが発案した戦略を吹雪へと語り出したのだった。

艦娘達の反撃の幕が開く……

【第十話】 part 2

そこかしこから響き渡る木々の破碎音が周囲を覆いつくす。

バキバキと音をたて、黒潮と那珂が身を潜めている場所へと、幹を砕かれた大木が倒れ込んできた。

二人は咄嗟に横へ身を投げて、間一髪でこれを回避する。そして地面へと体を這いつくばらせながら、どうにか押しつぶされずに済んだ事に安堵の溜息を漏らす。

伏せる二人の頭上では何発もの光弾が飛び交い続けている。次々と木々が倒れてくるこの場に留まるのは危険であるが、焦って迂闊に立ち上がれば光弾に撃ち抜かれてしまうかもしれない。

彼女らは息をひそめて、時には倒れ来る木々に潰されないよう身を転げさせ、銃撃の嵐が過ぎ去るのをひたすらに待った。まるで数十分、数時間もの長さに感じられるような「短い」時が過ぎ、やがて辺りは静寂に包まれる。

「黒潮ちゃん、大丈夫？」

那珂はそつと頭を上げ、倒木を隔てて反対側にいると思われる黒潮へ声をかける。

「ウチは平気や。那珂はんも大丈夫そうやな」

黒潮も恐る恐るといった具合で、倒れ込んだ状態から少しずつ体を起こし、姿勢を低くしたまま周囲を見渡した。

光弾を受けて薙ぎ倒された木々が、地面に数多く横たわっている。森の光景は様変わりし、木々が林立していた一帯はさながら荒野のような見晴らしであった。

そして、この惨状を作り出した銀面の戦士が、武器を構えて悠然とした足取りで二人の元へ近づきつつあった。

「ううっ、隠れる場所が無くなっちゃた」

「それに倒木が邪魔で思うように動けへんでコレは……」

「大ピンチ……だね」

接近戦が得手ではない彼女らは、木々の間に身を隠しながら逃走しつつ戦う事で、どうにかトルーパーと渡り合っていた。だが最早この

状況では、その戦法を取る事はできない。

正面切つての戦いとなつては、彼女らがトルーパーと互角に戦う事は厳しいと言わざるを得ない。

「どうしよう、八方ふさがりだよ」

「は、ははは。周りはだだっ広く開けておるんやけどな」

冗談っぽく言葉を発する黒潮であったが、それと裏腹に余裕などは一切なく、背筋には冷汗が流れ落ちる感覚が伝わっていた。

那珂も対処法を模索するが、自分達へ静かにゆっくりと向けられている銃口から放たれるプレッシャーを感じ、思わず喉を鳴らし息をのんだ。

ライオトルーパーは引き金に掛けた指にゆっくりと力を込めたと、その時

「ありがとうございます。貴方のおかげで狙いやすくなりました」

トルーパーは背後から聞こえてきた声に振り返る。そこには弓を構えた鳳翔の姿があった。

「鳳翔さん!？」

那珂が驚きの声をあげる。

「しかし、これ以上この島を破壊し、皆に危害を加えるのは許しません」

凜とした声色で鳳翔は告げ、手にした弓を弾き絞る。

対するトルーパーも、鳳翔へ向け銃の狙いを定めた。

単なる矢の攻撃であれば、ライオトルーパーの装甲には何ら脅威とは成り得ない。だが、彼女が矢を戦闘機に変化させる能力を持ち、その攻撃が軽んじる事は出来ない程に強力であることを、トルーパーは十分に思い知っていた。従って、みすみす彼女に矢を放たせるつもりなど無かった。

素早く彼女を仕留めて残りの二人も始末する。そう判断したトルーパーであったが、一つの奇妙な違和感が攻撃の手を止めさせた。

「……………」

黙して弓の弦を引く鳳翔。だが、そこに番えられていたのは矢ではなく、それと良く似た長さの木の枝であった。

矢を全て失ったのか、焦ってそこらに落ちていた枝を手にしてしまったのかは定かでないが、そのあまりに間の抜けた鳳翔の姿を見て、嘲笑うかのように肩をすくめるトルーパー。そして再び銃を構え、彼女に向け照準を合わせようとする。

「……残念ですが」

と鳳翔が静かに口を開いた。

「全機発艦済みです」

そう言っつてニコリと鳳翔は微笑む。と同時に上空から空気を裂くようなプロペラ音とエンジン音が響き渡る。

音のする方向、自らの頭上へと面を向けたトルーパーの目に映ったのは、三機の艦爆の編隊が自らの立つ場を目掛けて急降下を開始する光景だった。

トルーパーの銀面に表情が浮かぶことは無い。もしもその表情があつたとしたなら——いつの間に——とでも言いたげに驚愕の色を浮かべていた事であろう。

鳳翔は光弾が飛び交い、木々が倒れ行く混乱した状況の中で、僅かな隙を見て上空へ向け矢を放っていたのである。

不安定な場、混乱した状況、不慣れな姿勢で矢を射るその技量、判断力は人並外れたものであつた。

そして彼女の一連の行動は、ほんの僅かの間であるが、ライオトルーパーの状況判断力を大いに鈍らせた。

トルーパーは迫りくる艦爆へ向けてアクセレイガンを発射する。艦爆は機体を傾けてそれを回避。だが乱射される光弾の一発が、先頭の一機の左翼を撃ち抜く。コントロールを失った機体は軌道を外れ、あらぬ方向へと墜落していった。

続けて、残る機体に狙いを定めるトルーパーであつたが……

「させへんでー」

「え〜いつ〜」

黒潮と那珂が援護砲撃を開始した。

砲弾がトルーパーの周辺へ次々と着弾。巻き上げられた土が視界を遮り、爆風による衝撃が狙いをブレさせる。

しかしながら、それでも光弾の一発はターゲットを捉えた。それは艦爆の一機の尾翼を掠め消失させたのだ。

安定性を失った機体は、錐もみ状態となり墜落を始める。だがそれでもなお、艦爆はトルーパーへ向けた軌道を外れることなく突撃してゆく。その姿はさながら、狙った獲物を必ずや仕留めんと降下する猛禽類の如く。

一方でその軌道を読んだトルーパーは、後方へ跳びすさって回避しようとして脚に力を込める。

「喰らいやー！」

その瞬間、黒潮の放った砲撃が彼の足元へと着弾した。地面を大きく穿つ一撃。

足元を崩されたトルーパーはバランスを失い、跳躍しようとした勢いそのままに、仰向けの姿勢で倒れ込んでしまう。

そして、その胸元を貫くように錐もみ状態の機体が墜落する。トルーパーの身体から激しい爆風と爆炎が噴き上がった。膨大な熱量と衝撃の奔流に飲み込まれたライオトルーパーの視界に最後に映ったのは、爆炎を突き破り、自分目がけて降り注ぐ爆弾の雨であった。

「ハア、ハア、ハア……」

緊張した面持ちの吹雪が、荒げる呼吸を整えつつ、連装砲を構えていた。汗がこめかみから頬、顎へと伝って滴り落ち、水溜りに波紋を作る。

雨粒と汗で湿った額に前髪が張り付く。それを煩わしく思う気持ちを心の隅へと追いやって、彼女は戦闘へと意識を集中する。

吹雪は自分の前方、数十メートル先に薄っすらと見える影に向かって、がむしやらに砲撃を放った。

しかしその影はそれを容易く回避する。数度の交戦を経た末に、彼女の砲撃の軌道は敵に読まれるようになっていた。

それでもなお果敢に砲撃を放とうとした瞬間、言い知れぬ悪寒を感じ、吹雪は咄嗟に身を屈めた。



吹雪が背にしていた大岩の一部が砕け、破片が周囲へ飛び散った。  
「ひゃあー！」

思わず悲鳴を漏らす吹雪。

今にも崩れ落ちてしまいそうな位に震える足腰。だが彼女はグツと力を込めて立ち上がり、正面へと向き直る。

その闘志は未だに衰えてはいない。だが今の攻撃は偶然、運よく避けられただけ、恐らく次は無いであろう。

(川内さん、まだですか!?)

心の中で吹雪が叫びをあげた、その時

「待ってっ！」

勇ましい声と共に砲声が鳴り響いた。

カンカンという乾いた音が鳴ると共に、ライオトルーパーの装甲に軽い衝撃が走る。

トルーパーは声と攻撃の飛んできた方向を一瞥する。

そこには橙色の服を着た少女が小さな砲塔の括り付けられた腕を構え、続けて攻撃を放とうとしている姿が見えた。

激しい砲声音に似つかわしくない、まるで豆鉄砲かと思う程に弱々しい攻撃。

トルーパーは川内の事など興味ない、と言うかのように吹雪の方へと向き直り、着実に彼女を仕留めんと歩を進める。

「待ってっばー！お前の相手は私だ！」

川内が腕の主砲を撃つ。

これに対してライオトルーパーは回避行動すら取ろうとしない。

ゆったりと歩くその足が水溜りを踏んだ。パシヤリと音がし水が飛び散る。

「こらー！無視するな！」

自分の事を完全に侮っている敵へ向け川内は大声で叫ぶ。そして砲撃の手を止め、構えを解いた。

「私のことを甘く見ていると！」

怒気と苛立ちを孕んだような大声で言葉を放ちつつ、右手を腰の後ろへと回し

「……痛い目を見るよ」

口元にニヤリと笑みを浮かべ、相手に聞こえない程の微かな声でポツリと呟いた。

彼女が手にしたのは金属製の筒状の物体だった。

右手に握ったそれを川内は、立て膝になる程に腰を深く落とした姿勢、いわゆるアンダースローの投法でライオトルーパー目がけて放ったのである。

地面スレスレから浮き上がるように、きりもみ回転しながら飛んでいくそれは、トルーパーの腿の付け根付近に凄まじい勢いで衝突した。

その次の瞬間、ライオトルーパーの身体は突如発生した激しい衝撃により、宙へと舞い上げられていた。

川内の放った物。それは軽巡洋艦の主要武器の一つにして、最大級の威力を持つ物。『魚雷』であった。

突然の出来事にライオトルーパーは困惑する。

身体を襲った衝撃と浮遊感とが思考を混乱させる。

縦方向にグルグルと回転する身体、眼前で天と地とが目まぐるしく入れ変わる。

常人であれば身を襲った謎の衝撃により恐慌状態となり、場合によつては走馬灯を垣間見るやもしれない。

だが、ライオトルーパーはそうはならなかった。困惑するもそれは僅かな間。謎の爆発による自分の身体へのダメージは、致命的なものでは無いと冷静に感じ取り、更に状況を分析する。己が体は上昇を終え、地面への落下へと移行している状態である、と。

その落下予想点付近には、ターゲットであるセーラー服を着た少女の姿が。

幸いにして雨でぬかるんだ地面へと叩きつけられたところで、大きな損傷を負うとも思われない。

ならばとトルーパーは瞬時に判断し、着地の瞬間に受け身をとり、即座に起き上がり、攻撃へと移行できるようにと算段を整える。

そして一瞬の後、落下するトルーパーの身体は地面へと接触、その

衝撃を算段通りに受け流す……事は無く、深く深く「沈没」していったのであった。

眼前に落下した敵の姿が足下へと消え去った瞬間、吹雪は水面を全力で駆け出した。

完全装備ではない今の吹雪には、普段のように水上を航行する事は不可能だ。だがその状態でも足の艀装には浮力は働き、アメンボのように艦娘を水面に立たせる事が出来る。

「これで……決めますー！」

文字通り水上を走る吹雪はトルーパーの着水点を通り過ぎる瞬間、腰に括り付けられた武器のジョイントを切り離した。

落下していく小さなドラム缶のようなその武器は「爆雷」対潜水艦用の爆弾である。

投下された爆雷は、ゆつくりと池の底を目指して沈んでゆく。

「こいつもオマケであつー！」

ダメ押しとばかりに、川内が魚雷を一本投擲した。

放物線を描いて飛んだそれは、着水と同時に池の底めがけて推進する。

やがてそれは、水中でもがき蠢くライオトルーパーの周囲へ、多数の爆雷と共に到達した。

そして爆雷の一つが、ある深度まで到達し、炸裂。

爆雷が生み出す水中爆発の衝撃は、他の爆雷にも連鎖的に伝わっていく。

急激な水圧変化と衝撃が、ライオトルーパーの全身に襲い掛かる。たちまちのうちにライオトルーパーは、その強固な装甲を持つ身体を粉碎されたのであった。

陸まで全力で吹雪が駆け抜けた時、後方で爆発音と共に強大な水柱が立ち上がった。

連続で何度も巻き起こる爆発。

噴き上がった水が、雨のように地面へ、水面へと降り注ぐ。

吹雪とその傍らに近づいてきた川内は、黙してその光景を見つめていた。

やがて水柱の発生が収まり、激しく波打つ水面も次第に元の落ち着きを取り戻していった。

月を覆い隠していた雲が流れ、池の上方で大きく開けた森の切れ目から月光が差し込んだ。

そこで吹雪が口を開いた。

「終わった……のでしょうか？」

「そうだろうね」

応えた川内は、じつと水面を見つめる。そして作戦が上手くいった事に心の中で安堵した。

川内と吹雪がライオトルーパーを誘いこんだ場所。てっぺんを――川内らの知らぬ間に――大きく抉られた巨大な岩が中央に鎮座する、森の中にある巨大な池。

自分達の砲撃の効果が薄いのであれば別の攻撃をするまで。航空攻撃や戦艦の主砲などにも引けを取らない攻撃方法。魚雷や爆雷による水中爆破。極めて状況が限定される攻撃方法であったが、彼女らはそれを活かす状況を見事に整え、敵を欺き見事にやり遂げたのであった。

池からは何も浮き上がってくる様子は見られない。この池はかなり大きな部類ではあるものの池は池。広い海ならまだしも、こう限られた範囲であれば爆雷の生み出す衝撃から逃れる術は無い。

残骸すら浮き上がって来ない事を多少不可解に感じたものの（何事も起きないという事は、そういう事なのだろうな）と割り切って、川内はそれ以上考える事をやめた。

そして、何やら不安げな表情の吹雪の肩に手を当てた。

一瞬身体をビクつかせ顔を向ける吹雪に対し、川内は親指をサムズアップさせ満面の笑みを作ってみせた。

「吹雪が持つてきてくれた武器のおかげで勝てたよ、ありがとね」

「そ、そんな。こっちこそ川内さんがいてくれなかったら危ない所でした」

慌てて手を振るようにして吹雪が言う。

「いやいや、大したもんだよ。この状況に最適な欠陥品を、こうも都合

よく持つてきてくれるなんてさ」

「へ？……欠陥品？」

「思いもよらぬ言葉に首を傾げる吹雪。」

「そう。私が投げたあの魚雷」

「魚雷が欠陥品つてどういう事ですか？」

その問いに対して川内は愉快そうに答えた。

「いや私さ、炸薬の量と感度の設定を間違えた魚雷が送られて来ちゃってるから廃棄処分にするように、って言われてたんだけどね。寝過ごして処分担当の職員さんに渡せなくつてさ、仕方なく倉庫に置いていたつてわけ。怪我の功名とは正にこの事だね。おかげで私の投擲の衝撃程度でも魚雷を爆発させられたし。めでたしめでたし、だね！」

「め、めでたしじゃありませんよ！何でそんな危険なもの武器庫に置いておくんですか!？」

「だって他に置く所無いし。張り紙しておいたから大丈夫かなつて」

「張り紙なんて付いてませんでしたよ！」

「え？そんなはずは……」

と川内は服のポケットをまさぐる。指が探り当てたその中身を取り出した。するとそこには一枚の『不良品について注意!!』と書かれたメモ用紙が。

「あゝ、ハハハ。多分寝ぼけてて張るの忘れちゃったんだな。まいったまいった」

「まいったじゃありません！」

人差し指で頬をかいて笑って誤魔化す川内に対し、吹雪が声を張り上げた。

「ま、済んだことはしょうがない！気を取り直して他のみんなと合流だ！」

言うや否や川内はクルリと踵を返して走り出した。

「あっ！待ってください！……もう！この事は提督や神通さんに報告しますからね！」

早くも小さくなりつつある川内の背を追うように、吹雪も駆け出し

たのであった。

不意のアクシデントに一時は怯んだ天龍であったが、最早彼女の戦いぶりに迷いは無かった。

起き上がって臨戦態勢を整えたライオトルーパーへ向け、力任せに太刀を振り下ろした。

それは斬撃と言うよりも、打撃と呼ぶのが相応しい程に、荒々しい粗雑な攻撃。

無論それは、トルーパーに容易く受け止められる。

だが彼女はこれを全く意に介することなく、何度も何度も愚直に大きく刀を振りかぶり、連撃を浴びせ続ける。

守りの事など全く考えていない隙だらけの乱打。

だが天龍へと敵の攻撃が届くことは無かった。

トルーパーが攻めに転じようとする瞬間、龍田の薙刀による狙いすました一突きが、文字通りの横槍を入れる。

その攻撃はトルーパーの身体を何度も打ち据える。

だが、スーツの強固な装甲はその程度で貫かれることはない。

損傷と言えるほどに大きなダメージを与えるには至らない。

しかしながら、彼女の攻撃はトルーパーの反撃のチャンスを的確に潰して、潰して、潰し続ける。

「オラァー！」

振り下ろされた天龍の太刀がトルーパーの刃に再度受け止められた。その瞬間、響く破碎音。

遂に限界を迎えた天龍の愛刀が、その半ばから折れたのであった。

弾け飛んだ剣先が、数メートル離れた地面へと突き刺さる。

だが……………

「たかが刀が折れた程度でっ!!」

天龍は臆することなく、更に敵の間合いへと踏み込んで、剣先の無い刀で切りかかった。

無謀極まりない行為。柄の長さというアドバンテージを失い、接近

戦に有利な取り回しの良い短剣を武器とする相手の元へと近づくな  
どという事は。

これにより戦いの流れは相手方へと……

「龍田ー！」

「ええ、任されたわあ」

流れる事などはなかった。

たとえ刀が折れようと、たとえ武器を取り落とし素手で戦う事にな  
ろうとも、やる事は変わらない。天龍はひたすらに攻め続け、龍田は  
その隙を埋め続ける。敵が倒れるその時まで。

三者の打ち合いは続いた。永久に続くかと思われる程に。

そして拮抗する戦況。やがてそれは……

「でりやあー！」

天龍の一撃をきっかけに動き出した。

彼女が下から振り上げた刀が短剣とぶつかり合う。

その一撃はトルーパーの短剣を宙へと跳ね飛ばしたのであった。

天龍は確かな手ごたえを感じ、口角を吊り上げニヤリと笑みを浮か  
べた。

そして返す刀で斬撃を浴びせようとした。その瞬間

「!?……ぐッ……かつ……あッッ！」

トルーパーの右手が天龍の首を掴み、その身体を高く持ち上げたの  
であった。

天龍は足をバタつかせ、トルーパーの胴に蹴りを加えて激しく抵抗  
する。

「天龍ちゃん！」

龍田が叫び、薙刀でトルーパーの胴体を刺突する。

しかしトルーパーは、その攻撃に対して微動だにする事はなかつ  
た。今まで大したダメージを与えられていない彼女の攻撃など防ぐ  
必要などない。無言ながら、そうハッキリと主張するかの如く。

なおも繰り出される龍田の連続攻撃に構うことなく、トルーパーは  
天龍の首にかけて手へ力を込めていく。

「……かつ……はっ……」

天龍はトルーパーによる拘束を解こうと、その手に自らの指をかけるが、常人を凌駕する強大な握力は彼女の指の力では緩める事など敵わない。

龍田は尚も刺突を続けている。何度も何度もトルーパーの胴体を打ち据える。次第に手が痺れだす。だが彼女の方へ敵は気を向ける素振りすら見せない。

そして、トドメとばかりにトルーパーは、天龍の首を絞める手に全力で力を込めた。

その瞬間、鈍い異音が響いた。

天龍の身体がドサリと音をたてて地面へと落ちた。

トルーパーは己が面を下方へと向ける。

その先には龍田の顔があつた。不敵な笑みを浮かべた魔女のような顔が……

「ダメよお。油断なんてしちゃあ」

魔女の口から呪詞のように言の葉が発せられた。

トルーパーは後方へと数歩よろける。

「どんなに小さな取るに足らないような損傷も、積み重なれば大破の元よ」

口元に手を当ててクスリと笑う龍田。

トルーパーは自らの脇腹付近へ手を当てる。

そこにはただ一点、ベルトとバックルのつなぎ目周辺に、ほんのわずかに空いた小さな穴が。

彼女らの武器でトルーパーの装甲を貫くことは、まず不可能であった。並の攻撃をする限りでは……

だが一箇所は何度も何度も、ただ一点のみに集中して攻撃を当て続けていればどうであろうか。積み重なった小さな傷、僅かな歪み。それはいつしか大きな損傷へと姿を変える。

機械のように正確な、否、機械であつても困難であろう攻撃を彼女は行っていたのだ。

ライオトルーパーの無機質な銀面には、茫然とした表情が浮かんでいるように思われた。



そんな呆けた状態のトルーパーを衝撃が襲った。横合いからの爆炎と爆風がその身体を吹き飛ばす。

「ハア……ハア……」

天龍が手にした連装砲から硝煙が立ち上っていた。

彼女は喉元を押さえ、荒げる息を整えつつ、鋭い視線を敵へと向け続ける。

よろよろとした動きでトルーパーが立ち上がる。連装砲の一撃を受けてトルーパーの損傷は、開いた穴から更に広がっていた。

「トドメだあ！」

天龍は雄叫びと共に力を込めて引き金を引く。が……

カチリと引き金が乾いた音をたてた。ただそれだけだった。

「チツ！弾切れ!？」

苦し紛れに空になった連装砲をトルーパーへと投げつける。

だが、トルーパーはふらつきながらもそれを腕で防御し、叩き落した。

「ちつくしよおっ！」

と、天龍は足元に落ちていた——剣先の折れた——太刀を手に取り駆け出した。

（もう一撃叩き込んでヤツを倒す！）

そう息巻いて走る彼女の身体もまた、限界へと差し掛かっていた。

膝がに十分な力が入らない。足元もふらつき気味で、鉛のように重い。駆け出して間もなく足がもつれだす。

そしてバランスを崩した天龍は、前のめりに倒れてゆく。

「くあっ……だ、りやあああ!!」

倒れ込みそうになりながらも天龍は、腕と身体を捻り勢いをつけ、最後の悪あがきとばかりに折れた太刀をブーメランのように投げつけた。

回転しながら飛んでゆく太刀は、ライオトルーパーの立つ位置へ真っ直ぐに向かう。

大きなダメージを負ったトルーパーに、それを回避するだけのエネルギーは最早残っていないかった。

その為、再度腕による防御を図る。太刀は胸元を目がけて飛んでくる。トルーパーは腕を胸元で交差させる。

だがその時、ひび割れた太刀の一部が剥がれ落ち、それは軌道に変化をもたらした。太刀は途中で下方へその軌道をブレさせる。そしてそれは、ライオトルーパーのベルトのバックルに深々と突き刺さったのだった。

全くの偶然だった。龍田の攻撃により損傷が広がっていた箇所へ攻撃が当たると。

不運にも弱点をつかれたライオトルーパーは、腕を力なくだらりと垂らし前のめりに倒れ込んだ。その際の衝撃で更に半分に折れた天龍の太刀が飛び、ぬかるんだ地面へと落下した。

「へ……ざまあ、みやがれ……」

四つん這いの姿勢からゆっくりと起き上がる天龍の元へ、龍田が駆け寄ってきた。

「やったわね天龍ちゃん！」

「まあ、な………ハア………ハア」

両膝を押さえて肩で息をしながら天龍が応える。

(ふふっ、流石に軽口を叩く余裕はもう無いわよね)

天龍がいつもの調子であれば、からかうような一言でも浴びせている龍田であったが、そこは自重する事とした。

「それにしても、何者なのかしらね、この人」

と龍田が倒れた敵の見聞を行おうとした時

「えっ?」

トルーパーの身体にノイズが走りだした。それは壊れかけのモニターに映る像が乱れる様に酷似していた。程なくして倒れた侵入者の姿は、スウツと跡形もなく消え去ってしまったのであった。

不可解な現象を目の当たりにして天龍と龍田は、互いの顔を見合わせ沈黙するのであった。

メイジによるクロウの連撃がスカルに襲い掛かる。

スカルは身をよじってこれを回避、そのまま勢いに身を任せ身体を一回転。右足を振り上げ回し蹴りを放った。

メイジの脇腹に鋭い一撃が突き刺さる。その瞬間、スカルは左足を強く踏みしめ右足を一気に振りぬいた。

蹴り飛ばされたメイジの身体が、凄まじい勢いで地面を転がっていく。

間髪入れず、もう一体のメイジがスカルへ走り寄って来た。スカルはこれを迎え撃つべく構えをとった。

だがその時、彼の左足に痛みが走った。

スカルの頭部めがけて、メイジが手にしたライドスクレイパーの振り抜きが繰り出される。咄嗟に身をのけ反らせて躲すものの、足の異常により反応が一瞬遅れた。被っていた軍帽がはたき落され宙を舞った。

スカルは地面へ背中から倒れ込む。そこへすかさずメイジの打撃が振り下ろされる。

「ふっ！」

横へ身を転がしどうにか回避したスカルは、地面に背を付けたままメイジへと銃撃を浴びせる。メイジの装甲から火花が散る。スカルはなおも銃を撃ち続ける。だが

「バリア ナーウ」

銃撃を受けるメイジの前に、先程蹴り飛ばされたもう一体のメイジが立ちはだかった。

その正面には六角形の形をした、光り輝く障壁が広がっている。これにより受け止められた銃弾が地面に散らばった。

「ムウ」

息を漏らすようにして呟きつつ、スカルは起き上がった。

「まったく、しぶとい人だ。一人でこれほどまでに粘るなんてね」

「粘り強さは探偵に必要不可欠なものだな」

それを受けデイエンドが呆れ気味に嘆息した。

その時であった。

島の一区画から黄金色の光の柱が出現した。

スカルもデイエンドもその方向に思わず顔を向けた。

「あの光は……」

デイエンドが呟いた。

「……ふむ、面倒な事になってしまったか。黄金の果実を手に入れるのは……厳しいかな？」

「何のことだ？」

スカルの問いにデイエンドは振り返り、人差し指をスカルに、その腰のベルトにと突きつけるようにして答える。

「貴虎くんの持ってたお宝は残念だけど諦めざるを得ないかもしれない。だけど君のロストドライバーとスカルメモリは絶対に貰っていいよ。手ぶらで帰るなんてのは御免だからね」

「ふむ、コレが無くなった所でココでこなす俺の仕事に影響は無いが……コソ泥風情の思い通りにさせるのは御免だな」

「それじゃあ、容赦は無しだ」

二体のメイジの後方に立っていたデイエンドが前へと歩み出た。

スカルもまた同様に前へと進み出る。

決着の時はすぐそこまで迫っていた。

【第十話】 part 3

闇夜の森には戦闘により発生したと思われる音が、様々な方角から響いていた。

そんな中を三人の艦娘が駆けていた。

基地襲撃の報を受けて、哨戒任務より緊急帰投した神通、不知火、叢雲の三名である。

彼女らは装備もそのままに、戦闘の起こっていると思われる場所を目指していた。

遠方より、一際大きな音が響き渡る。

不知火が音のした方向へと、鋭い視線をチラリと向けた。

「また爆発音……加えて砲声音でしょうか？」

「まったく！職員の人達もパニック状態で状況を何もわかってないし、他のみんなは誰もいないし！一体何なのよ！」

叢雲が苛立たし気に声を荒げる。

「深海棲艦による襲撃、ではなさそうですが……」

先頭を駆ける神通が呟く。

（海賊やテロリストの類でしょうか？生活に困窮する人々、或いはならず者が徒党を組んでその様な行為に及ぶという話を耳にした事はありませんが……だとすれば、よりにもよって何故この基地を？）

全速力で駆けつつ神通は思案する。

世界が深海棲艦の脅威に晒されていようとも自らの生存、欲望の為、あるいは快樂の為、同族を手にかける事を厭わない人間は存在する。艦娘は、時にその様な者らが起こした事件に対処する事も——稀にはあるが——ある。

人々を異形の脅威から守る存在が、人に仇名す人に武器を向ける。どの世でも不条理と矛盾が存在しているものであった。しかしながら、それをも飲み込みながら人は、艦娘は生きてゆかねばならない。

「!?」

と、神通が何かに気付き、後方を走る叢雲と不知火を手で制した。急停止した二人は、前方を見据えたままの神通から後ろ手に送られ

るサインに従って身を屈め、息を潜める。木と茂みの影に隠れ、三人は前方の様子を窺う。

その先には奇妙な出で立ちの人影が四体。

縦縞模様の刻まれた被り物をした者と、宝石のような被り物をした者らとが、骸骨のような被り物をした者と相対している様子が見られた。

「何なのよ、アイツら」

「……何かの催しでしょうか？商業施設のイベントのポスターで、似たような物を見たことがあります」

「こんな所でお子様向けのショー？冗談でしょ？」

「はい、まるで冗談のような光景です」

と叢雲と不知火が小声でやり取りをする。

程なくして、この場から遠く離れた森の一角から、黄金色の光が天へ向けて昇るよう出現した。

前方の人影も、息を潜める三人の艦娘らも、その異様な光景に目を奪われる。

「な、何の光よアレ……」

驚愕した叢雲が思わず眩きを漏らす。他の三人も同様にこの状況に困惑し、暫し黙っていた。

「……意見具申します。前方にいる謎の、恐らくこの騒動に関係しているであろう者達は、我々に気付いていません。この隙にここから離れ、他の仲間と合流するのが最善かと思われます」

と不知火が神通に告げた。

「私も同意見。もしかしたら仲間割れの真っ最中だったのかもしれないし、ここで下手に動いて一斉に襲ってこられたら厄介に過ぎるわ」  
叢雲も不知火の提案に同意した。

それを受けた神通は、再び前方の謎の集団へと目を向ける。

縦縞模様の被り物に青を基調とした意匠の姿をした人物が、骸骨の被り物をした人物へ向けて、何やら話している様子が見受けられる。両者の会話の内容は、神通らのいる位置からは聞き取れなかった。

やがて謎の集団の三人と、対峙する一人は臨戦態勢へと移ってい

く。

不知火の提案の通りにこの場を去るのであれば、この状況は神通らにとつて絶好の機会であった。だがしかし

「……………総員この場にて待機。暫し様子を見ます」  
神通はそのように決断した。

一時は穏やかになりつつあった風が、今また強く吹き荒れる。

枝葉が揺らされ、ザワザワと音をたてた。

デイエンドとの間合いを測るように、スカルはゆつくりと歩を進める。左足を若干引き摺るようにしながら。

今までは抑えられていた古傷の痛みや違和感が、ここにきて強くなってきた。

（俺の体はもつて数分。それまでに決着をつけねばならんだろうが…………）

思案するスカルは、何気なしに馴染みの動きで右手を頭の上へと持っていく。

だが、途中で本来そこにある帽子が弾き飛ばされていた事に気が付き、その手を止める。

彼は自嘲気味に軽く息を漏らすと歩みを止め、デイエンドらに向けて構えをとった。

そして暫しの後、風がピタリと止み、周囲の空気が一瞬沈黙する。それがまるで合図であったかのように、彼らの最後の交戦が始まった。

そこからの攻防は僅か三分にも満たないうちに終結する。

先んじて動いたのはスカルであった。

彼は真つ直ぐに駆け出して、銃撃の連射を敵の集団に向け浴びせかけた

メイジの一体がこれに対し、バリアの魔法による障壁を展開。スカルの初撃は防がれてしまう。

〔ATTACK RIDE BLAST!〕

愛銃にカードを装填したデイエンドが反撃。強力な連続射撃が放たれた。

無論反撃があるであろう事はスカルも承知の上。銃撃が放たれると同時に、彼は左方向へ身を投げ出した。

地面の上を数度転げ回り攻撃から逃れると、即座に手足に力を込め、クラウチングスタートのように低い姿勢から、全力で敵の横合い目がけて駆け出した。

再度デイエンドの銃撃が、彼を追うように放たれる。

しかしながら、それはスカルの横へと着弾。数センチ程度の僅かな差で当たらない。

メイジが出す障壁は、前方にのみ展開される。左右・後方まで覆う程の大きさは兼ね備えていない。

スカルは守りの手薄な位置を狙い、スカルマグナムの引き金を引いた。

放たれた銃弾の何発かが、デイエンドやメイジの身体へと命中。彼らの装甲から火花が散った。

僅かに怯んだ敵に対し、畳掛けるべく全力で進むスカル。

だが、一つの人影が彼目がけて跳躍する。

ライドスクレイパーを手にしたメイジが、空中から突きを放った。

スカルは身体を捻り初撃を回避。しかしながら続けざまに振り払われる連撃が、彼の脇腹を打ち付ける。

「ぐっー」

苦悶の声を漏らすスカル。だが彼の動きは止まらない。次に突きが繰り出された瞬間、左脇へライドスクレイパーを挟み込んだ。そして得物ごとメイジを引き寄せる。

自ら放った突きの勢いとスカルの引き寄せにより、メイジはバランスを崩し前方へつんのめる。どうにか足を踏ん張って倒れ込む事は防いだ。が

「俺のおごりだ。とっておけ」

胸元に突きつけられていた銃口から弾丸が放たれる。その衝撃にメイジは身体をのけ反らせた。



「ふんっ！」

攻撃を受けたメイジの手放したライドスクレイパー。スカルは素早くそれを左手に握り、突きを放つ。

胸元に一撃を受けたメイジの体が弾き飛ばされ、地を転げると近くの木の幹に激突した。

【エクस्पロージョン ナーウ】

鐘の音が響き、スカルの周囲の空気が膨大な熱量と共に弾けとんだ。

【エクस्पロージョン ナーウ】

先程障壁を展開していたメイジが放った魔力が、スカルの周囲で弾け飛ぶ。

空間に突如として出現した巨大な爆炎が、森の中を赤く照しだす。眼前へとかざした手を、メイジはゆっくりと降ろす。

と、その時。爆炎の中から、何かがメイジを目掛けて飛び出した。真っ直ぐに凄まじいスピードで飛来するライドスクレイパーが、メイジの腹部に激突する。

メイジの身体が激しい衝撃を受けて、くの字に曲がった。

続けざまに炎の中から飛び出す人影。大きく腕を振り上げた仮面ライダースカル。

その右拳がメイジの頭部を目掛けて振り下ろされた。

頭部に激しい一撃を受けたメイジは顔面から倒れ込み、仮面を半分ほど地面に埋める事となった。

「これで、一二」

スカルは肩を大きく上下させた。その片足は小刻みに震えている。と、彼の upper body に火花が散り衝撃が走る。

デイエンドが銃撃を放ちつつ、スカルの元へと駆けて来る。

一瞬身体をのけ反らせたスカルだったが、即座に体勢を立て直し、迫りくるデイエンドに対してタイミングを計って拳を振るった。

だが、手ごたえは無い。拳は空を切るのみ。

「遅いよ」

背後から聞こえた声に振り向くスカル。その顔面が銃床で打ち据えられた。

意識が飛びそうになるのをすんでの所で堪えて、スカルは顔を前に向ける。

彼の目に迫りくるデイエンドの姿が映る。

スカルが構えるより早く、デイエンドはすれ違いざまにその身体に打撃を浴びせる。

一度、二度、三度と高速移動するデイエンドの攻撃が、スカルの装甲に傷を刻んでゆく。

「はっ！」

そしてデイエンドの蹴りが、スカルの背中を打つ。

蹴り飛ばされたスカルは、うつ伏せに地面へと倒れ伏したのであった。

「いい加減無駄な抵抗はやめたまえ。意地を張った所で傷が増えるんだからさ」

倒れたスカルを見下しながら、デイエンドは嘲るように言い放つ。

「……………断る」

喉の奥から絞り出すように声を上げ、スカルはその身を起き上げ始める。

ゆつくりと、震え混じりに動く足、膝、腕がぬかるんだ地面を抉ってゆく。

ぬかるんだ地面に押し当てられるように開かてくれた指が、グググと握られてゆき、指の跡が地に刻まれる。

と、次の瞬間。スカルは握り込んだ泥を、後ろ手に投げ放った。

デイエンドの顔面目掛けて飛ぶ泥の塊。

しかしてそれは、眼前にかざされた彼の左手に受け止められた。

「そんな小細工通用するわけないだろう」

呆れ気味に言い放つデイエンドに対して、起き上がったスカルが向き直る。

意識が朦朧としていた。ふらつく体に鞭打って、彼は構えをとろうとする。

【チェーン ナーウ】

だが、それはあえなく阻まれる事となった。

突如として、地面に刻まれた魔法陣の中から伸びてきた幾本もの鎖が、スカルの身体を簀巻きのように、がんじがらめに拘束したのだった。スカルに倒された二体のメイジが手をかざしつつ、ゆっくりと彼の方へと向かってきていた。

「ふう。ロストドライバーとスカルメモリの力、十分に見せてもらったよ。けどもう年貢の納め時というやつだ」

デイエンドもまたスカルの元へと歩を進める。

そしてスカルの腰のロストドライバーへと手を伸ばした。

「……………」

デイエンドの手が止まる。ふと感じた違和感。彼は程なくしてその正体に気付く。

「スカルメモリが無い？」

本来であればメモリの刺さっているはずのスロット部分。そこには何も刺さっていない。

【スカル！マキシマムドライブ！】

力強い電子音声が鳴ると共に、スカルの身体から紫色のオーラが立ち上った。

「何っ!？」

デイエンドは咄嗟に、自分の顔を庇うように腕をかざした。

その瞬間、鎖に縛られたスカルの胸元が大きく膨れ上がった。

胸元から飛び出た髑髏型のエネルギーが、魔法の鎖を噛みちぎった。

なおも膨れるエネルギーの奔流が、デイエンドを弾き飛ばす。

デイエンドは背中をしたたかに打ちつけて、地面に倒れ込む。

そしてスカルは高く高く跳躍した。その腰のスロットに刺さったスカルメモリが唸りを上げていた。

「くっ…メモリを既に…………あの泥は僕の注意を逸らすのが目的だったという事か。してやられたよ」

（あのデイエンドとかいうヤツの狙いはベルトとメモリ。俺が身に付

けている限りコレを奪いに必ず近づいて来る。読み通りだったな。流石に鎖の拘束は予想外だったが、それも良い目晦ましになった)

スカルは心の中で呟いた。

加えて簀巻きのように縛られたのも、功をそうしたのだった。おかげで手首を軽くひねるだけで、隙を見て腰のスロットに差していた、メモリを起動できたのであるから。

「終わりだ」

スカルの目の前には、直径一メートル程に肥大化した髑髏型のエネルギーが。

彼はそのエネルギーを、地面を背にして倒れたままのデイエンドに向けて蹴り放った。

「だけどこの勝負、僕の勝ちだ！」

デイエンドが手にしていた一枚のカードが、ドライバーへ装填された。

【FINAL ATTACK RIDE DIDDIDIEND  
!】

デイエンドライバーの銃口の前から、幾枚ものカードの形をしたエネルギーが、その射線上に円を描くように展開していく。

同時に彼の周囲にいた仮面ライダーメイジの姿が崩れ、一枚のカード状の光と化した。そして銃口から飛び出したエネルギーの中に吸い込まれてゆく。

デイエンドは上空のスカルへ狙いを定め、引き金を引いた。

銃口から飛び出したビームが、スカルの蹴った髑髏と衝突。凄まじいエネルギーのぶつかり合い。眩い光が周囲を強く照らし出す。

ぶつかり合ったエネルギーの余波が、周囲に突風を巻き起こした。髑髏の口に飛び込んだデイエンドの攻撃。それは、みるみるうちに髑髏を押し返してゆく。

やがて紫の髑髏に亀裂が入る。たちまちのうちにそれは全体へと広がっていく。

次の瞬間、スカルの蹴り放った髑髏が無残にも砕け散った。髑髏を砕いたビームはスカルの元へと達し……

空中で巻き起こる激しい爆発。轟く轟音。膨張する爆炎。

爆風が更に一陣の突風を周囲に吹き荒れさせる。

程なくして突風と爆発とが収まった。

そしてその場にあつたのは、悠然と立ち上がるデイエンド。身体を煤けさせ地面に倒れ伏すスカルの姿だった。

「たった一人でここまで僕と渡り合うとは、流石に予想外だったよ」

肩をすくめて言うデイエンドは、倒れたままピクリとも動かないスカルの元へと近づいてゆく。

「ともあれ僕の勝ちだ。ロストドライバーとスカルメモリは頂いていくよ」

と、その時。

「!?」

デイエンドは咄嗟に後方へと跳びすさる。同時に響く砲声。彼の眼前の地面がはじけ飛んだ。

そしてスカルを庇うように暗がりから飛び出し、立ちはだかる人影が一つ。橙色の制服を身に付け、腕に砲を括り付けた長髪の少女。

「ご無事ですか提督?」

「……………その声……………神通か」

地面に伏せられていたスカルの頭が、ゆっくりと上を向く。

霞む彼の視界には、臨戦態勢の——普段の弱々しげな様とは異なる——部下の凜とした後姿が映っていた。

「司令!?!嘘でしょ?!」

遅れて駆け寄ってきた叢雲、不知火は驚愕と戸惑いの表情を浮かべつつ神通の後方につく。

「よく、俺だとわかったな、神通」

「あの歩き方、帽子を直そうとする仕草を見れば察しはつきます」  
「そうか」

「ですが司令、何故そのようなお姿に」

傍らに立った不知火が問いかける。

「不知火さん、細かい話は後回しです。提督を安全な場所へ。叢雲さ

ん、目標前方の敵戦力、構え！」

神通の指示を受け、即座に不知火は提督を抱え起こして更に後方へと引き、叢雲は手にした武装と艀装のアームに取り付けられた武装とをデイエンドへと向ける。

「やれやれ、この女の子達と来たら、誰もかれも強情で参ってしまうね」

デイエンドは嘆息する。

「そこをどきたまえ、怪我をしないうちにね」

「お断りします。私たちの提督に、これ以上手は出させません」

「仕方ないな」

デイエンドは新たに一枚のカードを取り出し、ドライバーに装填する。

だが次の瞬間、彼は不穏な気配を感じ横へと跳びすさる。

彼の後方から飛んできた、折れた刀が、彼の立っていた位置に突き刺さった。

「そつちだ、龍田！」

着地したデイエンドの顔面へ向けて、薙刀が差し伸ばされる。

しかしデイエンドは、すんでの所でその柄を掴み攻撃を受け止める。

「あくら、残念」

突きを受け止められた龍田が、クスリと愉快そうに微笑む。

デイエンドは掴んだ薙刀をグイと龍田ごと引き寄せようとする。

しかし龍田は、その直前に武器を手放し軽やかに跳躍、デイエンドの胸板を蹴りつけて、そのまま反動で後方宙返りをし跳びすさる。

龍田の蹴りを受けて、たたらを踏むデイエンド。

「喰らえっ！」

と、彼の頭上に多数の爆雷、横合いからは魚雷が投擲された。

デイエンドは龍田の薙刀を投げ捨てる。そして勢いよく右手を突き出すように振るって銃身をスライドさせ、即座に上方へ向け引き金を引いた。

【ATTACK RIDE BLAST!】

銃口から放たれた攻撃が瞬く間に拡散し、降り注ぐ爆雷、迫りくる魚雷を全て弾き飛ばす。

撃ち落とされた魚雷と爆雷が地面の上で弾け飛んだ。無論デイエンドに傷一つ付けることなく。

「ああつー！」

「チツ！ダメか」

残っていたありったけの爆薬を放った吹雪と川内が、悔し気に声をあげる。

「姉さん！」

「戻ってきてたんだな神通！」

互いの無事を確認し、安堵の笑みを浮かべる姉と妹。

彼女らは目配せして頷くと、改めて敵へと向き直った。

デイエンドが首を左右に動かし周囲を見渡す。

彼は完全に包囲されていた。しかしながらデイエンドは動じた様子も無しに、軽い調子で問いかける。

「この様子だと兵隊さんたちは、みんな君たちに倒されてしまったのかな？」

「あんなヤツら、オレたちにかかればどうって事ねえんだよ！」

天龍が胸を張って言い放った。

「そうか。どうやら僕はスカル君だけでなく、君たちの実力も見くびっていたようだね」

デイエンドは改めて周囲を見渡す。

彼の目に映るのは、息も絶え絶えの仮面ライダースカルと、闘志を目に宿した少女らが七人。

（全部で八人。いや、今この場にいないのを合わせるともつとか。僕の全てを出しきれば十分に勝てるだろうが。気がかりなのは貴虎君の手にしたと思われる力。彼が加勢する事があるとなれば……）

遠くで地響きのような音が鳴っている。戦闘が行われている様子が感じ取れる。貴虎が戦っている事は間違いなく、少なくともライダーの力、若しくはそれに相当する何かを手に入れたであろう事をデイエンドは推測した。

そしてそれは、並々ならぬモノであろう事は予想に難くなく……  
暫しの沈黙。続く艦娘らとの睨み合い。僅かな時間を経て、デイエンドは再び嘆息した。

「どうやら今日は、ちよつとばかりし君らの方にツキが傾いているようだ。だから」

デイエンドが一枚のカードを取り出した。

艦娘らに緊張が走る。彼女らは一斉に身構えた。

「こうさせてもらおうとするよ」

デイエンドはカードを素早く装填し、銃口を上に向けて引き金をを引いた。

「ATTACK RIDE INVISIBLE!」

するとデイエンドの姿が空気中へ溶けるように、スウツと掻き消えた。

「消えた!?!」

天龍が驚愕の声をあげる。

「みなさん!周囲への警戒を怠らないでください!」

神通が即座に言い放つ。

その場にいる艦娘らは左右上下、前方後方へと顔を向け、デイエンドの姿を探す。闇に紛れての不意打ち、距離をとつての狙撃。あらゆる状況を想定し、彼女らは警戒する。

だが、何も起こらない。時折吹く風が木々を揺らす。それらがザワザワと音をたてるのみであった。

「どうやら……ヤツは逃走したらしいな」

暫しの後、スカルがよろめくように立ち上がった。

スカルはドライバーのスロットを閉じ、スカルメモリを引き抜いた。

一陣の風が巻き起こり、纏っていた装甲が霧散するように掻き消え、髑髏の超人は壮年の男性へと姿を変えた。

と、提督は膝からガクリと崩れ落ちそうになるが、傍らの不知火と叢雲が咄嗟にその身を支え、地に倒れ込むのを防ぐ。

「提督!」



と誰かが言ったのを皮切りに、艦娘らが提督の元へ駆け寄って来た。

集まった全員が無事な様を見て、提督は無言で頷いた。

「お身体は大丈夫なのですか？」

神通が言う。

外見の上では大きな傷などはないように見られるが、尋常ではなく消耗している様は誰の目にも明らかであった。

「少し無理をし過ぎた。車椅子とおさらばするのは当分先になりそう  
だ」

「そんな風に口が動くのなら、とりあえずは大丈夫そうね」

龍田がクスリと笑った。

「なんだか凄いビームみたいなのを喰らったみたいだけど、よく無事  
だったわね」

「直撃はしなかったからな。アレのおかげだ」

叢雲の問いに対して提督は、地面のある一点を指差して答えた。

その方向へと神通が向かう。何かが落ちているのに気が付き、腰を  
かがめてそれを拾い上げる。

それは焼け焦げて真っ二つに折れた矢であった。

「これは……………艦爆の残骸？ということは、さっきの爆発と爆風が  
提督を弾き飛ばして…………」

「おーいー！」

神通がポツリと呟いたその時、馴染みのある明るい声が聞こえてき  
た。

皆が見やると、那珂と黒潮が手を振りながら歩いてくる姿があっ  
た。

二人の間には、抱えられるようにしながら歩く鳳翔が。

近づいてくる彼女らへ向け、艦娘らは口々にその名を呼びかける。  
ある者はその身を案じ、ある者はホツと胸をなで下ろしながら。

そして提督らの傍に来た鳳翔らもまた、安堵の表情を浮かべてい  
た。

「提督、みなさん。よくご無事で…………」

「鳳翔さんの方こそ大丈夫なの!?怪我でもしたんじや……」  
叢雲が声をあげる。

「いえ、これは体力と精神力を消耗し過ぎてしまっただけです。少し休めば大丈夫ですので」

笑顔でそう口にする鳳翔であったが、隠し切れない疲労の色が顔には浮かんでいた。

「鳳翔」

提督が声をかける。

「お前の機体が盾になってくれたおかげで助かった。礼を言う」

「お役にたてたのなら何よりです。しかし、大切な艦載機を全て失ってしまいました。申し訳ございません」

「いや、よく生き残ってくれた」

提督は若干俯き気味の鳳翔の頭に手を乗せ、労いの言葉をかけた。

「……………はい！」

鳳翔は目じりに僅かに涙を浮かべつつ、満面の笑みで声を弾ませたのであった。

「皆もよくやってくれた」

周囲を見渡すようにして提督は、他の艦娘らにも労いの言葉をかける。  
彼女らはそれに対し——にこやかな顔で——敬礼をもって返したのであった。

「だけど安心するのはまだ早いわあ」  
落ちていた薙刀を拾い上げつつ龍田が言う。

「貴虎さん達がまだ戻っていないわ。あっちにも怪物がいるみたいだし、助けにいかないとお」

「それでしたら」

と神通が歩み出て進言する。

「私達が向かいます。皆さんは既に戦闘で消耗しておられる様子ですし」

彼女は視線を提督へ、次に旗下の叢雲、不知火へと向ける。彼女の提案に対し二人は無言で頷く。哨戒部隊の三人の目にはふつつつと

新たな闘志が浮かびつつあった。

と、その時。

「あつ!？」

その場にいた幾人かが声をあげ、天を指差した。

するとその先では、光り輝く一筋の黄金色の衝撃波が、雲を切り裂き天高く昇っていく様子が。

常ならざる不可解な未知の現象。にもかかわらず、これを見つめていた者たちは誰一人としてそれに対し、恐怖・不安の類を抱くことは無かった。

むしろどこかホツとしたような、穏やかな気持ちに包まれていた。そして提督が口元に笑みを浮かべ、静かに呟いた。

「どうやらアイツは、自分の道を切り開いたようだな」

時は提督らの戦闘が終結する少し前……

相も変わらず巨体に似つかわしくない素早い動きで、貴虎の周りを動き回り、攻撃をするシカインベス。

対する斬月は、立った場所から殆ど動くことなく攻撃を受け流し、インベスの体へと的確に攻撃を叩きこんでいた。

振り下ろされた拳が地面に突き刺さり、土を巻き上げた。

だがその場には、既に斬月の姿はない。

彼の姿はインベスの腕の上にあった。

斬月は腕を駆け上がったいき、インベスの肩口にて刀を振りかざした。

一太刀、もう一太刀と刀を振るうたびに、肩に生えた巨大な枝角が細切れにされていく。

インベスは肩を振るい、腕を伸ばし、貴虎を降り落とすか捉えようと試みるが、手は虚しく空を切るばかり。

そして遂には自らの拳で己が顔を打ち付けてしまう。そのシヨツ

クでふら付いたインベスは、轟音を立てて仰向けに倒れ込む。

その直前にインベスの身体を蹴って跳躍していた貴虎が、華麗に地上へと着地をする。

倒れ込んだインベスは顔をブルブルと震わせながら立ち上がると、まるで怒りの感情を爆発させるかのように激しい雄叫びを上げる。

「これでトドメだ」

それに怯むことすらせず静かに言い放った斬月は、戦極ドライバーのカツティングブレードを一度動かす。

【メロンスカッシュュー！】

音声が鳴ると同時にインベスの元へ駆け出す斬月。

そして、目にもとまらぬ速さで振り下ろされる無双セイバー。その一撃がインベスの片腕を切り落とした。

続けざまに横薙ぎに払われる一撃。それは斬撃を受けたインベスが苦悶の声を上げるより早く、その頭を切り飛ばしていた。

右腕と首とを失った巨大インベスの体は、地響きを立ててその場に倒れ伏したのだった。

「……………凄い」

「やったわー」

感嘆の声を漏らす夕張と、両手を上げて歓喜の声を上げる陽炎。

その声を背中越しに聞き、斬月もまた安堵の息を漏らした。

(この感覚、アーマーの性能、以前私が使用していたものと寸分違わぬように思える)

自らの手、武装、身体とを見下ろし貴虎は思案する。

(いや、それよりも重要な事は…………)

基地を襲撃したディエンドなるライダーとその一味。インベスを葬った今、彼らを排除する事こそ急務。

遠くから微かに聞こえてくる、戦闘を行っているとかわしき音の類。それらが途絶えた様子が無いという事は、未だに提督らが奮戦していると推察できる。

(一刻も早く彼らと合流せねば。戦極ドライバーの力をもつてすれば、ヤツらとも十分に渡り合えるはず)

斬月はインベスの亡骸を一瞥すると踵を返し、夕張らを伴って基地へと戻るべく歩を進め出した。

彼は、いや、誰しもが思いもしなかっただろう。斬月の背後であり得ない異変が起こっている事など。

うつ伏せに倒れたインベスの首の切断面からは、ドロドロと黒い液体が地面へと流れ出ていた。まるで重油のようなそれは、突如としてピタリとその流れを止めた。

と同時に切断面が沸騰するようにボコボコと泡立ちはじめ、そして膨張してゆく。

やがてその中心部には、何某かが形作られていく。それは筒状の物。艦娘らが常日頃から見ているモノに近い。

ギリギリ、ガリガリと何かを擦るような微かな音が、その中より鳴りだした。この状況でその微かな音に気が付く者はいなかった。

従って彼は運が良かったと言えるよう。いや、戦場に立つ戦士の直感が働いたとも言えるかもしれない。

斬月は、ふと倒したインベスの方へと左回りに振り返る。  
半ばまで彼が振り返りかけた瞬間！

インベスの首から生えた「巨大な砲身」が火を吹いた。  
凄まじい轟音と衝撃が斬月を襲う。

次の瞬間、斬月の身体は木の葉のように宙を舞い、そして地面に激しく叩きつけられたのだった。

彼の体は数回バウンドした後地面を転がっていった。  
「貴虎ー」

夕張の悲鳴にも似た声があがった。  
地面に投げ出された斬月は一度首を振ると、よろめきつつゆっくりと起き上がる。

砲撃は、彼が左腕に装着していた盾に運よく当たっていた。その為大事には至っていないなかったのだった。

(何だ今のは!? あんな攻撃をするインベスなど存在するはずが……)

斬月が敵の方へ目を向ける。

倒れていたインベスが、よろよろと立ち上がっていく。

そのインベスの首の切断面からは、金属製の筒のようなモノ、戦艦クラスの砲にも等しいそれが生えていた。

そして砲身の付け根の周辺から、どす黒い肉のようなモノが泡立つように盛り上がって来る。

更に、切り取られた腕の切断面も、同様にブクブクと泡立っていた。(再生しているのか!?!?!いや、再生というよりもこれは)

“変化” 或いは “進化”

インベスの身体は、元のそれとは明らかに異なる状態になりつつあった。

その急激な変化は程なくして治まった。

巨大インベスの片腕は、灰色がかった筋骨隆々の腕に変化していた。それは今も健在である元の腕と比べると一回り大きく、そのアンバランスな出で立ちには不気味さをより際立たせている。

そして新たに生えた頭は、全体的に灰色がかった黒色をしており、目鼻耳などの器官は存在していなかった。

そんな頭部に唯一存在し、見る者の目を引くのは、顔の半分を占める程の大きな “口” であった。

獣というよりも、人のそれに近い歯と歯茎とが剥き出しになった口から、インベスの肩が上下するのに合わせて息が漏れている。

インベス、否、異形の怪物は、空気をビリビリと激しく震わせる程の咆哮を轟かせた。

同時に口から伸び出た砲身から砲弾が放たれる。出鱈目に撃ち出されたる砲弾が、周囲に次々と着弾。砲弾に貫かれた木々が次々となぎ倒されていく。

「な、何なんですか、あの怪物!?!」

陽炎が驚愕し、その顔を青ざめさせる。

「そんな、信じられない。あれじゃあまるで……」

夕張も目を見開き、目の前の光景に身をすくませていた。

と、怪物の顔が夕張らの方を向いた。

刹那——彼女らへ向けて砲撃が放たれた。

(あつ……!?!?)

突然の事に夕張らは身を動かす事も出来ない。砲弾が迫る様が、その眼にハッキリと映る。

だが、次の瞬間。斬月が咄嗟に彼女らの前に立ちはだかり、盾を構えて砲撃から二人を守っていた。

強烈な衝撃に腕が痺れ、一瞬盾を取り落しそうになるのを斬月はグツと堪える。

「大丈夫か!？」

「え、ええ。ありがとう」

斬月と夕張が言葉を交わす。

と、そこへ向け、天を仰いで咆哮した怪物が、真っ直ぐに突進してくる。

斬月は無双セイバーを構えると、柄に備え付けられた銃を怪物に向けて撃ち放つ。

銃弾は怪物に全て命中。だが怪物には全く怯んだ様子は無い。走る勢いも衰えることは無い。

「早く逃げる！アイツは私が何とかする！」

斬月は剣と盾を構え直して突撃していく。

「貴虎！待って！」

夕張が呼び止めるも斬月は敵へ果敢に向かっていく。

振り下ろされる怪物の拳。

斬月はそれを盾で受け止める。突進の勢いも乗って威力を増した攻撃に斬月の腕は軋み、足が僅かに地面にめり込む。

「はあああつ!!」

雄叫びと共に、受け止めた拳を盾をずらして横にいなし、迫っていたもう片方の拳へと斬撃一閃。

斬り飛ばされた怪物の指の何本かが宙を舞った。

苦悶の雄叫びを上げて、怪物が体をのけ反らせる。

すかさず怪物の胴へと連撃を浴びせ、傷を刻んでゆく斬月。

怪物は怒りを滲ませたように咆哮し、左右から腕を振るい、打撃を繰り返す。

斬月は後方へ跳びすきって、この連撃を紙一重で避けた。

怪物の口から再度砲身が伸びる。それを見てとった斬月は、盾を眼前に構えた。

超至近距離から放たれる砲撃。その凄まじい爆風は、斬月の体を再び宙へと舞い上げた。

怪物もまた、自身の攻撃の反動と爆風を受け、後頭部を地面に叩きつけるように倒れ込み、後方へ身体を転げさせていく。

斬月の身体は再び地面に叩きつけられたものの、今度はどうにかして受け身を取り、即座に体勢を立て直す。

頭が若干ふらつくものの、身体に異常は感じられない。しかしながら疲労しつつある斬月。その呼吸は荒げだし、息をするたびに肩が上下していた。

倒れていた怪物もまた、ゆっくりと立ち上がりつつあった。

その指の付け根の肉が、泡立ち盛り上がる。切断された指が、元あった他の指よりも太く不均等に生え揃っていた。

「貴虎！」

彼の背に向けて夕張が声をあげる。

「早く逃げろと言ったろう！」

「いいから聞いてー」

叫ぶように夕張が言った。

「何故だかはわからないけど、あの怪物は深海棲艦の力を身に付けている！だったら艦娘の力をもった武器じゃないと倒せない！」

「……そうか。……実は、私もそうではないかと思っていた」

「ならあなたも逃げましょう！今のあなたの力は凄いものだけど、あの怪物を倒せるかはわからない！このままじゃいつか追い詰められてしまう！あの怪物が本当に深海棲艦と同じモノになっているなら、基地に戻って私たちの武装を揃えて総攻撃すれば勝てる見込みがあるはず！」

「一理あるかもな……だが、それは出来ない」

「どうしてですか!?夕張さんの提案が正しいと思いますー！」

陽炎も夕張の意見に同意の姿勢をみせる。

「忘れたのか、敵はあの怪物だけじゃない！最悪挟み撃ちになる！今



ここでヤツを何とかせねば、被害はより拡大する！」

夕張と陽炎はハツとして目を見開いた。

眼前の怪物に気をとられ、謎の侵入者らの存在を失念していた事に気が付き。

「私は今やれる事は全てやる。身体の動く限り足掻き続ける。諦めるのはその後だ！」

刀と盾を構え直し、斬月は跳ぶように駆け出した。

後ろで夕張と陽炎が呼びかける。目の前の敵に意識を集中した貴虎の耳に、その言葉は届かない。

艦娘の力でなければ倒せないのもであろうとも関係ない。たとえ怪物が再生を続けようとも、トドメを刺せなくとも貴虎は夕張らを、仲間を守るために刀を振るい続ける。再生を続けるのならそれが出来なくなるまで切り続ける。

かつての呉島貴虎なら取らなかつたであろう無謀な突撃。非合理的な行動。だが彼の心の中に芽生えた熱い思いが、覚悟が、その身体を突き動かしていた。

ふと、声が聞こえた。否、何者かに語り掛けられている。そんな感覚が彼の身に走った。

(何だ……!?)

耳元、いや、心に直接語り掛ける様な声が、貴虎には確かに聞こえた。ように感じられた。

何かがいる様な気配は感じられない。彼の遙か後方には夕張と陽炎が、目の前には倒れた木の幹を掴んで、自分へ向け投げつけようとしている怪物の姿が。彼自身以外に、この場にいるのはそれだけ。

何と言っているのかわからない、声のような気配。だが、それは貴虎の決意と行動をより強固なものへと昇華させる。

がむしやらに投げつけられる大木を、刀を振るって両断する。

一本、二本、三本。投げつけられ、切断された木々が森の奥へとすつ跳んでいく。

砲撃音が轟く。怪物が放った、狙いすました砲撃。だが砲弾は斬月

の僅か後ろに着弾。斬月は怪物の予想を遥かに上回る速度で突進する。着弾時に発生した爆風をその背に受けて、更に加速していく。

【メロンスカッシュュー！】

ベルトのカツティングブレードを倒した瞬間、威勢のいい電子音声  
が鳴ると共に、斬月の刀が金色のオーラを纏いだした。

「ハアッ！」

斬月は目にもとまらぬ速さで怪物の股下を走り抜け、一閃！

怪物の脚が付け根から切断される。

よろめいた怪物は、両手を地面に着くように倒れ込む。かに思われ  
た。

しかしながら怪物は、両の手をつく寸前、全力で地面を叩いたの  
だった。

その衝撃で高く跳躍した怪物は首をぐるりと動かし、地上の鎧武者  
へと砲撃の狙いを定める。

上空から連続砲撃の雨を降らせ、仕留めようという意志があったに  
違いない。

だが、遅い。

怪物の砲撃の狙いが定まる寸前

【メロンスパーキング！】

腰を深く落とし居合いの構えをとる斬月。彼の全身は金色のオー  
ラに包まれていた。

「はああああっ!!」

目にも止まらぬ速さの居合一閃！

光り輝く刀が上空の怪物に向けて振り払われた。三日月のように  
鋭く描かれる斬撃の軌跡。そこから飛び出すように放たれた眩い光  
の刃が、天へと昇る。

光の刃は怪物を、その中心から縦一文字に両断した。

怪物の体は、地響きを立てて地面へと転がり落ちたのだった。

そして怪物を切り払ってもなお飛翔する三日月は、遥か上空にある  
灰色の雲をも両断し、空の彼方へと消え去っていったのであった。

雲の裂け目から、隠れていた月が再度その顔を覗かせ、地上に月光

を注ぎだした。

「……………」

沈黙する斬月。程なくして彼は、ゆったりとした動作でその姿勢を正す。

その呼吸は激しい攻撃を行った後にも拘らず、落ち着いており、微塵も乱れてはいなかった。

彼の眼前で怪物の体が、ドロドロと融けるように崩れていく。

どす黒い泥のようなそれは地面へと広がると、やがて霧散した。怪物など初めからいなかったかのように、その存在は世界から消え去ったのだった。

戦いを見つめていた夕張と陽炎。目の前の光景に圧倒され、茫然としていた二人であったが。

「や………」

「や、やったー!!」

怪物が倒された事に安堵、歓喜し抱き合い飛びあがった。

そして、静かにたたずむ鎧武者の傍らへと駆け寄っていく。

「凄い！凄いです貴虎さん！」

「まさか本当にあの怪物を倒しちゃうなんて……大丈夫？怪我とかしていない？」

「ああ、問題ない」

陽炎と夕張の方を見やって答える斬月。

「だが安心するのはまだ早い。例の侵入者の迎撃に向かわなくては」

と、その時。

「……………あれは？」

斬月が空へと目を向ける。

そこには彼の見慣れぬ明るい光が瞬いていた。その後を追うように、続けて光の筋が地上から立ち上り、やがて弾けるように輝き出す。それは基地の方向から飛び出しているようだった。

「信号弾だわ。……戦闘終了、撃退に成功!」

「あ、また上がってきた。……………犠牲者は、無し！」

夕張と陽炎が信号弾の色と瞬きの具合から、その意味を読み取っ

た。

吉報を知った彼女らの声は、意図せず弾んでいるようだった。

「そうか。皆、無事なのか」

斬月が呟く。その声には安堵の色が浮かんでいた。

そして彼はロックシードとベルトを操作する。

たちまちのうちに纏っていた装甲が消え去り、鎧武者は口元に笑みを浮かべた青年へと姿を変えたのだった。

「お疲れ様、貴虎」

夕張がねぎらいの言葉をかける。

「ああ、夕張も無事で何よりだ。怪我などはしていないか？」

「そうね。ちよつとお腹にひっかき傷ができちゃったけど、これくらい大したことはないわ」

明るく微笑混じりに言う夕張。

だがそれを聞いた貴虎の表情が、一瞬で険しくなった。

「何だ?!?見せてみろ!」

夕張の腹部に顔を近づける貴虎。

夕張の傷。それは破れた服の隙間、あばら骨のある付近にあった。そこからは薄っすらと血が滲み出していた。

「えっ!ちよ、ちよつと!」

「触るぞ」

「え、それは!」

夕張の返答も聞かずに貴虎は、傷の周囲を手で触りつつ、丹念にその様子を調べる。

勿論傷に直接触れることの無いように、細心の注意は払っていた。突然の出来事に混乱した夕張は、身じろぎ一つすら出来ずにいる。

顔を染め、口をパクパクと動かす。心臓の鼓動が耳に響いてくると錯覚するほどに大きく、激しくなる。

陽炎も口を両手で覆って、やや興奮気味にその様子を見つめていた。

「インベスに、あの怪物にやられたのか？」

「ひゃ、ひゃい……いえ!に、逃げる時に木の枝に引っ搔けて破れたの

です！で、あります！」

夕張の言動からは、動揺の色が滲み出ていた。

「そうか……それなら大丈夫だな」

安堵の息を吐いた貴虎は、そのまま夕張の腹部に当てた手を離れた。

「そそ、そうですね。なんともない、ですわ！」

貴虎の手が離れてもなお、夕張の心臓の鼓動は収まらない。寧ろ一層激しくなっているように感じられた。

茹で蛸のように、夕張の顔は真っ赤になっていた。

「……どうした、やはり具合が悪いのか？」

問いかける貴虎。夕張はその顔をまともに見る事ができず、サツと俯く。

「え、えつと、その……ちよ、ちよつと熱が出たのかな？ 雨に長時間当たっちゃってたし……アハハ」

「そうか、では」

貴虎が夕張に背を向けた。

「え？」

「私が負ぶっていいこう」

「……だ、だだ、大丈夫！ 自分で楽勝で歩けるし！」

スツと立ち上がるうとする夕張だったが、

「ツ!!!」

足に激痛が走る。夕張は思わずその場にうずくまる。

「無理はするな。足のケガもあるんだ、遠慮する必要は無い。」

「で、でも……」

煮え切らない夕張の態度に首を傾げる貴虎。

「ダメですよ貴虎さん」

と、陽炎が歩み出た。

夕張は彼女がフォローしてくれるのであろうと考え、胸をなで下ろす。

貴虎に何やら耳打ちする陽炎。その顔には、どこか悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

(あ……嫌な予感)

「そうか、確かにその方がいいな」

と言うと貴虎は夕張の傍へ歩み寄り、彼女の身体を抱え上げた。

「きゃッー」

次の瞬間、夕張は貴虎に抱きかかえられていた。俗に言うお姫様抱っこの形で。

再び顔を真っ赤にして口をパクパクと開く夕張。

「確かに、負ぶるよりもこの方が腹の傷に負担がかからないな」

「でしょ？つてわけだから夕張さん、基地に着くまで大人しくしてて下さいね」

夕張の顔を覗き込むようにしてニッコリと微笑む陽炎。

非難の眼差しを夕張が向けるも、意に介さない様子で後頭部に両手を組み当てて、すまし顔で陽炎は歩き出す。

「では、帰るとしよう」

貴虎もまた、ゆつくりと歩き出す。

初めは興奮、緊張していた夕張であったが、歩くたびに体に伝わる心地良い振動と、全てが大事なく終わったという安堵感を受けてか、意識が微睡みだす。

彼女はゆつくりと、深い眠りに落ちていったのだった。

## 【幕間 其の二】

「えくつと、この材料を入れて、次はよくかき混ぜる、と」

ボウルの中に入ったチーズ、バター、砂糖、卵などの材料が、カシヤカシヤという音と共に攪拌され、混ざりあつてゆく。

クリームが出来上がってゆくに従つて、厨房内には仄かな甘い香りが漂い出してくる。

と、そこへ足を踏み入れる人影があつた。

「あら？夕張さん？」

「あつー鳳翔さん。おはようございます。すみません、厨房使わせてもらつてます」

割烹着を身に付けた鳳翔に対し、クリームをかき混ぜる手を止めて、夕張が挨拶する。

「おはよう。寝てなくて平気なのかしら？」

「それが、あれからずっと寝ていたせいで、かなり早く目が覚めちゃいました。改めて寝ようと思つても全然寝付けないので、せっかくだから昨日採った木苺でパイを作ろうかと」

「そうだったの。早くから精が出るわね」

微笑んだ鳳翔は、夕張の元へと近づき、彼女の手元を覗きこんだ。

「あら、すっかり出来てるわね。上手よ」

「ありがとうございます。レシピとにらめっこしながら、どうにかやつてるだけですけど」

「それでも大したものよ。お菓子作りは、しっかりレシピ通り作るのが大事だから」

と、その時、オーブンからチーンというタイマーの音が聞こえてきた。予熱が完了した合図であつた。

それを受けて夕張は、パイ生地を敷き詰めた型に、いそいそとクリームを流し込んでゆく。そして木苺を並べ、その上に切り込みの入った残りのパイ生地を被せる。

レシピの手順を再度確認し「よしー」と頷くと、オーブンにパイを入れてスイッチを押す。オーブンが低い音を鳴らすと共に稼働を始

めた。

「ふう」

一仕事終えた夕張が、自らの額を腕で拭う。

「出来上がりが楽しみね」

「はい！」

二人は顔を見合わせて微笑み合った。

「それじゃあ私は、朝御飯の支度に取り掛かるわね」

「まだ焼き上がりまで時間があるので私も手伝いますよ」

「あら、ありがとう。それじゃあお願いね」

そして厨房には、二人の艦娘が食材を切る小気味よい音が響き渡り始めたのであった。

---

貴虎は執務室のドアをノックした。

「呉島です」

「入れ」

簡潔な返答を聞いて貴虎は、部屋の中へと足を踏み入れる。

と、そこでは夷提督えいびとが、味噌汁の入ったお椀を手にし、口元へと運んでいた。

「失礼しました。まだお食事中でしたか」

「……………今終わった所だ」

椀の中身を飲みほして、提督が言った。

空になった椀を机の上に置くと、傍らに控えていた龍田が水の入ったコップを提督へと差し出す。そして彼女は手早く食器類を片付け始める。

それから程なくして、備え付けの小型コンロ上のヤカンが蒸気を吹き上げだす。

「これからコーヒーを淹れるが、どうだ一杯？」

「では、いただきます」

との返事を受けて提督は、龍田が手際よく机の上に並べた道具を手にコーヒーを淹れる準備を始めた。



「それで、用件は何だ？」

手元に視線を向けたまま提督が言う。

「昨夜の出来事についての、より詳細な報告書が出来ましたので、確認をお願いしようかと」

「そこに置いてある書類の上に乗せておけ。後でチェックしておく」

部屋の中にコーヒーの香りが漂い出す。

「龍田、茶請けの準備をしてくれ。棚の中にアレがある」

「はくい、わかりましたあ。アレですねえ。ふふっ楽しみ」

と、上機嫌で龍田が棚を空けて、中を探り出す。

だが程無くして

「あら、おかしいわね。確かこの辺にあったはずよね」

困惑気味の声を龍田が漏らす。

「どうかしたか？」

「ココにあったはずの間宮羊羹が無いんですけど。もしかして提督、こっそり食べちゃいました？」

「いや、手を付けた覚えは無いが………」

一瞬沈黙し、考えこむ提督だったが。

「フツ、そうか。あのコソ泥め」

そう一人で合点し、軽く笑みを漏らす。

その理由が分からず、貴虎と龍田は怪訝な表情を浮かべていた。

「すまんが、茶請けは品切れだ。コーヒーだけで勘弁してくれ」

「構いません」

と、貴虎。

一方で龍田は言葉にはしなかったものの、その顔には若干の落胆の色が浮かんでいた。

やがて三人分のコーヒーが準備され、皆が口を付けようとした時、コンコンと扉がノックされた。

「夕張です。少し宜しいでしょうか？」

「入れ」

「失礼します。提督、おはようございます……あ、貴虎、龍田。二人共おはよう」

部屋に入り挨拶をした夕張に、三人もまた礼を返す。

「夕張、身体はもう大丈夫か？」

貴虎が尋ねる。

「ええ、おかげ様で。昨日は本当にありがとう」

夕張が微笑んで礼を言う。

「どうかしたのか？」

「あ、そうでした。宜しければこちらを召し上がって頂けないでしょうか？」

夕張が手にした箱を提督の机の上に置き、蓋を開く。

すると中から香ばしい匂いと共に、こんがりとキツネ色に焼き上がったベリーパイが姿を現わした。

「ほう、これは」

「わあ、美味しそうねえ」

貴虎と龍田が感嘆の声を漏らす。

「昨日集めた材料で作った木苺のパイです。お口に合えばいいのですが。あ、鳳翔さんにも味をみてもらったので、出来の方は大丈夫だと思います、はい」

「そうか。丁度いいタイミングだな」

「じゃあ、早速切り分けましょうね」

いつの間にかナイフと皿を取り出していた龍田が、パイを食べやすい大きさに切り分け始めたのだった。

「では、いただきます」

提督の声を受けて、皆が一齐にパイを口にした。

夕張が緊張の面持ちでその様子を見つめる。

暫しの後

「うん、美味しいわあ」

「ふむ、中々の味だ」

龍田と提督の感想を聞き、夕張はホッと胸をなで下ろした。

そして夕張はチャリと視線を貴虎の方へと向ける。パイを咀嚼している彼は、若干俯き気味で、何やら考え込んでいるようだった。

夕張の目には、そのように彼の姿が映った。

「……えっと、もしかして口に合わなかった？」

おずおずと不安げに言う夕張。その声を受けて、貴虎はハツとした様子で夕張の方へと顔を向けた。

「あ、いや。そうではない。とても美味だ。素朴ながらもクリームの甘みと木苺の酸味が程よくマッチしている。とてもいい味だと思う」  
「そ、そう。良かったあ」

「是非ともまたいつか食べさせてもらいたい」

その一言を聞いた夕張は、照れくさそうにして軽く顔を赤らめ、満面の笑みを浮かべて答えたのだった。

「次はもつと美味しく作るから、感想聞かせてね」

人の背丈ほどもある大きな絵が飾られた部屋の一角で、小さな円形のテーブルを囲み、三人の人物が談笑していた。

テーブルの中央には皿に盛られたお茶請けの菓子、それを囲うように人数分のコーヒーが置かれていた。

「とっても美味しいですね、この羊羹！」

茶色がかったロングヘアの女性が、爪楊枝に刺さった羊羹を一齧りし、片手で口元を押さえつつ感嘆の声をあげる。

「うん。こんなに美味しい羊羹を食べたのは産まれて初めてだ！いやはや、長生きはするもんだねえ」

隣に座る、ニット帽と眼鏡を身に付けた白髪の老人が、目を細め、深い皺の刻まれた顔をほころばせる。

「……だけど、こんな美味しい羊羹があるのに日本茶を切らしてしまってたなんて、とても残念だ。ああ、勿体ない事したなあ」

落胆の声を漏らすと老人は肩を落とし、ほころんでいた顔を途端に曇らせた。

「いや、だけどこのコーヒーと羊羹、凄くよく合いますよ。俺はこの組み合わせ、好きだなあ。なんていうか、互いが互いをしっかり引き立てあっているというか」

同じく隣に座っていた人懐っこい笑顔を浮かべる青年が、手にした

コーヒーに口をつける。

「そうかい？嬉しい事言ってくれるね」

一転して嬉しそうに言う老人は、再びその顔に笑みを浮かべた。

と、その時、年季の入ったレトロな意匠の扉を開けて、一人の青年が部屋へと入ってきた。

ピンクがかかった色合いの二眼レフカメラを首から下げた、仏頂面の青年に対し

「おかえりなさい、土くん」

女性が明るい声で出迎えの言葉をかけた。

「ああ」

土と呼ばれた青年は、ぶっきらぼうに応える。

「やあ、土」

そして、テーブルから離れ、窓際に立っていた別の青年が親し気に声をかけた。

「海東……お前、また来たのか……」

門矢土は渋面を作り、溜息混じりに、不快感を隠そうとすらすらに言った。

「おいおい、つれないなあ。折角お土産を持ってきてあげたっていうのに」

「土産？」

「そうです。海東さんが持ってきてくれたこの羊羹、すつごく美味しいんですよ！土くんもどうぞ！」

怪訝な表情を浮かべる土の前にやってきた、ロングヘアの女性、光夏海は羊羹の刺さった爪楊枝を、彼の眼前に差し出した。

「いらん！誰があんな奴の持ってきた物なんか」

「そんな事言わずに……えいっ！」

文句を言うために大きく開かれた土の口に、羊羹が放り込まれた。突然口の中に食べ物を実つ込まれた事に驚き、彼は目を大きく見開く。羊羹と共に、飛び出しかけた言葉をも噛み砕くようにして、口をモゴモゴと動かす土。

やがて、ゴクリとそれを飲み込むと

「……………悪くは、無いな」

ポツリと呟き席についた。

そして、羊羹乗った皿を自分の元へと引き寄せる。

「あっ！ズルいぞ士！独り占めしようとするな！」

「細かい事を気にするな。ハゲるぞ」

「お前なあ！」

「まあまあ、士君もユウスケ君も喧嘩しない。羊羹ならまだ残ってるから私が切ってくるよ。あと士君のコーヒーも淹れてくるから、ちよつと待つてなさい」

言い合う二人をなだめつつ、夏海の祖父、栄次郎はキッチンへと向かっていった。

それと入れ替わるように夏海が席に着き

「ところで士くん。今度はどこに行っていたんですか？」

と話を振りだした。

それらのやり取りを窓辺で眺めていた海東大樹。軽く微笑むと彼は、ふと窓の外へと視線を移す。

「久々に良い光景を見る事ができた。それもコレのおかげかな？」

そう小さく呟くと、手にした羊羹を一口。それをじっくりと味わってから飲み込み、更に一言呟いた。

「こいつは大したお宝だ」

【第十一話】 part 1

時刻は間もなく午前十時過ぎになろうという頃合い。

執務室内で貴虎と夷提督は、この後開かれる会議の内容を詰めていた。

少し前までは秘書艦の龍田も同席していたのであるが、会議室の準備のために先に部屋を出ていたのであった。

会議の内容は主に昨夜の敵襲における諸々の状況報告、及び今後の防衛対策の検討などが行われる予定である。

また、インベスとヘルヘイムの果実の存在が確かとなった為、その対応も重要な議題の一つであった。

これらは軍事的に重要な案件であるため、会議には横須賀鎮守府の提督も同席する事となっていた。彼は同行者を伴い、高速艇にて今朝がた港を出発したとの連絡が入っている。その到着を待つて会議が開始される予定だった。

そして、その場において貴虎や提督の素性も艦娘らに明かされる事となる。

「お前がそういうつもりなら俺から言う事は何もない。好きにしろ」

「はい。そのようにさせていただきます」

正面に座る夷提督に軽く一礼する貴虎。二人の話し合いは終了したようであった。

「後はヨコの到着を待つだけだが」

と夷提督が呟いた折、執務室のドアがノックされた。

「赤城です。只今到着致しました」

「来たか、入れ」

扉を開け、足を踏み入れた赤城が敬礼をする。

「おはようございます。夷提督、貴虎さん」

「おっはよーございまーす。いやあ昨夜は大変だったようですね」

赤城の後ろから、ひよっこりと横須賀提督が顔を出し、相変わらずの軽い調子で言った。

「提督？」

ゆつくりと後ろを振り返り、赤城が呟く。

その表情を目にした横須賀提督は、一瞬顔を強張らせ「ハハハハ、失礼しました」と引きつり気味の笑いを漏らした。

「構わんさ。取り敢えずこっちに来い」

夷提督に促され、二人は執務机の傍までやってくる。

「改めまして、昨夜はお疲れ様でした。送られてきた簡易報告で事件の大筋は把握していますが、いやはや実に面白い。ヘタな小説を読むよりはよっほど。正に事実は小説よりも奇なりだ」

「提督、不謹慎ですよ」

懲りずに軽口をたたく横須賀提督を赤城が嗜める。それを受けて、彼はコホンと咳ばらいをする。

「失敬。……ところで貴虎さん、どうやらあなたはアーマドライダー、でしたか？とやらの力を取り戻したらいいですね」

「ああ、詳しい理由はわからないが、どうやらサガラの残っていた黄金の果实の力がその要因となったのは間違いないようだ」

「加えてインベスという怪物の出現も確認された。……貴虎さん、前置きは無しに言います。今後もしインベスが出現した場合、前線に出て戦っていただけませんか？」

横須賀提督は貴虎に尋ねた。

「言われるまでもない。元よりそのつもりだ。私の力や経験が活かせるのなら本望だ」

「ありがとうございます。我々は海上での戦いには正通してませんが、陸上での怪物との戦闘には不慣れですし、武装も専用の物はありません。この艦娘の皆は奮戦してくれたようですが、貴虎さんのようなスペシャリストがいればなお安心です」

顔をほころばせつつ、軽薄な雰囲気を漂わせている横須賀提督。しかしながら、その態度から嫌味や不敬な様子は見受けられない。貴虎は彼の賛辞を素直に受け止めた。

「ところでヨコ。昨晚の騒動について、関係各所、メディアにはどう対応するつもりだ？あの金色の光は本土からも観測されていたと思うが」

「それについては、開発中の新型探照灯や照明弾の実験中の暴走事故として報告をあげてあります。何かしらの追及やツツコミはあると思いますが、そこはまあ上手い事やっておきますのでご安心を」

「こういう時の悪知恵の周り方だけは確かだからな、お前は」

「だけとは何ですか。失礼なくもつと他にも良い所あるでしょう？ほら、赤城さん言ってあげて」

抗議の声を上げつつ、傍らの赤城へと継るように視線を向ける横須賀提督。

「私も夷提督のおっしゃる通りだと思います」

「そんなく赤城さんは冷たいなく」

頼りにした秘書艦にすまし顔で言い放たれ、横須賀提督は肩をガツクリと落とす。

そんなやり取りを見て貴虎も思わず口元に笑みを浮かべる。

「さて、冗談はこの辺にしておこう。小娘どもを無駄に待たせるわけにもいかん。そろそろ向かうとしよう」

夷提督の一言を受け、一同は部屋を出る。

先日と同様に夷提督の車椅子は赤城が押していた。

と、会議室へ向け廊下を進みだしたところで

「失礼いたします！」

作業服を着た一人の職員が駆け寄ってきた。

その職員は横須賀鎮守府所属の者で、先行して派遣された調査団の一人だ。

彼らはインベスとヘルヘイムの果実発見の報を受けて、早朝より島内の搜索を行っている。

「ご苦労様です」

横須賀提督が応え、職員の手にしていた報告書を受け取った。

そして目配せをして貴虎らに先に会議室へと向かうように促すと、職員の方へと向き直った。

「結論から申し上げますと、島内にて件の怪物や果実は発見されませんでした」

「うーん、えっと、この部分ですが――」



といった会話をする二人を背にしつつ、貴虎らは一足先に会議室へ向けて歩き出した。

長い廊下を抜けて、会議室の中へと夕張は足を踏み入れた。

基地内に幾つか存在する会議室の中でも、ここは特別であった。

建物内の奥まった所であり、窓は無く、壁も防音加工がしっかりと施された構造となっている。機密性の高い重要な会議やブリーフィングはここで行われるのだ。

既に室内には、何人かの艦娘らが席に着いていた。

前方の演台付近では、龍田が部屋全体を見回し、集まった人数をカウントしている。

そして各机の間を縫うように動くのは鳳翔。

彼女は会議で使う資料やら筆記具やらを、机の上に置いて回っていた。

部屋の入口から最も離れた、壁際の席に着いた夕張は、置かれていた資料の一つに目を通しだす。

それは提督と貴虎とがまとめた簡易報告書であり、昨日起こった出来事が時系列に沿って大まかにまとめられていた。

皆の意見や報告を受けた際に、補足やメモを書き留める為か、紙面の行間の隙間や余白が多めにとられている。

その資料を一通り読み終えた夕張は

「みんな大変な戦いをしていたのね……」

ポツリと独り言を漏らす。

「おう、夕張」

と、声をかけられた夕張は、資料に落としていた視線を上げる。

「あ、おはよう天龍」

「お前も大変だったみたいだな、怪物に襲われるなんてよ」

労うように言いながら、夕張の隣の席に着く天龍。

「そう言うあなたこそ。随分と激しい戦いでしたらしいじゃない」

「ん？ああ……マジでヤベエ戦いだった」

普段の彼女には似つかわしくないような、やや大人しめの口調で天龍は言う。

「あら、珍しいわね。いつもなら、オレ様にかかればどうってこと無かったぜ！ぐらいの事は言うってのに」

との夕張の声に天龍は、少々目を所在なさげに泳がせ、複雑そうな表情を浮かべる。

「あー、うん。……いや、何だかあまり実感が湧かねえんだ。現実離れた事ばかり起こってたし、戦ってる時は無我夢中だったしよ。今になって振り返ってみると未だに夢でも見てたんじゃねえかって、そんな気がしてくるんだ」

「……………そっか、そうよね。私もその気持ちわかるかも」

夕張にとつても、昨日怪物に襲われた事、不思議な光を目撃した事、貴虎が目の前で緑色の鎧を纏った武者へと変身し怪物と戦ったのを目にした事、全てが紛れもない実体験ながらも、一晚を経た今、一連の出来事の現実味は薄く感じられてしまっていた。

それこそ、あれは夢だったと言われれば納得してしまいそうなのに。

だが、自分の腹部に残るひっかき傷、打撲の跡、節々の痛み、隣に座る天龍の身体に残る怪我の治療の痕跡、手元にある公式の書式に則った報告書、それらが昨日の出来事が現実だった事を物語る。

ふと夕張は、周囲の会話に耳を傾ける。

「陽炎は貴虎さんの変身した姿も——」

「ええ。見た目は何ていうか——」

「ほな、全部見たんは陽炎だけ——」

「あとは銀色のマスクの——」

「他にもいたわ。宝石みたいなの——」

「えー、私は何も見てない——」

などと駆逐艦娘らが昨日の出来事を話し合っていた。

「みんな朝飯時には全然こういう事話して無かったってのに、ここにきて話しまくってやがんな」

小声で天龍が言う。

「……きつとみんな不安なのよ」

「不安？」

夕張の言葉に小首を傾げる天龍。

「ええ。こうやって公式的に会議の為に集められて、資料を渡されて。それで昨日の出来事が現実味を帯びてきて」

「だから話して気を紛らわさずにはいられない、ってか」

天龍は後頭部で両手を組んで、椅子を後方へ傾けつつ天井を見上げる。

「オレもみんなも色んな修羅場潜り抜けて、肝も座ってきたハズなんだけどな。……まだまだヒョッコってコトか」

「仕方ないわ。誰でも未知のモノは怖いんだから」

「そうだな。……あと、わからないと言えば提督と貴虎の素性もだな」

「……………ええ、そうね」

努めて考えないようにしていた事が、天龍の一言で夕張の頭の中によぎりだす。

鎧武者に変身した貴虎、資料の記述と昨晚の陽炎の言によれば提督、加えて基地を襲った謎の男も同様に——戦闘服と仮面をつけた——似たような姿に変わったらしい。

報告書によれば謎の男と、貴虎・提督に繋がりがあつたわけではないうのだが、少なくとも二人が只者では無い事は確かであろう。

そこが夕張の、艦娘達全員にとっての最も気がかりな事柄であつた。

夕張が暫し思考の海に沈んでいると

「ほら、姉さん、しっかり歩いて下さい」

「あー……………うん……………」

神通に手を引かれながら川内が会議室へと入ってきた。

更に続いて

「みんなー！おっはよー！今日も元気してるー!？」

快活に大声で挨拶をしながら那珂がやってきた。

不安気にしていた夕張は苦笑を漏らした。

「まったく。相変わらずね、あの子は」

「あいつだって昨日はあの変な奴らと戦っていたつてのに、ケロツとしてやがる。もしかしてメンタル一番強えんじやねえか？」

天龍も呆れ気味に、肩をすくめる。

それから間もなくして夷提督、貴虎、赤城の三名。若干遅れて横須賀提督が会議室へとやってきた。

その到着と同時に会議室は自然と静まり、空気に緊張感が漂い始めた。

会議室の前方に艦娘らと向かい合う形で設置された机には、貴虎、夷提督、赤城が着いていた。

演台には横須賀提督が立っている。

彼は場を和ませようとしたのか、いつもの調子で茶目つ気を含ませたジョーク混じりの挨拶をした。だがしかし、対する艦娘らの反応は薄かった。

苦笑しつつ居住まいを正すと、彼はゆっくりと話し出した。

「昨晚の襲撃に対する奮戦、お疲れさまでした。皆さんの活躍により基地及びこの島は守られました。一人の犠牲者も出すことなく終わったのは本当に幸運でした」

横須賀提督が真面目な口調で言う。そして一呼吸ほど置いて、その表情は一際真剣なものになる。

「ですが、このような事態がいつまた起こるか知れません。従ってこの場にて状況報告と対策案を話しあつてゆく必要があるのですが」

そこで言葉を一旦区切って場内の艦娘らを見渡す。

「その為には、皆さんにとある機密事項を話さなくてはなりません。夷提督や貴虎さんの素性もこれに関連してきます。そしてこれは軍の、いや、国家の重要機密になります。一度知れば容易に軍を抜けれなくなります。退役後も厳しい監視の目に晒される事となるでしょう。更には機密の漏洩があった場合、厳罰に、最悪死罪に処させる事もあり得ない話ではありません」

その言葉に艦娘らは、にわかになぞわつき出す。それを咎めることなく横須賀提督は、暫し間を置いた。やがて空気が落ち着き始めた頃合いを見計らい、再びその口を開く。

「機密に触れる事を望まないというのであれば、今すぐにこの部屋を出てください。後ほど昨晩の出来事を他言しないという誓約書を記入の後に、配属先の変更手続き、若しくは職種の変更希望手続きを行います。場合によっては退役も許可します」

かつてない程の厳粛な様子に艦娘らは沈黙していた。

室内には時計の秒針が時を刻む音が静かに響く。

暫しの後に夕張が手を上げた。

それを見て無言で頷き、喋るように促す横須賀提督。

夕張がゆつくりと立ち上がる。

「私は……昨夜の事を今でも夢の様に感じます。ですが、あれは紛れもない現実です。それを曖昧なままにしておきたくは無いです。私は真実が知りたい。それに夷提督は信頼のおける上官で、貴虎も、まだ僅かな間しか一緒に過ごしてないですけれど、私の大切な仲間で命の恩人です。彼らの素性がどうであれ、私はしっかりと受け止めたいと思っています」

堂々と宣言する夕張。

「そうだな。オレも同意見だ」

隣の天龍も立ち上がり、彼女に追従した。

「あんな妙な体験しちまったんだ。中途半端に抜けるのはスツキリしねえ。毒を喰らわば皿まで、つてな」

更にそれを受け

「私もー」

「あたしもー」

と他の艦娘らが声を上げてゆく。

結果として、会議室に集まった艦娘達は誰一人として部屋を出る事は無かったのであった。

その瞳には決意と覚悟がありありと浮かんでいた。

「皆さんの覚悟、しかと理解しました。それでは説明致しましょう」  
そして横須賀提督は以前貴虎に説明した時と同様に、この世界には異世界から迷い込んだ人々がいる事、彼らの助力を受けて深海棲艦への対抗策を練っている事などを話していった。

それを聞いた多くの艦娘らは、若干の動揺を見せたが、一方では昨晩の不思議な出来事の数々が腑に落ちた様子で、納得したような表情も表していた。

「以上が全てになります」

と横須賀提督が十数分に渡る話を終えた。

ふと貴虎は彼の説明の内容について違和感を覚える。

(……何が抜けている?)

思考を巡らせて、以前横須賀提督から説明を受けた時の記憶を探つてゆく。

「今述べた通り志願兵で構成されている艦娘達ですが、極稀にそれには当てはまらない、説明のつかない者が我々の前に出現する事があります。そんな普通ではない、もう一つの艦娘が存在するのです」

「かつて『とある戦争』で沈んだ軍艦が転生し、人として生まれ変わったモノ……それがもう一つの艦娘です」

「いくつか注意事項を言っておきます。異世界の事や、そこから来た人々についての情報は、軍の最高機密となっています。それは一部の人間しか知らない事です。くれぐれも他言無用でお願いします。たとえ艦娘にであつてもね」

「それと、転生した艦娘の中には、自らの出自にコンプレックスを持つ者が僅かながらいます。そんな娘達は、周りの人間達との違いに苦悩しながらも、どうにか折り合いをつけて日々を送っています。彼女達の心の平穩の為に、どうか宜しくお願いします」

(もしや、この中に軍艦から転生した艦娘がいるというのか?)

仮説に思い至った貴虎は、室内の艦娘らを見渡す。しかしながら、彼女らの様子からはそれを裏付ける様なものは見てとれなかった。

「それでは、ここからは夷提督にお話しいただきましょう」

と、横須賀提督が演台から離れ、夷提督へと目配せをする。

昨夜の戦いで脚の怪我を悪化させた夷提督は、演台に立つことは出来ない為、車椅子を演台の前へと動かし、そこで自らの素性を話始めた。

彼はかつて、風都という街で探偵を生業として生きていたという。

その傍ら「ガイアメモリ」という、人をドーパントなる超人に変えてしまう道具を生産し、実験の為に街へバラ撒く組織を探っていた。

そしてある時、依頼を受け、敵組織からとある人物を奪還しようと敵施設に潜入した際に、凶弾を身に受け彼は倒れたのだった。

「俺が覚えているのはここまで。後はお前たちの知る通り、気がついたら何故かこの島の浜に倒れていたというわけだ」

昨夜の戦いにおいて、夷提督が変身をした事により、並々ならぬ事情があるのは察していたのであろうが、彼の口より直接明かされた事実に対し、艦娘らは——半ばある程度の予想はしていたのであろうが

——困惑した様子でひそひそと話している。

「やっぱり別の世界の人ってのは本当なの？」

「そんな凄い事をしてたんだ、提督ってば」

「探偵か……何だかカッコイイね」

しかしながら、困惑した空気がありながらも、艦娘らから提督に対する不信感や懐疑心のようなモノは伝わってこない。

これもひとえに彼の人徳、積み上げてきた信頼の賜物のおかげなのだろう。

「さて、俺の話は仕舞いだ。次は貴虎、お前の番だ」

貴虎の方を見やり、夷提督が告げた。

促されるままに立ち上がった貴虎は、夷提督と入れ替わりに演台へと立つ。

そして会議室内を見回すように一瞥すると

「私も夷提督と同じく、この世界の人間ではない」

そう前置きをして語り始めたのだった。

彼は自らの行いを包み隠さず話していった。

かの怪物「インベス」は自分のいた世界に現れた怪物であるという事。

ユグドラシルコーポレーションでヘルヘイムの森、インベスの調査を行っていた事。

プロジェクトアークなる人類救済、もとい虐殺すらも辞さない残忍な計画に加担していた事。

血の繋がった弟の凶行を止める事が出来ずに敗北し、水底に沈んだ事を。

「そして、私は夕張らに救助され、今この場に至っている」

貴虎の話が終わった時、室内は静まり返っていた。

いくら大義名分を掲げてたとはいえ、言わば悪の組織に対抗する正義の味方のような夷提督の素性とは異なり、貴虎のやってきた事は悪事と呼ばれても仕方がない。

彼女らの反応は貴虎自身、覚悟していたものだ。

暫しの後に

「ちよつと聞きたいんだけど」

叢雲が律儀に挙手をして声をあげる。

「何だ」

貴虎が応え、叢雲に喋るように促す。

「アンタの素性は十分に分かったわ。でも一つだけ理解できない。どうして人類を大量虐殺するような計画に携わっていたなんて事まで言うの？ そんなのわざわざ話したって良い事なんて一つも無いでしょう？ 一体どういいうつもりなのよ」

「そうだな」

叢雲の言葉を受け貴虎は、会議室内の艦娘の様子を再度見渡す。

何やら思案しているような者、表情を変えずに真っ直ぐに貴虎へ目を向ける者、彼の言葉を固唾を飲んで待っている様子の者、不安と困惑の表情を隠しきれていない者、様々であった。

貴虎は軽く深呼吸をし、穏やかな口調で言った。

「私は君らと真に仲間になりたいのだ」

「……は？」



その言葉を耳にした叢雲は、眉をひそめ、訝しむような表情を向ける。

対して貴虎は意に介さずに話を続ける。

「かつての私は多くの部下の上に立ち、それを率いる立場だった。しかしこれからの私は、君たちと対等に肩を並べて戦っていく事となるだろう。だから君たちに判断して貰いたいのだ。このような事をしてきた私が、それに値する人間かを。これは私なりのケジメだ」

貴虎の言葉に会議室内は静まり返る。

その沈黙を破ったのは

「……私は貴虎を信じたい。いいえ、信じるわ」

スツと立ち上がった夕張の一言だった。

「あの怪物相手に命を懸けて必死に戦ってくれた私の命の恩人なんですもの。そんなあなたが心の底から望んで計画を進めていたワケない。私はそう思う」

「夕張……」

軽く笑みを浮かべつつも、堂々とした態度で夕張は言った。

「私も信じます！貴虎さんは悪い人じゃありません！」

吹雪が椅子をガタツと鳴らして立ち上がって言う。

「私も！」

「ウチもや！」

「オレもだ！」

次々と艦娘らが呼応してゆく。その姿を見て貴虎は

「皆……感謝する」

深々と頭を下げて応じたのであった。

「というわけだけども、叢雲ちゃん、納得できたあ？貴虎さんを信じられそう？」

龍田が叢雲に向けて悪戯っぽく言う。それに対し

「な、何よ！私は別に信用できないなんて言つてないでしょ！どうして自分に不利な話をわざわざするのか気になっただけよ！……そ、それに夕張さんだけじゃなく、一応私の命の恩人でもあるんだから」

と叢雲は言うのと、頬杖をついてそっぽを向いてしまった。

「うんうん。良きかな良きかな。皆さんこれでスッキリですね」

手を大きく広げて大仰な仕草で言いつつ、横須賀提督が歩み出てきた。

「貴虎さん、他に話しておきたい事はありますか？」

「大丈夫だ」

「わかりました。それではこの話はここまで。それでは今後の対策を立てる為にも、昨晚の出来事について皆さんの知っている事、体験した事、全部話して情報を共有していきましょう。とりあえずは例のデイエンド、でしたか？とかいう侵入者とその一味との戦いについてから報告、分析していきましようか。それじゃあ、まずは鳳翔さん達からお願いします」

「はい、了解しました」

鳳翔が返答し起立する。

そして昨晚の戦いについての報告を始めたのであった。

「ふむ、敵の装甲や攻撃力は深海棲艦で言うところの、重巡から戦艦の上位クラスに相当すると？」

「はい、駆逐艦用の砲で決定的な損傷を与えられなかった事や、艦載機での攻撃が効果を上げていた事から推察するに、ですが」

「倒した敵の身体が残らなかった、というのは？」

「オレらが倒した奴は何でかスツと消えちまったんだ。テレビの映像が消える時みたいな感じだったな」

「あ、それ那珂ちゃん達が戦った敵も同じだったよ」

「俺が戦った魔法使いもどきはデイエンドとかいうヤツの攻撃に吸収されて消えていた。もしかしたら何らかのエネルギーを使って作った分身か何かかもしれん」

「なるほど。小説とかアニメでみるような質量を持った残像、的な感じということなのでしょうかね？」

「もし再び彼らが現れた場合は、夷提督や貴虎さんに応戦していただくのが適任でしょうね」

「大丈夫だよ。私たちでも勝てたんだから。平気平気。特に夜戦だっ

たら負ける気がしないからいつでも歓迎だよ」

「いや、そう易々とはいかないだろう。昨夜は奇襲や奇策で撃破に成功しているが、次も上手くいくとは限らない。現に鳳翔さんの艦載機による攻撃が対策されてしまっていたからな。無茶な事はせず私達にまかせてほしい」

「うくん……そうか。ならそこは専門家に任せただ方がいいのかな？」

といった具合に報告がなされてゆき、デイエンドに関する話は終了したのである。

そして議題は次へと移る。

「さて、インベスという怪物に関してですが、これについてはまず貴虎さんに説明をしていただきましょう」

横須賀提督に促されて貴虎が演台へと向かった。

「あの怪物は、元々私のいた世界に現れた、侵略者とも言うべき存在だ」

そうして貴虎は、インベスとヘルヘイムの植物に関しての説明を始める。

突如として貴虎のいた世界へと侵略してきた、謎の植物と怪生物インベス。

クラックと呼ばれるゲートを通じてやって来るそれは、凄まじいまでの繁殖力で世界に蔓延っていった。

その植物に生る実は、食した生物をインベスへと変化させてしまう。一度インベスとなったが最後、二度と元に戻る事はない。

そしてインベスは、ヘルヘイムの果実をロックシードを取り込み進化する。灰色の下級インベスから凶暴性の増した禍々しい形態に。更には多種多様な生物を模したような容姿と、強力な戦闘力を有した上級種へと。

上級種は時として、昨晚貴虎が戦ったような巨大形態へと変貌を遂げるのである。

「昨日山小屋に入ってきたんが、下級インベスってのやな」

「そして私を襲った、角が生えていたタイプが上級というわけね」

「黒潮と夕張の言う通りだ。そしてそれが果実を取り込み巨大な形態へと進化した」

「その巨大化したのを貴虎さんが倒したけれど、姿を変えて生き返ったのよね」

陽炎の言葉に貴虎は静かに頷いた。

「……そしてそれは、深海棲艦みたいな見た目で、攻撃方法も深海棲艦と同じ特徴をしていたわ」

夕張の報告に、会議室は仄かにざわつきだす。

別の世界に居たはずの怪物が、この世界の脅威である深海棲艦の力を兼ね備えている。その可能性、不可解な事実には皆が困惑していた。

「あの姿は、私はデータベースでしか見た事がないのだけれど、まるで戦艦棲姫みたいな」

「戦艦棲姫ですって!？」

思いもよらない夕張の報告に驚愕し、赤城が立ち上がる。

横須賀提督は眉をひそめ、他の艦娘らのざわめきが一際大きくなる。

「夕張さん、それは本当なのですか!？」

「いえ、その……あくまで似ていたという話で。だけどあの巨大な腕と頭部の特徴は、戦艦棲姫の艦装に匹敵するほどの大きさだったと思います」

「戦艦棲姫というのは、それほどまでに厄介な深海棲艦なのか?」

「厄介も何も、並の深海棲艦とは比較にならないレベルの存在ですよ、貴虎さん」

「赤城さんが驚くのも無理はないでしょう。僕だって驚いた。目を通した簡易報告には、そこまでの詳細は書かれていませんでしたし」

横須賀提督が操作していた携帯端末を貴虎へ差し出した。

「インベスにも上級種が存在するように、深海棲艦にも上級種と呼ばれるに値するモノが存在します。力の程度の差まで同一かはわかりませんが」

「これが、そうなのか?」

貴虎が目にした画面には、黒い薄手のネグリジエのような衣を身に

纏った、妖艶な女性のようなモノが映っていた。

肌は青白く、長い黒髪を掻き分けるように額から生えた二本の角が特徴的なそれからは、まるで幽霊や鬼、妖怪の類を思わせる様な雰囲気を感じられる。

それ以上に目を引くのは、女性の背後に立つ巨人のようなモノ。

前に佇む女性を遙かに上回る大きさの、筋骨隆々な腕。肩から生えた巨大な砲塔。鉄塊のような頭部に存在する不気味な口。

その様相は、昨晚戦ったインベスの変化した姿と酷似しているように見えた。

「私が目にした事のある深海棲艦よりも、随分と人間に近いな。上級種というのは皆こうなのか？」

「はい。その理由は未だ説明されていませんが」

貴虎の疑問に赤城が口を開く。

「これらの深海棲艦には鬼級、姫級といった通称が付けられています。それらは敵の拠点防衛や大規模な侵攻艦隊の旗艦を担って、私達の前に立ちほだかるケースが多いのです。艦隊の最高クラスの戦力や強力な支援をもって、ようやく渡り合える程にその戦闘力は強大です。私もそれらと対峙した事がありますが、一人で渡り合うなどとても考えられません」

「ちよつと待ってよ。てことは貴虎の力で深海棲艦、それも姫級を倒したって事になるの？深海棲艦って艦娘の装備以外じゃ倒せないハズでしょ？」

「正確に言えば妖精さんの加護が宿った武器以外、ですけどね叢雲さん」

横須賀提督が補足するように答える。

「でもさ、深海棲艦みたいに変化した怪物を倒したって事は、貴虎も深海棲艦と戦えるって訳じゃない？それって凄くない？」

「確かに。上手く運用すれば戦力の増強になるわね」

川内の言葉に夕張が頷く。

「一緒に夜戦訓練出来るじゃん！」

「結局それですか、姉さん……」

彼女の隣に座る神通が溜息をついた。

「いくら深海棲艦を倒せるっていつても、海の上でどうやって戦うのよ。忍者みたいに水蜘蛛でも履かせるわけ？」

皮肉気に言う叢雲。

「そうねえ……貴虎、あの戦闘服に水上を移動する機能とかはついていたりするの？」

「残念ながらそのような機能は無いな」

「うーん、なら考えられる方法は……」

「ちよつと、軽い冗談で言っただけなのに、本気で考えこまないでよ」  
「脚に主機を装着して……でも缶が取り付けられないと制御が……それに燃料も」

叢雲が呆れて言うのだが、夕張はブツブツと呟きながら思案を続けている。完全に彼女の中にある技術者魂に火が入ってしまった。

議論がにわかにな熱しだした所で夷提督が一言釘を刺す。

「不確かな情報を基に憶測で話を進めてもロクな事にはならん。例の怪物はあくまでも戦艦棲姫の艦装に“似ていた”だけだからな。今は一つでも多くの情報を揃えておくべきだ」

「確かにその通りです。この議論は一旦置いておくとしましょう」

と横須賀提督が議論を仕切り直す。

「貴虎さん、あなたは数多くのインベスと戦ってきたようですが、昨夜のように巨大な姿から更なる変化を遂げるインベスはいたのでしょうか？」

横須賀提督が尋ねる。

「いや、昨夜が初めての遭遇だ。私が目を通した各種報告書や研究データには、そのような実例は存在していなかった」

「なるほど……加えて気になる事は」

と思案する横須賀提督は、席に着いている島風に視線を向ける。

「島風ちゃん。この前ヘルヘイムの果実を運送した時、まっすぐに横須賀鎮守府まで向かったんだよね」

「もーっ！横ちゃん提督ってば、また私を疑うの!?!」

席から思わず立ちあがり、ふくれっ面で島風は横須賀提督を睨みつ

ける。

「待つて！確認、確認だから！念のための！」

「真つ直ぐに横須賀に向かったよ！その時はベストタイムだったんだから！ね、連装砲ちゃん？」

呼びかけに答えて彼女の背後からちよこんと顔を出した連装砲ちゃんたちが、しきりに首を縦に振る。

「おかしいですよね。貴虎さんのお話では、ヘルヘイムの植物とやらは凄まじい繁殖力と生命力を持っているとの事ですが……」

「せやなあ。ウチらがあの夜見た果実はプルプルやったで」

不知火と黒潮が訝しむように言う。

「そうだな。それもどう考えてもおかしい事だ。あの状態の果実が半日も経たないうちに枯れ果てるなど……」

「貴虎さん、昨夜のインベスに関連する事で他に気になった点は何かありましたか？」

「……そうだな。ヤツは部位の切断面から重油のような体液を流していた。インベスはそのような体液を流す事は無い。加えて死骸はドロドロに溶けて消えていた。大抵の場合、インベスはその身を跡形もなく散らす、溶けるなどといった消え方はしない」

横須賀提督の質問に貴虎が答えた所で

「あの、すみません」

神通がおずおずと手を上げた。

「どうぞ、神通さん」

横須賀提督が発現を促す。

「はい。貴虎さんが戦った巨大なインベス、というのは深海棲艦が果実を食べて変化した姿なのではないでしょうか？」

「あつ、なるほど！だったら納得できますー！」

吹雪が合点がいったという風に声をあげる。

「インベスが深海棲艦が変化したもの、という可能性は僕も考えましたが……貴虎さん、ある生物がヘルヘイムの果実を食べてインベスとなった場合、元の生物の特性を引き継ぐといった事はあるのでしょうか？」

「実験映像で果実を与えられたネズミがインベスとなる動画を見た事がある。その際は元の大きさを保ったままネズミがインベス化していた。しかしながら、そのインベスにネズミの特性を引き継いだ様子は見られなかった」

「なるほど。だとすると特性はまだしも、インベスの大きさから元の姿を推察する事もできそうですね」

「ともあれ、これであらかた情報は出そろったな。後は実物の果実を検証できるかどうかだが」

そう夷提督が口にするとはぼ同時に、横須賀提督の懐から着信音が響き出した。

「おっと、少々失礼します」

そうして電話に出た横須賀提督は二、三言発し電話を切る。そして「ヘルヘイムの果実が発見されたそうです」

全員に向けて告げた。会議室の空気は一瞬で張りつめた。



## 【第十一話】 part 2

「この島にヘルヘイムの果実が……」

小型のモーターボートから降りた貴虎が呟いた。

彼が降り立った所、そこは基地から少し離れた所にある無人島であつた。

「よつと」

横須賀提督が軽くジャンプしてボートから飛び降りる。その手にはロープが握られており、彼は手慣れた様子で船着き場にある杭にそれを結び付けボートを係留する。

「昔は僅かながらに人が住んでいましたが、島民はみんな深海棲艦の侵攻に伴って疎開しています。まあ、今のこの世界ではよくある事ですが」

「それにしても、何故この島に果実があると分かったのだ？」

「先刻見た島の調査報告書に、とある海岸の写真がありました。映っていたのは何かが座礁したような跡と見慣れない植物の一部。恐らくヘルヘイムの植物に関係あるのではないかと思いましたが、昨晩の潮流の変化を考慮して周辺海域を調査するように指示しました。結果は大当たり、というワケです」

会話をしつつ作業を終えた横須賀提督は、両手をパンパンと打ち払う。

「提督、上陸完了致しました」

ボートの接岸した箇所より若干離れた場所にて上陸の作業を行っていた赤城、その後ろに続いて龍田、夕張がやってきた。

無人島へやってきたのは全部で五名。

夷提督は足の具合を鑑みて基地に残ったのでその代行として秘書艦の龍田、更にもう一人護衛として夕張が、赤城については言わずもがなである。

「それじゃあ行きましようかね」

横須賀提督を先頭に一同は件の場所へ向け歩き出した。

島の道路は簡単な舗装がなされていたが所々ひび割れており、雑草

がそこかしこから生えていた。

周囲に点在する廃屋、放置され転がっている生活用具、荒れ果てた畑、それらは人が長年島にいないという事実を如実に物語っていた。貴虎が歩きながら周囲を見渡すと、様々な野生生物が所々にみられた。それらは遠巻きに彼らの様子を窺っているように思われる。

大型の鳥類、アホウドリや鷺。哺乳類においてはイタチや鹿のような動物「キヨン」の姿が多く見られた。

基地のある島でも野生動物が見られないわけではないのだが、無人島であるこの島ほどに遭遇する頻度は高く無かった。

のどかな景観を横目に歩く一同は島の反対側へと向かって行く。

「あ、アレかしら？」

夕張が道の先を指さした。そこでは調査員と思わしき者らが周囲を見渡したり、しゃがみ込んで何やら調べているようであった。

その内の一人が貴虎達の接近に気付き敬礼をする。

周りの者らも続けて敬礼を行っていく。

「ご苦労様です。状況は？」

「はい提督、まずは見て頂いた方が良いと思われまますので、どうぞこちらへ」

作業員に案内されて岩礁地帯を皆が進んでゆく。

波打ち際に小型の黒い鯨のような物体が横たわっていた。波に揺られて小さくユラユラと動くそれは、深海棲艦の駆逐イ級であった。

「これは……間違いない」

貴虎が横たわっているイ級の遺骸を見下ろす。

それには緑色の蔦が絡みついていていた。

一部分は肉に食い込むように深々と絡みついており、蔦の数ヶ所には錠前を思わせる様な形状の、紫がかつた色の木の木の実が生っていた。

「これがヘルヘイムの果実、というものですか？」

「そうねえ。あの夜に天龍ちゃんが手にしてた……」

赤城の問いに龍田が呟くように答える。

「酷く感じがらめになってるわね。植物の群生地にも突っ込んだのかしら？」

「いえ、ここを見てください夕張さん。この植物、イ級の内側から生えているように見えませんか？」

「え？」

横須賀提督の指示した箇所、そこは微小の穴が空いており、蔦が内側に食い込んでいるように見える。全体をくまなく観察してみると、蔦の発生源はそこであると見られ、決して外側から入り込んだモノではないとわかる。

「入り込んだ種子が発芽したか」

貴虎の居た沢芽市でも起きた事例だった。

インベスはヘルヘイムの果実を口にした生物の成れの果てであると同時に、その種子の媒介者でもあった。

インベスの爪などに傷つけられた者の傷口に種子が付着。やがて発芽したそれは宿主を蝕みつつ生長してゆく。

ヘルヘイムの植物のもう一つの恐ろしさがこれであった。

「だとすると深海棲艦はインベスと交戦したと考えるのが妥当でしょうか。貴虎さん、深海棲艦を襲うようなインベスについて心当たりはありますか？海を泳げるような」

横須賀提督の質問を受け、貴虎は記憶を探る。

しかしながら、彼が今まで戦った、データとして見たインベスの中に水生系のモノは無かった。研究者の戦極凌馬が秘匿していたデータがあったとすれば別の話だが、今となっては窺い知れない事だ。

「水中や海上の移動を得手とするモノに心当たりは無い。だが、飛行能力を持ったタイプのインベスであれば深海棲艦を襲う事も可能だろう。もしくは何らかの要因でヘルヘイムの果実を口にした海洋生物が未知のインベスとなった、という可能性もあるかもしれないが」

「じゃあ、ヘルヘイムの汚染が海全体に広がってるって可能性もあるわけ？」

「海の底にびっしり植物が生えてたりするとかあ？」

「海中で繁殖していたという事例もデータには無かったが」

夕張と龍田の疑問にそう答えた貴虎であったが、その可能性が無いとは言えなかった。ヘルヘイムの植物は謎の部分が多かったのだか

ら。

仮に龍田の言った通りの事態になつていれば、最早手の施しようは無いに等しい様に思われた。

「まあ、一先ずはこの遺骸を研究する事から始めましょう。貴虎さん、御助力お願いします」

「勿論だ」

横須賀提督の言葉に頷く貴虎。

と、その時。遠方で銃声が鳴り響いた。それに続けて微かな悲鳴のような声が。

一同は音のした方へと振り向く。

その先には小さな森が広がっていた。

「あそこには誰が!?!」

「植物の痕跡を調べに行つた者が数名です!」

「もしいンベスが!」

調査員の一人の言葉を聞くや否や、貴虎は駆けだしていた。

「夕張さん、龍田さん、同行を!」

「はい!」

「了解しましたあ」

横須賀提督の指示を受け、二人の艦娘もまた森へ向けて駆け出していった。

「く、来るな!」

調査員の男が手にした拳銃を撃つ。

それは迫りくる初級インベスの腕に当たる。しかしながら、致命傷には至らない。逆に刺激されたインベスは、怒りに身を任せて調査員に向かつて体当たりをしかけた。

突き飛ばされた調査員が、もんどりうって倒れ込む。

更にインベスはそこへ追い打ちをかける。振り下ろされた鋭い爪が調査員の腕を引き裂いた。

「ぎやあああああ!!」

腕を押さえて苦悶の声をあげる調査員。

「くそっ！化物め！」

もう一人の調査員が、仲間を傷つけたインベスへ銃を向ける。

だがその時、木陰からもう一体のインベスが飛び出し、男へ向けて突進してきた。

「う、うわあああああ！」

男はパニック状態になり銃を乱射するが、狙いは悉く逸れ、インベスには一発たりとも当たらない。彼もまたインベスの突進を受け、地面を転げる。

苦痛に顔を歪めつつ目を開くと、腕を大きく振り上げたインベスの姿が。

「た、た、助けてくれえー！っ！」

悲鳴が森の中に響き渡る。

「はあああああっ！」

雄叫びと共に駆けつけた貴虎がインベスの横合いから体当たりをしかけた。跳ね飛ばされたインベスは、よたよたとよろめきながら木の幹に顔面からぶつかつた。

「大丈夫ですか!?!」

駆け寄つた夕張が、しやがみ込んで調査員の安否を確認する。

「あ、ああ。助かったよ」

「夕張！早く彼を森の外に！」

「ええ！」

調査員を助け起こし、身に付けている艦装を外側に開いて懐にスペースを作る。そして彼に肩を貸しながら夕張はその場を離脱する。

貴虎は取り出した戦極ドライバーをかざして装着。ロックシードのスイッチを押した。

「変身！」

黄金色の輝きと共に頭上に出現した緑色の果実が貴虎の頭に覆いかぶさつた。

【メロンアームズ！天・下・御・免！】

緑と白に彩られた装甲を身に纏った鎧武者、斬月が降臨した。

彼は無双セイバーを手にし、鏢の銃口から弾丸を放った。

それは倒れた調査員に覆いかぶさろうとしていたインベスの背に傷を刻む。

痛みに身体を震わせ振り返るインベス。

「はあああああつー！」

その眼前に迫る鎧武者、斬月。

彼は左手の盾を振りかざし、その面でインベスを横合いに殴り飛ばす。

強烈な一撃を受けて地面を転げるインベス。ヨロヨロと立ち上がった所へ、斬月の無双セイバーによる乱れ切りが繰り返された。

目にもとまらぬ速さの斬撃は、容赦なくインベスを切り刻む。

程なくして一つの遺骸が地面に転がった。

貴虎の体当たりを受けて木に激突したインベスは、振り返ってその手を大きく振り上げて怒りを露わにする。

と、そこへ

「これ以上のおイタは許されないわよお」

クスリと笑いながら薙刀を構える龍田が立ちはだかった。

インベスは怒りの矛先を彼女へと向け、鋭い爪を振り上げて突撃する。

「ふふっ。お触りは禁止よお」

口元に笑みを浮かべ、目を細めた龍田の手にする薙刀が華麗に閃いた。

次の瞬間、振り上げられていたインベスの腕が宙を舞い、ドスンと音を立てて地面へと転がり落ちた。

腕を切り落とされたインベスはブルリと身を震わせて、直ちに踵を返してその場から逃げ出した。しかし

「逃がすかー！」

先程のインベスを倒し、即座に動き出していた斬月が、逃げるインベスの眼前に立ちはだかった。

戦いは間もなく終結した。

インベスを倒した斬月は周囲を見渡す。

もう視界に敵はいないと判断すると、変身を解除した。

ロックシードをドライバーから取り外し、懐へと仕舞い込む。

「既にインベスがこれだけ出現しているとは……」

この島は無人島であるため、インベスは打ち上げられていた駆逐イ級の体から生えていた実を食べた野生動物が変化した姿であると考えられた。

だが、植物がこの世界に完全に根付き、本格的に繁殖を始めて人里などにまで繁殖してしまえば取り返しをつかない事態になってしまう。

早急に対策をとる必要がある、などと思案しながら貴虎は龍田の元へと向かう。

彼女は倒れた調査員の手当てをしていた。

傷口を押さええてうずくまる彼の腕からは、血が少しずつ滴り落ちて  
いる。

止血処理がなされてなおその状態という事は、傷は相当に深いと思  
われる。

「歩けるか？」

「……な、なんとか」

息を荒げ、足をふらつかせながら立ち上がる男を二人は両脇から挟  
みこむようにして肩を貸して歩き出す。

「種子が入り込んでいるとマズイ。すぐに精密検査を受けさせねば」

「そうねえ。ところで、貴虎さんは大丈夫なお？ 昨日の戦いでイン  
ベスに傷つけられちゃったんじゃない？」

龍田に言われて初めて貴虎は、それに気が付いた。

夕張の怪我を気にかけるあまり、自分の事がすっかり頭から抜け落  
ちていた。今のところ全く体調に異常は見られなかったが、万が一と  
いう事も十分にあり得る。

「そうだな。私も検査を受けておくとしよう」

貴虎が苦笑交じりに口にした。

その時、彼らの頭上からガサガサと音がした。

何事かと二人が上を見上げると、枝葉のカーテンを突き破って、羽の生えたインベスが襲い掛かってきた。

「逃げるー！」

貴虎が咄嗟に龍田と男を突き飛ばす。

「キャッー！」

龍田はよろめいて倒れそうになるところを、怪我人の男を支えながらもどうにか踏みとどまった。

「貴虎さん!？」

顔を上げた龍田の視界には、片腕を掴まれ上空へと連れ去られてゆく貴虎の姿が。

「このっー！」

もう片方の拳を振り上げて抵抗を試みる貴虎。だが、もう一体の飛行型インベスが飛来し、その腕を掴みとり動きを封じたのだった。

(迂闊だった。空への警戒を怠るとは!)

貴虎の身体は森を抜け、更に上空へと運ばれていった。

横須賀提督らの待つ場所へと夕張は調査員を連れ帰った。

非常事態発生の報を受けて調査中断の指示が出され、各所に散らばっていた調査員らが集まっていた。

彼らは横須賀提督の指示の元、いつでも撤退ができるよう準備を進めていた。

「夕張さん、状況は？」

「インベス二体が調査員を襲っていました。現在貴虎と龍田が交戦中です。赤城さん、私は救助に戻ります」

「わかりました。よろしくお願いします」

踵を返し、森へ向け走り出そうとした夕張。その眼に森から上空へ向けて飛び出してきたモノが映った。羽の生えた二体のインベスと、それに捉えられた白い軍服の男。

「貴虎!？」

驚愕しつつも夕張は、咄嗟に装備した砲を向ける。しかし



(ダメ！迂闊に撃てば貴虎を巻き添えにしてしまう！)

夕張は歯噛みする。

「ここは私が！」

「赤城さん!？」

夕張の横に進み出た赤城が矢を番え、弓を引き絞る。

(ですが、出来るのは牽制程度。無暗に怪物を打ち落とせば貴虎さんも下へ……。ならば上空からプレッシャーをかけて高度を下げさせれば、あるいは)

思案する赤城。と、その様子に気が付いた貴虎の顔が赤城らの方へと向く。

彼は頷くと、何やら叫んだ様子だった。

(や、れ?……何か考えがあるのですね?)

それを受けて赤城は上空へ向けて矢を放った。放たれた矢は三機の零式艦戦52型へと姿を変え、空中の敵へと一直線に向かっていった。

まずは牽制として、先頭に行く一機がインベスの進行方向へと威嚇射撃を行った。

それに驚いたインベスは、飛行速度をわずかに緩めた。そして方向を転換しようとした所へ別の一機が威嚇射撃。これにてインベスらは一瞬ではあるが、空中の一点に留め置かれる事となった。

そこへすかさずもう一機が機銃を斉射。

狙いすまされた攻撃は、一体のインベスの羽を背中ごと撃ち抜き、ボロ布のように変えてしまう。

強烈な攻撃を受けたインベスは、痛み思わず手を離し、ボロボロの羽を動かしながら地上へと真つ逆さまに落ちていった。

そして岩礁へと激突。程なくしてその身は消滅したのだった。

残るインベスは艦載機の包囲網から逃れようと、思い切つて速度を上げ、前方へと舵をとった。

だが、一体のインベスが消えた事により片手の自由を取り戻した貴虎が、右手を掴むインベスの手を掴み返し、勢いをつけて腕と腹筋の力で逆上がりのようにその身を上方へと捻り上げた。

そして脚を大きく伸ばし、ドロップキックの要領でインベスの顔面を蹴り上げた。

インベスは思わず両手で蹴られた顔を覆う。

かくして、インベスの手から離れた貴虎は、脚からそのまま岩礁地帯へ落下、否。暫し飛行をして位置がずれたせいかな、海上への落下軌道をとっていた。

(目論見が外れた。しかし生身で落ちるよりは！)

懐からロックシードを取り出し、貴虎は再度ベルトへと装填すると「変身！」

斬月へと姿を変えたのであった。

アーマーを纏った状態であれば、上空から水面へと落下しても大怪我を負う事は無い。

やがて落下する斬月は海上へと到達。足に衝撃が走り、そのまま水底へと沈んで行く。

かに思われたのだが……

「……どうしたのだ？」

彼の体は沈まない。足の裏には大地をしつかりと踏みしめて立つのと同じ感覚があった。

(これは、上手い具合に浅瀬に落ちたか)

と、上空から羽音が聞こえてくる。

見上げると、飛行型インベスが斬月へと急降下攻撃を仕掛けてきているのが目に映る。

手を伸ばして、鋭い爪で降下の勢いそのままに、斬月を貫かんとするインベスであったが、その背後に追従する濃緑色の機体が。

赤城の零式艦戦52型三機が機銃を一斉射。先に落下したインベスと同様に、その羽を蜂の巣とされる。

羽を撃ち抜かれたインベスは伸ばした腕をジタバタと動かし、斬月の元へと落下してゆく。

「はあっ！」

落下するインベスに向けて繰り出された斬撃が、その身体を縦一文字に切り裂いた。

両断されたインベスは、そのまま斬月の両脇をすり抜けて、海底へと真つ逆さまに沈んで行った。

「……………ふう」

斬月は振り上げた刀を下ろし、一呼吸をした。

「貴虎！」

彼の後方より呼びかけと共に近づく者が、斬月が振り返ると、海上を夕張が航行してきていた。

「夕張」

「大丈夫、なの？」

「ああ。怪我などは負っていない」

訝しむ夕張の表情に対し、斬月が答える。

「ううん……………そうじゃなくって……………」

戸惑いの表情を浮かべた夕張が、斬月の足元を指さした。

彼女の示した方へと視線を下ろす斬月。彼の足下にはユラユラと揺れる水面があった。その数メートル下を小魚の群れがスイスイと泳いでいた。

まぎれもなく斬月の身体は、水面を踏みしめるようにして海上に立っていたのだった。

「……………何、だど？」

【第十二話】 part 1

快晴の空の下、褐色の肌の少年少女が二人、澄み切った青い海の傍の砂浜を駆けていた。

無邪気に笑い声を上げて走り回る少女を追いかける少年は、ふと立ち止まって水平線の彼方へと目を向ける。

陽光を反射して蒼く煌めく海は穏やかだった。何日か前までは沖合の海水が赤黒く淀み、そこで黒い怪物たちが泳ぎ回っていたというのが信じられないくらいに。

その黒い怪物たちは島の傍にまで寄って来るようなことは無かったが、遠くで怪物の撃った大砲の弾が飛んできて、島の高台の一箇所に大穴を空けたことがある。

好奇心からその場所を友人らと共に一度見に行こうとしたことがあるが、少年は大人たちにそれを見つかり、途中で連れ戻されてこっぴどく叱られてしまった。

——危ないから絶対に近づくな。そして無闇に海にも行くんじゃない——と

しかし今、少年は心おきなく妹と共に海辺を走り回っている。

村の大人達の許しが出たからだ。

——怪物はもういなくなった。海を走る女の人たちが追っ払ってくれたからな——と父は言っていた。

少年には何の事かよくわからなかったが、おかげで父や島の間人は漁へと出られるようになったらしい。村はその為の準備で賑わっていた。

少年は、もうすぐ大人達と一緒に漁に出られる歳になる。

憧れの仕事をようやく手伝わせて貰える。大人への第一歩を踏み出せる。胸躍らす少年は、大海に思いを馳せていた。

ふと周りを見ると、近くを走り回っていた妹の姿が見えなくなっていった。

少年は妹の名前を呼ぶ。何度も呼びかけつつ歩いていると、返事が聞こえてきた。

その方へ目を向けると、海辺の洞窟から妹がひよつこりと顔を出していた。楽しそうに満面の笑みを浮かべて手招きをしている。

妹の姿を見つけて安堵した少年は、その方へと駆け寄っていく。そこは海と繋がっている洞窟で、中央に海水が運河のように流れ込んでおり、その幅は大型の船が入り込めるぐらいの大きさで、高さも大木がすっぽりと収まってしまふのではと思える程だった。

この洞窟には子供だけで近づいてはいけなと言われていたが、自由を得たばかりの心の高ぶりを少年少女は抑える事などできなかった。

探検と称して二人は洞窟へと足を踏み入れていった。

穏やかな風が吹き込み、洞窟内には潮の香りが満ちていた。壁の岩や足元は湿り気を帯びており、少年らは足を滑らさないように慎重に歩を進めていった。

奥に行くにつれて周囲は薄暗くなっていくが、多少夜目のきく彼らは臆する事無く先を目指す。

やがて洞窟の中央を流れる大きな水路は三又に分かれる。その先で大口を開けるかのように開く三つの穴。左、中央の二箇所は全く先を見通せない程に暗闇が広がっているが、残る一方の先からは僅かながらに光が漏れていた。

都合のいい事に少年らの進んでいる道がそこへと続いていた。対岸の道を進んでいけば引き返さざるを得なかっただろう。探検が続けられることを無邪気に喜んだ彼らは、微かな明かりを頼りに薄暗い洞窟の中を進んでいった。

暗い洞窟を抜けた先に広がる光景に、二人は思わず魅了された。

辿り着いた先はドーム状に大きく開けた空間になっていて、天井に空いた大きな穴からは木漏れ日のように淡く光が差し込んでいた。

空間の中央には流れ込んだ海水が湖を形成しており、微かに煌めき反射する光が天井を照らし返す様は神秘的の一言に尽きた。その光景に少年は目を奪われ、暫し天井を見上げ続けていた。

その下に広がる異形の影に気付くことなく。

トタトタと駆ける小さな足音と、嬉しそうに誰かに呼びかける様な

妹の声に、ふと我に返った少年は視線を下ろした。

海水の湖の周りを囲むように、見た事のない珍しい形の実が生った緑色の植物が茂っていた。一面に広がっているそれは、壁にまで続いている。いや、それはむしろ壁際から生えて長く伸びているようであった。

少年はその眼に映ったモノに驚愕し、恐怖に身を強張らせた。

壁一面に黒い怪物たちの姿があった。

大型の魚のようなモノ、鉄塊から人の身体の一部が生えているようなモノ、人ほぼ変わらない形をしたようなモノ。脈動するように蠢くそれらには緑色の植物が絡みつくように生えており、それによって洞窟の壁に貼り付けられていた。

そんな光景の中、壁を見上げるように立ち、少年らに背を向けて佇む人影があった。

腰元の高さ程までに伸びた長く長い髪、透き通るような青白い肌、黒いマントのようなボロ布を羽織り、手には紫色の不思議な形の果実のような飾りがついた杖を手にした女性。

それを目にした少年の身に悪寒が走り、大きくその身を震わせる。両親に怒られた時、大人に怖い話を聞かされた時など比べ物にならない位の畏怖の感情が心に広がってゆく。

ただそこに佇むだけの存在。彼には一目でその存在が神々しくも恐ろしいものだと感じられた。アレには関わってはいけないと本能が訴えかける。

しかしながら人懐っこく幼い妹は何も理解していないのか、無邪気に笑いながらその女性のもとに駆け寄っていた。

それに気づいたのか謎の女性のようなモノは、ゆっくりと少女の方へと振り返った。表情を何一つ変化させることも無く。

——お姉ちゃん凄くキレイだね——そのように話しかける少女を青白い女は、無表情で黙って見下ろしていた。

いくら話しかけても一向に口を開かない女に対し、少女は小首を傾げてキョトンとした表情を浮かべた。両者の間に一瞬流れる沈黙。と、女がボソリと謎の言葉を呟いた。

「ジエガウフオンエエ、ダバリヤダバリヤレジヤフエンミヤルゴデイ  
ブリヨシヨジヨミデエジメジヨシヨジユジヨジャシャフアン」

そして、奇妙な意匠の杖が少女の目の前にかざされる。

女が念じると共に杖が輝きだした。それに呼応するように周囲から見る見るうちに植物の蔦が伸びだし、少女の身体を絡めとらんとする。

その様子をポカンとして見ていた少女の身体が、不意に突き飛ばされた。

彼女の兄が体当たりをしたのだった。彼は妹の身代わりとなり、蔦にその身を絡めとられ包みこまれてゆく。

——早く逃げろ！——そう叫ぶ兄の声を受けて起き上がった妹は、一瞬戸惑いと恐怖の表情を浮かべたものの、一目散に洞窟の外へと向けて走り出した。

涙を流し、大きな声を上げながら必死に走る少女。湿った岩に足を滑らせ、何度も転び傷を刻み、血をその身に滲ませて少女は洞窟を駆け抜けた。そして……

「……!?」

洞窟を抜けた少女の眼に飛び込んできたのは、赤黒く染まった海と暗雲立ちこめる空。

更には海上を埋め尽くすように広がっている黒い怪物達の姿が……

その光景を目にし恐怖に顔を歪ませた少女は、一層大きな声で泣き叫びながら村へと向けて走った。既にボロボロの身体に鞭を打つようにして。

——両親に知らせなくては、怪物が来たと、兄が捕まってしまった——と

少女の遙か後方から連続した爆音が轟いた。

それと共に飛んでくる怪物たちの放った攻撃が、大地を抉り、木々を薙ぎ倒し、土塊を巻き上げる。炎が至る所で燃え盛る。

なおも雨あられのように降り注ぐ砲撃の中を、少女はがむしやらに駆け抜ける。

そして村の目前まで辿り着いた少女の目に映ったのは、更に恐ろしい光景だった

虫のような羽をつけた、灰色の怪物の群れが村を襲っていた。

大人たちが、武器と呼ぶにはあまりにも粗末な、手近な生活用品を振りかざして応戦している。

しかしながら襲い来る怪物達には無力と言う他ない。数の暴力に圧倒され一人、また一人と村人達は倒れてゆく。老若男女の区別なく、産まれて間もない赤子ですらも……

その中に見知った人影を目にした少女は叫んだ

——お父さん！——と

次の瞬間、轟音と共に地面がはじけ飛び、少女の身体は木の葉のように宙へと舞い上げられた。

とある島の人々のありふれた日常、その営みは、ほんの数分足らずの間に無慈悲にも終わりを告げたのであった……………

「

！

」

ふと誰かから話しかけられたような気配を感じて、彼は周囲を見渡した。

しかしながら近くには、話しかけたと思わしき人物はいない。

《貴虎さん、どうかしましたか？》

「……………何でもない。準備は完了している、始めてくれ」

《了解。これより性能検証試験開始します》

無線を通して快活な女性の声が告げると同時に、砲声音が鳴り響いた。

斬月は水面を蹴って前方へと駆ける。彼の居た位置に砲弾が落ち、水柱が立ち上った。

スタートダッシュで勢いを付けた斬月は、足元から水しぶきを撒き上げつつ海上を高速で滑ってゆく。

その遙か前方に深海棲艦の編隊を模した標的が、単縦陣で斬月から



逃げるように航行している。

斬月は右腕を上げ、標的へと向ける。そこには主に朝潮型駆逐艦に配備されているタイプの連装砲が括り付けられていた。

敵の速度、自らの速度、放たれる弾の速度と軌道をイメージし、タイミングを計り発射。

放たれた砲弾は緩い放物線を描いて飛翔し、編隊の一メートル程横の位置に着弾。斬月は即座に腕の角度を修正、続けざまに第二射を放つ。

それは最後尾の標的に直撃。砕けた破片が宙を舞う。

次の瞬間、編隊は左方に三隻、右方に二隻と分かれ逃走を図る。

それを見てとった斬月は、右方向へ逃げた編隊の方へと身体を向ける。

と同時に彼の右足の脛の付近に括り付けられた、吹雪型駆逐艦に多く配備されているのと同型の魚雷発射装置が起動。発射された三本の魚雷が標的へ向け突き進む。

そしてそれは先頭を行く的に斜め後方より着弾。後続の的も巻き込みつつ爆散する。

斬月は視界の端でそれを捉えつつ方向転換。全速力で残るターゲットを追走。

そんな彼へ向けて、標的に括り付けられている砲塔より模擬弾の雨が降り注ぐ。

巧みに之字運動でそれらを回避しつつ、斬月は腕の連装砲を発射。砲弾は的の的の間に着弾。撃破はならない。

しかし、即座に射角を修正した続けざまの一発が標的の一つに命中。半壊させたことにより中破の判定を得る。

斬月は、ふと視線を海面へと向ける。すると幾本かの物体が彼の進行方向を目掛けて進んでいるのが見てとれた。的から発射された模擬魚雷だ。それを見てとると、彼は左腕に装備した盾「メロンディフエンダー」を投擲。

ブーメランのように高速回転するそれは、一瞬水面下に沈むと斬月の航路へと迫りくる魚雷群を両断。そして再び海上に浮上して、最後

尾の的から先頭的的までを一気に切り裂いたのだった。

《お疲れさまでした貴虎さん！全ターゲット撃破完了です！今回の武装の使い心地はどうでした？》

「悪くは無かった。しかし連装砲に関しては、前回使用した型式の方が取り回しが良い感じだな」

《そうですね。では次回はご希望に添える様な武装を揃えておきますね。この後はバイタルチェックがありますので、入渠ドックの検査室へ向かって下さい》

「了解だ、明石」

通信に応えた斬月は、海上に設けられた巨大演習場から栈橋へと上がり、変身を解除した。貴虎は演習後の若干汗ばんだ肌に受けるそよ風の心地良さを感じつつ、明石に指定された場所へ向け歩を進めたのだった。

「ふう、何度見ても凄い戦闘力と順応性ね」

呟いた女性は通信用のヘッドセットを外し、机の上に置く。

その女性は顔の脇で短く結ったピンク色の髪が印象的で、体にはセーラー服のような制服を纏っていた。

「明石、お疲れ様。飲み物持ってきたよ」

「ありがとう夕張」

通信室へとやってきた夕張から水の入った水筒を受け取る明石。

彼女は工作艦の艦娘であり、今はここ横須賀鎮守府にて兵装開発及びそれらの改良の任に着いている。

「それでどう？貴虎の鎧の性能は」

「どうもこうも、一言で言うならチートよチート級。航空母艦用の艦載機や一部の特殊兵装を除いて殆ど全部が運用可能。主機無しで海上を航行する上に、その速度もずば抜けてる。限界まで身軽にすれば島風並に速くなるわよアレ」

「そんなに!?!」

「元々はアレって貴虎さんの居た世界で、インベスとかいう怪物と戦うために作られた物なんでしょ?」

「ええ。私も貴虎から大体の事は聞いたんだけど、装備は陸戦用で水上での運用なんかは想定されてなかったらしいわよ」

「はあ〜。謎だらけね。まっ、それだけに調べ甲斐もあるんだけどさ」

無人島での戦闘時、艦娘のように海上戦闘を行った斬月。

それは艦娘をはじめとしたこの世界の人物のみならず、貴虎本人にとっても衝撃的な出来事だった。

しかしながら、そのような事態に直面しつつも貴虎及び提督らの決断は早かった。

使える物は使う。出来る事はやる。それだけだった。

斬月は本格的にインベスの対策、及びヘルヘイムから何らかの影響を受けたと思われる、深海棲艦の搜索作戦に組み込まれる運びとなった。

その為には性能を十分に把握する必要があるという事で、数日前から横須賀鎮守府にて斬月の海上戦闘能力の調査、艦娘用装備を組み合わせた運用方法を模索しているのである。

「ところで、今日の兵装はどういう組み合わせだったの？」

「右腕にコニシエンタープライズ製の駆逐艦用連装砲A型、両足に芝製作所の三連装魚雷発射装置F型よ。あの魚雷発射装置は本来太ももに括り付けるものだけど、彼の体格は艦娘よりも大きいからね、膝下に取り付けたわ。稼働に問題は無し」

「左手の装備は？」

「そこは元々デカイ盾があるからね。防御だけじゃなくて攻撃にも使えるみたいだから下手にいじるのは止めたわ。今日の連装砲はイマイチ相性が良くなさそうだったから、今度は藤川重工の駆逐艦用連装砲を試してみるわ。それならベルト脇にジョイントを付けておけば、不要な時にぶら下げて手を自由に使えるようにできるしね」

「夕雲型が使ってるやつよね？両手を自由に使えるようにするんだったら、いつそのことアヤキエレクトロニクスの自律可動式兵装を付けてみたら？叢雲とかが頭に付けてるアレみたいな。砲塔タイプのもあるでしょ？それを使えばもつと自由に戦えそうじゃない？」

「ダメよ。AEの兵装は独自性が強いから使いまわしが難しいの知ってるでしょ？一から艦に合わせて設計しないといけないし、下手にカスタマイズしようとするばバランスガタガタになるわ。第一そんなことしてる時間も生産ラインのキャパも無いわよ」

「やっぱダメか。あの剣と盾を最大限に活かすには、一番良い案だと思っただけだなあ」

先程から彼女らが口にしてる社名は、いずれも艦娘の兵装を開発している企業の名である。

イギリスの企業と提携し、民間でいち早く艦娘用兵装の開発に乗り出した業界最大手のコシエンタープライズ。

造船業で培った技術による堅実な造りで駆逐艦から空母、潜水艦と幅広い艦種の兵装開発を手掛ける業界二番手の芝製作所。

駆逐艦に加え、多数の後方支援タイプの艦装の開発に定評のある藤川重工。

などなど艦娘の兵装開発には多数の民間企業が携わっている。

元々は既存兵器に異世界の人間の技術、妖精信仰者の退魔術などを掛け合わせ、国営の研究所などで開発が行われていたのだが、戦線の拡大に従って生産は追い付かなくなった。その為民間企業にも兵器開発の委託を開始。そして現在に至っている。

その門戸は広く開かれており、イタリア系外資企業ジジニック社を始めとした海外の

兵器開発社も軒を連ねるようになってきた。

しかしながらそんな数多の企業が開発を手掛けているにもかかわらず、兵装の互換性は可能な限り保たれていた。

弾薬や燃料は共通規格の物が採用され、各種兵装は最低限の手間で他艦にも換装可能となっている。

とはいえ何事にも例外は存在するもので、一部艦装に関してはオーダーメイドレベルで構造が細かく作りこまれており、流用が難しいものも存在した。

「それならさ。この組み合わせは？」

「どれどれ？」

新たな兵器を前に技術者魂に火が付いた二人の艦娘。凶面を覗き込む彼女らの議論は白熱してゆくばかりであった。

数刻後、横須賀鎮守府正門付近

鎮守府を囲う石垣の傍を、外出帰りの加賀が歩いていた。

出先から戻ってきた彼女の表情は、相も変わらず乏しい。

だが、今の彼女はすこぶる機嫌の良い状態だった。

(以前から気になっていたあの甘味処、なかなか良いお店でした。間宮さんのお店とはまた違った趣と品々で。今度は赤城さんとも是非御一緒したいものです)

そのように心の中で呟きつつ、彼女は正門を抜け鎮守府へと足を踏み入れようとする。

正門脇に立つ守衛の男が横目で加賀を一瞥し、何事も無かったように正面へと視線を戻した。

と、車のエンジン音らしきものが周囲に響き渡る。

何事かと振り返った加賀の目の前で、一台の車がゆっくりと停車した。

車の助手席から白い軍服を纏った軍人の男が降りてきた。そして無駄のない速やかな動きで移動し、後部座席のドアを開く。

一拍の間を置いて車から降りてきた人物の姿を目にした加賀は、普段よりも微かに大きく目を見開いた。

同じく来訪者の姿を目にした守衛の男は、狼狽した様子で身体を強張らせつつ大袈裟なまでの動作で敬礼をしたのであった。

検査室にてバイタルチェックを終えた貴虎は、部屋を後にする。

戦闘後の肉体の検査結果は異常なし。自分の抱く感覚においても、以前アーマードライダーとして戦っていた時と何ら変わりなく動いていると思えた。

また、ヘルヘイムの植物による肉体の浸食が起きていないかの検査も行っていた。

先日の龍田の提案を受けて即座に行った検査では異常が見られず、日を置いて今しがた詳細に再検査をしたのだが、これもまた異常は見られなかった。

無人島にてインベスに負傷させられた調査員の検査結果も同様であった。

と、廊下を進む貴虎に声がかけられる。

「おう、貴虎じゃねえか」

後ろを振り返った貴虎の目に映ったのは、眼帯がトレードマークの艦娘の姿。

「天龍か。お前も横須賀まで検査に来てたのか？」

「違げえよ。コイツを受け取りに来たんだよ」

得意気な表情で天龍は、手にしていた得物に取り付けられていたカバーを外す。

「へへっ、どうよ？」

「刀か。そういえば先日の戦いで損傷していたのだったな。その具合から見るに新品か？」

「そうだけ。けどただ新しくなっただけじゃねえ。この前みたいな戦いがまたあっても、簡単にはぶっ壊れねえように丈夫になってるんだぜ。切れ味だって増し増しだ！」

天龍はここが室内、しかも人の行きかう廊下だということも忘れて刀を構えてみせる。無意識に荒れているであろう鼻息と、口元を緩めた表情からは彼女がいち早く戦場へ出たいと思っている様子が窺える。

まるで新しい玩具をプレゼントしてもらった子供のように無邪気な天龍の様子に、貴虎はフツと笑みをこぼす。

「それは頼もしい限りだな」

「へっ！見てろよ、今度あの仮面ヤロウどもが出てきたら真っ二つにしてやるぜ！」

意気込んだ天龍はその場で素振りをはじめた。

と、そんな彼女を見ていた貴虎は、ふと視線を上げる。

すると、十数メートル先の廊下の曲がり角から出て来る人影が目に入った。

「あれは、正規空母の加賀？」

「えっ？」

貴虎の呟きに天龍は振り返り、同様の方を向く。

すると二人に気付いた加賀と目が合った。彼女は一瞬面食らったような表情を僅かに浮かべ、即座に天龍を睨みつけた。

殺気すら孕んでいるように思われる鋭い視線に、身震いする天龍。

そして加賀は瞬きを数度した後、視線を斜め下に向ける。

何事かと一瞬訝しんだ天龍であったが、加賀の後ろから続けて見えて来た、白い人影を認めると

「ヤベっ！」

狼狽しながら乱雑に刀へとカバーをかけ、壁際の床の上に置くと、それを身で隠すように立って敬礼をしたのだった。

何事かと、加賀と天龍を見比べていた貴虎であったが

「ほら！お前も敬礼だ！敬礼！」

天龍に小声で急かされるがままに、同様に敬礼をした。

貴虎はそのままの姿勢で横目にて、加賀に案内されるように歩いて来る人物らの様子を窺う。

加賀の後ろを歩くのは、白い髭を口元と顎にたくわえた、禿頭の六十から七十程度の歳の頃と思われる軍人だった。

身に纏った軍服には、数多くの煌びやかな勲章が付けられている。

(階級は……大将、か)

その大将と思わしき人物の後には、部下と思わしき二人の軍人が続く。

貴虎らの前を通り過ぎる一行は、敬礼する二人を一瞥すらせず黙って進み続け、やがて廊下の更に奥へと姿を消していったのであった。

そして十秒ほどの時をおいて

「あービックリしたぜ。加賀さんが目配せしてくんなきゃエライ事

になった。処分や始末書は勘弁だ」

額の汗を袖で拭いながら、天龍がホッと胸をなで下ろす。

「あの老人は？階級章から察するに大将だと思っただが」

「海軍本部の鬼多川大将だよ。知らなかったのか？」

「そういえば……」

貴虎は提督になる為の学習をしていた際の記憶を探り出す。

日本国内のみならず、各地域の基地や泊地に所属する艦娘らは、横須賀鎮守府を総司令部とする組織——言うなれば「艦娘軍」であろうか——に属している。

しかしながらこの組織は正規の海軍ではなく、海軍本部旗下の特殊部隊という位置づけとなっているのだった。

深海棲艦という異形の敵を相手とし、兵員・兵器の運用方が通常の軍とは異なるという事情もあり、独自の判断、指揮系統が認められた独立性の高い部隊となっているのだ。

そんな部隊の上層に位置する、海軍本部の総司令官が鬼多川大将。かつて夷提督が着任する前の伊豆諸島の基地に配属されていた提督の直属の上官でもあった。

「名前だけは聞いた事があったな。実際に目にするのは初めてだ」

「なるほどね。にしても本部の大将が来るなんて聞いてねえぞ。直々に来る予定があったとなりやあ、訪問の知らせを聞いた基地全体がピリピリしてお出迎えの準備をしてるハズなのにな」

「……それだけの緊急事態があったというのだろうか」

貴虎の脳裏にインベスの姿がよぎる。

インベスとヘルヘイムの植物の出現を聞いた海軍本部が事態を憂慮し、対応に乗り出したという可能性はある。

であるならば、今後は海軍本部と協力し、ヘルヘイムの殲滅に全力を注ぐという作戦を展開していく事になるのであろうか。

鬼多川大将らの進んで行った方へと目を向けつつ、思案する貴虎であった。

だがしかし、そのように彼や鎮守府の面々にとって都合の良いように物事が運ぶ事にはならなかったのである。



【第十二話】 part 2

執務室の中には横須賀提督がペンを走らせる音と、書き上げられた紙が放られて宙を舞う音が、ひっきり無しに響いていた。

嬉々として書類と格闘する彼の表情は、見る者によつては「キモイ」と一言で切つて捨てられても仕方がない程にニヤついていた。

次々と床に散らばつてゆく書類を、赤城はしやがみながら拾い集めてゆく。

(まったく。毎度ながら、どうしてこの人はこうなのでしょう)

思いを口には出さない赤城であったが、時折大きく吐き出される溜息が、彼女の気持ちを雄弁に物語っていた。

横須賀提督が書いているのは、大規模作戦計画に関する書類だ。

インベス及びヘルヘイムの植物などの出現により、この世界には新たな危機が訪れた。彼は艦娘らを始めとする戦力を、その対策にも当てるべく事を決定した。

まるで植物に寄生されたかのような深海棲艦の遺骸、先日貴虎が交戦したインベスの変化態の様子から、ヘルヘイムと深海棲艦の間には何らかの繋がりがあると彼らは推測した。

であるならば、対深海棲艦のスペシャリストである艦娘らが、対応に当たるのは当然の事と言える。

幸いにも現在は、深海棲艦群に目立った活動は見られず、戦況は落ち着いていた。

その為、各鎮守府や基地などとの情報のやり取り、協力体制の構築は滞りなく進んでいった。

そして、各所に散らばる戦力をどう配属し、どう活用していくのか、その他諸々の内容を横須賀提督は凄まじい速度で立案し、書き連ねてゆく。

この世界においても、パソコンや通信ネットワークの類は発達・普及しており、大抵の書類はそれにより作成されるのが普通であるのだが、横須賀提督は

「手書きの方が通常の三倍以上の速さで捗るから良いのだよ」

という理由で書類を手書きで作っているのだった。付け加えると、パソコンで作業していると余計な事をついついしてしまうから、なのであるが。

しかしながら、手書きの書類をそのまま各所に回す事は流石に出来ないのも、まとめられたそれらは、タイピング専門の担当者に渡され、正式な書類データとして整えられるのだ。

だが散らばった書類を集めるのは一苦勞である。

赤城をはじめ、秘書艦の任についた者は口をそろえて「せめて放り投げるのはやめてほしい」と抗議していた。

言われると初めは横須賀提督もそれに従って業務を行うのだが、筆がのって勢いが出てくると、知らず知らずのうちに彼は今の執筆スタイルになってしまう。

その為誰もが最終的には諦めて、投げられたそばから書類を拾い集める作業を渋々行う事になるのだった。

出来上がるたびに書類を拾い集めておかないと、後で書類を順番に並べ直すという、気の遠くなるような作業が発生する。

だから秘書艦は、彼の書類業務の最中は付きつきりなる事が多いのだ。

「ふう……」

ペンを置き、横須賀提督は一息をつく。

手を首筋に当てて首を回し、肩を上下させて凝りをほぐす。

「赤城さん。ちよつと休憩しようか」

との言葉を受け、書類の束を手にした赤城が立ち上がる。

「わかりました。お茶、ご用意しますね」

湯気をたてる湯呑みから緑茶を一口すすって

「ほっ……」

小声混じりの息を横須賀提督は吐き出した。

「それで提督、今度の作戦はどのように展開するのでしょうか？」

「うん。今回は進攻や防衛じゃなくなって、索敵・搜索が主になるからね。ある程度の当たりを付けて、そこから重点的に調べていこうと考えてるよ。とりあえずは南方海域を中心にかな？」

「南方海域ですか。何か心当たりでもあるのですか？」

「妖精さんがね、囁くんだよ。そっちが怪しそうって」

「なるほど」

このふざけた様な回答を赤城はすんなりと受け入れた。

横須賀提督は深海棲艦に対抗できる力を、ある程度感知できる。

その亜種的な能力として深海棲艦の動向を、大まかにだが察知できる第六感のようなものも兼ね備えていた。

彼の直感が切欠となり、勝利を掴んだ作戦は幾多にもわたる。

ある時は、敵の本拠地とは関係が薄いと考えられていた輸送部隊――迂回して別艦隊を中継として物資を送っていた――を徹底的に殲滅。結果として、補給を受けられず弱体化した敵首魁の撃滅に成功する。

またある時は、複数存在する敵防衛基地に同時多発的に攻撃を仕掛け、警戒の薄くなった海域をショートカットのように突っ切らせ、本隊を強襲するといった作戦を成功させている。

これらの作戦をどのような考え付いたのか、という問いに対して横須賀提督は

「妖精さんが、僕の頭の中に声をかけて教えてくれるんですよ。それで何となく、どうすればいいのか分かるんです」

常にそのように答えていた。

その正気を疑うような発言を、誰もが初めは訝しんでいたが、やがてそれは当然の事実のように彼の周囲の人々には、受け入れられるようになっていったのである。

「いやあ、それにしても筆が進む進む。新たな敵と新たな戦力、どう活かしてどう戦わすかを考えると実にワクワクするねえ」

「提督、不謹慎ですよ。作戦が早く立案できるのは良い事ですけど」

「ごめんごめん。と、そういうえば貴虎さんの性能試験の結果つてもう出てますっ…」

「はい。こちらに」

赤城がクリップ止めされた紙束を手渡す。

「ふむふむ。……なるほど。……ふくん」

眺めつつ思わず声が出る横須賀提督。一通り読み終わると視線を書類から、机を挟んで向かいに立つ赤城へと向ける。

「凄いスペックの高さだねコレは。赤城さんはどう思った？」

「正直驚きです。先日の戦いを見た時もそうでしたが、ここまで艦娘の兵装と親和性のとれる兵器が存在するなんて、信じられませんか？」

「そうだねえ。今までずっと、誰でも使えるような汎用性の高い対深海棲艦用の装備を作ろうとしてきたけれど、失敗続きだったからね。結局艦娘の扱える兵装しか、僕ら人類は作れなかった」

「やはり、例の『仮面ライダー』という者の力が成し得るのでしょうか？」

「うーん。そうとも言えないと思うよ」

横須賀提督は、机の引き出しから取り出した書類を机の上に置く。

「これは？」

「貴虎さんの戦極ドライバーと夷提督のロストドライバーを測定にかけたんだ。結果は見ての通りさ」

書類には様々なチェック項目と数値が記されており、その末尾には評定が書かれていた。

ロストドライバーには『無』と。戦極ドライバーには『優』と。

「貴虎さんのベルトだけが、対深海棲艦に適した性能が見込まれる。しかも最上級クラスの評定だなんて」

「ゲームなんかで言ったら、キラキラの超レア装備って感じだねえ。僕も触ってみて実感したけれど、確かに貴虎さんのベルトからしか、妖精さんの力を感じなかったんだよね」

「何故なのでしょう。同じライダーの力のはずでしょうに」

「いや、同じとは言えないでしょ」

「どういうことですか？」

「彼らは異世界から来た人だけど、同郷ってわけじゃない。ベルトの仕組みや動力源だってバラバラさ。ロストドライバーはガイアメモリっていうステイックを、戦極ドライバーはロックシードっていうヘルヘイムの力の結晶のような物をキーとして作動する」

「つまり、ロックシードがこの結果の要因だという事ですか？」

「赤城さん鋭いねえ。まあ今は仮説に過ぎないんだけど」

横須賀提督は喉を潤すため、お茶を一口啜る。そして再度口を開く。

「あと考えられるのは、二つのベルトの出自の違いかな？」

「出自、ですか？」

「うん。夷提督のロストドライバーは、彼がこの世界に来た時に元々持ってた物。でも貴虎さんの戦極ドライバーは、黄金の果実とやらの力で、この世界にて生みだされた物」

「……この世界に持ち込まれた物と、ここで生み出された物。この世界の何らかの力の影響、例えば妖精さんの力。そうお考えなのですか？」

それを聞いた横須賀提督は、手をパンと叩いて上機嫌に言う。

「グッド！冴えてるね赤城さん！ただ、もしかしたらなんだけど」

彼がそう言いかけた時。

「提督、失礼します。加賀です。お客様をお連れ致しました」

執務室のドアがノックされ、その向こうから加賀の声が聞こえてきた。

「お客様？……誰だろう。まあいいや、入ってもらって」

加賀にそう促すと、横須賀提督はお茶に口をつける。そして……

「久しいな」

部屋に入ってきた老軍人の姿を目にし、口の中身を机の上に盛大に嘔き出した。

「き、鬼多川大将!?!」

思わず立ち上がって裏返り気味に声を上げる。

「お、お久しぶりです。大将閣下」

慌て気味の赤城が敬礼をする。

二人の様子に首を傾げる加賀。

「か、加賀さん、どうして連絡してくれなかったの!?!」

「お伝えしようと思ったのですが大将閣下が、それには及ばない連絡は済んでいる、と申されておりましたので……」

「こうでもしないと貴様に逃げられるかもしれんからな。この程度些

末な事だ。流せ」

嘘をついた事に対し、悪びれた様子もなく言う鬼多川大将。

加賀はその物言いに、不快感と嫌悪感を心に滲ませる。だが努めて冷静に振る舞い、それを表情に出す事はしなかった。

「嫌ですねえ、逃げたりなんてしませんよ」

「以前ワシが来た時に、倉庫に籠って文庫本を読みふけていたのは誰かね？」

「さあ？記憶にありません。僕は未来に生きる男ですので」

「口の減らんヤツだ」

と、鬼多川大将はサツと片手を上げて合図をする。

入り口付近に控えていた彼の部下が、敬礼をして部屋を出てドアを閉める。

執務室の中には四人だけとなった。

「そうだ、赤城さん。大将にお茶を入れて差し上げて。熱くて渋めなのが大将のお好みだから」

「いらぬ。ワシも暇ではないのでな。手短にすませる」

仕切り直すように咳ばらいをして、大将は話を始める。

「貴様の報告書には目を通させてもらった。インベスなる怪物とそれを生み出す果実、植物。それがこの世界にて繁殖、増殖の兆しありと。にわかには信じがたい話だな」

「でしたら、件の無人島に視察にいらっしやいますか？現物をお見せできますよ」

「その必要はない。コレが嘘だろうと誠だろうと、方針は既に決まっているのだからな」

懐から二通の封筒を取り出した鬼多川大将は、それらを横須賀提督の机の上に突き出す。

横須賀提督は、うち一つを開封し、入っていた書類を広げる。

内容を一読した横須賀提督は、眉間に皺を寄せて不快感をあらわにした。

何事かと横合いから覗き込む赤城と加賀もまた、その内容に表情を変えた。

「北方海域の防衛に、投入可能な最大の戦力をもって警戒部隊を編成、展開せよ!?!」

赤城が思わず声を大にする。

横須賀提督がもう一つの封筒を開き、中身を取り出す。

中に入っていたのは数枚の写真。そこには、流水の浮かぶ海に佇む黒い影の群れが写っていた。

深海棲艦の駆逐艦に始まり軽巡、重巡、空母、戦艦。更には鬼級、姫級と思わしき影までもが確認できる。

「よくできた合成写真ですね」

「ワシがわざわざ、そのような戯れをしに来たとても言いたいのかね?」

「北方海域での深海棲艦の目立った活動は、報告されていませんが?」  
「お前さんの事だから既に察知していると思ったが。お得意の得体のしれない能力、妖精の囁きを聞き取る、とやらは眉唾だったのか?」

その一言に眉をひそめる横須賀提督。

「まさか。僕のアンテナはバリバリに立っていますよ。それに、本当にそのような事態が起きているなら、僕の方に北方海域に展開する部隊から報告が上ってきているはずです」

「残念だがそれは無い」

「どうして言い切れるのです?」

「この写真は、北方海域を航行中の海軍本部の艦から撮られたものだ。無論、直ちに敵艦隊発見の報は本部へと飛ばされたが、君らの指揮下にある基地の方へは、通信を飛ばし忘れたとの事だ。気が動転した通信士のミスらしいが」

「……それは本当にミスなのでしょうか?」

「通信士本人、艦長共々そう言っておる。ならばそういう事なのだろうよ」

「そんなつ!新人兵士の訓練でもありえない事を!」

赤城が一步前に進み出る。

「何かね?海軍本部の者が、わざと貴様ら部隊の基地に報告をしなかった、とでも言いたいのかね?」

「海軍本部の中には、私達の事を快く思つてな——」

「赤城さんストップ」

食つて掛からんとばかりに動いた赤城を、横須賀提督が手で制する。

ハツとした表情を見せて我に返つた赤城は、歯噛みしつつ数歩後退した。

「ともあれだ、その報告を聞いたワシが直々に詫びも兼ねて、貴様らにこうして自ら情報を持つて参つたというわけだ。我が国の対深海棲艦の主力である貴様らが、このような事で動けなかつたとあれば一大事であるからな」

「はっはっは。恐悦至極に存じます」

横須賀提督は、大仰な動作で大将に向かつて礼をする。

とその時、執務室備え付けの電話が鳴りだした。

鬼多川大將は、目配せで横須賀提督に出るように促す。

横須賀提督は受話器を取り、少々言葉を交わして電話を切る。

「北方海域の警戒に当たつていた部隊からの報告があつたそうです。閣下の仰つた通りの状況になつていようですね、北の方は」

「ならば話は早い。直ちに北方海域へ戦力を集中したまえ」

「しかし今は、南方海域に存在するであろうヘルヘイムの脅威も、放つておくわけにはいかないのです。現在その為の作戦立案と、部隊の編成中でして」

「ならん。最優先は北方海域だ。これは政府の決定でもある」

横須賀提督の申し出を、鬼多川大將は突っぱねる。

「政府の？何故ですか？」

「先程の写真だがな、それを撮つたのは取材のために乗り込んでいた新聞記者なのだよ」

「新聞記者？」

「かの記者は抜け目なく、我々が対処するより先に本社へと情報と写真を送つていたそうさ。現在圧力をかけて記事の公開を差し止めさせているが、代わりに閣僚のスキャンダルを報じると言い出したそうだ。政府は何としてでもこれを阻止したいらしい」



「……………」

「この報告を聞き、横須賀提督だけでなく赤城、加賀もまた黙してしまっていた。」

「これが報じられれば内閣の不信任案提出、解散につながる恐れもある。加えて件の閣僚は、軍にとっても益になる働きをしている議員でな。我らにとっても他人事ではないのだよ。従って、明日には北方海域の深海棲艦に関する記事が公表される事となる。となれば、十分な戦力をそちらに差し向けないわけにはいなくなる。国民の不安を和らげる為にもな」

「……………下らないですね」

吐き捨てるように言う横須賀。

「拒否権は無いぞ。ヘタな事をすれば貴様の進退にも関わってくるだろう。志半ばで大切な部下達と別れたくはあるまい？ 貴様も軍人の端くれなら、危機的状況への対応策を間違えん事だ。不確実な情報よりも確実な情報を信じてな」

そう言うのと鬼多川大将は、話は終わりとばかりに踵を返し、部屋を出ようとする。

と、その時。

「おっと、失礼します」

横須賀提督は懐から携帯電話を取り出し、通話に応じる。

「はい横須賀です。……………はい。……………本当ですか?!……………ええ……………承知しました。情報提供感謝します。そちらも万一に備えて気をつけるように」

電話を切ると横須賀提督は「お待ち下さい」と鬼多川大将を呼び止める。

「南方の海域にてヘルヘイムとインベス発見、との報が入っております。やはり、こちらを放っておくわけには参りません」

その言葉を受けて大将は振り返る。

「ほう、搜索については現在作戦立案中ではなかったのか？」

「先んじて動いていた調査隊が発見しました」

「……………何とも奇妙なタイミングだな」

「ですが、これを無視するわけにはいかないのではないのですか？信じるに値する『確実な』情報が入ってきたのですから」

「ふむ……………」

と、鬼多川大将は顎髭を擦りながら思索する。そして暫しの後

「仕方あるまい。そちらに対しても、ある程度の戦力を割く事を許そう」

「ありがとうございますー！」

「ただし、そちらに新たな状況の変化が見られない場合、直ちに戦力を北方海域防衛に当てられるようにしておくのだ。期限は……二週間だ」

「了解しました。必ず新たな危機的状況の変化を確認してみせましよう」

「ふん。相変わらずのふざけた物言いだ。正式な命令書は追って送付しておく」

呆れた様子で鼻を鳴らすと、鬼多川大将は再度踵を返し部屋を後にした。

そして十数秒の後

「ふう〜。あ〜〜っ！疲れた。毎度何なんだよ〜あの爺さんは〜〜！」

横須賀提督は脱力して、机の上に体を投げ出すようにして突っ伏す。

「お疲れ様でした提督」

「お疲れ様。とにかく不愉快だったわ。何もかもね」

赤城と加賀が労いの言葉をかける。

「色々と厄介な事になりましたけど、ヘルヘイムへの対策が引き続き行えるのは良いことです。良いタイミングで連絡が来てなによりです」

「ああ、あれ？嘘」

「……………え？」

キョトンとした表情をする赤城。

「電話なんてかかって来てないよ。あれは全部僕の一人芝居」



後部座席に座る鬼多川大將は、窓の外を流れる風景を眺めながら呟いた。

「何といったか、夷とかいう者の前任で、船から海に落ちた指揮官くずれは？」

「不破大佐でありますか？」

傍らに座る部下の一人が答える。

「おお、そうだった。そうだった。大口を叩いて任に就いた割には、艦娘どもを御すことも出来ず、何の成果も上げられんときた。野心ばかり高く、柔軟性・適応性に乏しい奴だった。その点、横須賀の奴は本当に食えんな。加えて、旗下にいる夷という提督は優れた手腕を持っているらしいな。呉島という提督見習いも侮れなさそうだったわい」

そして窓の外には、輸送船が鎮守府から出港しようとする光景が見られた。

「そういうえば、降格して輸送隊に配属されたのであつたな。あの……桑とかいう奴は」

「お言葉ですが大將。不破です」

「おお、そうだそうだ」

自ら言っておきながら、既に関心無さげな様子で、大將はそう答えたのだった。

翌日

「——というわけで申し訳ありませんが、各方面からの横槍によりヘルヘイムの搜索及び、その対処に割ける人員は大幅に削減せざるを得なくなりました。搜索自体は禁止を免れたのが幸いです。限られた人員で、やれる事を最大限やりましょう」

横須賀提督の執務室に緊急招集された夷提督と貴虎は、鬼多川大將よりの通達、経緯を聞かされた。

「軍隊に限らず、組織で動く場合にはままある事だ。致し方ない。私も身に染みてわかっているのだが、改めて味わうと何ともやりきれな

い気分になる」

「これだから組織は面倒でならんな。探偵業の方が気ままに出来て良い」

「とは言いつつも、夷提督は立派に組織を率いられているじゃないですか。艦娘の皆さんにも好かれていますし」

「お前さん程じゃあないさ。そんな事より、そろそろ本題に移った方がいいんじゃないか？」

「そうですね。では」

軽く咳ばらいをして横須賀提督は、壁に掛けられた地図を指示棒で指しながら話しはじめた。

「北方で確認された深海棲艦群はAL諸島を抜け、ベーリング海にて流水に紛れるように集結しています。現在の所、南下したりどこかへ攻める様な兆候は見られません。何らかの陽動の可能性も検討しましたが、どこに攻め込むにしても中途半端に距離がある上に、流水が邪魔で動き辛く補給も容易くは受けられない。従ってその線は薄いと判断しました。本来なら、小規模な偵察部隊を近海に常駐させて様子を見るところです。しかし知っての通り、海軍本部の命令により大規模な部隊を展開し、警戒に当たる事となりました。部隊は幌筵以北に前線を引いて展開。有事に備える事になります」

一通りの説明を聞き、貴虎が口を開く。

「それで、私達はどう配置されるのだ」

「もちろん貴虎さんは、ヘルヘイムの搜索隊に組み込ませていただきます。隊の人員の選出は、夷提督の指揮下の艦娘から行っていただきます。身軽で小回りのきく娘が揃ってますし、何より気心が知れているのが良いでしょうしね」

「わかった。面子は俺の方で決めておこう」

「ありがとうございます。それと貴虎さん。本来なら数日は十分に訓練と演習を行ってから搜索に向かってもらうつもりだったのですが、実地・実戦で練度を上げて貰わなくてはいけません」

「私は構わない。むしろその方が、早く体をこの世界の戦場に馴染ませられるというものだ」

「それは頼もしい限りですね。よろしく願います」

「ヨコ、それでヘルヘイムの調査についてだが、何かしらの見当はついているのか?」

「ええ」

夷提督に言われた横須賀提督は、再度地図に指示棒を向け

「ズバリ! ヘルヘイムの手掛かりは南方にあるでしょう!」

太平洋の中心辺りを指し示した。

「あ、いま指した場所は適当です。詳しい場所はまだわかっていません」

「なぜ南方だと?」

「貴虎さん、以前お話しましたが、僕には妖精さんの力が感じ取れません。そして時にはお告げのように、フツと何かを伝えられたような感覚がするのです。まるで耳元で囁かれたようにね」

「そうか……」

それを聞いた貴虎は、昨日の性能評価試験が始まる直前の出来事を思い出す。何者かに話しかけられたような不思議な感覚を味わった事を。

そして横須賀提督が話し、示した南方という箇所。地図を見る貴虎の心が静かに波立つように揺れ動く。

「私も……南方を搜索するのに賛成だ。寧ろそこ以外にない。そのようにさえ感じられる」

「ほう、貴虎さんもですか。ちなみにその根拠を伺っても?」

「………勘だ、としか言いようがないな。あなたの話を聞いてそんな気がした。それだけだ」

それは勘というよりも、確信に極めて近い感覚に思える。しかしながら、心のどこかに引つかかる何か、貴虎がそれを断言するのを妨げた。

「なるほど、僕と近い感性をお持ちのようですね。では改めて貴虎さんには、南方海域で発生しているであろうヘルヘイムの脅威の搜索及び殲滅をお願いします」

「了解した。一刻も早く、それが成し遂げられるよう全力を尽くそう」

「当初考えていた戦力は集められませんが、南方海域に駐留していた部隊に協力を仰いでいます。彼女らと合流して作戦に当たって下さい」

「ああ」

「ヨコ、その戦力とやらを今見せて貰えるか？」

「はい。構いませんが」

横須賀提督から夷提督に書類が手渡される。暫しの間それを眺めてから夷提督は、口を開く。

「本当にこの戦力で対処しきれるのか？」

投げかけられた言葉を受け横須賀提督は、一瞬神妙な面持ちになるが、すぐに明るい表情を浮かべ

「不安が無いと言えば嘘になりますが、現状の手札で出来る最善手はこれしか無いかと」

そう答えた。

「ともあれやるしかありません。時は一刻を争います。こうしているうちにも、ヘルヘイムによる浸食は広がっているはず。この世界でも、私のいた世界と同じ悲劇を繰り返させるわけにはいきません」

貴虎が強く主張した。

「いや、手の足りない今の状態で無理に挑めば、どこかでムリが出て来るだろう。犠牲者も数多く出て来る」

「なら、どうすればいいとお思いですか？北方の問題を解決してから臨めとでも？」

横須賀提督の問いに夷提督はこう答えた。

「海軍本部のヤツらを動かして協力させる」

「本気で言ってるんですか？あの石頭連中が、意見を曲げるわけないでしょう」

若干の苛立ちを滲ませて、横須賀提督は言う。

対して夷提督は、感情を揺らすことなく平静に続ける。

「お前達は『妖精さんのお告げ』とやらを根拠に南方海域を優先すべき、と主張しているのだろうか？さつきも言った通り、それを否定する気は無い。現にヨコはそれを頼りに実績を積み重ねてきた。部下の

娘らもそれは十分に承知しているはずだ」

「まあ、そうですね」

「だが、他の組織の連中は違うだろう。いくら実績を上げても、懐疑的な目を向けたままだ。その上に今回は政治家、一般人までもが絡んできている。更には北方海域に深海連中がたむろしている現場も押さえられた。自分達には理解できない”勘のようなモノ”を根拠に主張するヤツと、明確な脅威の証を見せて主張するヤツ、普通なら人はどちらを信じる？」

夷提督の話聞いた二人は黙っていた。

「誰にでも理解できる”確信的な脅威”というカードを俺達は持つちやいない。ならどうすればいい？」

「……僕たちも同じカードを手にする必要がありますね」

「そうだ、ヨコ。ヘルヘイムが速やかに対処すべき脅威だという証拠を手に入れて、本部の奴らに突きつける。そうすれば重い腰をちよつとは上げてくれるだろうよ」

言われて横須賀提督は考え込む。

「完璧な人間などいない。それは人の集まりである組織も同じだろう。自分らの力だけで何でもしようとするよりも、上手く周りの協力を引き出した方が良い時もある。いけ好かない連中でもな」

それを聞いて横須賀提督は、やれやれと肩をすくめた。

「どうやら、頭が固かったのは僕のようにですね……本部の人らに抱く下らない思いに囚われる。我ながら愚かしい限りです」

そして貴虎は、心の引つ掛かりの正体を理解した。今までに感じたことの無い、予感めいたものに気にとられるばかりで冷静に状況を分析できていなかった。堂々と確信の理由が言えなかったのもその為だ。

「私も焦り過ぎていたようです。ヘルヘイムを少しでも早く排除しようとして、気ばかり前に出てしまっていた」

「無理もない。お前が一番ヘルヘイムの脅威を、身に染みてわかっているんだからな」

「よしーでは、話を整理しましょうー」



パンと手を叩いた横須賀提督は、人差し指を突き立てる。

「二つ、南方海域の搜索を最優先で行い、ヘルヘイムの脅威の証拠を集める。二つ、それを突きつけて本部と交渉。自由に動かせる部隊の数を増やす。三つ、再編した部隊でヘルヘイム殲滅作戦を実行する！」  
それを聞いた貴虎と夷提督は、口元に軽く笑みを浮かべて頷いた。

「ありがとうございます！夷提督！」

横須賀提督が深々と頭を下げる。

「大した事じゃないさ。しかし……」

「しかし、何ですか？」

貴虎が、含みのある様な口ぶりの夷提督を訝しむ。

「ふむ、一つ言わせてもらおうなら。北方に深海棲艦が集まりだしたのと、南方で起きているらしい異変。その二つが無関係ではないような気がしてな」

「それは何故？」

「言ってしまうえば……勘だ。それこそ根拠も何も無いがな。戯言と思つて忘れてもらつて構わんさ」

そう言つて苦笑する夷提督。

「さて、次に我々がすべきことですが。大きな問題が一つ」

横須賀提督が、再度地図の方に目を向ける。それに伴つて貴虎と夷提督も地図の方を向く。

「初めにどこへ搜索の手を伸ばすか。です」

横須賀提督が、地図上の南太平洋の辺りを棒で指して、ぐるりと大きく円を描くように回した。

南方と一口に言つても、当然ながらその範囲は広大だ。

フィリピン近海か、オーストラリア付近か、グアムか、はたまたインド洋方面にまで赴かなくてはならないのか。

一同が考え込んでいたその時。

「おっと、お取込み中だったかねえ」

部屋の隅から前触れなく男の声が出た。

夷提督と横須賀提督は、何事かと警戒心を露わにして声のした方へと振り向く。

そこには、額にゴーグルとバンダナをつけたラフな格好の中年男性の姿があった。

「サガラか」

「おう、しばらくだな」

二人が警戒する一方で、聞き馴染みのある声の主と貴虎は、軽く挨拶を交わしたのだった。

「お前さんに渡した果実の気配を辿って来てみたんだが、こないだとは違う場所のようだな」

「横須賀鎮守府という施設だ。この世界のな。それはそうと、いい所に来てくれた」

そうして貴虎は、サガラを両提督に紹介する。

一同は軽く自己紹介を交わし、サガラが一度去って以降この世界で起きた出来事と、置かれている現状について情報を共有したのだった。

「なるほどね。これはまた面倒な事になってるねえ。とはいえ、俺のプレゼントが役立つたようだなによりだ」

「だが問題は山積みだ。解決の糸口は掴み切れていない」

「そうだな。事態は確実に悪化しているらしい。おかげ様で俺は、こういう状態になってはいるんだがな」

サガラの姿は、数日前に貴虎と会った時のモノトーンの姿とは異なり、色合いがハッキリして像の乱れも殆ど起きなくなっていた。

「それは浸食が進んでいるという事を意味するのか？」

「ああ、以前よりも植物の気配が強く感じられるようになってる。俺にかかってくる負荷のような感覚も和らいでいる。だが、靄がかかったような感覚は相変わらずだ。この世界のヘルヘイムの植物を全て感知できる程じゃあなし、干渉して操る事も出来ない」

降参でもするかのように、肩をすくめて見せるサガラ。

「サガラさん。少しいいでしょうか？」

「おう、何だい。えくと、横須賀の提督さん」

「大雑把でも全く構いません。あなたが特に強く感じられる植物の気配。それがあある所を示しては貰えないでしょうか？ 搜索の手掛かり

になる情報が一つでも欲しいのですよ」

「お安い御用だ。どれどれ、ちよつと待っててくれよ」

サガラは目を閉じて右手を水平にかざし、左右に動かしていく。やがてその振れ幅は徐々に小さくなってゆき、僅か数センチの間を歩き来する程度に動きは細かくなった。

「ちよつと分かりにくいかもしれないが、この位の範囲、その先にとりわけ強い気配が感じられるな」

「サガラさん、もう少しそのままで」

横須賀提督が机から方位磁石と小型の測量器具を取り出し、サガラの示した方角を更に細かく絞り込む。

そして、その結果を壁の地図に記載してゆく。

長く引かれた線は、横須賀を起点として、南南東から東南東方面に八の字型に伸びていた。

線の両端は、それぞれパプアニューギニアの北に位置する海域と、北太平洋にある群島付近を貫いていた。

「これは……」

「なるほどな。ここならあり得るかもしれない」

横須賀提督と夷提督が、合点がいったと言わんばかりに頷いた。

「その場所に何か心当たりが？」

貴虎の問いに横須賀提督が答えた。

「この線の片方が指し示すのはトラック泊地近海。以前大規模作戦が発令された際に、激戦区となった海域です。そしてもう一方はハワイ諸島。『始まりの場所』とも呼ばれる、深海棲艦の本拠地と推測されている海域です」

荒れ狂う闇夜の海原を駆ける少女のようなモノ。

それは狙いを付けた獲物を執拗に追いかける。

轟音と共に放たれた砲弾が、逃げる輸送艦の両脇・後方へと着弾し、洋上に激しく水飛沫を撒き散らす。

その様を見て舌なめずりをした少女は、立て続けに弾を四連射。放物線を描いて輸送艦の頭上を飛び越え進路前方に着水したそれは、行く手を阻むかのように水のカーテンを一瞬にして作りだす。

程なくして崩れた水のカーテンは、輸送艦の上に一気に覆いかぶさり、その船体を満遍なく海水にまみれさせる。

その光景を目にした少女は、海上を駆けながら腹を抱えて大笑いする。

楽しい！楽しい！タノシイ！

自分のカラダを弄ってメチャクチャ、グチャグチャにしたアイツは気に入らない。あの時は最悪な気分だった。目は回り、体内からよくわからない何か零れ出て、痛みと熱さと冷たさと重さどが混ざったような不快感に襲われた。

でも今は最高だ！体は軽く、みなぎる力はスゴク気に入っている。

逃げ惑い、怯える様な姿を晒す艦を見るのはタマラナイ。

アイツに何かやるように、あつめるようにと言われたけども、そんなのはどうでもイイ。知るものか知るものカ！今はアレを潰すのがオモシロイ！アイツの言った事は気が向いたらやればイイ。

あの獲物は全部自分のモノだ。楽しいオモチャで遊ぶのは自分だけ、他のダレにも譲らない！

そう思考しながら少女のようなモノは、自分の後に続く黒い影の群れを大きく引き離し、一人で輸送艦群を追いかける。

やがて少女はニタリと口元を歪め、天を仰ぐように咆哮する。

と、彼女の眼前に禍々しい形状の魚雷が幾本も出現。そして着水。前方に大きく突き出された両腕の動きに呼応するように、魚雷群は

スピードを上げて突き進む。

魚雷の一本が輸送艦の右脇を、続くもう一本が左脇を掠めてゆく。そして次の一本は船体の後方に命中。

立て続けに残りの魚雷も同様に、全弾吸い込まれるように同じ箇所へ。

水柱と灼熱の火柱が闇の海上に立ち昇る。

燃え盛りながら沈んでゆく獲物を眺める少女の顔には、恍惚の表情が浮かんでいた。

悦に浸った少女は、噛みしめるように一呼吸した後に、残る獲物も追い詰めんと、船速を更に上げてゆく。

少女の遊戯は、まだ始まったばかり。

「は〜〜いっ！みんなグラスは持ったかな？」

演壇の脇でマイクを手にした那珂が、アイドルスマイルを浮かべ、明るく良く通る声で宴会場内にいる面々に呼びかける。

夷提督をはじめ、部下の艦娘らがグラスを手に立ち上がる。

そして演壇上に立つ六人もまた、配られたグラスを手にする。

「うん！準備オーケーだね！それではっ！貴虎さん、夕張ちゃん、天龍ちゃん、龍田ちゃん、神通お姉ちゃん、叢雲ちゃん。六人の南方での活躍と健闘を祈って〜〜っ！かんぱ〜〜い！」

「乾杯！」

程なくして宴会場には、皆の談笑する声が響き始めたのであった。

サガラ感知により、トラック諸島からハワイ周辺に搜索範囲は絞り込まれた。

その後、急ピッチで作戦計画の変更と出撃メンバーの選出・編成が二日足らずで行われた。

これに伴って、南方へ出撃するメンバーの壮行会も企画された。

鳳翔は一際腕によりをかけて料理を作り、幹事に任命された陽炎が

他の駆逐艦娘らを率いて諸々の準備に駆けずり回り、MCの那珂はここぞとばかりに張り切って、司会どころか歌とダンスの練習まで行い、川内は夜通しの準備作業を嬉々として行うなど、基地は終始明るい空気に包まれていた。

そしてその雰囲気そのままに、万歳三唱からの三本締めで壮行会はお開きとなったのであった。

季節は未だ夏。しかしながら日中こそ汗ばむ陽気であるものの、夜になれば暑さは大分和らいでくる。都会から離れた自然豊かな島であれば、夜風に吹かれながらの散歩は快適にできる。

基地の敷地内を酔い覚ましがてら歩いていた夕張は、ふと星空を見上げる。

アルコールで火照った顔にそよぐ夜風は、何とも言えず心地良い。風に乗って運ばれる、土や草木の香りとは暫くお別れだ。

明日のこの時間、既に自分達は艦娘待機船にて南方へと向かっている頃合いだろう。

行く先で感じる風や、見える星々はどんなものなのだろうか。

そんな事を夕張は思う。

艦娘待機船、それは艦娘らが長期にわたる遠征任務などをする際に、拠点となる軍艦である。

一通りの生活設備に食料・物資が大量に積み込める倉庫、大規模な整備ドックなどが搭載されている、いわば母艦となる存在だ。

それは通常の軍艦に比べて、対深海棲艦用に特化した索敵・防衛装備を多数搭載しており、艦娘に頼らなくとも多少の自衛程度ならこなす事が可能である。

ただし、生産・運用にかかるコストが他の艦よりもはるかに高く、まだ試作段階でもあるために、その配備数は極めて限られていた。

今回の任務においては、北方海域に配備される艦よりも機能の優れた艦が、優先的に配備される事となっていた。少数の人員で任務にあ

たる彼女らへの、横須賀提督のせめてもの気遣いであった。

「大丈夫なのかな、私で……」

ポツリと独り言ちた夕張は、瞳を閉じて軽く深呼吸をする。

と、その時。背後からガサツと草の擦れる音がした。

思わず肩をビクリと震わせた夕張は、サツと後ろを振り返る。

「驚かせてしまったか？ すまないな」

「貴虎？」

白い軍服姿の貴虎がやってきていた。

「お前がこちらに向かつて歩いていくのが見えたのでな。少し気になつて様子を見に来たのだが」

「ちよつと散歩をしてただけよ。心配させちゃったみたいね、ごめんなさい」

「そうか。なら良いのだが」

「貴虎も良かったらどう？ 夜風が気持ちいいし、空も良い眺めよ」

そう言つて手招きする夕張。促された貴虎は、彼女の傍らに立ち夜空に目を移す。

吹いたそよ風が草木を揺らし、二人の髪を僅かになびかせる。

「美しい月と星空だな」

「……そうね」

空を見上げたまま暫し沈黙する二人。

周囲には草木の微かなざわめきと、虫の声が控えめに響いていた。

「……ねえ」

沈黙を破つたのは夕張の一言。

「貴虎はさ、怖いと思つた事は無い？ 戦うのを。元の世界ではインベスとかと戦いをしていたんでしょ？」

その質問に貴虎は少し考える様な仕草をする。

「どうだろうか。正直に言うとうまくわからない。初めて戦つた時は何かしらの気持ちを抱いていたかもしれない。だがそれ以上に、私が何とかしなければ、という使命感が強く心を支配していたのだと思う。恐怖を感じているヒマは無かつたのかもしれないな」

「そっか。やっぱり貴虎は強いよね」

「そうだろうか？」

「ええ、そうよ」

夕張は貴虎に向けて微笑する。

「実は私ね、大規模な作戦で最前線に出た事って無いんだ」

眩いた夕張は再び夜空へと目を向けた。

「そうなのか？意外だな」

「うん。貴虎もある程度分かっているとと思うけど、私がよく任されるのは新兵装や改造兵装の製作補助や実験なの。適性が戦闘よりもそっち寄りだからってのもあるけど、大規模作戦に編成された時は、せいぜい拠点の防衛や潜水艦狩りみたいな露払いをする程度。安全で信頼性のおける武装が好まれる最前線では、未知の性能の新兵装が活躍する機会はむしろ……ね」

「なるほど。軍隊らしい考え方だな」

「そうね。で、そんなんだからさ。今回の任務は……」

「怖い、のか？」

貴虎の問いかけに夕張は瞳を閉じて少々俯く。

脳裏によぎるのは上級インベス、及びその進化態に襲われた記憶。

その時の事を思い出すと今でも体が震える。

これから向かう場所には、それ以上の怪物が潜んでいるかもしれないのだ。もしかすれば貴虎すらも知らない未知の敵すらも……

「怖いわ。正直に言うとな。だけど、心のどこかでワクワクもしている。戦いは得意じゃないけど、前線でメカニックとしてサポートの技術を存分に活用出来るのが楽しみだったりする。現地でデータを取りながら兵装を調整して、即座に実戦に投入してなんて経験なかなか出来るものじゃないもの」

「そうか」

「戦いではあまり役に立てないかもしれないけど、あなたの兵装のサポートは技術者魂にかけて全身全霊でやらせてもらおうわ」

「ああ、頼りにしている」

貴虎はフツと微笑む。

「だが、そう卑下するほど夕張は弱くないと俺は思う」



「え？」

言われた事の意味を理解しきれず夕張は怪訝な表情をする。

「お前の過去の戦闘データに目を通させてもらった。戦果を見る限りでは他の者に見劣りする点もあった。だがそれは数値のみに注視した場合。それに現れない戦場での立ち回り方は特筆すべきものを感じた。状況に臨機応変に対応し、自分に出来る事を最大限にやろうとする姿勢が見られる。加えて兵装の損傷率や不具合の発生率が飛びぬけて少ない」

「それは、ただ仕事柄構造や特性を知ってるからってだけのことよ」

「兵器の構造を熟知している事は大きなアドバンテージだ。それを知っていれば性能を十全に引き出す事だって可能だろう。それを自分に馴染ませ、戦術にまで深く落とし込めれば、性能の劣る物が優れた物を凌駕する状況も出て来るはずだ」

「……………」

「夕張にはそれが可能だと私は思う」

「……フツ。こういう風に褒められたのは初めて。ありがと。貴虎がそう言ってくれるなら、戦闘の研究にも多く力を注いでみようかしら？期待には応えたいしね」

「それは何よりだ。あらためて、頼りにしてるぞ」

「ええ、私こそ」

二人は見つめ合い、互いに笑みを交わす。

「では戻るとするか。明日は早い」

「そうね。行きましょう」

二人は並んで宿舎の方へと歩き出したのであった。

「これでよし。龍田さん、手伝ってくれてありがとう」

厨房にて、受け取った食器を棚にしまった鳳翔が振り返る。

「いくえく、どういたしまして」

「よかったら一杯いかがですか？」

「そうね。じゃあお言葉に甘えようかしら」

鳳翔が冷蔵庫から白濁りの液体が入った一升瓶を取り出し、その身をグラスに注いで傍にある作業台の上に置く。

「はい、どうぞ」

「いただきます」

グラスに口を付け、中身を一口分含み、舌の上で転がすように味わって、コクリと音を鳴らして喉の奥へと流し込む。

そして軽く一息ついて

「おいしい」

龍田は目を細めた。

その様子を見て、フフツと声を漏らす鳳翔。

「なくに、鳳翔さん？」

「あなたもそういう表情をするようになったのね、なんて思ったらついで」

「そくかしら？自分ではあまり意識した事はないのだけれど。まあ鳳翔さんが言うならそうなのかもしれないわね」

「昔のあなたは、あまり人を寄せ付けない、関わろうとしない感じでしたから。やっぱり、あの時の出来事と、天龍さんのおかげかしら？」

「もく鳳翔さんってば、その話はしない約束よ」

「フフツ、そうでしたね」

クスクスと笑いあう二人。と、そこへ足音が近づいてくる。

「おいしい、龍田いるか？」

「あらく天龍ちゃん。どうしたの？」

厨房へと入ってきた天龍へ、にこやかな表情を浮かべた顔を向ける龍田。

「なかなか戻って来ねえから見に来たんだろ」

「まあ、心配して見に来てくれたの？天龍ちゃん優しい」

「ちげーよ。持っていく荷物と書類のチェックを一緒にやってくれて言ってる」

「あら、そういえばそうだったわね」

とぼけ顔の龍田を見て天龍は溜息をつく。

「ったく……って、お前こんな時間に呑んでんのか？」

「そうよお。一仕事終えた後の大人の楽しみってやつよ」

「つくづくお前ってやつは。程々にしとけよな」

「大丈夫よお。お子様な天龍ちゃんと違って私はセーブもできるし、飲み過ぎて寝転げたりしないものお」

「あん？何だと」

龍田の一言に対し、僅かに苛立った天龍が語気を強める。そして龍田の隣に立つと

「鳳翔さん、俺にも同じの一杯くれ」

「コレ、ですか？」

「もう、そういう所よ天龍ちゃん」

「るせえ！鳳翔さん早く！」

「はあ……どうぞ」

鳳翔から手渡されたグラスを受け取った天龍は、片手を腰に当ててグラスを持ち上げる。

「ダメよ！天龍ちゃん。一気飲みなんてしちやあ」

「黙って見てろ！」

そして天龍はグラスの中身を一気に煽り………口の中に広がる予想だにしてなかった味に驚き、盛大にむせてから一言放った。

「甘酒じゃねーかコレ!!」

「そうよ。一仕事終えた体には、鳳翔さん特製の冷やし甘酒が良いんだからあ」

「それならそうと言えっつてんだよ！ったく」

そんな二人のやり取りを見て微笑む鳳翔。

「話は変わるけれど、二人とも戦いの準備は大丈夫？」

「勿論よ。貴虎さんから聞ける限りのインベスとかの情報聞いたし」

「武器だって新調したしな。デイエンドとかいう奴の一味と戦った俺らにとっちゃ、インベスなんて怪物は敵じゃねえだろうしな」

天龍と龍田が今回のメンバーとして選出された理由。それは必然的に増えるであろう近接戦闘に備えて、砲雷撃戦以外の戦闘手段もこ

なせる者が求められたからだだった。

彼女らは近接戦闘の心得が他の艦娘に比べて多い。更にライオトルーパーとも渡り合い、それを退けた実績がある。加えて、比較的長く貴虎と接しており、気心も知れていたおかげで共に練度・知識を高めるのが容易だった点が選出の決め手となった。

「本当は航空戦力も欲しい所だけど、鳳翔さんは私の代わりに秘書艦をやらなきゃいけないし」

「それだけど、後でトラック諸島に出張している空母の艦娘が協力してくれるそうよ」

「マジか。でもオレとしちゃ鳳翔さんがいてくれた方が頼もしいんだけどな」

「私は空母としては技術しか取り柄が無いからダメよ。火力や搭載数に優れた他の娘の方がよっぽど頼りになるわ」

「あら、謙遜しているように見えてさりげなく腕前自慢もするのね、鳳翔さん」

イタズラっぽい笑みを浮かべて龍田が言う。

「これは私のちよっぴりの誇りと、技術を褒めてくれる人達に悪いからって事にしておいてわかってもらえるかしら?」

「は〜い。わかりましたあ」

その時、壁に掛けられていた時計が鳴り時刻を告げる。

「と、もうこんな時間か。龍田そろそろ行こうぜ」

「そうねえ。鳳翔さん、ごちそうさま。それと提督と基地の事よろしくね〜」

「はい、勿論です。おやすみなさい」

自室へと向かって行く二人に対して鳳翔は軽く手を振ったのであった。

明かりの灯った夜の資料室にて、一人の女性が書類を書いていた。室内は冷房が効いてひんやりとしており、新しい物から年季の入っ

た物まで様々な紙類の匂いが微かに漂っている。

時折手元に置かれた冊子を熱心に見る女の背後に忍び寄る影があった。

気が付く様子の無い女に手を伸ばす影……

「こら神通ー！」

「きやつー！」

その影、川内により後ろから首に手を回すようにして抱きつかれて、悲鳴を上げる神通。

「姉さん!?……もう、何ですか?」

「何ですか?じゃないよ。せっかく部屋にまで行ったのに、神通って居ないしき。探し回っちゃったよ、まったく。んで、壮行会が終わったばかりなのに、こんな所で何してたのよ」

「貴虎さんと叢雲さんの訓練メニュー作りがまだ途中だったので、出発までに仕上げておこうと思ひまして。横須賀提督からの勅命ですし、万全を期さなくては」

「えくくっ!?相変わらず真面目だなあ。何もこんな時にやらなくつてもいいですよ」

「ですが、現地へ向かいながらの訓練です。取れる時間は限られてますし、いつ不測の事態が起こるか分かりません。ですから……」

「ハイハイ続きは明日。待機船に行つてからやる!きつと何とかなるから大丈夫!そんなのよりも優先する事があるんだから」

「優先する事?何をですか?」

小首を傾げる神通。

「それはあ、姉妹艦水入らずの壮行会だよ!」

「え?」

神通がキョトンとしていると

「あくくっ!二人ともこんな所にいた!」

部屋のドア付近から那珂が顔を覗かせた。

「いい所に来た、那珂!神通を部屋まで連れて行くから手を貸して!」  
「りよくか〜い!」

サツと素早く神通の傍までやってきた那珂は、川内と共に神通の腕

をとり、左右から挟み込むようにして彼女を連行する。

「ホラ行くよ！キリキリ歩いた！」

「今夜は那珂ちゃんライブ姉妹壮行会スペシャルバージョンをやるからね。楽しみにしてて！」

「わ、わかりました二人とも。ですからせめて書類だけは」

言い終わるより早く、三姉妹の次女は部屋から連れ出されてしまったのであった。

誰もいなくなった部屋の机の上には、書きかけの書類と開かれた資料とペンとが転がっていた。

急須と茶葉の入った筒を乗せたお盆を手に、吹雪は執務室へと続く廊下を歩いていった。

角を曲がった所、その前方に叢雲の姿が見えた。

「あつ、叢雲……」

「あら吹雪じゃない。こんな時間にどうしたの？」

問われた吹雪は思わず目を泳がせた。

「え、えくとね。司令官まだお仕事してるみたいだし、お茶でもどうかなくって思つて。鳳翔さんや龍田さんは別の仕事があるみたいだし。それより、叢雲こそどうしたの？明日の出撃に備えなくていいの？」

「その為に来てたのよ」

叢雲が手にした書類の束をチラつかせる。

「南方海域での戦闘データや海流に天気の変動の傾向、気になったのを貰いに行つてたのよ。粗方事前にチェックはしたけど、追加であった方がいいと思つたのを念のためね」

「へ、へえ……気合い入ってるんだね」

「これくらい当たり前よ。それにしても、アンタこそ司令に対して気を回しちやって。時期秘書艦の座でも狙ってるの？」

「そ、そんなんじゃないってば！」

「冗談よ、冗談。それじゃ、おやすみ」

「おやすみ……」

叢雲は手をひらひらと振って自室のある方へと向かって行った。

「……あ、あのさ。叢雲！」

「何？」

吹雪に呼び止められた叢雲が振り返る。淡い水色の長い髪がフワリとなびく。

「えっと、その………頑張ってるね！初の重大任務!!」

「?……ええ。アンタもしっかりね」

踵を返して再び歩き出した叢雲の背を、彼女が角を曲がって見えなくなるまで吹雪は見つめていた。

扉をノックして夷提督えびすの返答を聞いて、吹雪は緊張気味に執務室へと足を踏み入れる。

するとそこでは、ちょうど夷提督が机の上でコーヒーを淹れていた。

「あ……」

「どうかしたか？」

「い、いえ。お茶でもどうかかなと思ったんですけど………必要無かったですね。失礼しました」

消沈した吹雪は微かに頭を下げ、踵を返そうとする。

「………待て」

夷提督がそれを呼び止めた。

「え………はい」

「折角だ、二人分淹れるのも手間は決して変わらん。飲んでいくか? ……いや、小娘に今の時間飲ませるのは……」

「い、いえー!大丈夫です!是非ともいただきます!」

吹雪は大袈裟な程に声を張り上げて言った。

程なくしてコーヒーの入ったカップを夷提督に差し出され、吹雪は角砂糖を三つと粉クリームを入れてかき混ぜる。スプーンに砂糖のざらつきが感じられなくなった頃合いで、吹雪はカップに口に付けた。

ほのかな甘みと苦みとが混ざり合った味わいが舌の上に広がる。

提督はブラックコーヒーに口を付けつつ、机上の書類に目を通していた。

コーヒーをちびちびと飲みつつ、吹雪は所在なさげに視線を室内のあちこちへと泳がせる。お茶を入れに来たという口実を失い、部屋にいる理由を失ったのを図らずも提督に救われたのだが、一向に吹雪は話を切り出せずにいた。

そうこうしているうちにカップのコーヒーは無くなり、本当に誤魔化しの利かなくなった吹雪は、意を決して口を開こうとした。

「叢雲の事が気になるのか」

先んじて夷提督から突然告げられた言葉に吹雪は目を丸くする。

「ど、ど、どうしてわかったんですか!!?」

「顔に書いてある。誰にでも察せる位にハッキリとな」

「あ、う、うう……………」

恥ずかしさのあまり耳まで真っ赤にして、両手でカップを持ったまま吹雪は俯いた。

「聞きたい事があるなら答えるぞ。出来る範囲でな」

「は、はい。それじゃあ…………」

ほのかに赤みが残る顔を上げて、吹雪はおずおずと喋り出した。

「今回の任務にどうして叢雲が選ばれたんでしょうか？他の方々が選ばれた理由はなんとなく分かるんですが」

「ふむ」

コーヒーに口を付けて一呼吸置き、夷提督は吹雪の質問に対して答えだした。

「最後の一人を誰にするかと考えていた時に、叢雲を編成に加えてほしいと神通が進言してきた」

「神通さんが!？」

「叢雲が神通指導の特訓を度々受けていたのは、お前も知ってるだろう。それで神通が言ってきた。叢雲にはまだまだ伸びしろがある。教えるべき最低限の事を教え切らないうちに特訓を中途半端に終わらせたくない。とな」

予想だにしていなかった意外な人物の名と、その経緯を耳にした吹



雪が目を丸くする。

「そして叢雲本人にこの提案を説明したら了承したのでな。だから決定した」

「そんな簡単に……。あの、差し出がましいかもしれませんが、もう少し熟慮された方が良かったのではないのでしょうか？ 今回の任務は通常のものとは事情が違います。深海棲艦だけでなく、インベスマイナ怪物を相手にする可能性も高いはずです。だから特殊な戦闘経験のある艦娘を選ぶべきではないでしょうか？ 先日の基地襲撃の時に戦った黒潮ちゃんとか——」

「お前など、か？」

「え!? あ、いえ、その……」

「自分が選ばれなかったのが納得いかなかったか？」

「い、いえ！ そういうわけでは！」

慌てて手と首を横に振って否定する吹雪。

「冗談だ。お前はそういうタイプの娘じゃないのは知っている」

「ううつ、司令官ふざけないで下さい」

肩を落として消沈する吹雪に——すまん——と一言挟んで夷提督は咳ばらいをした。

「もう少し詳しく説明するでしょう」

その一言を受け、吹雪が姿勢を正し視線を夷提督と合わせる。

「確かに今回の任務は特殊なものだ。殆どのメンツは役割と適性とを厳選して編成したが、最後の一人の駆逐艦を入れる枠は、正直言って誰を入れても大差は無いと俺は考えていた。実力、技能はほぼ横並び。性能は島風がある程度飛びぬけているが、アイツは横鎮から北方海域の任務に参加するよう辞令が来ているからな。俺の動かせる手駒じゃあない。お前の言う通り、デイエンドとかいうやつの一味との戦闘経験やインベスとの遭遇経験を踏まえるという考えもあるだろうが、お前達がした程度の経験は付け焼き刃にしかならんだろう。実際の戦場で劇的に差がでるようなもんじゃない。ならば少しでも覚悟と気概のあるヤツを行かせた方が良い。叢雲にはそれがあった。そういう事だ」

「……覚悟と、気概……」

夷提督の話聞いた吹雪は、小さく呟いて顔を俯かせた。彼女の拳がギュツと強く握られ、口が真一文字に結ばれる。そして、ほんの十秒足らずの沈黙の後

「司令官！」

顔を上げた吹雪は力強く言葉を発した。

「私も今回の任務の編成に組み込んでいただけないでしょうか！」  
「何故だ？」

「叢雲の力になりたいんです！」

投げかけられた夷提督の問いに、吹雪は迷うことなく即答した。

「叢雲と私は殆ど同じ時期に艦娘になりました。養成学校で一緒に学んだり訓練したりして。彼女は私なんかよりずっと成績が良かったし、学科も実技も同期のトップクラスでした。卒業して各所に配属される時、きつとこの子は皆を引っ張っていくような存在になるんだろうなって思っていました。そんな叢雲が前任の司令に干されて全く活躍も訓練も出来なかったなんて……ヒドイと思って……」

吹雪は目元にいつの間にか滲んでいた涙を腕で拭う。

「確かに叢雲にも非はあったと思います。だけど休む暇もない程の雑用を押し付けたりだとか、懲罰の粋を超えています。……そんな辛い思いをしていたのを私は知らなくて……ちよつとでもその時に案じる事を思いつかなかった自分が許せなくて」

「それはもう終わった事だ。その提督はもうここにはいない。お前さんが知らなかった事は罪でも何でもない」

「司令官……」

こころえきれず、吹雪の瞳からこぼれた一筋の涙が頬を伝い床に落ちる。

吹雪は再度、服の袖で顔を拭ってから言葉を紡ぐ。

「私は叢雲が私の知らない所で辛い目に合うかもしれないのを、もう放っておきたくありません！ワガママで勝手な事を言っているのは承知しています。彼女だって私の助けなんて必要としていないでしょう。だけど、お願いします！私も編成に加えてください！雑用でも何

でもこなします！お願いします！」

思いの丈を吐き出した吹雪は、夷提督の瞳をジツと見据えた。

その力強く決意のこもった視線を受け止めた夷提督は「フツ」と軽く笑みをこぼしたのであった。

（やれやれ。他人を思っ  
て涙を流す娘の  
思いを無下には  
できんな  
……）

仮面ライダー斬月・艦【第十三話】 part 2

早朝、出撃前の最後のブリーフィングの為に会議室に集まっていた面々は、夷提督の

「偵察艦隊の編成に変更がある」

との言葉を聞いて驚きの表情を浮かべた。

「入れ」

提督に促されて入ってきた吹雪の姿を見て

「ちよ、ちよっとー! どういう事なの!」

ガタツと音をたて席を立ちあがり、真つ先に驚きの声を上げたのは叢雲だった。

「司令官、もしかして吹雪を加えて誰かを外そうっていうの!」

「早とちりするな。何もお前さんを外そうなんて心づもりは無い」

「なっ!?! ……べっ、別に私が外されるだなんて思っっちゃいないわよ!」

「フツ、そういう事においてやろう」

「ぐっ……」

「訳はこれから説明する。とりあえず座れ」

狼狽した自分の胸の内を見透かされた叢雲は、顔を赤くして軽く身を震わせながら席に着く。

「知つての通り、始めは通常の六隻編成で艦隊を組ませるつもりだった。海軍本部からヨコを通じて、必要最低限の人員のみを配するを許可する」と通達があつたからな。だが俺の…いや、俺らにとつての最低限が七隻に変わった。だから吹雪を加えると決めた」

「それ、ちゃんとした説明になっていないんだけど。だからどうしてそれが吹雪なのよ」

無然とした態度で叢雲が問いかける。

「理由は幾つかあるが、最も大きなものは昨晚編成に加えてほしいと志願してきた事だ。だからそう決めた」

「志願してきたからって…そんな理由でホイホイ変更してもいいわけ? 仮にも軍の人間なんだから、そんなやり方問題あるとは思わない

のかしら?」

「神通に推されて編入されたお前がそれを言うのか?」

「う……」

その指摘に、二の句が継げずに叢雲は口ごもる。

「それに俺は軍人の真似事をしてい元探偵。どっちつかずの半端者だ。ここに集まったお前達も大体似たようなものだろう」

言われてその場にいる多くの者が苦笑を漏らす。

正規の軍人とは採用過程も教育・訓練型式も異なる、艦娘たる適性を重視して選ばれた面々が。

「軍人らしからずとも問題ない。半端者は半端者らしく、自分達のやり方で事を進めるだけだ」

「そうだけ叢雲。要は結果さえ出しまえば良いって事よ。小難しいこだわりは抜きにしてよ!」

提督の言葉に感化された天龍が、拳を手のひらにパンと打ちつける。

その隣では龍田がやれやれと言いたげな風に肩を竦めている。

他の者らも反応は様々だが、おおむね同意の空気を漂わせていた。

「別にこだわっているとか、そういうわけじゃないんだけど……」

「叢雲」

釈然としない様子の叢雲に吹雪が近づく。

「もしかしたら迷惑に思われることもあるかもしれない。けど私、精いっぱい叢雲の、みんなの力になれるように頑張るから」

叢雲の前に吹雪の手が差し出される。

「……フン。別に迷惑だとか思っていないけど。足引つ張ったら承知しないからね」

差し出された手を握る代わりに、叢雲は吹雪の手のひらを、己が手のひらで思いつきり打ち据えた。

乾いた音が響き、手に走る痛み顔に顔をしかめる吹雪。しかしながらすぐに「えへへ」と嬉しそうに笑みを浮かべた。

「何よ、気持ち悪いわね」

そう悪態をつく叢雲もまた微笑を浮かべていた。

「さて、あとの理由の話だ。艦隊構成人員が七隻になった事によりメリットがいくつか生まれるわけだが……貴虎、どういう事があるかわかるか？」

夷提督が視線を貴虎の方へと向け問いかける。

対して貴虎は、ほんの一瞬思考を巡らせた後にそれに答える。

「いくつか考えられますが、まず一つとして遊撃艦隊が組めるようになります。未知の敵の搜索、撃滅をしていくとなると有用な選択肢であるでしょう。戦艦や空母などの高火力、長距離攻撃兵装を持たない我々であればなおさらです」

「正解だ。では他には？」

「艦隊構成員の負担が軽減されます。トラック泊地までの道中、待機船周囲にて警戒に当たる者は三、四名が適正。ローテーションを適正に組めば、各員半日程度の安定した休息をとる事が可能かと」

「ならその運用を前提に、次のような状況に遭遇した場合どういう対応をとる？」

次々と提督は貴虎に問いを投げかける。対して貴虎は、スラスラと迷いなくそれに答えてゆく。

その様を見ていた艦娘らは、感嘆の声を漏らしたり、自らも問いについて考え頭を捻らせたり、答えを聞いて頷いたりと様々な反応を見せる。

「ふむ……提督業の講習を学んでいた時以降も随分と知識を深めていたようだな」

「私はこの世界の戦い方に不慣れで経験も乏しい。せめて知識だけは蓄えておかねば、皆の足を引っ張ってしまいますので」

「それならば問題ないな。貴虎、艦隊旗艦はお前に任せる」

「私ですか？」

「ああ。様々な知識や戦況判断能力、口頭でのやりとりとはいえ十分な域に達していると分かったからな」

「ですが先に述べた通り、私は艦娘の行う海上での戦いの経験は不足しています。ここは経験の豊富な者がなるべきなのでは？」

「今回の任務はあくまでインベスとヘルヘイムの搜索が主目的だ。深

海棲艦とやり合う事じゃあない。ならばその経験が豊富なお前が旗艦として適任だ。……さて、これに異論のある者はいるか？」

夷提督は室内の艦娘らに目を向けた。

「異論はありません。私も貴虎が適任だと思います」

夕張が答える。

「オレもだ。貴虎にだったら命預けても構わないぜ」

続けて天龍が。

他の者らも答えは同様だった。

「……わかりました。旗艦としての任、務めさせていただきます」

心を決めた貴虎が敬礼をした。

「よし。……とはいえだ、副官や補佐は必要だろう。神通、副官はお前を任命する。対深海棲艦戦では旗艦経験の多いお前の力が助けになる。そして龍田、お前は通信や各種手続きの補佐をしろ」

「はい、了解致しました」

「はあい。了解よ」

神通、龍田の両名が提督の命を敬礼と共に受け取ったのだった。

「しつかりインベスとヘルヘイムの植物を見つけて、全部ぶっ倒してきなさいよね」

「陽炎、彼女らの任務は偵察と調査です。そこまでの必要は無いのですよ」

「せやな。そない無茶言うたらあかんで」

「言葉のあやよ。その位の気持ちで行きなさいって言いたいのは！とにかく頑張んなさいよー！」

陽炎、不知火、黒潮の三名が叢雲と吹雪に激励の言葉をかける。

「当たり前よ。そっちこそ私達のいない間にハマなんかしたら承知しないわよ」

「ありがとうーみんな元気だねー！」

駆逐艦娘らがそのように激励しあう様を貴虎達は遠目に眺めていた。

「本当に皆仲が良いのだな」

「そうね。艦娘の中でも駆逐艦の子達は特に連携を求められていて、一緒にいる事も多いから団結力は強くなる。だからああいう光景はよく目にするのよね」

「ええ、駆逐艦の子達は皆素晴らしいです。あの氣勢は愛おしく思う程です」

「流石は沢山の駆逐艦を指導してきた神通ね。名教官らしくカツコいいこと言ってくれちゃって」

「ゆ、夕張さん。そんな風にかかわらないで下さい……」

「えく褒めてるんだよ。そんなに照れないでってば」

貴虎の傍らの夕張と神通がそんなやりとりをしていると

「貴虎！」

「ん？」

駆逐艦娘の輪の中から抜け出てきた艦娘が一人駆け寄ってくる。

「島風、どうかしたのか？」

「ねえ、貴虎ってあの装備を付けると凄く速く動けるようになるって本当？」

「アーマーの事か？まだ十分に検証をしきれてはいないが、明石が言うには海上での航行性能はかなり高い方らしいな」

「じゃあさ、今度帰ってきたら海の上でかけっこしよう！どっちが早いか競走だよ！」

体の前でぎゅっと腕を曲げ、目を輝かせる島風。

その様を見て軽く笑みを浮かべ

「わかった。その勝負受けてたとう」

貴虎は彼女の申し出に快く答えた。

「やった！絶対だからね！約束だよ！」

満面の笑顔で右手を上げる島風。貴虎は彼女の手のひらへ向け自らの手を突き出す。

パン！と軽い音と共に合わされる手。

「にひひっ！」

とご機嫌な声を漏らして島風はパツと身を翻し、元いた所へと戻っ



ていった。

「あらく貴虎さんつてば島風ちゃんに目を付けられちゃったみたいね」

「ああなった島風は厄介だぜ。しつこいくらいに勝負をしかけてくるからな。相手が根を上げてもひたすらに」

「そうか。なら十分に鍛錬をしておかなければ」

「つて、マジでやる気かよオイ」

「これは見逃せないわね」

呆れ混じりに天龍、目を細めて龍田が言う。と、そこへ陽炎らとの別れを終えた吹雪と叢雲が戻ってくる。

「お待たせしました」

「もう十分なのか？」

「はい！」

「平気よ。これ以上時間をかけても仕方ないし」

「叢雲つてば、言い方」

ひねくれたような物言いをたしなめる吹雪。対して叢雲は「別にいいでしょ」と煩わし気にしていた。

「皆さん」

と声がした。

「鳳翔さん」

声の主は鳳翔。彼女は小さな包みを手に貴虎らの元へやってきた。

「困難な任務でしょうけど、どうか無事に帰ってきて下さいね。これはささやかな気持ちです。宜しければお持ちになつて下さい」

鳳翔が手にした包みを開くと、そこには小さな赤い袋状の物が数個入っていた。

「これは、お守りですか？」

貴虎の横あいから覗き込むようにして夕張が言う。

「はい、皆さんの出撃が決まった後、本土の神社へお参りして買ってきました」

「お気遣いありがとうございます。ありがたく受け取らせて頂きます」

軽く礼をして貴虎がお守りを一つ受け取る。

後に続いて一人また一人とお守りをもらって鳳翔にお礼を述べてゆく。

「吹雪ちゃん」

「はい」

「ごめんなさいね。私もついさっきあなたが出撃する事になったって知ったから、六人分しか用意できていなくて」

「い、いえ。気にしないでください」

「だからね。代わりと言っては何だけど」

鳳翔は懐からお守りを一つ取り出して吹雪へと差し出した。

「自分用に勝ってきた物なのだけれど」

「そんな！悪いですよ。鳳翔さんの分が無くなっちゃいますし、私の事なんて気にしなくても……」

「私はいいの。またいつでも買いに行けるのだから。今はあなたに持っていてもらいたい。じゃないと気がすまないわ」

「……わかりました。じゃあ、頂きます」

吹雪はおずおずと鳳翔からお守りを受け取る。

それを目の前にかざしてジツと見つめる。風に揺られて仄かに鳳翔の纏った香りが感じられた。吹雪は安らぐような気持ちだし、それと共にどこか心強さのようなものを強く感じたのだった。

「もう挨拶は済んだ頃合いだな」

車椅子に乗った夷提督が近づいてきた。

「はい、大丈夫です」

貴虎の返答を聞くと

「よし」

夷提督は軍帽に手をかざし、海風に当てられ若干崩れた形とズレた位置を少し整えてから口を開いた。

「お前たちはこれから未知の敵の実情を探る任務へと向かう事になるが、どんな時であっても俺から言う事は一つ。生きて帰ってこい。それだけだ」

静かに、だが力強く気持ちの込められた一言を告げられた一同は敬

礼をし

「了解！」と声をそろえて応えたのであった。

海上の波風は穏やかで、空は青く晴れ渡っていた。

港を出た七人は、単縦陣の陣形を組んで海上を突き進む。

彼らは待機船と合流すべく南西の方角へと進んでいた。

「待機船付きの任務なんていつぶりだろうな」

「あ、天龍さんは乗ったことあるんですね。私、実は一度も乗ったことが無くて、実際どんな感じなんですか？」

「言っちゃえばちよつとしたホテルって感じだな。休む部屋だって寮の個室程度の広さはあるし、風呂だって広い。オレが前に乗ったのは卓球場だつてあつたんだぜ」

天龍がラケットでボールを打つように手を軽く振って見せた。

「今回の艦にもあるかどうかはわからねえけど、もしあつたら一勝負してみるか？」

「いいですね！是非！楽しみです！」

「あのねえ、修学旅行に行く小学生じゃあるまいし、はしゃいでるんじゃないわよ。まったく、緊張感が足りないわよ」

目を輝かせて言う吹雪に向け、呆れ混じりに嘆息する叢雲。

「ご、ごめん」

申し訳なさそうに肩をすくめる吹雪。

天龍もまた龍田に言動をたしなめられ、バツが悪そうに視線を泳がせていた。

他の者はその様を見て軽く笑い声を漏らす。

一行の間には和やかな空気が漂っていた。

「そういえば、港に川内と那珂の姿が無かつたわね」と夕張。

「姉さんと那珂ちゃんでしたら、一足先に横須賀鎮守府に向かつたそうですね」

「ふくん。見送りが無くて神通は寂しかったりしないの？」

「大丈夫です。二人とは昨晚のうちに十分お話をしましたから」

「そうなんだ。仲が良いのねあなたたち三姉妹も」

夕張の言葉に神通は微笑みをもって応える。その表情からは微かな喜びと誇らしさのような物がうかがえるようだった。

「……何だあれは？」

先頭を行く貴虎、もとい斬月は進む先に小さな二つの影のようなのがあるのを目でとらえた。

その影は少しずつ大きさを増している。

猛スピードで斬月らの方へと接近をしてくれているようであった。

「総員警戒態勢！」

異常に気付いた斬月が指示を下す。

全員が武装のロックを解除し、僅かに乱れていた陣形を立て直し、即応体制を整える。

前方を注視する斬月はやがて、接近してくる者らの姿をハッキリと認識した。それは橙色の服を身に纏った二人の女性。

「川内と那珂だと？」

二人の艦娘が武装を構えながら高速で接近してくる様を見て斬月をはじめ、皆が何事かと訝しんだ。

「ちよつと！・どうしてあの二人がこっちに仕掛けてこようとしてるのよ!?!」

大声をあげて戸惑う夕張。

「私が出ます！・皆さんはそのまま待機を！」

「神通!?!何なのよ!?!」

増速し陣形から抜け出した神通が、接近する姉妹艦へ向かってゆく。

双方ともぐんぐんスピードを上げ、その間の距離は瞬く間に縮んでいった。

「危ない！・ぶつかる！」

その様を目にした夕張が悲鳴にも似た声を上げる。

とほぼ同時に神通と川内・那珂が僅かに体をずらしてすれ違った。

双方の間の距離は数十センチ程度、少しでも位置がズレてぶつかれ

ば大怪我どころでは済まない。

神通とすれ違った川内・那珂はY字を描くように二手に分かれてターンする。

神通もまた、水飛沫を跳ね上げながら高速でUターンをして、再度二人の方へ向けて突撃。

上空から見れば、三角形のそれぞれの頂点から中心へ向けて線が伸びていくような軌道で高速接近してゆく三人の艦娘。

そして極限まで近づいて交錯するようにして、またもやギリギリの距離ですれ違い、急ブレーキをかけた後に百八十度回転。

ピタリと静止した三人は、主砲を構えて向き合った。

その様子を見ていた他の面々は、固唾を飲んで見ているのみだった。

『あははっ！きつすが神通！何も言わなくてもここまでピツタリ合わせてくるなんてね』

少しの時をおいて、通信機を通して川内の快活な声が響き渡る。

『元々は以前、私が姉さんに対して行った航行演習ですから。それにしても那珂ちゃん、随分と腕を上げたわね。動きに無駄が無くなっています』

『えへっ！ダンスの体幹トレーニングもかねて、いっぱい練習したからね！艦娘としてもアイドルとしても、那珂ちゃんますます磨きがかかった。キャハ！』

三人の会話は、ちよつと前まで命がけとも言えるような、凄まじい航行をしていた者らとは思えない程に和やかな雰囲気を出していた。

『じゃあ私達は行くね。みんな、神通のことよろしく！』

『みんな、またね〜！』

一同へ向け大きく手を振って別れを告げると、川内と那珂はクルリと向きを変えて横須賀鎮守府方面へと向かっていったのであった。程なくして神通が斬月らの元へと戻ってくる。

「お待たせしました。では行きましょうか」

「ちよ、ちよつと待って。今のは何なの？」

夕張が戸惑い気味に尋ねる。

「長期遠征任務前の準備運動のようなものです。私が考案して、姉妹間では必ずやるようになった恒例行事です」

「い、いつもあんな事してるのね……」

涼しい顔で言う神通。対する夕張は僅かに顔を引きつらせていた。

「よろしければ夕張さんもやってみますか?」

「……遠慮しておくわ」

「ねえ、神通さん」

神通の傍へ叢雲が進み出る。

「私にもあれのやり方教えてもらえない? 戦いの役にたてたいので」  
「わかりました。では時間の許す限りそれも指導させていただきますね」

にこやかに微笑んで神通は言う。

「ええ……」

それを見た吹雪は引きつり気味の声をあげる。

「私にも指導願えないだろうか?」

「貴虎!」

夕張が目を丸くして斬月の方へ目を向ける。

「知つての通り、私は海上での戦いの経験は浅い。あの航行技術を身に付けて戦闘力を向上させたい」

「はい、喜んで。では早急にお二人の訓練メニューを調整しましょう」

「……じゃ、じゃあ私」

と、手を上げかける吹雪の肩を掴んで夕張が引き止めた。

「やめておきなさい。無暗に手を出したら取り返しがつかなくなるわよ」

小声で囁く夕張。

「でも、私も実力に不安がありますし……」

「せめて様子を見てからにしましょう。始めるのはそれからでも遅くないし、怪我したら事だから、ね」

「……はい」

と吹雪が言ったところで

『……ちら、……待機船………応答………います』

途切れ途切れの通信が入ってきた。

「はくい、こちら特殊遊撃艦隊の龍田です。聞こえていますよ、どうぞ  
く」

龍田が応答し、暫しの後

『こちら艦娘待機船 “霜伊里” 旗艦らより西南西の海上にて待機中。  
至急合流されたし』

雑音の無いクリアな音声が返って来た。

「了解しましたあ」

返答をした龍田が一同に目配せをする。

領いた面々は再び陣形を組みなおす。そして

「特殊遊撃艦隊、出るぞ」

斬月の号令と共に出発したのであった。